九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

-17

甘木市所在宮原遺跡の調査 II (AI地区)

1990

福岡県教育委員会

九州横断自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

____ 17 ___

甘木市所在宮原遺跡の調査 II (AI地区)

1990

福岡県教育委員会



宮原遺跡出土 土馬

福岡県教育委員会は、日本道路公団の委託を受けて、1979(昭和54)年 度から九州横断自動車道の建設に先立って発掘調査を実施してまいりま した。

本書は、1981 (昭和56) ~1983 (昭和58) 年に調査を行った甘木市所在の宮原遺跡についての2冊目のものであります。今回も、古墳時代から奈良時代にかけての集落が中心で、多数の土器以外にも土馬や権、青銅製品等の遺物を報告しております。

報告書として十分に満足のいくものではありませんが、地域史研究や 文化財愛護思想普及の一助ともなれば幸甚に存じます。

発掘調査および整理報告にあたって、御協力、御援助いただいた方々に 深甚の謝意を表します。

平成2年3月31日

例言

- 1. 本書は、九州横断自動車道建設路線内に位置する遺跡について、福岡県教育委員会が日本道路公団から委託されて発掘調査を行った甘木市宮原遺跡の二冊目の報告書である。
- 2. 本書は、九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告の17冊目にあたる。
- 3. この報告は、宮原遺跡のA地区東半部(AI区)を対象とする。
- 4. 遺構の写真撮影、実測図作成は調査担当者と調査補助員とで行った。
- 5. 出土遺物の整理は、岩瀬正信氏の指導のもとに、九州歴史資料館と福岡県文 化課甘木発掘調査事務所にて行った。
- 6. 鉄器類の保存処理については、九州歴史資料館・横田義章氏にお願いした。
- 7. 遺物の写真撮影は、九州歴史資料館・石丸洋氏と、須原悦子・矢野明美両氏が行った。
- 8. 遺物実測は、松嶋邦子・原田和枝・高瀬照美・渡辺輝子の各氏と武田光正・ 児玉真一・伊崎俊秋が行った。
- 9. 遺構・遺物の製図は、塩足里美・豊福弥生・鶴田佳子の各氏と報告者が行ない、関久江・森山シズ子氏の援助を受けた。
- 10. 本文中及び表中で示す面積値はプラニメーターによって測定したものである。
- 11. 本文中での方位はすべて国土調査法第II座標系での座標北を示す。
- 12. 本文中に示した土器実測図のうち、断面に示した◆印のものは縮尺1/6である。
- 13. 本書の執筆は、武田光正・児玉真一・伊崎俊秋が分担し、目次と各文末に名を記した。
- 14. 本書の編集は伊崎が担当した。

本 文 目 次

I. H	にじめに	((頁)
A. Έ	宮原遺跡の調査の経過(伊	崎俊秋)	1
В. й	遺跡の位置と環境	(伊崎)	3
• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	 査の内容		١
	既要		
	貴構と遺物(武田光正・児玉真一		
	竪穴住居跡		
	掘立柱建物跡		
3.	土壙		123
4.	溝	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •	·138
5.	その他の遺構・ピット	•••••	139
6.	遺物各説		•
a	. 接合・同一個体資料	•••••	•143
b	,土製品	•••••	·148
c	. 石製品	•••••	157
d	. 鉄製品		•157
e	. 特殊遺物	•••••	·162
7.	陶質系土器と古式土師器		·168
C. 糸	単文時代の遺物	•••••	•171
III. ‡	3わりに ·		
1.	集落について	(武田)	173
2.	土壙について	(武田)	180
3.	竪穴住居の壁際に見られる杭状痕	(武田)	183
4.			
5.	ネズミ狂騒曲	(伊崎)	188
-	あ レがき	(伊崎)	196

図 版 目 次

- 図版 1 第11地点(立野・宮原遺跡)周辺航空写真
 - 2 第11地点(立野・宮原遺跡)周辺航空写真
 - 3 第11地点(立野・宮原遺跡)周辺航空写真
 - 4 第11地点(立野・宮原遺跡)航空写真
 - 5 宮原遺跡航空写真
 - 6 上. 立野・宮原遺跡航空写真
 - 下. 宫原遺跡航空写真
 - 7 上, 宫原遺跡航空写真
 - 下. 宫原遺跡航空写真
 - 8 宮原遺跡航空写真
 - 9 宮原遺跡航空写真
 - 10 上。 宮原遺跡航空写真
 - 下. 宫原遺跡航空写真
 - 11 上。宮原遺跡A I 地区全景(東から)
 - 下. 宮原遺跡A I 地区全景(西から)
 - 12 上. 宮原遺跡A I 地区気球写真
 - 下. 宫原遺跡A I 地区気球写真
 - 13 上. 宮原遺跡A I 地区気球写真
 - 下. 宫原遺跡A I 地区気球写真
 - 14 上。31~34号住居跡(西から)
 - 下。31~34号住居跡(西から)
 - 15 上. 35~44号住居跡(南東から)
 - 下. 35~44号住居跡 (西から)
 - 16 上、35~37号住居跡(東南から)
 - 下。40・41号住居跡、7号土壙(南から)
 - 17 上。35号住居跡カマド
 - 下. 37号住居跡カマド
 - 18 上。42~44号住居跡(南から)
 - 下. 42号住居跡カマド(南から)
 - 19 上・中 45~51号住居跡

- 下. 46~48、51号住居跡
- 20 上. 45号住居跡カマド
 - 下. 46・47号住居跡カマド
- 21 上. 49号住居跡カマド
 - 下.50号住居跡カマド
- 22 上. 52・53号住居跡 (北東から)
 - 下.54~61号住居跡(南東から)
- 23 上. 54~56号住居跡(南東から)
 - 下、57号住居跡(南東から)
- 24 上. 58~61号住居跡(南東から)
 - 下. 62~64号住居跡、10号土壙 (東から)
- 25 上. 62号住居跡(南から)
 - 下. 63号住居跡(東から)
- 26 上. 64号住居跡 (東から)
 - 下. 64号住居跡壁小溝内杭状痕
- 27 上. 65号住居跡 (東から)
 - 下. 66号住居跡 (南東から)
- 28 上. 67号住居跡(南東から)
 - 下. 68号住居跡(南東から)
- 29 上. 68~70号住居跡(南東から)
 - 下.70号住居跡(南東から)
- 30 上. 69号住居跡(南東から)
 - 下. 71号住居跡(南東から)
- 31 上. 74~76号住居跡(南東から)
 - 下. 77号住居跡(南東から)
- 32 上. 77~80号住居跡(南東から)
 - 下. 80号住居跡(南東から)
- 33 上. 78号住居跡カマド
 - 下. 79号住居跡カマド
- 34 上. 81号住居跡 (東から)
 - 下. 81号住居跡カマド
- 35 上. 82・83号住居跡(南東から)
 - 下、82・83号住居跡床下層(北東から)

- 36 上. 82号住居跡カマド
 - 下. 82・83号住居跡、杭状痕
- 37 上. 83号住居跡杭状痕
 - 下. 82号住居跡杭状痕
- 38 上. 84・85号住居跡(南から)
 - 下. 86~94号住居跡(南から)
- 39 上. 89号住居跡カマド
 - 下.92号住居跡カマド
- 40 上. 95・96号住居跡 (東から)
 - 下.95号住居跡床下層(北から)
- 41 上。95号住居跡カマド
- 42 上. 97~100号住居跡(南から)
 - 下. 97・99号住居跡下層(南から)
- 43 上。103号住居跡下層(南から)
 - 下。105号住居跡(東から)
- 44 上. 108~110号住居跡(南東から)
 - 下. 111号住居跡(南東から)
- 45 上。36号掘立柱建物跡(東から)
 - 下. 40・41号掘立柱建物跡(北東から)
- 46 上. 46号掘立柱建物跡(南東から)
 - 下. 49号掘立柱建物跡(西から)
- 47 上. 50号掘立柱建物跡(北から)
 - 下.51号掘立柱建物跡(北から)
- 48 上. 6号土壙 (南東から)
 - 下. 7号土壙(西から)
- 49 上. 10号土壙 (北から)
 - 下. 13号土壙(北から)
- 50 上。14号土壙(北から)
 - 下。19号土壙(北から)
- 51 上. 20号土壙 (西から)
 - 下. 22号土壙(南東から)
- 52 宮原遺跡出土土器① (31・37・39・40・41・42・43号住居跡)
- 53 宮原遺跡出土土器②(46・49・53・57・59・62号住居跡)

- 54 宮原遺跡出土土器③ (62・63・64・65・67・68号住居跡)
- 56 宮原遺跡出土土器⑤ (69・70・73・74・78・80・81・82号住居跡)
- 57 宮原遺跡出土土器⑥ (82・84・85・92・95号住居跡)
- 58 宮原遺跡出土土器⑦ (95・96・97・99・102・104・105号住居跡)

- 61 宮原遺跡出土土器⑩ (14・17・18・19号土壙)
- 62 宮原遺跡出土土器①(19号土壙)
- 63 宮原遺跡出土土器② (19·20号土壙)

- 66 宮原遺跡出土土器⑮ (溝1)
- 67 宮原遺跡出土土器⑯(溝1、ピット)
- 68 宮原遺跡出土土器⑰ (ピット・その他)
- 69 宮原遺跡出土土器(⑧ (その他・接合資料)
- 70 宮原遺跡出土土器(9 (接合資料・ミニチュア)
- 71 宮原遺跡出土土製品(ミニチュア)
- 72 上。 宮原遺跡出土土製品
 - 下. 宫原遺跡出土不明土製品①
- 73 上。 宫原遺跡出土不明土製品②
 - 下。 宫原遺跡出土不明土製品③
- 74 上。 宮原遺跡出土不明土製品④
 - 下. 宫原遺跡出土不明土製品⑤
- 75 上。宫原遺跡出土土錘①
 - 下。宫原遺跡出土土錘②
- 76 上. 宫原遺跡出土石器①
 - 下, 宫原遺跡出土石器②
- 77 上. 宫原遺跡出土石器③
 - 下。宫原遺跡出土石器④
- 78 上、宫原遗跡出土石器⑤
 - 下. 宫原遺跡出土紡錘車
- 79 宮原遺跡出土鉄製品①

80		宮原遺跡出土鉄製品②
81		宮原遺跡出土土馬
82		宫原遺跡出土土馬破片
83	Ŀ.	宮原遺跡出土権
	下.	宮原遺跡出土瓦
84	上.	宮原遺跡出土青銅製品
	下.	宮原遺跡出土製塩土器
85	上.	宮原遺跡出土土器木葉痕
	中.	宮原遺跡出土土器吹きこぼれ
	下.	宫原遺跡出土土器文字?
86		宮原遺跡出土陶質系土器
87		宮原遺跡22号土壙出土土器の爪痕
88	上.	宫原遺跡出土縄文土器
	下.	宮原遺跡出土石鏃、玉、石器
89	上.	籾痕のある土器
	下	須恵器と里色十器

挿 図 目 次

	(<u>)</u>	į)
第 1 図	九州横断自動車道路線図(約1/400,000)	xii
第 2 図	宮原遺跡と周辺遺跡分布図(1/50,000)	• 4
第 3 図	竪穴住居跡模式図と各部の名称	. 7
第 4 図	須恵器・土師器の調整(1/4)	. 8
第 5 図	31・32・34号竪穴住居跡実測図(1/60)	•10
第 6 図	33号竪穴住居跡実測図(1/60)	•12
第7図	35・36号竪穴住居跡実測図(1/60)	•14
第 8 図	35号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	•15
第 9 図	37・38号竪穴住居跡実測図(1/60)	·17
第 10 図	37号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	-18
第 11 図	38号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)	·18
第 12 図	39号竪穴住居跡実測図(1/60)	20

第 13 図	39号竪穴住居跡カマド実測図(1 /30)21
第 14 図	40・41号竪穴住居跡実測図(1/60)22
第 15 図	40・41号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)23
第 16 図	42号竪穴住居跡実測図(1/60)25
第 17 図	42号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)26
第 18 図	43・44号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 19 図	43・44号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)28
第 20 図	45号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)30
第 21 図	45~48·51号竪穴住居跡実測図(1/60) ····································
第 22 図	49号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 23 図	49号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)34
第 24 図	50号竪穴住居跡実測図(1/60)35
第 25 図	50号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)36
第 26 図	52・53号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 27 図	54号竪穴住居跡、8・9号土壙実測図(1/60)40
第 28 図	55 · 56号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 29 図	57号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 30 図	58・59号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 31 図	60・61号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 32 図	62号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 33 図	63号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 34 図	64号竪穴住居跡実測図(1/60)56
第 35 図	65号竪穴住居跡実測図(1/60)5
第 36 図	66・67号竪穴住居跡実測図(1/60)
第 37 図	68号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)5
第 38 図	68・70号竪穴住居跡実測図(1/60)5
	69号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)
第 40 図	69・72号竪穴住居跡実測図(1/60)5
第 41 図	71・73号竪穴住居跡・18号土壙実測図(1/60)6
第 42 図	74~76号竪穴住居跡実測図(1/60)6
第 43 図	77号竪穴住居跡・17号土壙実測図(1/60)6
第 44 図	78号竪穴住居跡実測図(1/60)6
第 45 図	79号竪穴住居跡実測図(1/60)6

第 46 図	80号竪穴住居跡実測図(1/60)	70
第 47 図	81号竪穴住居跡実測図(1 /60)	71
第 48 図	81号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	72
第 49 図	82号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	73
第 50 図	82・83号竪穴住居跡・杭痕実測図(1/30、1/60)	74
第 51 図	84・85号竪穴住居跡実測図(1/60)	76
第 52 図	86~91号竪穴住居跡・15号土壙実測図(1/60)	79
第 53 図	92~94号竪穴住居跡実測図(1/60)	83
第 54 図	95・96号竪穴住居跡実測図(1/60)	86
第 55 図	95号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	···87
第 56 図	97~102号竪穴住居跡実測図(1/60)	91
第 57 図	103号竪穴住居跡実測図(1/60)	94
第 58 図	104号竪穴住居跡実測図(1/60)	96
第 59 図	105号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)	97
第 60 図	105~107号竪穴住居跡実測図(1/60)	99
第 61 図	108~110号竪穴住居跡実測図(1/60)	•101
第 62 図	111号竪穴住居跡実測図(1/60)	•103
第 63 図	112号竪穴住居跡実測図(1 /60)	•104
第 64 図	31~33号掘立柱建物実測図(1/80)	•107
第 65 図	34~36号掘立柱建物実測図(1/80)	•109
第 66 図	37~40号掘立柱建物実測図(1/80)	·110
第 67 図	41~44号掘立柱建物実測図(1 /80)	·111
第 68 図	45~48号掘立柱建物実測図(1/80)	•113
第 69 図	49~52号掘立柱建物実測図(1/80)	•115
第70図	53号掘立柱建物実測図(1/80)	·116
第71図	54号掘立柱建物実測図(1/80)	·117
第72図	55号掘立柱建物実測図(1/80)	119
第 73 図	56・57号掘立柱建物実測図(1/80)	120
第74図	58号掘立柱建物実測図(1/80)	·121
第 75 図	59号掘立柱建物実測図(1/80)	122
第 76 図	6 ・ 7 ・11・12号土壙実測図(1/60)	125
第77図	10・13・16号土壙実測図(1 /60)	129
第 78 図	14号土壙実測図 (1/30)	130

第 79 図	19・21・22号土壙実測図(1/60)133
第 80 図	20号土壙実測図(1/30、1/60)
第 81 図	1号集石遺構実測図(1/30)
第82図	土製品実測図(1/2)149
第83図	不明土製品実測図①(1/2)150
第84図	不明土製品実測図②(1/2)151
第 85 図	不明土製品実測図③ (1/2)152
第 86 図	不明土製品実測図④(1/2)153
第87図	不明土製品実測図⑤ (1/2)154
第 88 図	不明土製品実測図⑥ (1/2)155
第 89 図	不明土製品実測図⑦(1/2)156
第 90 図	土錘実測図(1/3)
第 91 図	石器実測図①(1/3)
第 92 図	石器実測図②(1/4)160
第 93 図	鉄製品実測図(1/2)
第 94 図	鉄製品・鞴羽口実測図(1/2) ·····163
第 95 図	土馬実測図(1/2)165
第 96 図	紡錘車実測図(1/2)166
第 97 図	特殊遺物実測図(1/2)
第 98 図	陶質系土器実測図(1/3)169
第 99 図	古式土師器実測図(1/4)
第100図	縄文土器・石器実測図(1/2)172
第101図	(上) 竪穴住居の群構成と規模(下)床面下層土壙の形態175
第102図	(上)接合資料 (下)切削物の分布状況177
第103図	掘立柱建物の構成179
第104図	黑色土器実測図 (1/3) ·····186
第105図	ネズミの爪痕・門歯痕(1/3・1/4)189
	ネズミのチュー太郎190
第107図	31~36号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)197
第108図	37~39号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)198
第109図	40・41号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)
第110図	42号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)
第111図	43~45号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)

- 第112図 46~49号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第113図 50~54号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第114図 55~59号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第115図 59~62号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第116図 63・64号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)
- 第117図 65~67号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第118図 67・68号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第119図 69号住居跡出土土器実測図(1/4)
- 第120図 69・70・71号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)
- 第121図 72~77号住居跡出土土器実測図 (1/4·1/6)
- 第122図 77~80号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第123図 81・82号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第124図 82~85号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第125図 86・87号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第126図 89~93号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第127図 93~95号住居跡出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第128図 96号住居跡出土土器実測図 (1/4·1/6)
- 第129図 97~99号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)
- 第130図 101~104号住居跡出土土器実測図 (1/4·1/6)
- 第131図 105~107号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)
- 第132図 108·110号住居跡出土土器実測図 (1/4·1/6)
- 第133図 111·112号住居跡、掘立柱建物跡出土土器実測図 (1/4·1/6)
- 第134図 6・7号土壙出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第135図 7~11号土壙出土土器実測図 (1/4·1/6)
- 第136図 11・12号土壙出土土器実測図(1/4・1/6)
- 第137図 13・14号土壙出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第138図 15~18号土壙出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第139図 19号土壙出土土器実測図① (1/4·1/6)
- 第140図 19号土壙出土土器実測図②(1/6)
- 第141図 20号土壙出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第142図 20・21号土壙出土土器実測図 (1/4・1/6)
- 第143図 22号土壙出土土器実測図 (1/4·1/6)
- 第144図 溝1出土土器実測図① (1/4·1/6)

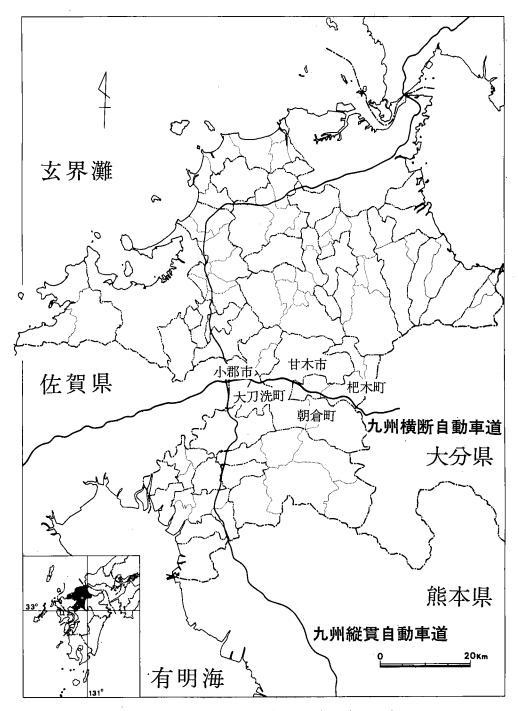
第145図	溝1出土土器実測図②(1/4・1/6)
第146図	溝1出土土器実測図③(1/6)
第147図	ピット出土土器実測図①(1/4)
第148図	ピット出土土器実測図②(1/4)
第149図	ピット出土土器実測図③ (1/4・1/6)
第150図	その他土器実測図①〈10号土壙周辺〉(1/4・1/6)
第151図	その他土器実測図②〈10号土壙、62~65号住居跡周辺〉(1/4・1/6)
第152図	その他土器実測図③(1/4・1/6)
第153図	その他土器実測図④(1/4・1/6)
第154図	接合・同一個体資料①(1/4)
第155図	接合・同一個体資料②(1/4・1/6)
第156図	接合・同一個体資料③(1/6)

表 目 次

第1表	宫原遺跡出土土器法量表①~⑩	•247
第2表	宫原遺跡出土不明土製品計測一覧表①~④	·267
第3表	宮原遺跡竪穴住居跡一覧表①~③	折込

付図

- 1 宮原遺跡構配置図、立野・宮原遺跡付近路線図(上・1/600、下・1/2000)
- 2 宮原遺跡AI地区遺構全体図(1/200)



第1図 九州横断自動車道路線図(約1/400,000)

I. はじめに

A. 宮原遺跡の調査の経過

九州横断自動車道第11地点・宮原遺跡の調査の経過については、『九州横断自動車道関係埋蔵文化財報告-14-』(1988)に詳しい。ここでは本報告に関する部分のみ抽出して記しておくこととしたい。

宮原遺跡は調査の便宜上,東の方から西へ $C \cdot B \cdot A \cdot D \cdot E$ の各区に分けられ,そのうち A 地区のみ A I,A IIに細分されている。今回報告するのは A I 地区の全部である。既に報告した $B \cdot C$ 地区より西側になるが,宮原遺跡で最初に調査にとりかかったのはこの A I 地区であった(だから A 地区なのである)。 E 地区は試掘の結果遺構がなかった。

この A I 地区は1981 (昭和56) 年 5 月18日から調査が開始され、途中の中断や他地区の優先 的調査などがあって、最終的に終了したのは1983 (昭和58) 年12月17日であった。

なお,立野遺跡を含めた第11地点の調査は宮原遺跡 D 地区が最後まで残り、全てが完了したのは1984(昭和59)年4月30日のことであった。

この足かけ 2 年半に及ぶ期間中に発掘調査に携わった文化課の担当者は10人にのぼっている。 出土遺物等の整理については、調査終了後からやや間をおいて着手し、本格的には1987年か らとりかかった。そしていま、宮原遺跡の 2 冊めの報告書がやっと刊行の運びとなった次第で ある。

今後、B·C地区、A地区に続いて、AII地区·D地区の一部と甘木市市道部分、そして D地区の残り、というようにあと最低 2回は報告書刊行の予定である。

調査時の関係者については『横断道報告第14集』に記してあるが、昭和57(1982)年度分をも含めて一覧にしておこう。また報告書刊行時(平成1=1989年度)の関係者も併せて載せておくこととする。 (伊崎)

日本道路公団福岡建設周	哥 <i>19</i>	81	19	1982		1983		1989	
局 長	持永電	 色一郎	持永市	竜一郎	今村	浩三	臼井	信	
総務部長	田代	勝重	落合	一彦	落合	一彦	堀	義任	
管理課長	布川	堯	梅田	道人	梅田	道人	副島	紀昭	
管理課長代理	村上	博之	野口	利夫	野口	利夫	荒木	恒久	
	谷口	浩二							
日本道路公団福岡建設局 甘木工事事務所									
所 長	江口.	正一	乗松	紀三	乗松	紀三	風間	徹	
副 所 長	矢野	浩司	矢野	浩司	西田	功			
" (技術)			中村	義治	中村	義治			
庶務課長	森本	太郎	松下	幸男	松下	幸男	下川	節生	
用地課長	溝口	萩男	岩下	剛	岩下	剛	松尾	伸男	
工務課長	深町	貞光	山口	宗雄	山口	宗雄	豊里	英吉	
小郡工事区工事長	田口	裕	田口	裕	友田	義則			
甘木工事区工事長	瀬戸山	山邦雄	瀬戸[山邦雄	猪狩	宗雄			
朝倉工事区工事長	吉長	英一	平沢	正	平沢	Œ	上野	満	
杷木工事区工事長					前田	雄一	小沢	公共	
福岡県教育委員会									
教 育 長	友野	隆	友野	隆	友野	隆	竹井	宏	
							御手法	先 康	
教育次長	守屋	尚	森	英俊	安倍	徹	大鶴	英雄	
							渕上	雄幸	
管理部長	森	英俊	安倍	徹	伊藤	博之			
指導第二部長							光安	常喜	
							月森潭	青三郎	
文化課長	藤井	功	藤井	功	藤井	功	葉石	勲	
			,				六本ス	木聖久	
文化課課長補佐	蓮尾	謙吉	中村	一世	中村	一世	苹	聖峰	
課長技術補佐							宮小路	格賀宏	
庶務係長	内山	孝之	内山	孝之	松尾	満	池原	脩二	
(担当) \	平尾	敏映	長谷川	川伸弘	長谷川	川伸弘	沢田	康夫	
	三島	洋輝							

	19	81	19	1982		1983		1989		
調査第二係長	栗原	和彦	栗原	和彦	栗原	和彦				
調査班総括							柳	Ħ	康雄	
(二 係)	柳田	康雄								
および	石山	勲	石山	勲	木下	修	井	Ŀ	裕弘	
調査班	児玉	真一	浜田	信也	児玉	真一	木	下	修	
	新原	正典	児玉	真一	新原	正典	中	間	研志	
	佐々オ	大隆彦	新原	正典	中間	研志	伊	崎	俊秋	
	小池	史哲	中間	研志	小池	史哲	小	田	和利	
•	池辺	元明	小池	史哲	伊崎	俊秋	水	ノモ	工和同	
文化財専門員				:			木	村糸	幾多郎	
臨時職員							日	高	正幸	
調査補助員	高田	一弘	高田	一弘	高田	一弘	武	田	光正	
	武田	光正	武田	光正	武田	光正				
	日高	正幸	日高	正幸	佐土原	原逸男				
					日高	正幸				
					平嶋	文博				
					狐塚	省蔵				

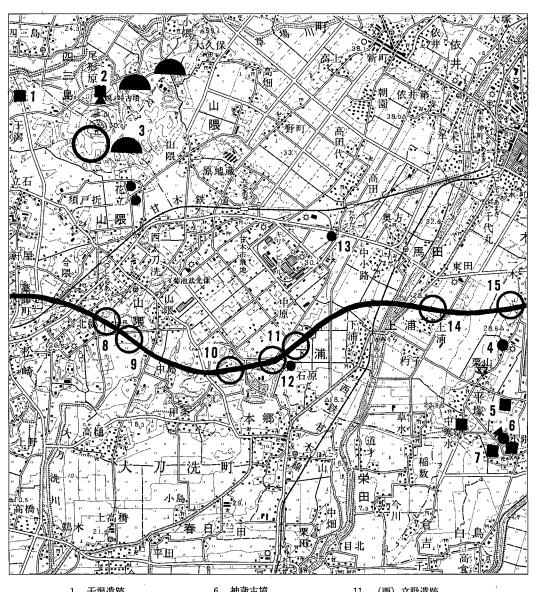
B. 遺跡の位置と環境

**ばる 宮原遺跡は、福岡県甘木市大字下浦字宮原に所在する。筑後川へ注ぐ小石原川右岸に広がる 低台地の縁辺で、標高22~23m の所である。周辺に位置する遺跡については、すでに刊行され た横断道関係の報告その他でかなり触れられているので、今回は割愛することとする。宮原遺跡の最終報告の中で詳しく述べる予定としよう。

11地点(宮原遺跡・立野遺跡)についての既報告書は下のとおりである。

- ・福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-2-』1983
- ・福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-5-』1984
- ・福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-8-』1986
- ·福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-14-』1988

(伊崎)



1. 干潟遺跡 2. 焼ノ峠古墳

3. 花立南麓窯址群 4. 大願寺遺跡

5. 小田道遺跡

6. 神蔵古墳

7. 小隈出口遺跡

8. 宮巡遺跡

9. 春園遺跡

10.10地点

11. (西) 立野遺跡

. (東) 宮原遺跡

12. 宮原古墳

13. 馬田りんりん石古墳

14. 上々浦遺跡

15. 下原遺跡

第2図 宮原遺跡と周辺遺跡分布図 (1/50000)

II. 調査の内容

A. 概要

今回報告する宮原遺跡 AI 区にて検出した遺構・遺物は次のとおりである。なお、遺構番号は 先に報告した宮原 B・C 地区からの続きである。

〈遺構〉

- ·竪穴住居跡 82軒 (31~112号)
- · 掘立柱建物跡 29棟 (31~59号)
- ・土壙 17基(6~22号)
- ・溝 数条 (溝1・6と現代溝)
- ・ピット 多数
- ・集石遺構 1基

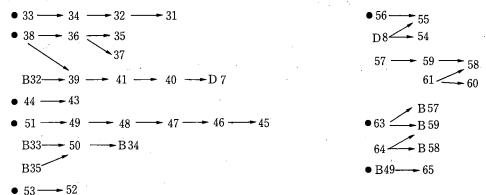
〈遺物〉

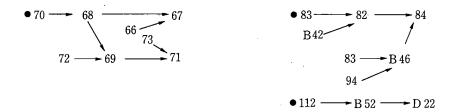
須恵器、土師器、焼塩土器、瓦、土製品(土錘・権・土馬・紡錘車・ミニチュアなど)、石製品(砥石・紡錘車)、鉄製品(鎌・鏃・刀子など)、青銅製品、玉、縄文土器、打製石鏃その他。 遺構の大半は6世紀後半~8世紀後半という時期に営まれたものである。溝1のみは5世紀初頭前後に属する。縄文土器が出土しているものの、その時期の遺構は捉えていない。

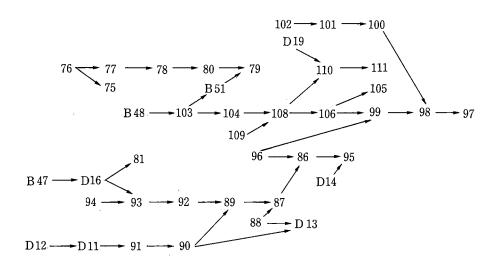
主な遺構の重複関係は次のようであった。

(伊崎)

(古→新)







── 遺構・遺物の説明のまえに ──

〈遺構〉

遺構の主体を占める竪穴住居跡については、今次の報告でも今までと同様に第3図に示すような名称と計測区分を用いることとする。今回は新たに床下層での壁隅土壙の存在を加えている。各住居跡の計測値については第3表を参照されたい。

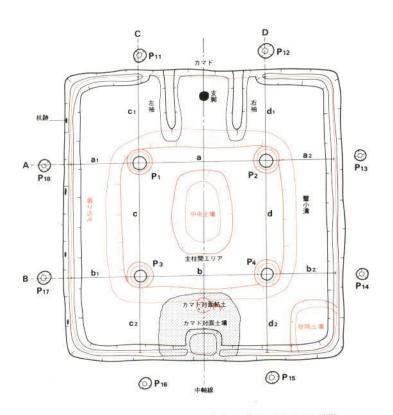
〈遺物〉

出土遺物の大多数は土器であり、この報告書にて1400余個体の実測図を掲示している。土器は須恵器と土師器が殆んどで、6世紀後半~8世紀後半という2世紀にわたる時間差をこえて、ほぼ同一の整形・調整手法を見出しうるものが多い。前に試みたように各器種を網羅して各々を説明すべきであるが、時間的余裕がないため概略のみ述べておくこととしたい。 須恵器には坏(蓋・身)、高坏、璲、壺、甕、平瓶、横瓶がある。胎土は砂粒を含むものの概ね良質のも

のが多い。稀に極めて良質のものを見る。焼成も概ね良好であるが、焼成中途にて軟質のまま 使用されたものもある。色調は通有のねずみ色を呈する。調整は、口縁部周辺はどの器種も例 外なく回転なでを行う。体部は坏類は回転へラ削りかまたはなでを行う。回転へラ削りは反時 計回りが多い。甕等の体部はタタキが施される。坏の天井部または底部の外面を未調整のまま としている例も多い。

土師器には坏・皿・境・高坏・壺・鉢・鍋・甕・甑・移動式カマドなどがある。胎土のあり 方で精製と粗製に大別され、その中間くらいで精製に近いものとがある。坏・高坏は殆ど全て 精良な胎土を用いた精製土器である。甕・甑の中にも精良な胎土を用いたものがわりと目につ く。焼成はふつう。稀に甕の胎土中心部が高熱で青っぽく変色しているものがある。よほど火 回りがよかったものとみえる。色調は赤みがかった黄色を呈する。調整は口縁周辺は例外なく 回転なでを行う。体部は坏類が外面は手持ちへラ削り、内面はなで、甕類は外面が刷毛目、内 面はヘラ削りとなる。

本文中での土器の説明は最小限にとどめ、法量等は巻末の第1表を参照されたい。なお、法



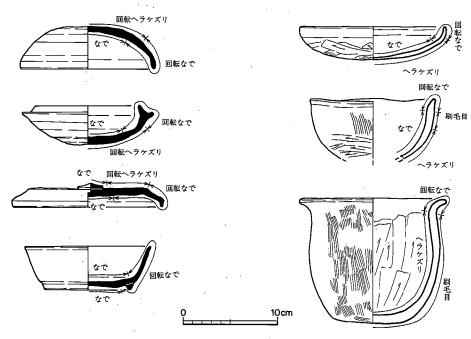
第3図 竪穴住居跡模式図と各部の名称 (赤線は下層)

量の欄において、須恵器坏身の受部径とかえりのある蓋の身受け部径を④胴径の中に表示している。

次項以下の説明では、遺構の次にそこから出土した遺物について記すが、このとき、不明製品と接合・同一個体資料については出土したことのみに触れ、詳細は C. 遺物各説の中で述べることとする。

また、おそらく溝1を掘削したのと同じ時期の所産と思われる土師器が住居跡埋土等から出土したりしているが、これを6世紀後半以降の土師器と区別するために、好適とは思わないが古式土師器と称しておく。さらに、ほぼ同じ時期と思われる陶質土器もしくは古式須恵器も同様に出土している。これも現時点では国産・舶載も含めて分離しえないため、陶質系土器と称して凌いでおくこととしよう。 (伊崎)

- 註1 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-2-』1983 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-8-』1986 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-14-』1988
 - 2 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-8-』1986 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告-9-』1987



第4図 須恵器・土師器の調整 (1/4)

B. 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡

31号竪穴住居跡 (図版14, 第5図)

A 地区北東端の農道下に位置し、31~34号住居の 4 棟が重複しているのを検出した。当住居が住居群の中で最も新しく、かつ南側に占地する。

約半分が調査区外に伸展し、農道及び農道の側溝でカマド等も撹乱されており、最大壁高も12cmを測る残存不良な住居跡である。主柱穴は P_1 と P_3 を検出したが、柱間は1.45m とやや狭いことから、-辺3.7m 程の隅円方形に復原出来る。

床面は平坦に造っているが、床面下層は32・34号住居の下層遺構も重複し、やや不明瞭となるも全体的に深く掘削している。床面下層の中央土壙は調査区内では検出していない。

カマド 北壁略中央部に焼土を検出したが、これが火床面と考えられる。壁体は側溝により破壊され何ら残存しないが、造り付け型と考えられる。

出土遺物で、図示している1と2がカマド火床面、4が床面上より出土し、他の2点は埋土中出土品である。耳環は床面下層より出土した。図示した品の外は、須恵器が3点出土しているだけである。 (武田)

出土遺物 (図版52・84、第107・97図)

1・2はカマド周辺から出土している。1の内天井部には成形時の同心円当具痕がある。2 はきわめて精良なつくりである。4は円盤貼りつけ風の底部であるが、粗製のつくりとなる。

耳環(図版84, 第97図7) もともと銅地金銅張りであったものが、鍍金部分は剝落したものだろう。身の断面形はやや楕円形気味となる。最大径3.1cm。重さ12.9g。欠部の幅は3.5mmを測る。 (伊崎)

32号竪穴住居跡 (図版14, 第5図)

31号住居に南半分が削平を受けているが、34号住居を切っている。

残存状況は31号住居と同様に農道等で著しく削平を受けており、最大壁高も12cmを測る残存不良な住居跡である。主柱穴は P₄が調査区外となるも各柱穴間は1.64m を測り、また東西辺が約4 m となる中型規模の隅円方形の住居に復原される。柱穴 P₃も他と略同じ深さであった。

床面は略水平に造っている。床面下層は34号住居の床面下層遺構が深く造られているので明確に把握出来なかったが、東壁側の掘り込みは深く掘削されていた。北壁側に土壙を検出して



第5図 31·32·34号竪穴住居跡実測図 (1/60)

いるが、位置等から34号住居に付随する遺構と考えられる。

カマド 31号住居同様に火床面の焼土のみ検出したが、位置は北壁略中央に当る。右袖は農道の側溝で壊されたと思われるが、左袖は住居破棄時に壊された可能性も有す。造り付け型であるう。

出土品で、図示した1と2が埋土中より出土した。鉄製刀子は床面下層の東側掘り込みより出土。図示した外には、須恵器の甕が3個体分出土している。 (武田)

出土遺物 (図版79, 第107·93図)

1の坏身はかなり厚ぼったいつくりを示す。2は甑になるのかもしれない。把手は断面楕円 形を呈し、扁平に近い形状とはならない。 (伊崎)

鉄製品(図版79, 第93図 2) 身の先端を欠失する刀子で現存長 9 cmを測る。身の幅は中央部で0.7cm程, 関部で1.5cmを測る。度重なる使用に耐え,よく研ぎこまれたものであろう。茎尻は折れ曲がり,茎の関部側に木柄が遺存する。 (児玉)

33号竪穴住居跡 (図版14, 第6図)

31~34号住居群の西端に位置する。31と32号住居には明らかに切られているが、34号住居との関係は切り合う部位の残存状況が極めて不良なこともあり明確になしえなかった。しかし、カマド焼土の散布範囲から判断して、当住居の方が古いと判断される。

東側の壁面と床面下層遺構は他の住居と重複して不明となるが、西辺が4.86m を測り、中型規模でも大きめの住居に復原される。主柱穴の平面形は長方形に近い台形状を呈し、 P_4 は P_3 と略同じに深く掘削されていた。最大壁高は21cmを測る。床面は略水平である。床面下層より中央土壙と掘り込みを検出した。中央土壙は、長軸1.9m、短軸0.85m、深さ0.2m を測り、やや不整形な長楕円形を呈す。埋土は黄灰色粘質土と黒色土がブロック状に混じり合っている。掘り込みは、検出分より判断すると幅 $0.6m\sim0.8m$ 、深さ $0.14m\sim0.2m$ でもって壁面と平行に全周していたと推定され、一見溝状の平面形態を呈す。

カマド 北西壁の略中央に付設されていたと推定されるが、後世の柱穴と農道の側溝等から 撹乱を受け、火床面の焼土が僅かに旧態を止めていた。造り付け型と思われる。

図示した出土品で、6が床面下層中央土壙より出土し、他の1~5は埋土中出土品である。 不明土製品も埋土中より出土。鉄製品は側溝より出土したが、当住居に帰属する可能性が強い。 図示した外に、須恵器坏が1個体、甕が2個体、土師器の甕と坏類がそれぞれ1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版80, 第107・94図)

図示しえたもののいずれも小破片である。2の外天井部にはヘラ記号が一部見えている。5

は甑になるのかもしれない。

(伊崎)

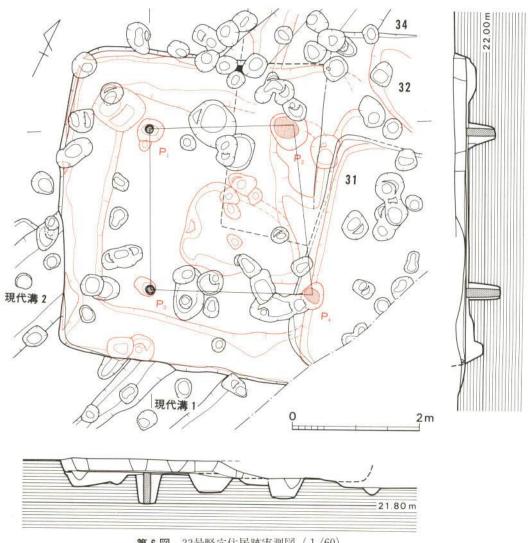
鉄製品 (図版80, 第94図18) 鉄鏃の茎片と思われる。現存長3.8cmを測る。

(児玉)

34号竪穴住居跡 (図版14, 第5図)

南東側半分程を32号住居により削平され、その他も大半以上が側溝及び後世の柱穴等で撹乱 された残存不良な住居跡である。

主柱穴は 4 本検出したが、個々深度差を示しているものの、 P_3 と P_4 は推定床面より $40\sim50$ cm



第6図 33号竪穴住居跡実測図 (1/60)

の深さに掘られている。主柱穴の配置及び北壁の長さ等から類推すると、大型に近い中型規模の住居に復原される。最も良好な壁面でもって15cmの壁高を測る。

北東側の床面は削平されているものの、略水平であったと思われる。床面下層より中央土壙と掘り込みが検出された。中央土壙は32号住居内に位置するも当住居に付随し、平面形は三カ月状を呈す。長軸1.9m、短軸0.8m、最深部は床面より0.28mを測る。掘り込みは前述の切り合い関係等で一部不明な点も存すが、カマド部を除き33号住居と同様溝状に巡っていたと推定される。

カマド 前述した3棟の住居と同様に撹乱されていたが、右袖の基底部が僅かに残存している。北辺の略中央に位置し、典型的な造り付け型となろう。右袖側の小礫は焼土面で検出したが、後世の側溝に付随した可能性が大である。

出土品で、1が床面下層より、2が埋土より出土した。図示した外には、須恵器の甕が1個体分出土している。 (武田)

出土遺物 (第107図)

小破片2点を図示しうるのみである。1の口縁内面はヘラケズリによって稜を有する。(伊崎)

35号竪穴住居跡 (図版15·16, 第7図)

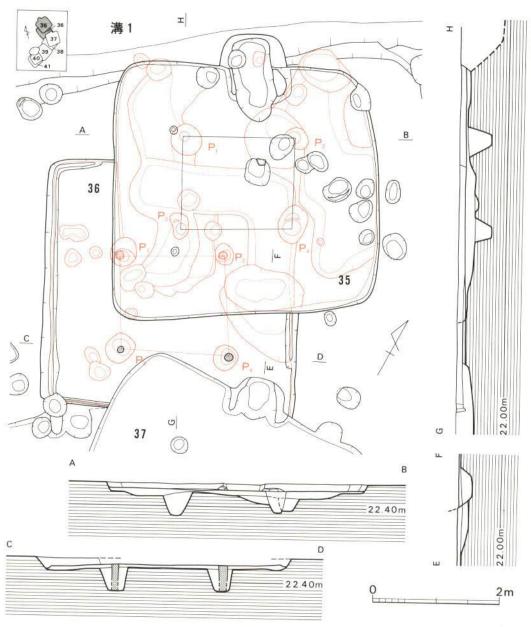
35~41号住居の7棟が切り合いをなし、弧状を呈し南北に伸展する一群の北端に位置する。 34号住居跡からは西方17mの位置に当り、カマドの先端は1号溝まで達している。36号住居と 1号溝を切って築造された住居である。

辺長は3.8m~4.14m を測り, 若干歪つな隅円方形を呈しているが, 竪穴部と主柱穴配置は略相似形をなしている。主柱穴は P₂が若干浅く, 他は略同じ深さである。最大壁高10cmを測る。

床面は略水平である。カマド対面の南壁中央壁際に土壙を検出したが、床面下層の掘り下げを行なっていた時点で判明した遺構であり、床面上では開口していなかったと断定すべきであろう。この外の床面下層遺構には、主柱穴 P_2 付近に中央土壙と掘り込みが存す。中央土壙は、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.2m を測り、略円形の平面形を呈す。掘り込みは36号住居床面下層遺構と重複しているものの、東・西両壁際が深く掘削されているので溝状を呈している。

カマド (図版17, 第8図) 左袖上を中軸線が通る北壁略中央に付設した突出型で、火床面の約40cmが壁面より突出している。後世の柱穴で一部壊され、かつ残存状況もさほど良好ではないが旧態を窺い知れるカマドである。突出部は、奥行き0.52m、幅1.03mの略長方形に掘り込んだ後、厚み0.2m~0.25mの壁体を積み上げている。壁体は屋内へ最長0.6m伸展し、焚口部を0.52mと若干狭くした馬蹄形の平面形となる。右袖下方には壁体を補強するためであろうが、浅い掘り込みを行なった後に粘土を積み上げていた。掘り込み北側、壁面ライン上に存す

柱穴は当カマド以前の所産であり関連する遺構ではない。火床面は長軸1.02m, 短軸0.28m~0.42m を測り、やや不整形な長方形を呈す。突出部側が若干深く、焚口部へ順次緩やかな勾配でもって浅くなっていた。カマド内出土の土師器甕はやや大型であり、他の住居の支脚に転用した甕とは器形を異にし支脚とは考え難い。住居廃棄時に支脚を撤去したと考えるべきであろう。



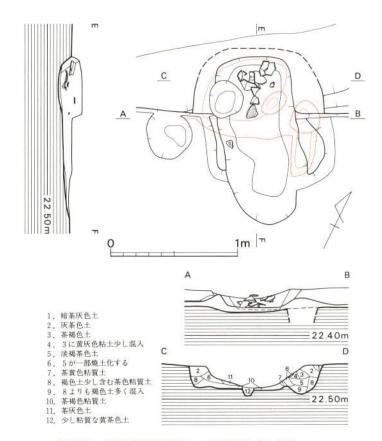
第 7 図 35·36号竪穴住居跡実測図 (1/60)

図示した1~8で,3と8がカマド内より,2と4が床面下層より出土し,他は埋土中品である。古式土師器(第99図)1は埋土中品,2は床面下層より出土。縄文土器も埋土中品である。図示した外に,須恵器の坏と甕が1個体,土師器の甕が6個体,同环類が2個体,同高坏が1個体出土している。不明土製品も埋土中より出土した。(武田)

2の坏身は床下層の出土 で、古い時期の、例えば36 号住居跡からの混入品であ ろう。4の体部にはカキ目 風に見える横なでが入る。

出土遺物 (第107·100·

99図)



第8図 35号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

5・6の外面は粗い刷毛目をみる。

第100図 5 は外面に凹線の入る土器で、多分に縄文時代の所産であろう。何分にも小破片ゆえ 断定は差し控える。

第99図1・2は古手の土師器で、2は床下層から出土している。 (伊崎)

36号竪穴住居跡 (図版15·16, 第7図)

35号住居の南に位置し、略同じ主軸方位をなす。北側の半分程を35号住居に切られ、南壁際は37号住居に切られているが、38号住居の一部を切っている住居跡である。

規模は、前途の如く削平されて不明な部分が多いけれども、西辺が3.86m、南辺が3.78mを 測り、また、35号住居下層で検出した掘り込み等から中型の隅円方形に復原される。

主柱穴は 4 本とも柱痕が確認され、図化していない P_1 と P_2 も他の 2 本と略同じ深さを有す。 西壁側の壁小溝は隅から北壁及び南壁にかけて若干伸展しているが、東壁側の壁小溝は中程

で途切れていた。最大壁高は13cmを測る。

床面下層遺構には、北東・隅部に明瞭な掘り込みが存すが、それ以外の掘り込みは判然としなかった。主柱穴 $P_1 \sim P_2$ 間に不整形な土壙状の落ち込みを検出しているが、35号住居床面下層遺構と重複しているので中央土壙と断定するまでには至っていない。

カマドは北壁側に付設していたと推定されるが、35号住居に削平されたのであろう。

出土品は、2と7が床面下層より、他は埋土より出土した。図示した以外に、須恵器の甕が 1個体と、土師器の甕と坏類が2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第107図)

1はやや厚ぼったい坏蓋である。3は外面に化粧土がかかり、底面は平らになる。7は甑になるのかもしれないが、薄手のつくりである。 (伊崎)

37号竪穴住居跡 (図版15·16·第9図)

36号・38号住居を切り、36号住居の南側に位置する住居跡である。

東西の両辺が僅かに長い隅円方形を呈し、中型規模となる。壁高は10cm~14cmを測る。主柱 穴内に柱痕を検出したが、床面積に対する主柱間エリアの占有率は極端に低い。主柱穴は住居 の平面形と大きく異なり、逆台形状の平面形を呈す。

カマド対面の床面上に黄灰色粘土の高まりを検出した。平面形はカマド両袖と同じ馬蹄形を 呈すが、焼土は全く見受けられず、かつカマドは北壁に付設しており、所謂カマド対面粘土と 呼称している遺構である。粘土の高まりは 4 cm~ 7 cmを測り、中央部は埋土と同じ黒色土が充 塡していた。この中央部の黒色土も当遺構に付随していたと考えるならば、壁側が1.36m、屋内 側が0.95m、長さ0.9mを測る台形状のテラスに復原される。

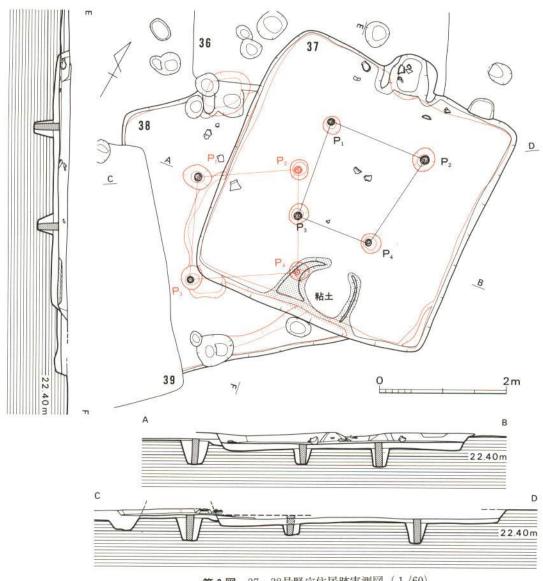
床面下層には明瞭な掘り込みはなく、若干凹凸をなすも略水平に掘り込まれている。

カマド (図版17, 第10図) 北壁中央に付設した突出型のカマドである。中軸線はカマド中央を通るが、カマド主軸は主軸方位よりも更に12°西偏している。突出部は、奥行き0.43m,屋内側の幅0.88m,突出側の幅0.67mを測る台形状の掘り方となる。壁体の築造は35号住居カマドとは異なり、突出部の奥壁は積み上げず、両側壁から屋内の両袖に伸展する壁体を積み上げている。壁体は基底部で幅0.3m,屋内の両袖長は左が0.34m,右が0.2m残存する。火床面は長軸0.52m,短軸0.34mの長方形を呈し、床面よりも5cm程深い。支脚は撤去されていたが、少し壊れて左袖外床面上に横転している13が転用されていたのであろう。

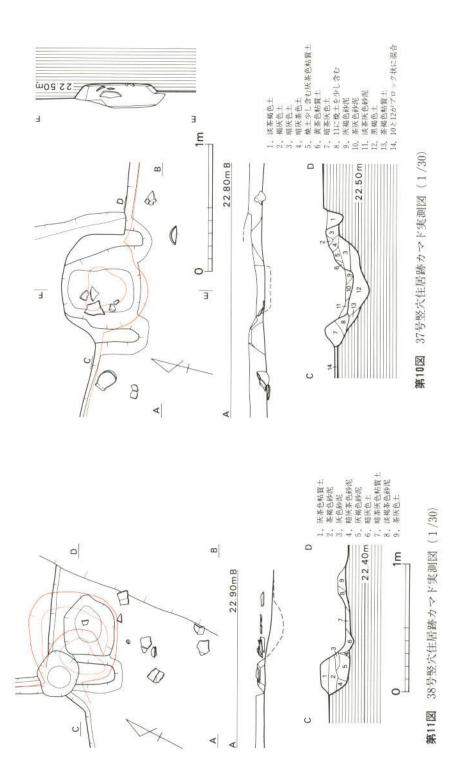
出土品は、2・3・13・15・16と19がカマド周辺より、7・8と14が床面下層より出土し、他は埋土中品である。図示した外に、須恵器の甕・壺が1個体、土師器の甕が14個体、同甑が2個体、同坏と高坏が各2個体出土している。不明土製品では、切削物がカマド内より、他の

出土遺物 (図版52, 第108·100·98図)

2・3の坏身は口縁端部に打欠きを施している。6は床下層と埋土中のものとが接合した。7は若干の歪みをみる。10~12はいずれも精製品である。13は完形に復される小型の甕で、二次加熱を受け、体部から底部にかけて煤が付着している。カマド周辺の床面から出土したことと併考すれば、カマドの支脚に使われていたものかも知れない。14の外面はタタキと見まがう



第9図 37·38号竪穴住居跡実測図 (1/60)



— 18 —

ような刷毛目を施す。15・18・19の口縁直下には平行タタキの痕と思われるくぼみを見る。

第100図 6 は深鉢の口縁部と思われる小破片で,口唇外面下端にはヘラ先で擦過したような痕がある。縄文土器と思しいが断定は控える。

第98図1は陶質系の土器で40・41号住居跡出土の破片と同一個体である。詳細は後述する。 (伊崎)

38号竪穴住居跡 (図版15, 第9図)

37号住居の西南に位置し、36・37・39号住居に切られている住居跡である。残存する部位はカマド周辺と西壁側・南壁側の一部にすぎず、最大壁高も僅か6cmしか測りえない。

西辺が4.33m を測り、主柱穴配置も考慮に入れると中型規模の隅円方形に復原される。各主柱穴間は1.6m~1.72m を測り、平面形は若干歪つな正方形を呈す。

床面下層遺構には中央土壙と南壁際に溝状を呈す掘り込みが存す。中央土壙も大半以上を37 号住居に削平されているが、長軸が1.5m 前後で10cm以上の深さになろう。

カマド (第11図) 中軸線が右袖上を通ると考えられ、北壁に付設した突出型となるカマドである。残存しているのは左袖の一部と火床面のみである。突出部は36号住居と後世の柱穴で削平されているが、床面下層の掘り方から約40cm程突出している。以上から、火床面が長軸0.7m、短軸0.45mの長方形に復原出来よう。支脚は火床面の一部が約10cm程窪んでいたため存せず、住居廃棄時に撤去したとも考えられる。

出土品は、1が床面下層より出土し、鉄製品は埋土より出土した。不明土製品の2点はカマド周辺より出土。図示した外には、土師器の甕が2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版79、第108・99・93図)

1は坏身のごく小さな破片である。第99図3は古式土師器の坩になる。 (伊崎)

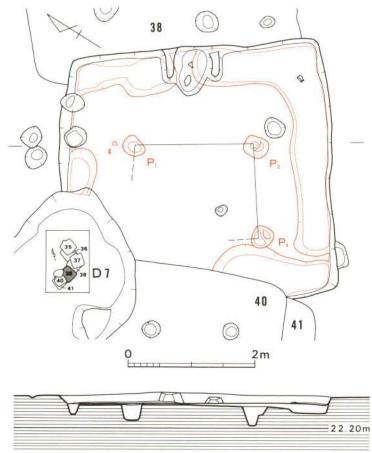
鉄製品(図版79, 第93図4) 刀子の身の破片と思われる小片で,現存長4cmを測る。厚さは1.5mmで極めて薄い。 (児玉)

39号竪穴住居跡 (図版15, 第12図)

38号住居を切り,西南側に位置する。7号土壙と40·41号住居に西南部を切られている。35~41号住居群で当住居のみ主軸方位が東北をとり,他の住居と略直交している。

北東辺が3.85m, 東南辺が3.95m を測るので、床面積約15m²の中型規模で隅円方形に復原出来る。主柱穴の P_3 は7号土壙に削平されていたが、やや台形状に近い長方形に主柱穴を配していたのであろう。 P_4 は床面よりの深さ約20cmとやや浅い掘り方であった。

床面下層には, 明瞭な溝状の掘り込みが壁際に途切れて 4 条存す。 幅0.4m~0.6m, 床面より



第12図 39号竪穴住居跡実測図 (1/60)

0.15m の深さを測り、一部はカマド火床面下方まで達していた。

カマド (第13図) 中軸線がカマド中央を通り、東北壁中央に付設した造り付け型カマドである。焚口側の両袖が壊われているものの、比較的残存状況は良好である。壁体は貼床面より粘質土を積み上げ、長さ0.5m~0.55m、幅0.25m、高さ0.15mを測る。火床面は長軸0.63m、短軸0.42mの楕円気味の長方形を呈し、床面よりも若干深い。支脚は遺存せず、抜き跡も検出し得なかった。

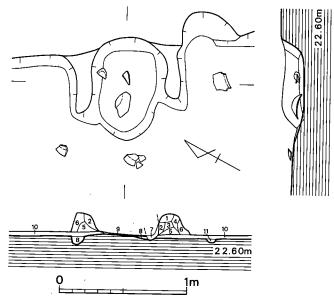
出土品は、1と2が埋土より、3と5がカマド周辺より、4が床面下層より出土した。図示した外に土師器の甕が13個体、坏が2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版52, 第108図)

2は蓋か身かよくわからないが、内面にヘラ記号を有する。

3はやや厚ぼったいつくりで 粗製の部類に入る埦である。内 面は煤だらけになっている。 4 の外面口縁下には何かで押さえ つけたような圧痕が見られる。

(伊崎)



第13図 39号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

- 1. 暗茶灰色粘質土に褐色土少し混入 5. 1に黄茶色粘質土混入
 - 6. 灰茶色 (やや) 粘質土
- 9. 8に褐色土少し混入 10. 8と黒褐色土が混合

- 2. 暗灰茶色粘質土 3. 暗茶灰色粘質土
- 7. 灰茶色砂泥に焼土少し含む
- 11. 黑褐色土

- 4. 暗茶灰色砂泥
- 8. 黄茶色粘質土

40号竪穴住居跡 (図版15・16, 第14図)

39号住居の西南側に位置し、7号土壙にカマドと北東壁の一部を削平されているが、39・41 号住居と32号掘立柱建物を切っている住居跡である。

辺長は2.9~3.2m と比較的短く, 床面積も約9 m²に復原され, 隅円方形を呈す小型住居とな ろう。主柱穴配置も竪穴部の平面形と相似形をなし、柱穴間も1.09~1.34m と比較的狭い。

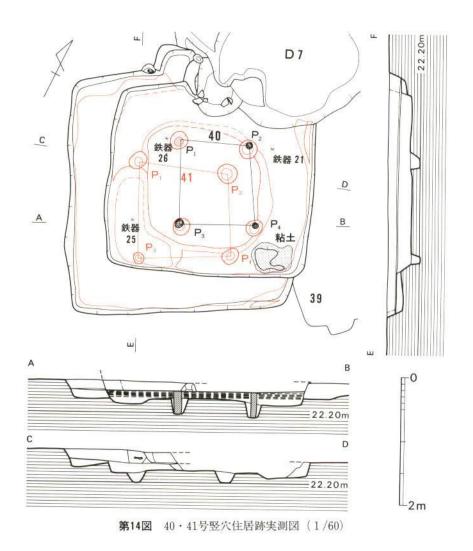
床面は3面存したが、上部床面から下部床面下層まで約10cm程で、各貼床の厚みは2~3cm 程であった。上部床面上において主柱穴の柱痕を検出し、かつ各床面上において柱穴の掘り方 と抜き痕が認められなかったことから、住居内の湿気に起因してか、または土砂の流入等の理 由で順次床を貼付したと考えられる。東南隅で検出した粘土の高まりは下部床面に付随し、3 ~ 5 cm程の高さを測るが性格は不明である。

床面下層には,幅0.45m~0.8mで明瞭な掘り込みが壁際を全周していた。深さは下部床面か ら約10cm程で、南西隅部が更に深く掘り込まれていた。

中軸線がカマド中央を通り、北西壁中央に付設した突出型カマドであ カマド (第15図) る。大半以上が7号土壙に削平され,左袖と火床面の半分程が残存していた。0.35m 程壁面よ

り突出していると推定出来るが、突出部奥壁より積み上げたか否かは不明となる。左袖は突出部より0.6m 残存していたが、更に屋内側へ若干伸展していたであろう。火床面は長軸0.5m、短軸0.45m 程の隅円方形と推定されるが、床面より13cmも深くなっていたのは前述の床面の問題に起因している。また、屋内側の火床面下層に32号掘立柱建物の柱穴を検出した。

出土品は、11・13と20がカマド内より、7と19が上部床面埋土より、2・3・5・10・14・15・17と18の8点が上部床面から中部床面間より、4・9と16が下部床面埋土、1・6・8と12が床面下層より出土した。鉄製品は3点出土している。J22はカマド周辺より、陶質系土器1は中部床面下層より、41号住居の出土品と同一個体となる陶質系土器3は上部床面下層より出土した。土製品の21は中部床面上方より出土。不明土製品の3点は上部床面下層から中部床面

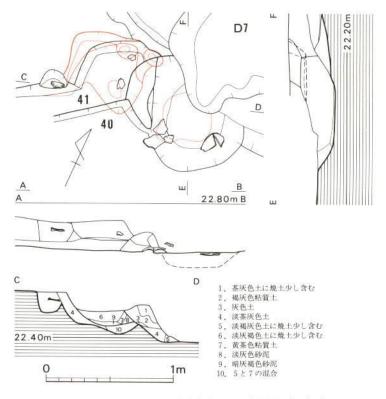


- 22 -

の間より出土した。図示 した外には、須恵器の坏 が3個体、土師器の甕が 7個体、同甑が1個体、 同坏類が6個体出土して いる。 (武田)

出土遺物 (図版52 · 72 · 80, 第109 · 154 · 98 · 82 · 94図)

2は蓋か身か定かでないが外面にへう記号を持つ。3の撮みは中央部分が隆起する。8の口唇部は細く直立している。10はおそらく平瓶の口縁部だろう。11は須恵器の形をまねた土師器で赤褐色〜灰褐色を呈する。16の口縁内面は煤が付着して



第15図 40・41号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

いる。17の口縁直下はタタキ痕のように見える。18は37号住居跡出土の13とつくりがきわめて似ており、同一工人の作かと思われる。20は内外ともに煤の付着がみられる。

第154図 J22と第98図 1・3 はこの40号住居跡からも出土して他と接合もしくは同一個体となる資料である。

土製品 (図版72, 第82図40-21) 7号土壙で出土しているのと同様の形状になるのだろう。 しかし、全形がどのようであったのかはわからない。 (伊崎)

鉄製品 (図版80, 第94図21・25・26) 21は鉄鏃の茎片で現存長5.1cmを測る。下半部は矢柄の木質が付着している。25も鉄鏃の茎片と思われ、現存長2.1cmを測る。26は厚さが25に比べて薄く、何らかの工具の破片かと推測する。現存長4cmである。 (児玉)

41号竪穴住居跡 (図版15·16, 第14図)

40号住居に大半以上削平され、略同じ主軸方位でもって南側に位置する。カマドの先端部も7号土壙に切られた残存不良な住居跡であるが、32号掘立柱建物を切っている。

西南辺が3.7m, 東南辺も3.67m を測り, 小振りの中型規模に属す隅円方形に復原される。主柱穴配置も P₂が若干南偏しているも略方形を呈し, 柱穴の深さも床面より30cm~35cmで略同レベルとなる。

床面下層は、床面より10cm~15cm程掘り込まれていたが、残存状況より判断して溝状を呈していた可能性を有す。

カマド (第15図) 中軸線がカマド中央を通り、北西壁略中央に付設している突出型カマドである。7号土壙と40号住居に大半以上削平されており、突出部の約半分程が旧態を止めていた。突出部の掘り方は奥行きが0.45m、幅約0.7mを測る。壁体は突出部先端も粘土を積み上げ、最大0.15mの厚みをなす。左袖も突出部壁体から伸展していたと考えられるが、後世の柱穴と40号住居に削平されている。火床面の幅は0.45mを測る。

図示した1~15で,5がカマド周辺より出土したが,他は全て埋土中出土品である。不明土製品の2点は埋土より出土。鉄製品の2点も埋土中出土品。接合資料のJ22と陶質系土器1・3・4の4点は埋土中出土品である。図示した外には,須恵器の坏類が9個体,土師器の甕が11個体,同甑が2個体,同坏が6個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版52・79・80, 第109・98・93・94図)

3の蓋はひずみが大きい。5は筥形に近い形状を示す。12は鍋,13・14は甑になるのかもしれない。15の肩部には浅い凹線が入るが、これは横なでの時の押えつけによって生じたものである。

第154図 J22, 第98図 1・3・4 はこの住居跡から出土し他との同一個体資料である。(伊崎) **鉄製品** (図版79・80, 第93・94図 9・30) 9 は刀子片で両関のようである。現存長4.5cm, 身の最大幅は関部で1.1cmである。30は鉄鏃の茎片かと思われる。現存長4.7cmで,下端部は折れ曲がっている。 (児玉)

42号竪穴住居跡 (図版15·18, 第16図)

41号住居の北西3.5m に位置し、1号溝の埋没後略直上に築造した住居跡である。

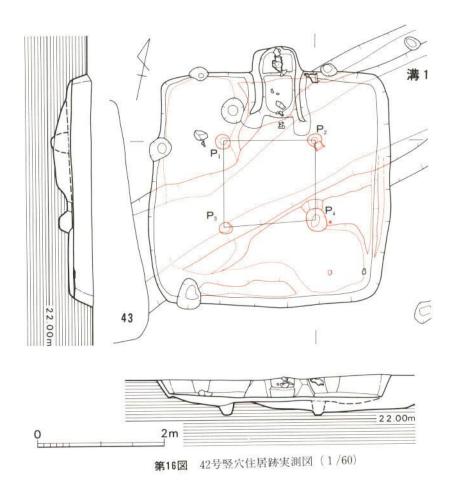
辺長は3.38m~3.5m を測り、中型でも小振りの規模に属し、隅円方形の平面形を呈す。主柱 穴配置も竪穴部と相似形をなし、床面からの深さは四本共に略同じ深さである。壁面は急勾配 の立ち上がりをなし、最大壁高0.33m を測る。壁際に柱穴を4個検出したが、当住居に伴う可 能性を有すが断定する迄には至らない。

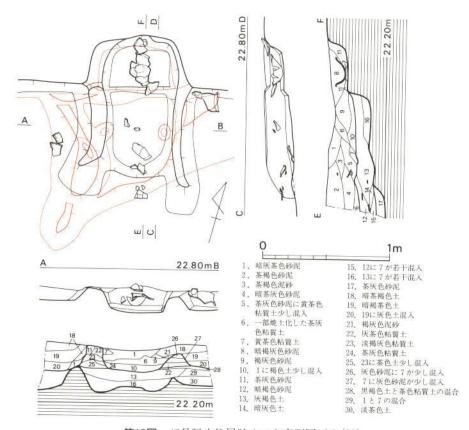
床面下層では掘り込みを検出したが、1号溝と重複して一部不明となるも、西壁際は溝状を呈し最大幅1.3mを測る。全体的にやや深く掘削し、貼床面まで10cm~15cmを測る。

カマド (図版18, 第17図) 北壁中央に付設した突出型カマドで, 中軸線は若干西偏するがカ

マド内を通る。突出部は奥行き0.4m,幅0.75mの略長方形を呈す掘り方である。壁体は突出部 奥壁隅から両袖にかけて積み上げているが、袖は基底部で幅0.27m~0.3m,突出部は上端で0. 11mを測る。カマド全長は1.4mとなり、突出部から直線に両袖へと伸展している。火床面は長軸0.95m,短軸0.4mを測り、平面形は隅円方形を呈す。突出部が約4cm程高くなっているが、突出部側か地山面で、屋内側が埋め戻した土であり、使用時に灰や炭化物の掻き出しにより屋内側が低くなったと考えられる。突出部床面上の土器は略完形の小型甕(22)に復原されたが、支脚として使用していた後、廃棄時に抜き取られ逆向きに放置されたのであろう。

図示した 1~29では、6・11・22・24・25と29がカマド内及び周辺より、3・8・13・17・21と28が床面下層より出土し、他は埋土中出土品である。陶質系土器の4は埋土中出土品である。不明土製品の切削物2点とM4は埋土より出土し、他の1点は床面下層より出土。図示した外に、須恵器の坏類が2個体、土師器の甕が17個体、同甑が3個体、同坏類が3個体、同鉢と高坏が各1個体出土している。 (武田)





第17図 42号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (図版52, 第110·98図)

1のヘラ記号はあまり深みがない。3は撮みを欠失するが、その剝離部分を見ると、撮みを付ける前に接着しやすいように沈線を入れている。9はかなり厚ぼったいつくりになる。13は内面に化粧土がかかり、口縁部には黒斑をみる。15の内底面には一部にミガキが施される。18の外底面は回転ヘラケズりを行う。20の口縁内面はケズリによって稜を有する。また外面に煤が付着する。28・29の刷毛目はかなり粗々しい。29を見ると、刷毛目の原体が木片でないものもあるようだ。

第98図4の陶質系土器は41号住居跡と31号掘立柱建物のピット出土品と接合した。(伊崎)

43号竪穴住居跡 (図版15·18, 第18図)

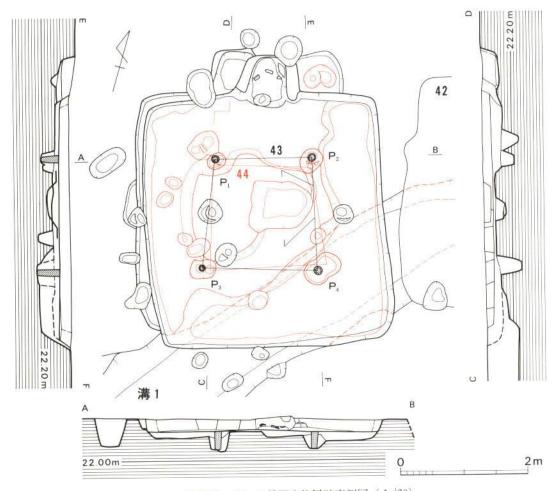
東南部が1号溝埋没上に当り、42号住居の西南15cmに位置する。44号住居とは略同主軸方位となり、主柱穴も略同位置に配し、かつ壁面も北東側に15cm程移行した相似形をなしている。

上記から44号住居の建て替え住居跡かもしれない。壁高は0.2mを測り、残存状況やや良好。

辺長は3.68m~3.93m を測り、中型規模に属す。平面形は隅円方形を呈し、主柱穴も竪穴部と相似形に配置している。床面上で主柱穴の柱痕を検出したが、掘り方も4本共略同じ深さを有していた。

床面は略水平である。床面下層には中央土壙と掘り込みが存した。中央土壙はやや P_2 寄りの主柱間エリアに位置し、長軸0.97m、短軸0.72m、床面よりの最大深長0.18m を測る。平面形は不整楕円形を呈す。溝状を呈す掘り込みが壁際を巡るが、東壁際から南壁際が一段と深く掘り込まれているので、視覚的には逆「L」字状の掘り込みとなる。

カマド(第19図) 中軸線がカマド中央を通り、北壁中央に付設した突出型カマドである。突出部の一部壁体を後世の柱穴で壊されてはいるが、比較的残存状況は良好である。突出部は奥



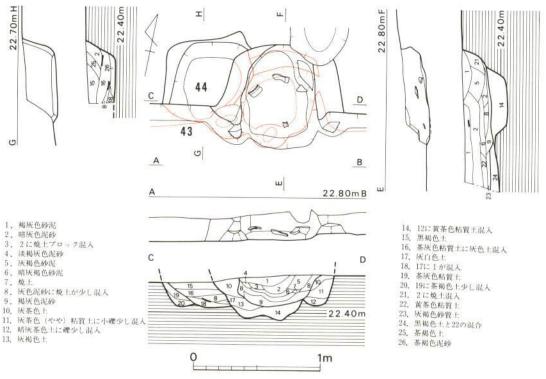
第18図 43·44号竪穴住居跡実測図(1/60)

行き0.51m,幅は北壁際で1 m,先端で0.75mを測り,平面形が台形状を呈す掘り方となる。 壁体は突出部先端の隅より直線に屋内側両袖へと伸展し、粘質土を積み上げている。屋内の袖が0.2m~0.3m と短いのは、焚口側が崩落したのか壊されたのであろう。壁体の幅は、袖の基底部で0.23m~0.34m,突出部の上端で0.15m~0.21mを測る。火床面は長軸0.68m,最大幅0.49mを測り、平面形が不整楕円形を呈す。床面は奥壁側が高く、緩やかな勾配をなし焚口側がやや深くなる。カマド内より土師器甕が火床面直上で出土しているが、支脚に転用されていた品(11)で、廃棄時に壊されたと考えられる。

図示した1~20で、11・16・17と19がカマド内より出土し、3は床面下層よりの出土品で、他は埋土中出土品である。接合接料のJ27は床面下層より出土した。不明土製品は埋土中出土品である。図示した外に、土師器の甕が14個体、同甑と坏類が各2個体、同甕の脚部が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版52, 第111·154図)

2は角張った感じの器形という印象をうける。2と4の撮みは同じ様に中央が盛り上がる。 4の外天井部には1本線のヘラ記号が入る。5は壺になろうか。瓦質に近い焼き上りとなる。 7・8は精製品だが、9はどちらかというと粗製に近い。13の内面はかなりの二次火熱を受け



第19図 43・44号竪穴住居跡カマド実測図(1/30)

て胎土が赤変している。 $14 \cdot 15$ は胎土が良質であり精製に近いつくりである。 $16 \cdot 17$ の外面はきわめて粗い刷毛目を施す。また両者ともに黒斑がある。18の外面は擦過に近い刷毛目調整となる。 $16 \sim 18$ は甑となる可能性もある。20は内面に煤が付着している。

第154図 127は7号土壙出土の破片と接合した。

(伊崎)

(武田)

44号竪穴住居跡 (図版15·18, 第18図)

43号住居に殆んど削平され、カマドの一部と西壁際が僅かに残存する住居跡である。

辺長と主柱穴配置が43号住居と略同じとなるので、規模と平面形も同様であったと考えられる。床面は43号住居より5cm程上に造られ、壁高は最大15cmを測る。

床面下層遺構も全く不明である。

43号住居カマド東側に存する土壙状遺構は、壙底は略平坦で、壁面も急勾配の立ち上がりをなし、埋土も当住居と略同じであることから当住居に付随するのかもしれない。しかし、類例が殆んどなく断定するまでには至らない。

カマド (第19図) 中軸線が右袖上を通ると思われ、北壁略中央に付設された突出型カマドである。右側壁と屋内側壁体を43号住居に、左袖付近を後世の柱穴に削平されて残存状況極めて不良である。突出部は奥行き0.5m、幅0.75mと推定される掘り方となり、平面形は略長方形を呈すと思われる。壁体は43号と略同じと考えられ、壁体の幅は約10cm程が残存していた。火床面は略水平で、長軸0.48m、短軸0.43mが計測された。支脚も遺存していない。

出土遺物はカマド内より1個体出土したのみである。

出土遺物 (第111図)

図示しうるものは1点だけである。この土器は底部を打欠いて穿孔し甑に転用したものである。外面の刷毛目はきわめて粗い。43号住居跡出土の16とつくりが類似しており、この両者は同一工人の作としてよかろう。 (伊崎)

45号竪穴住居跡 (図版19, 第21図)

35~41号住居群の南2 mに位置し、45~51号住居の7棟が切り合いつつ住居群を構成する。切り合い関係は一部49号住居と51号住居の切り合いが逆となるも、西側が古くなり、新しくなるに従い順次東方に移る。当住居跡は住居群中最も新しくて東端に位置するが、大半が調査区外に伸展し、カマド周辺部のみ調査した。

検出分で辺長4.35m を測るが、カマド中央より北東隅までが2.3m を測るので約4.6m 程の辺長に復原される。これより中型規模でも大きめの住居となろう。壁高は土層断面で40cmを測る

が、土層図で分かる様に削平を受けているので更に高くなる。調査区内に主柱穴は遺存しない。 床面下層には掘り込みが存し、床面より10cm~15cmの深さとなる。検出分では明瞭な溝状を呈 していない。

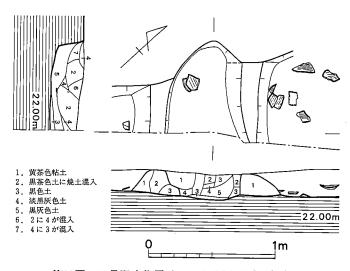
カマド (図版20, 第20図) 北西壁の略中央部に付設されたと考えられ、燃焼部が若干突出した造り付け型カマドである。突出部は楕円形気味に、壁面より最大0.22m 突出する。両袖の焚口側をトレンチで削平したが、火床面は長軸0.8m、短軸0.55mの、平面形が不整楕円形に復原される。支脚は遺存していなかった。

図示した1~3はカマド内及び周辺より出土したものである。古式土師器もカマド周辺よりの出土である。陶質系土器7は埋土中より出土。移動式カマドの庇部分と思われる土製品も埋土中に存したが、これは図示していない。図示したもの以外に、土師器の甕2個体分が出土している。 (武田)

出土遺物 (第111・99・98図)

1は鉢形になるのだろう。精製品であり、内面はミガキ風の擦過をおこなう。外面はヘラケズリである。2の外面には煤が付着している。カマド周辺からの出土であるけれども、支脚として使用していたとするには小型にすぎるきらいがある。図示していないが、移動式カマド形土器の庇部分と思われる3cm前後の小破片が埋土中から出土している。

第99図4はカマド周辺からの出土となっているが、古式の土師器口縁部である。第98図7は埋土中出土で、32号掘立柱建物の1ピット出土品と同一個体となるものである。この陶質系土器については後述する。 (伊崎)



第20図 45号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

46号竪穴住居跡 (図版19, 第21図)

45号住居に東南壁際を切られ、東南隅が調査区外となるも残存状況良好な住居跡で、46~51号住居と33・35号掘立柱建物を切る。34号掘立柱建物に北西壁面が切られていた。

辺長が5.5m 程を測り、平面形が隅円方形を呈す大型の住居である。主柱穴も竪穴部の平面形と相似形に配置し、各柱穴間も $2.65m\sim2.85m$ とやや広く、 P_1 と P_3 に径15cm程の柱痕を検出した。 $P_1\sim P_3$ 間の壁寄りに土師器甕と埦が出土した柱穴(PN 1)は後世の所産と考えられる。

壁面は略垂直に立ち上がる。土層図において、幅4cmの壁体に関連すると思われる痕跡を壁際で検出した。しかし、床面上では何ら痕跡を止めていない。この件は後章で検討する。主柱間エリア床面上に土器が若干散乱していた。床面下層には明瞭な掘り込みが存し、溝状を呈して北東、南西壁際に2条検出した。

カマド (図版20) 北西壁略中央に付設し、燃焼部が0.4m 程突出した造り付け型カマドである。袖は黄灰色粘質土を積み上げ、壁より0.7m~0.75m の長さを測る。突出部には壁体を積み上げた痕跡は認められない。火床面は略水平に近く馬蹄形の平面となる。支脚は遺存していなかった。

図示した1~15で,5がカマド内より,1・3・6・8と15が床面上より,14が床面下層より出土。他は埋土中出土品である。古式土師器の2点と陶質系土器も埋土中出土品である。図示した外に,須恵器坏類が1個体,土師器の甕が9個体,同甑と坏類が各1個体,同高坏が2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版53, 第112·99·98図)

須恵器は坏 6 点を図示するが、うち 5 点にへラ記号がある。破片で断定はしえないが、 2 は X 字形となるようだ。 3 ・ 4 は口唇部端面を打欠いている。 8 ~10は高坏であろう。 12は粗い つくりで脚台になろうか。 15の外面はきわめて粗々しい刷毛目を施している。

第99図5・6は古式土師器, 第98図5は陶質系土器で後述する。 (伊崎)

47号竪穴住居跡 (図版19, 第21図)

46号住居に大半以上削平された残存不良な住居跡である。当住居を約0.7m 東方に平行移動して建て替えたのが46号住居と思える程,平面形・規模や主柱穴配置などが相似している。 48~51号住居と35号掘立柱建物を切っているが,34号掘立柱建物には切られている。

壁面も46号住居と同じ様相を呈しているが、もし当住居群が建て替えで構成されたのであるならば、土層断面の壁体?は新住居の壁面を構築しつつ旧住居を埋め戻したため名残りを止めたと考えられる。しかし、当住居群が建て替えで構成されたと断定する資料はないけれども、後章で壁体に関して考察することにする。

床下層は溝状の掘り込みが認められたが、全体としては把握できなかった。

カマド (図版20) 中軸線がカマド略中央を通り、北西壁中央に付設した造り付けカマドである。後世の柱穴と46号住居に約半分程が削平されているが、右袖は0.55m 残存していた。黄灰色粘質土を積み上げていたが、46号住居カマド壁体との差異はあまり認められなかった。支脚は残存していない。

図示した1と2は埋土中より出土。他に土師器の甕が2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第112図)

1・2ともに精製品である。(伊崎)

48号竪穴住居跡 (図版19, 第21図)

47号住居に大半以上削平され, 西南壁側が0.5m 幅で残存する住居跡である。46~48号住居に切られ, 49~51住居を切っている。南東隅と主柱穴 P₂が調査区外となる。

主柱穴配置より47号住居と略同規模で、大型に属すると思われる。

床面、床面下層と壁面等の有様も47号住居と略同じであった。カマドは検出していない。 図示した甕は埋土中出土品で、他に出土品はない。 (武田)

出土遺物 (第112図)

図示しうるのは土師器甕が1点あるのみである。頸部がやや締まって、口縁部が外反していくのは時期的な特徴としてよいだろう。 (伊崎)

49号竪穴住居跡 (図版19, 第22図)

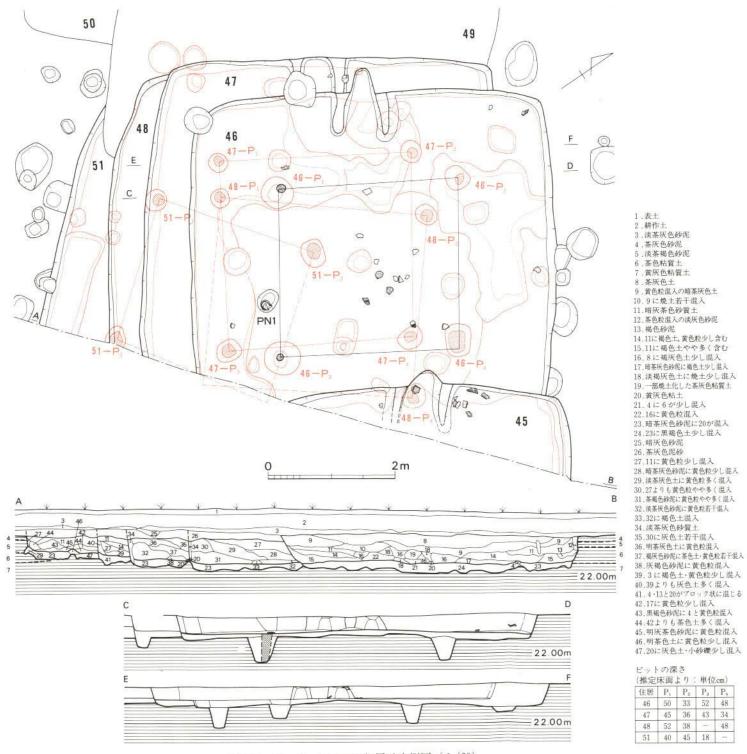
47·48号住居に東南側の約¼程を削平されているが、比較的残存良好な住居跡である。46~48住居と34号掘立柱建物に切られるが、50·51号住居と35号掘立柱建物を切っている。

辺長は約5.6m 程となり、主柱穴間も2.77m~3.09m を測る大型住居である。平面形は隅円方形を呈すと思われるが、主柱穴の平面形はやや台形状を呈す。

壁面は急勾配の立ち上がりをなし、最大壁高は15cmを測る。カマド周辺を除いて壁際を壁小溝が巡り、不規則ではあるが壁小溝内に深さ5~7cmの小穴を検出した。

床面下層より中央土壙と掘り込みを検出した。中央土壙はやや P_2 寄りに位置し,長軸2.5m,短軸1.4m,床面から10cmの深さを測る。平面形はやや不整な楕円形を呈す。掘り込みは溝状を呈し,北東壁側と南西壁側に2条存す。北西隅が他より若干深くなっているのは,50号住居の中央土壙がこの位置に存したのであろうか。

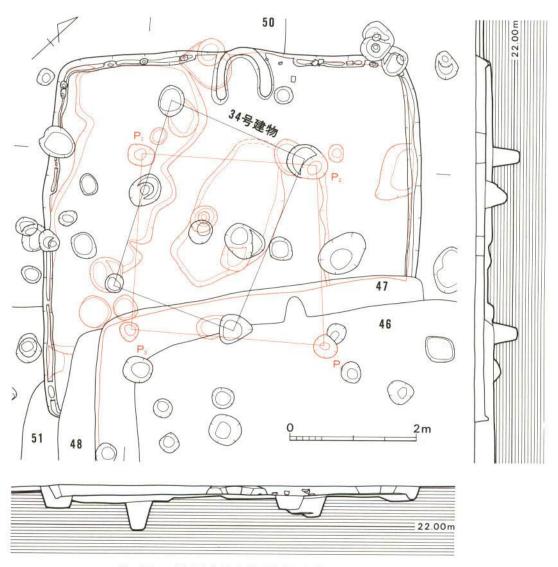
カマド (図版21, 第23図) 北西壁の略中央に位置し、中軸線がカマド内左袖側を通る。両



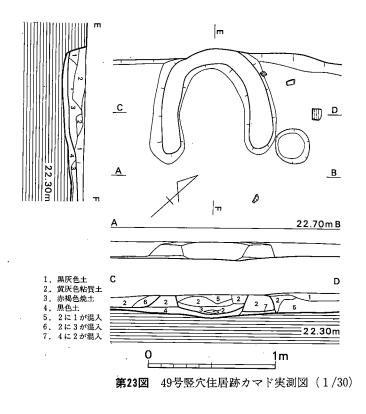
第21図 45~48·51号竪穴住居跡実測図 (1/60)

袖共0.8m を測り、壁体が煙道側にも巡る特異な造り付け型カマドである。火床面は長軸0.67 m, 短軸0.51m を測り、平面形は楕円形を呈す。埋没状況は、カマド内外に壁体に使用されていた黄灰色粘質土と焼土が火床面・床面直上に広く散乱していることから、家屋廃棄時か直後に壊れたと考えられる。支脚も同時期に撤去したのであろうか残存しない。

図示した1~4で、3がカマド右側より出土し、他は埋土中出土品である。4は遺構検出時に北東壁際より出土し、床面より10cm程上方に当る。手捏風土製品も埋土中出土品である。図



第22図 49号竪穴住居跡実測図 (1/60)



示した外には、土師器甕と高 坏が各1個体、同坏類が2個 体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版53, 第 112·82図)

1は城になるのかもしれない。3の甕は46・48号住居跡出土の甕(46-15,48-1)とも通ずる器形をなす。外面は粗い刷毛目を施し、煤けている。4のカマド形土器は破片からの復原実測であるが、上端部径21.5cm, 焚口部幅25cm程となろう。上端開口部周辺が赤変し、焚口部周辺には煤が付着している。内面には化粧土がかかる。

第82図49-5はミニチュア土器の口縁部破片である。なでが著しい。 (伊崎)

50号竪穴住居跡 (図版19, 第24図)

 $46\sim51$ 号住居群の西端に位置し、主柱穴 $P_3\sim P_1\sim P_2$ を結ぶラインより東南側約%程を49号住居に削平された住居跡である。この住居群中では古期に属する住居で、東南へ 2~m移動して若干拡張したのが49号住居と思われるほど 2~棟の住居は相似形をなしている。

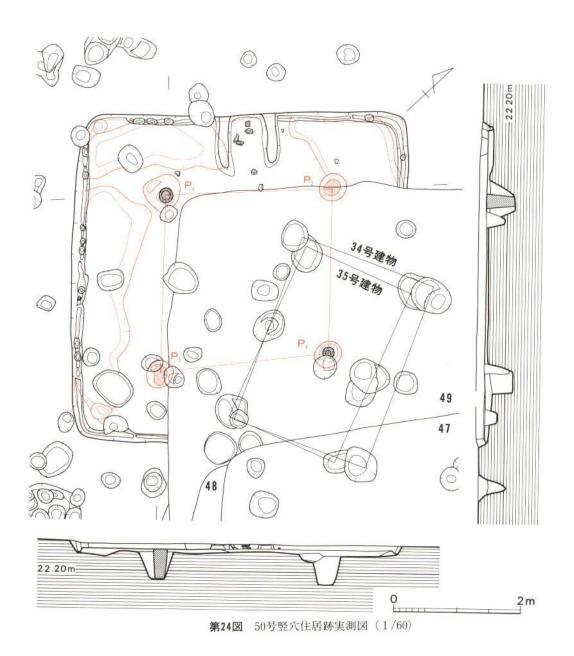
主柱穴間は2.6m~2.78m を測り,平面形は若干歪つな方形を呈す。辺長も5 m を越えることから大型規模となろう。竪穴部の平面形は残存する部分より推定すると略正方形になる。

壁面はやや急勾配に立ち上がり、カマド部を除いて壁際に壁小溝が巡る。壁小溝内に深さ 4 cm~9 cmの小穴が不規則に並んでいて、総数14個を数える。

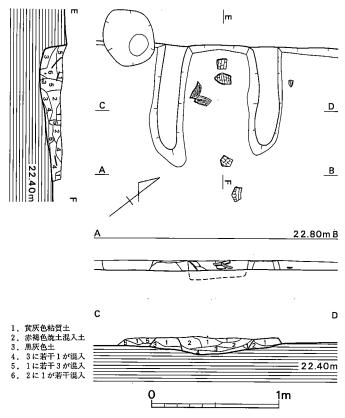
床面下層で掘り込みを検出したが、図面上では不連続となるも若干凹凸を有して壁際を巡る。 49号住居床面下の西北隅が若干深く、この所が当住居の中央土壙となるかもしれない。

カマド (図版21, 第25図) 北西壁中央に付設した造り付け型カマドで、中軸線がカマド中央を通る。両袖共に黄灰色粘質土を積み上げているが、最大高9cmとやや残存状況不良である。 火床面は長軸0.75m, 短軸0.5m を測り、平面形は長方形を呈す。煙道側0.25m から焚口側が強 く火を受け焼土化していた。カマド内より出土した甕は支脚に転用した品とは考え難く,支脚は家屋廃棄時に撤去したものと考えるのが妥当であろう。

図示した2がカマド焚口部より出土し、1は埋土中出土品。接合資料J39は南西壁際より出土の埋土中品。鉄製品も埋土より出土。図示した外には、須恵器甕が1個体、土師器の手捏ねが1個体出土している。 (武田)



-35 -



第25図 50号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

出土遺物 (図版80, 第 113·94図)

1の土師器坏は精製品とは言い難い。2の甕はややなで肩気味の器形になる。

第155図 J39は 須 恵 器 甕 で96号住居跡出土品と同一 個体である。 (伊崎)

鉄製品 (図版80, 第94図 27) 鉄鏃の茎片とするに は断面が長方形で薄く, 何 かの工具の破片と想像する。 現存長5.3cmである。

(児玉)

51号竪穴住居跡 (図版19, 第21図)

49・50号住居に大半以上削平され、西南壁側が旧態を止める残存不良な住居跡であり、東南部が調査区外に伸展している。

主柱穴は $46\sim48$ 号住居床面下より $P_1\sim P_3$ を検出した。各柱穴間は2.59m, 2.34m を測り、このことから46号住居よりも若干小規模となるが大型に属すと推定される。

調査区東端の壁面で堆積状態を観察した折、壁面より0.7m 内側に黄茶色系粘質土の高まりが認められた(図版19·下)。高まりは6 cm程であり、プランとしては検出し得なかった。類例としては当遺跡 D 地区で検出しているので、その折に検討を行ないたい。カマドは検出分では認められない。

床面下層には掘り込みを検出したが、幅0.5mで1.6m以上伸展する。

図示した1と2及び接合資料J42・J43は埋土中出土品である。図示した外には、須恵器甕2個体と同壺1個体が出土している。 (武田)

出土遺物 (第113図・155図)

1・2ともに須恵器甕の口縁部である。1は内面にやや膨らみを持つ。 第155図 J42・J43はともに甕の破片でピット出土品と同一個体である。

(伊崎)

52号竪穴住居跡 (図版22, 第26図)

51号住居の南西12mに位置し、53号住居を切るも約%が調査区外に伸展する住居跡である。調査区内にカマドは存しなかったが、南西壁側の床面上に土器が多数出土したことから、南西壁中央部にカマドが付設されている可能性が高くなろう。上記より主柱穴を P₂と P₄と判断し、計測表にも記載した次第である。主柱穴間と北西辺長等から中型規模の住居と推定される。土層図より、北及び西から土砂が流入したことが窺え、また主柱穴 P₂付近の床面上に高さ 4 cmを測る地山の高まりを検出した。貼床面はこの高まりで明確に途切れているが、平面では検出し得なかった。この種の遺構は51・53号住居にも見受けられるが、平面的には把握し得たのは D 地区の住居であり、検討はその折りにすべきと考える。床面下層にはやや不明瞭な掘り込みが存す。この掘り込みとは別に、主柱穴 P₄から西南方へ伸展する溝状遺構を検出した。長さ1.9m、最大幅0.45m、床面よりの最大深長は0.3mを測るが、他に類例もなく性格は不明である。図示した1~4で、2と3が床面上から出土し、他の2点は埋土中出土品である。図示した外には、須恵器甕が1個体、土師器の甕と甑も1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第113図)

2は甑になるのかもしれない。 3は精製品である。 4は甑としてまちがいなかろう。(伊崎)

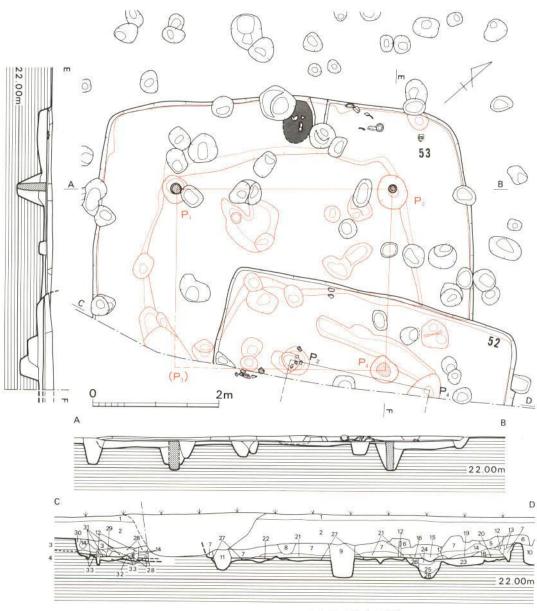
53号竪穴住居跡 (図版22, 第26図)

52号住居に北東を切られ、主柱穴 P₃及び南側が調査区外に伸展する住居跡である。

北西辺が5.71 m を測り、主柱穴間も2.87 m、3.42 m と広いことから、大型規模で隅円方形の住居に復原出来る。主柱穴の P_1 と P_2 で、径16cm、13cmの柱痕を検出した。壁面は急勾配の立ち上がりをなし、土層断面で壁高23cmを測る。

52号住居と同様に土層断面で、床面より3cm程の高まりが認められたが、平面的には把握出来なかった。高まりの位置は、床面下層掘り込みの上端に当たる。掘り込みは、調査区内では途切れることなく巡り、床面より最大深長0.15mで幅0.8m~1.0mを測る。中央土壙は存しない。

カマド 北西壁中央に付設した造り付け型カマドで、中軸線がカマド左袖を通ると思われる。 残存状況は不良で、後世の柱穴に大半壊され右袖が0.6m残る。火床面は良く焼けており、長軸 0.7m、短軸0.48mの平面形が楕円形になろう。火床面略中央より土師器甕7が散乱して出土し



第26図

- 1. 表土 (暗灰色土) 2. 耕作土 (茶灰色砂泥) 3. 淡茶灰色粘質土
- 4. 黄灰色粘質土

- 5. 淡茶灰色砂泥

- 6. 暗灰色砂泥 7. 暗茶灰色砂泥 7. おりも茶色土多く 混入
- 9. 5に淡褐灰色土少し 混入 10. 淡褐灰色泥砂
- 11. 10に茶色土若干混入
- 12. 木の根痕 13. 7に褐色土少し混入
- 14. 茶褐色土
- 15. 暗茶灰色土
- 16. 明灰茶色砂泥

52·53号竪穴住居跡実測図 (1/60)

- 17. 灰茶色砂泥 18. 淡褐色砂泥に黄色粒
- 少し混入 19. 14に黄色粒少し混入
- 20. 黄灰色粘質土に茶灰 色砂泥混入
- 21, 16に黄色粒若干混入
- 22, 21よりも多く黄色粒 混入
- 23. 黄灰色・茶灰色粘質 土と 7 が
- ブロック状に混合 24、21に褐色土少し混入
- 25. 24よりも褐色土多く 混入
- 26、24よりも茶色土多く
- 混入 27. 3と4がブロック状 に混合 28. 14に黄色粒少し混入
- 29、明茶褐色上に黄色粒
- 少し混入 30. 3に褐色土少し混入 31. 暗茶褐色砂泥に黄色
- 和少し混入 32. 茶色粘質土に 4 が少 し混入 33. 茶色粘質土に 4 所色
- 砂泥がブロック状に 混入

たが、支脚に転用した品で家屋廃棄時に壊された考えられる。右軸外の床面上に遺物がまとまって出土した。

図示した1~9で、1・2・5と8がカマド外床面上より出土し、3・4と9が埋土中品、6が床面下層より出土した。砥石かもしれない石材もカマド右袖外床面上よりの出土品。図示した外には、須恵器坏類と甕が1個体、土師器の甕と高坏も1個体出土している。 (武田)

出土遺物(図版53·77, 第113·92図)

1・2ともにきわめて粗製の須恵器である。1の天井部へラ記号と2の底部へラ記号とは全く異なっている。3の内底面には傷つけて描かれてしまったというようなへラ記号がある。7はカマド内にあったので支脚として使用されていたものか。8はやや歪みのある土器で、外面には煤が付着している。9の甑は把手を欠失する。

石器(図版77, 第92図22) 長さ12.1cm, 最大幅8.8cmの石英片岩と覚しき石材である。断面台形状の四面のうち三面に使用痕跡を認めるものの砥石としての使用ではなく, なにか別のことに使用されているようだ。 (伊崎)

54号竪穴住居跡 (図版22·23, 第27図)

A地区最北端に位置し、8号土壙を切るも約半分程が調査区外に伸展する住居跡である。

辺長は4.2m程を測り、主柱穴間 P₃~P₄も2.08mを測ること等から中型規模に復原される。壁 高が最大10cmと残りはやや不良であるが、南東壁際中央部に屋内土壙を検出した。一部後世の 柱穴に切られているが、長軸1.25m、短軸0.5mに復原出来る。平面形は楕円形を2つ合わせた 如く不整形を呈し、また長軸は竪穴部の下端と若干方位を異にする。 壙底は僅かな段差をなし ているが略水平に近く、床面まで10cmを測る。

カマドは調査区外となるが、屋内土壙の対面に付設していた可能性が大である。

床面下層には、東南隅で土壙を検出したが、壁面に沿って掘り込まれた壁隅土壙である。長軸1.65m、短軸は北側で0.8m、南側で1.55mを測る。瓢形の平面形を呈し、床面より29cmの深さを有す。掘り込みは一部図化していないが、全体としては判然としなかった。

図示した1~9で、1・2と5~7が床面下層より出土し、9が屋内土擴東側の床面上から出土したが、他は埋土中出土品である。図示した外には、須恵器が2個体、土師器の甕が2個体、同坏類が4個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第113図)

1は内面が黒く煤け、さらに底部付近の破片はその割れた断面も煤けたところがある。割れてのち火の傍にあったものだろう。3は器肉の厚みからして壺になるのかもしれない。5の裾部上端はきわめてシャープなつくりとなる。 (伊崎)

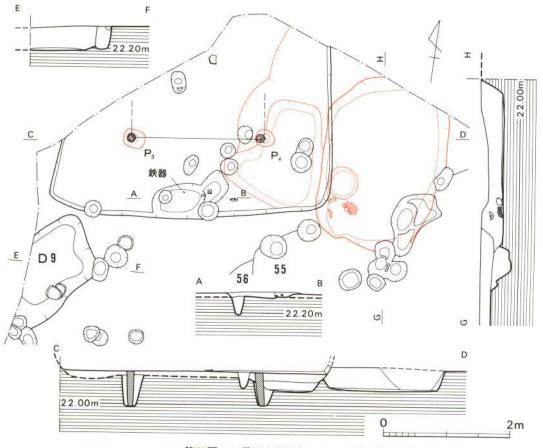
55号竪穴住居跡 (図版22·23, 第28図)

54号住居とは切り合わず、僅か30cm東位に隣接している。56号住居と8号土壙を切るも北西隅付近が撹乱を受け、また最大壁高が5cm足らずの残存不良な住居跡である。

辺長が4.15m~4.64m, 床面積も18.5mを測る中型規模の住居である。4本の主柱穴は略同 じ深さで、径11cm~12cmとやや細い柱痕を検出した。平面形は若干歪つな台形状を呈す。

床面下層で土壙を2基検出したが、北東隅に位置する壁隅土壙が当住居に伴う。長軸が1.4 m, 短軸は1 m, 床面より0.25mの深さを測る。壁面に沿って掘り込まれ、平面形は楕円形を呈す。主柱間エリア内に存する土壙を、当初は当住居の中央土壙と考えていた。しかし、近辺の54・59号住居と71・75号住居にも壁隅土壙が存し、住居に2基の土壙を保有する例はないこと等から、56号住居の壁隅土壙となる可能性が大である。カマドは西南壁の略中央に付設し、火床面のみ検出した。長軸は0.7m、短軸が0.45mを測る。支脚も残存していなかった。

図示した1~8で、8がカマド火床面より出土し、1・2と6が床面下層から出土した。他

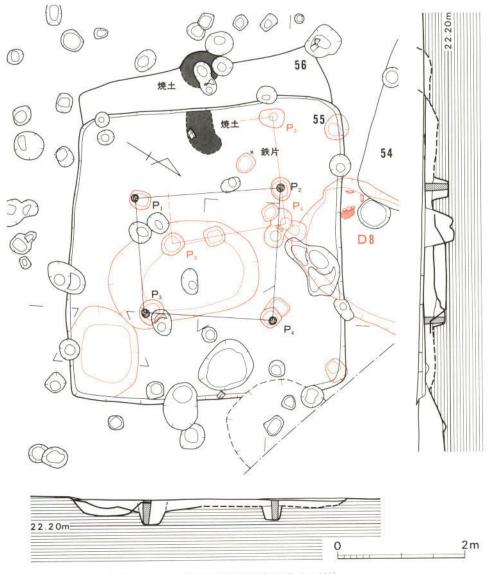


第27図 54号竪穴住居跡、8・9号土壙実測図 (1/60)

は埋土中出土品である。接合資料のJ3は埋土中出土品で、J11は床面下層より出土した。砥石は北東壁際中央の床面上より出土。図示した外には、須恵器の坏類が3個体、同甕が1個体、土師器の甕が5個体、同坏類が3個体、同鉢が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版77, 第114·92図)

1の坏は底部に比して体部はかなり薄手である。 4 はやや大ぶりの坏になり、口縁端部は丸くなる。 8 は甑になるだろう。



第28図 55·56号竪穴住居跡実測図 (1/60)

第154図J3は8号土壙と,J11は89号住居跡出土品と接合している。

石器 (図版77, 第92図18) 砥石である。四面ともに使用している。基部の方は熱を受け、油煙のような煤が付着している。カマド支脚への転用など、火に関する所で利用されたことはまちがいないところである。また基部中央にには打突痕が多数ある。硬砂岩で中砥。現存長9.7cm、幅13.4cm。 (伊崎)

56号竪穴住居跡 (図版22·23, 第28図)

55号住居に大半以上削平され、貼床面の範囲のみ検出した極めて残存不良な住居跡である。 主柱穴は4本と考えられるが、P₁は浅い掘り方であったのか、55号住居の掘り込みで喪失し たのであろうか、該当する位置では検出し得なかった。他の主柱穴間は1.81mと1.7mを、残存 する辺長も3.85mを測ることより中型規模の住居と推定出来る。

床面下層には、前述した55号住居の中央部で検出した土壙が当住居の壁隅土壙と考えられる。 土壙の位置は北東隅に当たると推定され、近隣の住居と同じ様相を呈す。長軸が2.4m、短軸は 1.5m、推定床面より35cmの深さを測り、平面形は北東側が壁面に沿った如く直線となる楕円形 に似た形状を呈す。

カマドは西南壁中央に付設されていたが、両袖も残存せず、火床面も後世の柱穴3個に切られていた。火床面は壁面より25cm程突出しており、若干突出するタイプのカマドとなろう。

須恵器坏類の小片が1個体出土しているが図示しえない。 (武田)

57号竪穴住居跡 (図版22·23, 第29図)

56号住居の西方2mに位置する。58・59号住居に西南壁際を切られ、北西壁側の壁高が無くなるやや残存不良な住居跡である。

大型に近い中型規模に属し、平面形はやや横長の隅円方形を呈す。主柱穴の4本に径13cm~16 cmの柱痕を検出し、略同じ深さの掘り方である。主柱間エリアが床面積の27%を占有し、竪穴部と略相似形に主柱穴を配置している。

壁小溝は南東隅より北西隅まで途切れることなく巡るが、北西壁際では検出していない。

床面下層で中央土壙を検出したが、近隣の住居と有様を異にし主柱間に位置する。長軸2,07m,短軸1.32m,床面より0.29mの深さを測り、平面形は楕円形を呈す。

カマドは北西壁略中央に付設し、両袖共に残存していなかったが造り付け型となろう。焼土はやや広範囲に拡がり、火床面もやや不明瞭であった。支脚は存しなかった。

図示した出土遺物 1~10で、10がカマド内から出土し、8 は床面下層より出土。他は埋土中出土品である。接合資料 J29も埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の甕と壺が各 1 個

体、土師器の甕が4個体、同坏が3個体出土している。

(武田)

出土遺物 (図版53, 第114·154図)

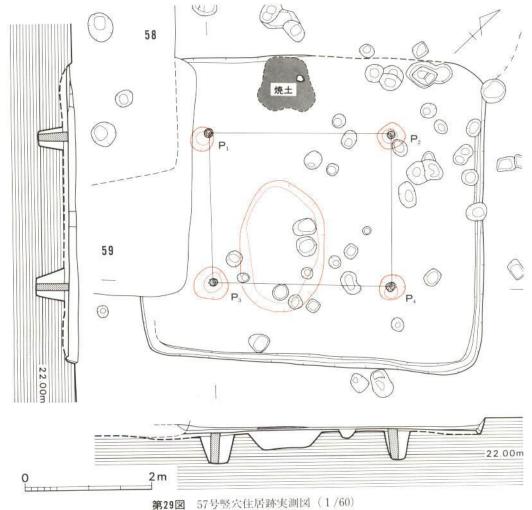
2は口縁立上りが高い。天井部外面は未調整のままである。6は内底面には小さく傷の入ったまとまりがいくつかある。それは割れ口の断面部分にも及んでいる。ネズミが土器に門歯の痕を付けたものと思われる。

第154図 J29は89号住居跡出土品と同一個体である。

(伊崎)

58号竪穴住居跡 (図版22·24, 第30図)

57号住居の西側に位置し、57·59·61号住居を切る。壁高も最大3cmしか測り得ず、また東



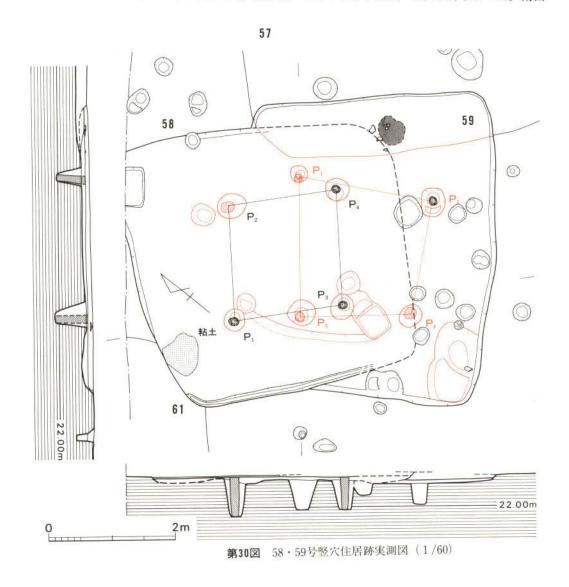
第23回 37 7 五八正日时人间四 (1700)

壁は59号住居と重複して不明となる極めて残存不良な住居跡である。北隅は調査区外となる。

規模は中型に属すと推定され、平面形は若干歪つな隅円方形を呈す。主柱穴の平面形も竪穴部と同じく歪つな方形を呈し、全体に東偏していた。 P_2 の西隣の柱穴を主柱穴と考えるならば、竪穴部と略相似する主柱穴配置になる。しかし、 P_1 、 P_4 より30cmも浅く、 P_2 でさえ20cmも浅くなるので、平面形よりも深度を重視して主柱穴とは判断しなかった。両穴共貼床下で検出したが、判断基準となる床面上における柱痕は検出し得なかったので絶対的とは言い難い。

壁小溝は南壁側で検出したが、西南隅で途切れ、南東隅付近より先は不明となる。

床面下層の掘り込みも、59号住居と重複していたので判然としなかった。土壙は存しない。 カマドは存したはずだが、火床面が赤化しなかったのであろうか、検出し得なかった。南西



- 44 -

隅付近で黄灰色粘土を検出したがカマド跡ではなく,カマド壁体であった可能性を僅少残している。

図示した1~4は床面下層より出土した。図示した外には、須恵器の坏類が1個体、土師器の甕・甑・坏がそれぞれ1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第114図)

59号竪穴住居跡 (図版22·24, 第30図)

58号住居の東側に位置し、西部の約半分程を58号住居に切られるが、57号住居を切っている。 残りの良い東側の壁面でも5 cm~8 cmの壁高を測り、残存不良な住居跡である。

中型でも小さめの規模と推定され、竪穴部の平面形は台形状になろう。主柱穴は竪穴部とは 逆の辺が長い台形状に配置され、竪穴部と主柱間エリアの平面形は不似合いな有様を呈す。径 13cm程の柱痕を P_a 以外検出したが、 P_2 と P_4 は他の2本と比べて浅い掘り方であった。

床面下層で掘り込みと土壙を検出した。掘り込みは、調査が2度に及んだことや58号住居と重複している等から不明瞭であった。土壙は近隣の5例と同様隅に位置する。長軸が1.2m、短軸が0.7mを測り、平面形は壁側が直線となる楕円状を呈す。壙底は二段掘りとなり、床面より上段が20cm、下段が32cmの深さとなる。

カマド 北東壁中央に付設した造り付け型カマドであろう。両袖は残存せず、土師器の甕を転用した支脚と良く焼けた火床面を検出した。支脚は上部を喪失しているが、支脚の傍より手捏ね土器が出土していることを鑑みると、支脚破壞行為の祭祀がなされたとも推測される。

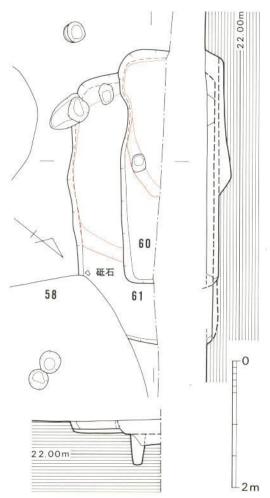
図示した1~18で、13は支脚に転用した品。14と18がカマド周辺より出土し、10・11・12・17が床面下層より出土し、3も床面下層土壙から出土した。他は埋土中出土品である。接合資料のJ41と不明土製品も埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏類が5個体、土師器の甕が3個体、同甑が2個体、同坏が3個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版53, 第114·115·82·155図)

2の口唇端部には打欠きが施されている。4はあるいは身とすべきか。12は体部が円筒状を 呈して特異な器形となる。15はわりと精製に近い胎土である。甑かもしれない。17も精製品で ある。

第155図 J41は96号住居跡出土品と接合している。

第82図59-19はカマド内より出土したミニチュアの土器で口径3.3cm, 器高2.3cmを測る。や や雑なつくりである。 (伊崎)



第31図 60·61号竪穴住居跡実測図(1/60)

60号竪穴住居跡 (図版22·24, 第31図) 58号住居の西方0.5mに位置し,大半が調査 区外に伸展する不詳な住居となる。

辺長は3.5mを測ることから小型規模に属すと思われる。壁高は最大23cmを測る。

東南隅の床面下層で土壙状の落ち込みを検出したが、壁隅土壙に相当すると思われる。 床面より最大15cmの深さを測る。掘り込みは 存したが判然としなかった。

図示した1~9で、6と7が床面下層土壙 より出土し、他は埋土中出土品である。図示 した外には、須恵器の甕が1個体、土師器の 甕と坏が各2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第115図)

1・2はよく似た器形のようである。 4は 皿とした方が妥当かもしれない。 6はもと脚 台付の甕である。 (伊崎)

61号竪穴住居跡 (図版22·24, 第31図) 60号住居の少し東に位置する。大半が調査

区外に伸展し、大部分を60号住居に削平されていると考えられ、かつ北東隅も58号住居に切られる不詳な住居跡である。

辺長が4.1m前後となる中型規模に推定される。急勾配に立ち上がる壁面で、壁高は14cm。60 号住居内で検出した柱穴が、主柱穴となる可能性を有すも断定する迄には至らない。

床面下層に掘り込みがなされていたが不詳である。カマドも検出していない。

図示した土器と砥石は埋土中出土品。他には何ら出土していない。 (武田)

出土遺物 (図版76, 第115·91図)

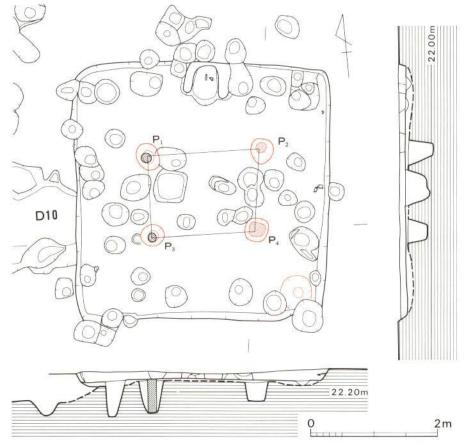
実測にたえうるのは図示した1点のみであった。小型の甕で特殊なものだろう。

石器(図版76, 第91図3) 砥石である。現存長9 cm, 最大幅6.1cmを測る。凝灰岩らしい。仕上砥として四面ともに使用されている。石材そのものの節理が縞模様に入っていて、見た目に

62号竪穴住居跡 (図版24·25, 第32図)

A地区の略中央部に当たり、61号住居の東南18mに位置する。当住居と63~65号住居は、今報告分において他の住居と切り合わない数少ない事例であり、A地区では特異な形態を呈す。しかし、当住居が10号土壙を、10号土壙が64号住居を切ることから、当住居が64号住居より後出する関係となる。また、今報告分の殆どの住居で後世の柱穴が多数掘り込まれているが、当住居も例に漏れず床面上には柱穴だらけの様相を呈していた。

辺長は3.81m~3.91mを測り、中型に近い小型の規模となる。この竪穴部に比較して、主柱間エリアは更に狭いおもむきを受け、床面積に対し15%弱の占有率となる。壁面はやや急勾配の立ち上がりで、最大17cmの壁高を測る。壁小溝は存しなかった。



第32図 62号竪穴住居跡実測図 (1/60)

床下層には掘り込みが存したが、図化していないが不明瞭であった。中央土壙は存しない。 カマド 北壁中央に付設した造り付けカマドである。後世の柱穴に一部壊されているも、残存 状況は比較的良好であった。両袖は長さ55cm、幅20cm、8cm程の高さで残存し、焚口側が壊れ た程度と考えられる。火床面は良く焼けており、長軸53cm、短軸38cmの楕円形を呈す。支脚は 遺存してなかった。カマド内より手捏ね風の土器が出土した。

図示した $1\sim17$ の土器で、17が南壁際の床直上で出土したが、他は埋土中出土品である。前述の手捏ね風土器の外に、埋土中よりもう 1 点出土している。接合資料の J40も埋土中出土品。 J28は $P_2\sim P_4$ 間の中央に位置する後世の柱穴内より出土し、当住居に伴う可能性は少ない。臼玉も埋土中出土品である。図示した外には、須恵器甕が 2 個体、同壺が 1 個体、土師器甕が 6 個体、同坏類が 7 個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版53・54・85, 第115・154・155・82・97図)

4 は器形・調整は須恵器と同じだが、胎土・焼成については土師器とかわらない。器形についても口縁のつくり、厚み等を見れば通常の須恵器とは趣を異にしている。5~7 はよく似た器形の坏である。11は外面も口縁直下まで削りを施していて珍しい例といえる。13・14は鍋の器形になるのかもしれない。14は煤が付着している。15は精良な土器である。17は長胴の甕となる。口縁部には黒斑を見る。

第154・155図 J28と J40はピットや溝1出土の破片と同一個体となる資料である。

第82図62-18・62-19は手捏ねの小型の土器である。18は約¼の破片でカマド内から、19は ½程の破片で埋土中から出土した。ともに平底風となる。胎土も良質である。

玉(図版88, 第97図5) 滑石製の臼玉で最大径1.12cm, 厚さ0.46cm, 孔径0.27cm, 重さ950 mgをはかる。全体に白っぽい。 (伊崎)

63号竪穴住居跡 (図版24・25, 第33図)

62号住居の西8mに位置する。住居や土壙との切り合いはなく、後世の57・59号掘立柱建物 や多くの柱穴に切られていた。単独に存する住居でもあり、残存状況は良好な部類に属す。

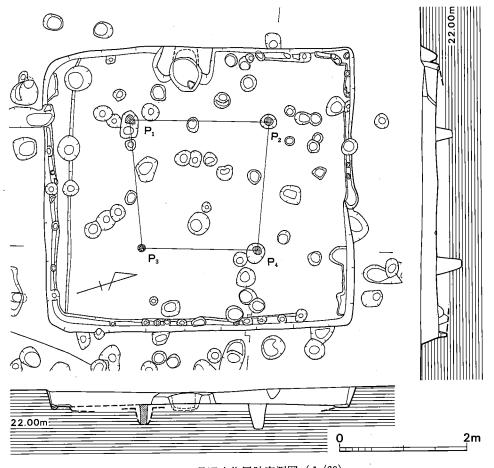
中型規模に属し、竪穴部の平面形は隅円方形を呈す。主柱穴は $P_3 \sim P_4$ 間が狭く、平面形は台形状を呈す。壁面は急勾配に立ち上がる。壁際を壁小溝がカマド部から西南隅を除き、途切れつつ巡っていた。壁小溝内には数多くの小穴を検出したが、深さは $3 \sim 8$ cm と不規則である。南壁中央の壁小溝内から土師器の坏が溝底の若干上方より出土した。

南壁側の床面がテラス状に高くなっているのは、一部の床面を掘り過ぎたためと考えられる。 このテラス部が住居の拡張を示しているかもしれないが、不明な点が多々あって断定し難い。 カマド 西壁中央に付設した造り付け型カマドである。中軸線はカマド内右袖寄りを通るが、 カマドの軸線は若干北偏する。袖は黄褐色粘質土を積み上げ、長さ0.6m、幅0.2m~0.3m最大高0.18mを測る。火床面は楕円形となろう。支脚は残存していない。

図示した $1\sim16$ で, 7 が壁小溝内より出土したが,他は埋土中出土品である。土錘も埋土中出土品。鉄鏃は P_3 南に 3 個連なる柱穴の真中より出土したが,当住居に伴うかもしれないが断定出来ない。不明土製品の 3 点も埋土中出土品。図示した外に,須恵器の甕が 4 個体,同高坏が 1 個体,土師器の甕が24 個体,同甑が 3 個体,同不類が15 個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版54·75·80, 第116·90·94図)

1の蓋はかなり分厚いつくりをなす。2は長頸壺も胴部より上の破片である。胴部は算盤玉状に屈折すると思われる。口縁は鋤先状に折れる。頸部高は12.3cm。3は内面口縁下の回転なでがカキ目風となる。5は平底になり、外面は化粧土がかかる。9の裾部にはねじりの痕跡を見る。10は手捏ね風のつくりで成形・調整ともに雑である。13は甑になるかもしれない、外面



第33図 63号竪穴住居跡実測図 (1/60)

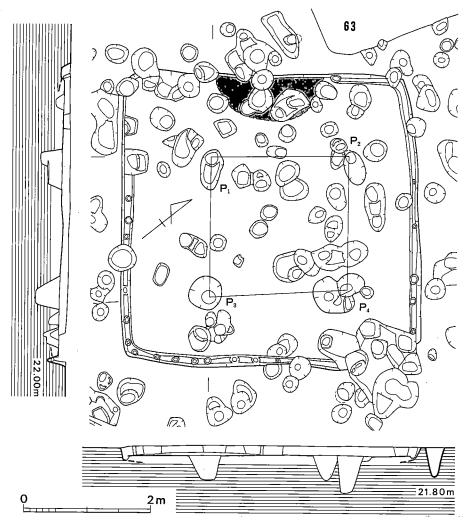
に煤が付着する。

土錘(図版75, 第90図1) 長さも径も約半分の破片になってしまっている土錘である。現存長5.1cm,最大径2.45cm,重さ12.4g。焼成はふつうである。 (伊崎)

鉄製品 (図版80, 第90図17) 茎の下半部を欠失する鉄鏃で現存長9.6cmを測る。銹のため、 身の平面は推定図であるが、片刃で平造りである。 (児玉)

64号竪穴住居跡 (図版24·26, 第34図)

63号住居の東南0.3mに位置する。10号土壙と58·59号掘立柱建物に切られ、切り合い関係より62号住居に先行する住居跡となる。多数の柱穴が掘られてカマドも旧態を止めていない。



第34図 64号竪穴住居跡実測図 (1/60)

辺長は4.5m程を測り、規模は中型に属す。竪穴部の平面形は隅円方形に復原され、主柱穴も竪穴部と略相似形に配置されている。壁高は最大15cmを測り、壁面下に深さ4~10cmの壁小溝が存す。壁小溝はカマド周辺を除いて巡り、溝内には深さ3~8cmの小穴がやや整然と並ぶ。南側略中央の壁小溝内に、溝底より少し浮いて完形の土師器坏が出土している。

床面下層は不詳である。カマドも完璧に壊れ、焼土は北西壁中央部に散乱していた。

図示した1-14で、6が南側壁小溝内より出土したが、他は埋土中出土品である。接合資料のJ35は、住居内柱穴よりの出土品が接合し、埋土中出土品は同一個体となる。鉄鏃も埋土中出土品である。図示した外に、須恵器の坏と壺が1個体、同甕が8個体、土師器の甕が10個体、同甑が2個体、同环類が5個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版54·80, 第116·154·94図)

2の口縁外面には擦過痕を見る。4の内面は回転横なでの結果として沈線ふうの凹凸ができている。5は一応高坏としておくが、立ち上がりの細く高い点が気にはなる。外面屈折部に繊維質のモノで擦過した痕がる。6は細身のつくりで外底面に黒斑がある。9は脚台部と体部の接合部分に指押さえの痕跡が著しい。10~14の甕の口縁部のうち12のみやや特異である。

第154図 J35はこの住居跡とその周辺から出土した破片とが接合している。 (伊崎)

鉄製品 (図版80, 第94図32) 鉄鏃の茎片で矢柄の木質が銹着している。現存長9.2cmである。 (児玉)

65号竪穴住居跡 (図版27, 第35図)

64号住居の南1 mに位置するが、近隣の62~64号住居と主軸方位が極端に異なる。A 地区には派手に切り合う住居が多い中にあって、単独に存す62~65号住居が逆に際立つけれども、その中でも一際異彩を放つ住居跡がある。49号掘立柱建物を切っている。

床面積は10㎡を測る小型の住居で、平面形は若干歪つな長方形を呈す。壁面はやや緩やかな 勾配で立ち上がり、壁高は最大12㎝を測る。壁小溝は検出していない。

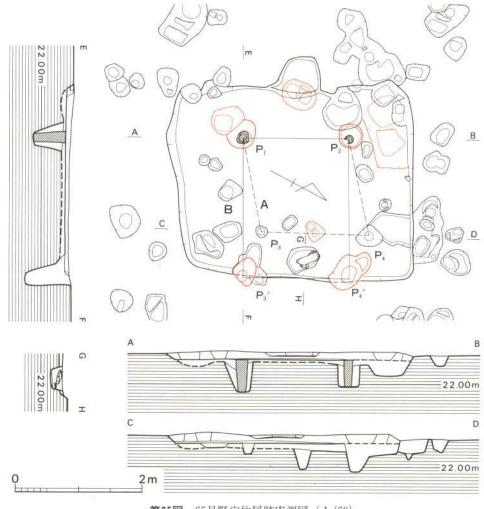
当住居において若干問題となるのは主柱穴である。当遺跡では A 案が一般的な柱配置となるが、突出型カマドを有し床面積10m²以下の小型住居は末だ主柱穴配置が確立していないので、問題提起をしつつ今後の課題として B 案を図示した。 A 案では, P_1 と P_2 と妥当な位置に存し、かつ床面上で柱痕を検出したので間違いはなかろう。しかし, P_3 は他の 3 本より極端に浅く、かつ主柱穴配置は竪穴部の平面形と大いに異なり北偏し,平面形もやや菱形状を呈して視覚的にも違和感が生じる。一方の B 案は,南北の両壁面と平行に位置して, P_4 'も P_3 'と略同じ深さであり,主柱穴の深さとしては充分である。しかし,上記の理由だけでは決定的な断定基準に達しない。特異な小型住居が解明される過程で決定されると思われ,現時点において A 案が妥当とせずばなるまい。

床面下層では、北西部隅に土壙状の落ち込みが存し、壁隅土壙に当たるかもしれない。

カマド 西壁中央に付設した突出型カマドである。突出部の掘り方は、奥行き0.5mで、煙道側の幅0.43m、焚口側の幅0.7mを測る。両袖及び壁体は崩落して何ら旧態を止めていなかった。火床面が4cm程高くなっているが、何に起因したのか不明である。支脚は残存していなかった。

カマド対面土壙 (Fig. 1) 東壁略中央の壁際で検出し、床面上で開口していたか否かは不明。 長軸0.5m,短軸0.37m,床面より0.18mの深さを測り、楕円形の形状を呈す。壙内に土師器の 坏身と何らかに使用された石材が、床面延長上よりも下方から出土した。

図示した $1 \sim 22$ で、6がカマド対面土壙内より、 $7 \cdot 15 \cdot 21$ が床面上より出土した。8はカ



第35図 65号竪穴住居跡実測図 (1/60)

マド内から出土し、支脚に転用していたものかもしれない。他は埋土中出土品。製塩土器は住居内ピット、土錘は埋土中出土品。接合資料のJ10も埋土中出土品。使用痕のある石材はカマド対面土壙より出土した。不明土器製品も埋土中出土品。図示した外には、須恵器の坏が3個体、同甕が7個体、土師器の甕が10個体、同甑が7個体、同鉢が3個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版54・75・78・84, 第117・154・90・92・97図)

2は身の可能性もある。3の外天井部中央付近は未調整のままである。4はかなりぼってりとした酸になろう。5は口縁が二重口縁風に立上る。きわめて精良な土器であって赤茶けた色調を呈する。6は須恵器の形をまねた土師器である。全体に太めのつくりとなる。7も器形としては須恵器のそれと同じである。外面には化粧土がかかる。8は胴部の張りはほとんどない。9~19はいずれも小片であるが、14・18はかなりの大型になろう。15・12・19は鍋になるのかもしれない。

第154図 [10は84・92号住居跡出土品と接合している。

土錘 (図版75, 第90図2・3) 土錘の破片である。2が10.45g, 3が12.0g。

石器(図版78, 第92図23) 石器と称してよいか不明だが、表裏ともに擦れたあとがある。た ぶん屋内での作業の時に台石として使用していたものだろう。緑簾片岩かと思われる。

焼塩土器 (図版84, 第97図9) 赤茶けた土器片である。 2点は接合しないが同一個体の破片 としてよい。底部は尖り気味の丸底になる。胴部は内面に屈折する箇所がある。内面は原体不 明のモノにて擦過し、それが条痕風となっている。外面はなで。小破片からの復原にてやや不 安もあるが、図示した部分で高さ8.5cm、最大径7cm。 (伊崎)



Fig. 1 65号住居跡カマド対面土壙

66号竪穴住居跡 (図版27, 第36図)

60号住居の西南で3mで、A地区の北西隅に位置する。67号住居に南東側が削平されるも、 比較的残存状況が良好であり住居の旧態は復原可能となる。

辺長は3.8m前後で、床面積が約14mに復原出来、中型に近い小型規模の住居になろう。平面 形も隅円方形になろう。主柱穴は P₂と P₄に径13cm・10cmの柱痕を検出した。平面形は台形状を 呈す。壁高は最大 7 cmを測り、南北の両壁面下に壁小溝を 2 条検出した。最大深長は 3 cm と浅 く、溝内に小穴は全んど存しないが、南西隅に深さ 3 cmの小穴が存した。

床面下層の掘り込みが存したが、あまり明瞭ではない。中央土壙は存しなかった。

カマド 西壁中央に付設し、煙道部が壁面より0.1m突出した造り付け型カマドである。中軸線はカマド内右袖寄りを通るが、カマド軸線は若干北偏する。袖長0.45m、基底部幅0.3mの右袖しか残存せず、焚口側と左袖は崩落していた。また、主柱穴 $P_1 \sim P_2$ 間まで焼土が散乱していたが、カマドを人偽的に壊したと推定出来る。支脚も残存していなかった。

図示した $1 \sim 6$ は埋土中出土品である。鞴の羽口はカマド周辺より出土した。図示した外には、土師器の甕が 7 個体、同甑が 1 個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第117・94図)

2は坏蓋とも考えたが、沈線が2条はいることと口縁周辺が少し細身になるこから高台の付く坏であろうとする。きわめて精良な土器である。4は皿状の器形になろう。 (伊崎)

第94図34は鞴の羽口片である。内面の下半は赤変している。胎土は精選されているようで砂粒は目立たず、淡黄茶色を呈し、もろくなっている。 (児玉)

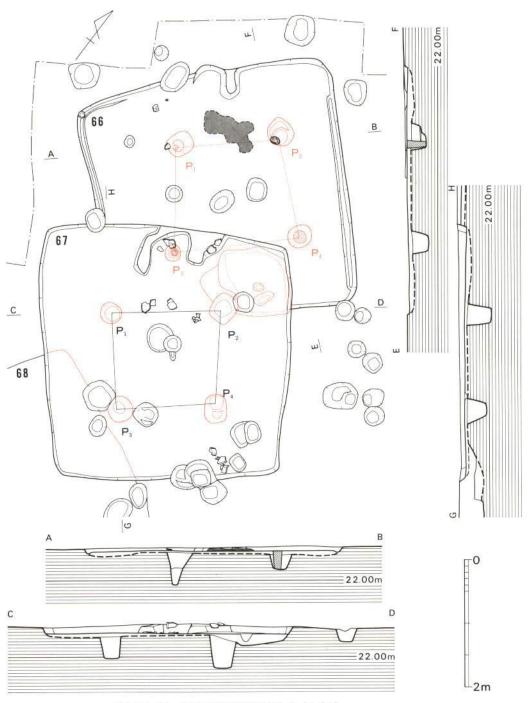
67号竪穴住居跡 (図版28, 第36図)

66号住居の南に位置し、主軸方位も同住居より僅かに北偏する。66・68号住居を切る。

規模と形状も66号住居と略同じとなるが、主柱穴は $P_1 \sim P_2$ 間が若干広くなり逆台形状の平面形となる。壁高は最大12cmを測り、壁小溝は存しなかった。

床面下層で壁隅土壙を検出した。北西隅に位置し、壁面に沿って掘り込まれている。南北が1.1m、東西は1mを測り、平面形は少し歪つな方形を呈す。床面より最大17cmの深さとなる。カマド 北西壁中央に付設した造り付け型カマドで、ほば旧態を止めていた。左袖長は0.8m、同基底部幅は0.25mを測り、右袖は焚口側が崩壊していた。火床面は略水平で、支脚は存しない。

図示した $1 \sim 15$ で、 $7 \cdot 8 \cdot 15$ がカマド内より出土した。10は P_2 南の床面上より、 $5 \cdot 14$ が北東壁際の床面上より出土した。他は埋土中出土品。鞴の羽口は P_2 内より出土。不明土製品の4点も埋土中出土品。図示した外には、須恵器の甕が 1 個体、土師器の甕が 6 個体、同坏が 4



第36図 66·67号竪穴住居跡実測図 (1/60)

個体, 同高坏が2個体出土している。

(武田)

出土遺物 (図版54, 第117・118・94図)

4は鉄鉢になろうか。薄手のつくりで、ややひずみがある。5の底部は異状に分厚い。7は精製とするにはやや難がある。熱を受けたように見受けられる。10の底部は脚台風になる。その底部中央は押さえつけてくぼみにしたようである。外面には煤が付着する。12は精製に近い。口縁の一部に煤が付着する。15は甑となるか。 (伊崎)

第94図35は鞴の羽口片である。先端に近い部分にあたり、外面下半は灰色~青灰色に変色し、 鉄滓の小片が付着し、内面は赤変している。胎土は精選されているようで砂粒は目立たず、淡 黄茶色を基調とする。 (児玉)

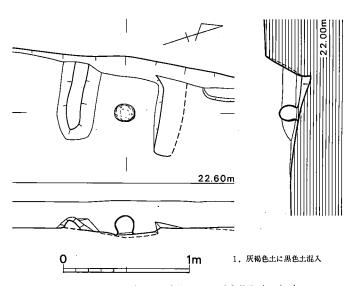
68号竪穴住居跡 (図版28·29, 第38図)

67号住居に北壁側を, 69号住居に南壁側を切られているが, 当住居がより深く築造していたので壁面は全て巡る。一方, 70号住居を切っている。

南北の両辺が3m~3.2m,東西両辺が3.5m程測り,平面形は横長の隅円方形を呈す。主柱穴も竪穴部と略相似形に配置していた。最大壁高24cmを測る。壁面下に壁小溝を検出したが、カマド部と南東隅で途切れていた。溝内に深さ3~10cmの小穴が多数存したが、南壁側は40~50cm間隔でもってやや整然と並んでいた。

床面下層の掘り込みは明瞭ではなく、中央土壙は存しない。

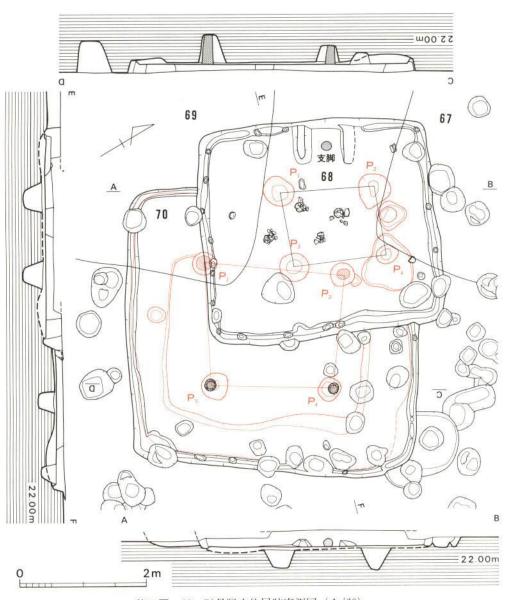
カマド (第37図)



第37図 68号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

る。

図示した1~14で、3・9・10が南壁側床面上より、8・11・13が主柱穴エリア床面上より、14が北西隅床面上より出土した。12は支脚に転用されていた品である。他は埋土中出土品。接合資料J32も埋土中出土品。図示した外には、須恵器の坏が1個体、土師器の甕が6個体、同甑と坏が各3個体出土している。 (武田)



第38図 68·70号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物(図版54·55, 第118図)

1~4の蓋はそれぞれが器形の特徴を有しているし、5も含めて同じへラ記号はない。3は 土師器に似せており、黒くいぶした如き黒色土器風の態をなす。しかし須恵器である。5は壺 になるのかもしれない。底部はかなり厚い。6の内面は煤ける。8はやや歪んだ壺で、底部の 分厚さは異状な程である。9は二次火熱を受けている。10~13はほぼ相似た器形となるが、10 の外面は化粧土がかかり、13の外面には煤が付着する。12は支脚としていたものか。14の頸部 内面は刷毛目を施す原体を用いて、横方向に粘土を削りとる擦過を行っているために、この部 分に平坦面ができている。幅2.5cm前後になっているのは、刷毛目原体の幅もそれくらいという ことだろう。

第155図 J32は70号住居跡のものと接合した。

(伊崎)

69号竪穴住居跡 (図版29·30, 第40図)

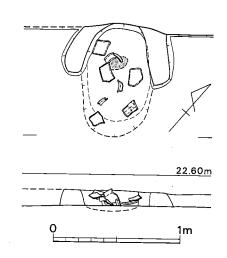
68号住居の西側に位置し、南西隅が調査区外に伸展する住居跡である。68・70・72号住居の 3棟を切る。南東部隅を71号住居に切られているが、床面下層から旧態の復原は可能となる。

辺長は $5\sim5.1\,\mathrm{m}$ と,床面積か $25\,\mathrm{m}$ 以上の大型住居に復原され,竪穴部の平面形は南東辺が僅かに広い隅円方形になろう。主柱穴も竪穴部と略相似形に配置している。壁面はやや緩やかな立ち上がりをなし,最大壁高 $12\,\mathrm{cm}$ を測る。壁小溝は存しない。床面上で多数の土器が出土したが,まとまりはなく広範囲に散乱していた。

床面下層に掘り込みを認めたが、トレンチによる確認であった。

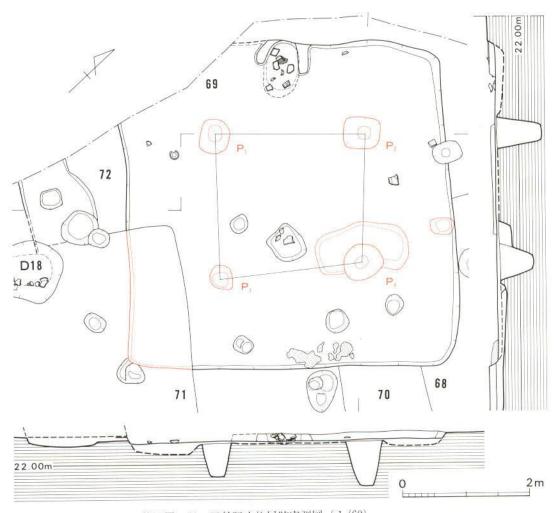
カマド (第39図) 北東壁中央に付設した造り付けカマドである。中軸線はカマド内を通るが、カマドの軸線は若干北偏している。カマドの残存状況は両袖共焚口側が崩壊している。火床面は略水平で長軸0.73m,短軸0.5mを測り、平面形は楕円形を呈す。奥壁より0.25mの位置に赤化した粘土を検出したが、これは支脚の甕内に埋納されていたものであろう。カマド内より多数の土器が出土したが、支脚に転用した品はなく撤去したのであろう。

カマド対面粘土 南東壁中央部の壁際に,幅1mに渡って灰白色粘土が散乱していた。一応まとまりは認められるが,何らかの遺構と推測されるほど広範囲に及ばす,また土量も多くない。



第39図 69号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

図示した $1\sim59$ で、 $5\cdot39\cdot41\cdot42\cdot47\cdot50\cdot53$ の 7 点がカマド内よりの出土品。12がカマド対面粘土内よりの出土品。カマド北側から $7\cdot18\sim22\cdot24\cdot26\cdot27\cdot30\sim32\cdot34\cdot36\cdot37\cdot40\cdot43\sim45\cdot51\cdot55\cdot56$ と多量に出土し、投棄された品も混入していよう。17はカマド北側 P_4 付近の床面上より出土している。1 と 48が北東隅床面上よりの出土品。 $46\cdot54$ は主柱間エリアの床面上より、4 と 6 は P_1 南側の床面上から出土した。他は埋土中出土品である。手捏ね風土器もカマド横北側からの出土品。石材も床面上より出土した。上記の如く床面上よりの出土品はあまりにも多量であり、全てが使用していた品とは考えられない。逆に大半以上が投棄された品と思われるが、個々に判断するまでには至らなかった。図示した外には、須恵器の坏が 5 個体、同甕が 2 個体、土師器の甕が 2 個体、同甑が 5 個体、同年か 3 個体、同鉢と高坏が各 2



第40図 69·72号竪穴住居跡実測図 (1/60)

個体出土している。不明土製品は全て埋土中出土品である。

(武田)

出土遺物 (図版55・56・76・77, 第119・120・82・91・92図)

1~17は須恵器, 18~59が土師器である。かなり多くの遺物が出土した。 1 と 2 は同じ蓋でもつくりが異なる。 2 には内天井部にへう記号の一部が見える。 3 の口唇部は打ち欠きが著しい。 6~11については蓋となる可能性もあるが、ここでは全て身としておく。 11は受部に沈線が入る。また体部にも回転なでの時の砂粒の動きによって沈線が生じている。 13は高台が高く薄手のつくりである。 15・16は器形が定かでないが、ともに平瓶の破片かもしれない。 17は良質の胎土でつくられた平瓶で、底部はやや上げ底になっている。 そこには落書きみたいなへう記号が見られる。 胴部高10.2cm、頸部径は5.7cm。

20は高坏の口縁部か。23は指おさえの痕が著しい。26~29はあるいは甑になるかもしれない。34はかなり下膨れの器形となる。35からは口径が15cm以上とやや大きめになってくる。43は34と同じく下膨れになる。46・49は甕としては精良な土を用いている。53~55はおそらく甑になるのだろう。59はかなり分厚いのでカマド形土器の破片かもしれない。

第82図69-60はよくわからない土製品である。粘土をこねただけのようにもみえるし、あるいはカマドを意図したミニチュアかもしれない。

石器(図版76・77, 第91・92図8・11・21)8は砂岩の砥石である。現存長9.7cm, 表裏二面を使用し、破損した側面も一部を使っている。中砥。11は凝灰岩と思われる三角錐体の石であるが、石器としてよいものかどうか判断に苦しむ。器表が風化していることもあわせて使用痕、加工痕は今のところわからない。一辺長が4.6~4.8cmで高さは3.8cm。21は花崗岩礫で先端部に明確な敲打痕は見えないものの叩石として使ったものと思われる。現存長8.3cm。中央付近断面はほぼ円形に近く、直径6.5~7.2cm。

70号竪穴住居跡 (図版29, 第38図)

68号住居の東側に位置し、北西部を68・69号住居に切られている。しかし、69号住居と略同じ高さで築造しており、壁小溝と床面下層の掘り込みを69号住居内においても検出出来た。上記より床面積が約18.5㎡に推定出来、中型規模の住居となろう。主柱穴は $P_1 \sim P_2$ 間がやや広く、逆台形状の平面形を呈す。壁面は急勾配に立ち上がり、壁面下には途切れることなく壁小溝が巡る。溝内で深さ $2\sim6$ cmの小穴を若干検出した。

床面下層には掘り込みが存し、幅が0.5~1 m、床面より最大14cmの深さでもって溝状に巡る。中央土壙は存しない。カマドは検出していないが、68号住居に削平された北西壁に存したと思われる。

図示した1~3と接合資料のJ32は埋土中出土品である。図示した外には土師器の甕が3個

(武田)

体出土している。

出土遺物 (図版56, 第120·155図)

1は須恵器のつくりに近い土師器である。底部は回転ヘラケズリを施す。 2・3はともに精 良な胎土を用いており、同一個体かもしれない。

第155図 J32は68号住居跡のものと接合した。

(伊崎)

71号竪穴住居跡 (図版30, 第41図)

69号住居の南に位置し、69・72・73号住居を切っている。カマド周辺を18号土壙に切られ、カマドは全く不明となる。辺長が4.1m前後を、床面積が約17m²を測り、中型規模の住居跡である。竪穴部の平面形は隅円方形を呈すが、主柱穴は P_3 と P_4 が若干北偏して平面形も少し歪つとなる。南東辺の壁面が最も残存良好で、最大14cmの壁高を測る。

床面下層の掘り込みは不明瞭であるが、南東隅において土壙を検出した。壁隅土壙と呼称している遺構で、平面形は不整形となる。壁面に沿って掘り込まれ、床面より最大30cmの深さを測る。18号土壙の北側に焼土が認められ、この土壙の位置にカマドが存したと思われる。

図示した品は埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏と壺が1個体、土師器の甕と甑も1個体、同坏類が6個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第120図)

1の須恵器高坏は器形として珍しい。坏部の深さは2.9cm。2は外面に僅かに黒斑がある。成形時の粘土帯の幅は2.5cmであることが接ぎ目からわかる。 (伊崎)

72号竪穴住居跡 (第40図)

69号住居の西に隣接し、大半以上が調査区外に伸展し、69・71号住居にも削平されている。 全く不詳な住居跡で、検出したのは床面下層の掘り込みのみである。掘り込みから判断して、 69号住居の方に伸展する住居が考えられる。掘り込みは溝状を呈し、検出面より13cm深さを測 る。

図示した品は床面下層より出土した。図示した以外には、土師器の甑が1個体のみ出土している。
(武田)

出土遺物 (第121図)

1の坏身はわりと深みがある。2は精良な土器であるが、内面には煤が付着している。3は 内面に粘土の接ぎ目がはっきりみえる。 (伊崎)

73号竪穴住居跡 (第41図)

71号住居の南に隣接する。西側の大半以上が撹乱を受け、北東辺も71号住居に切られた不詳な住居跡である。南東壁のみ検出したが、最大壁高も $6\,\mathrm{cm}$ であった。。上記より規模・形状は不明となる。多分 P_4 に相当すると思われる主柱穴を $1\,\mathrm{lm}$ 機出したのみである。

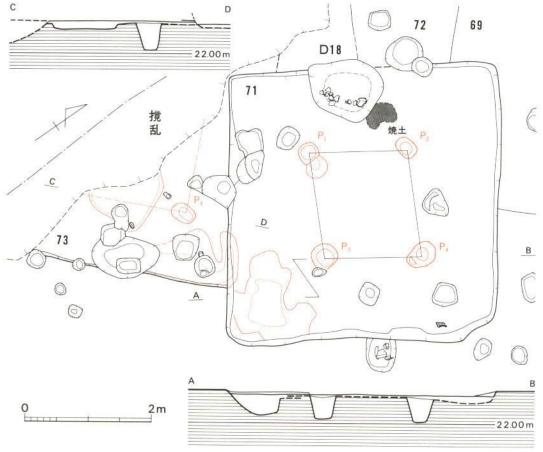
床面下層には、P₄の西南方で中央土壙が存す。約半分程が撹乱されているが、約1.1m程の規模と推定される。床面より12cmの深さで、壙底は略水平である。

図示した品は埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏が1個体、土師器の甕が2 個体、同甑と坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版56, 第121図)

2は精製土器である。かなり口径が大きい。

(伊崎)



第41図 71·73号竪穴住居跡·18号土壙実測図 (1/60)

74号竪穴住居跡 (図版31, 第42図)

73号住居の南1 mに位置する。全んどが調査区外に伸展し,かつ撹乱を受け北東隅部を調査しただけの住居跡である。73・75・76号との切り合いも撹乱されて不明となる。規模・形状は不詳。床面下層より柱穴を検出したが,主柱穴の P_2 か P_4 に相当しよう。

図示した品は埋土中出土品であり、それ以外には、土師器の甑が2個体出土している。(武田) 出土遺物 (図版56、第121図)

2は皿としてよいかもしれない。4の高坏は器形として珍しい。脚部を欠くが,その坏部と脚部の接合部には溝を入れて接着しやすいようにしている。坏部の深さが3.2cm。5は高台部分の破片であるが,本体が壺か境かよくわからない。7も器形がよくわからない。6・8・9は器形が相似している。9の外面にある刷毛目はその終点がよくわかる。10は精良な胎土を用いている。

75号竪穴住居跡 (図版31, 第42図)

74号住居の南に位置し、西側の半分以上が撹乱を受けた残存不良な住居跡である。74号住居 との切り合いは不明となるが、76号住居を切っている。東西辺は4.3m以上を測り、中型規模に なろう。主柱穴も P₄のみ床面下より検出した。

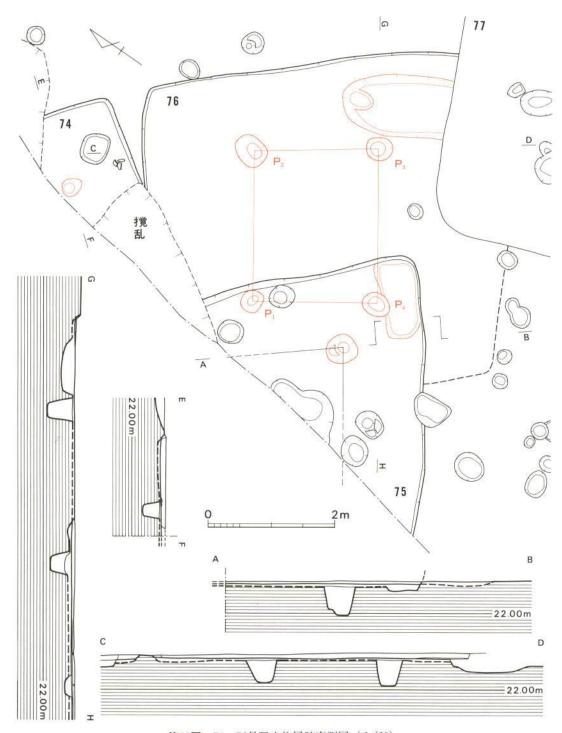
東南辺の略中央で焼土が堆積した浅い窪みを検出したが、カマド対面土壙に当たるのかもしれないが、竪穴部より突出した例はなく断定し難い。逆に突出型カマドとも考えられるが、残存不良でかつ、東南壁に付設した例も稀であり、現時点では可能性が有るに止めておく。北東隅の床面下より壁隅土壙を検出したが、両側壁に沿って掘り込まれていた。平面形は長方形を呈し、長軸は1.25m、短軸が0.6m、床面より0.1mの深さを測る。主柱間エリアに位置する土壙状の遺構は、検出面が床面となる残存不良な所であり、当住居に伴うか否か判断し難い。カマドは不明である。

図示した1~6で、1が中央の土壙より出土し、当住居に伴うのかもしれない。他は埋土中出土品。砥石類も埋土中出土品である。図示した外には、土師器甕が2個体、同甑が1個体、同坏が3個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版76・77, 第121)

1はたぶん蓋でよかろう。焼き膨れがある。3・4は器形としてはよく似ている。6は甑になるだろう。

石器(図版76・77, 第91図 2・10・14) 2 は硬砂岩製の仕上砥で破損が著しいが四面とも使用している。現存長6.4cm。10は砂岩の中砥で,これも四面とも使用している。現存長8.4cm。14はやはり砂岩だが砥石とすることはできない。使用痕は不明だが表面を使っているらしい。(伊崎)



第42図 74~76号竪穴住居跡実測図 (1/60)

76号竪穴住居跡 (図版31, 第42図)

75号住居に南壁側を切られ、北東隅部も77号住居に切られ、かつ西南部が撹乱を受けた残存やや不良な住居跡である。南東側も検出時には床面は喪失し、床下層の掘り込みが露呈していた。しかし、辺長が5.7m程に、床面積も約27mと推定され、大型規模に属すと思われる。主柱穴も広めに配置され、平面形は長方形を呈す。北東側の壁面が比較的に残りが良く、最大8cmの壁高を測る。

床面下層で掘り込みを検出したが、大半は不明瞭であった。主柱穴 P_4 の北側に溝状を呈す落ち込みが存するが、この部分のみ掘り込みが深く掘られていたのか、壁隅土壙に当たるのか不明である。長軸が1.7m以上、短軸は1m、床面より0.2mの深さを測り、平面形が長楕円形となるう。カマドは北西壁に付設していたと想定されるが。撹乱を受け不明である。

図示した7点は埋土中出土品でる。図示した外には、土師器の甕が2個体、同坏が1個体出土している。不明土製品の2点も埋土中出土品。 (武田)

出土遺物 (第121図)

1は蓋になるのかもしれない。2の内面には煤が付着している。3は特異な鉢形をなす。外面底部に黒斑がある。4と5,6と7は各々同一個体のように思われる。 (伊崎)

77号竪穴住居跡 (図版31·32, 第43図)

76号住居の南に位置し、78号住居に南半分を切られているが、76号住居と17号土壙を切っている。床面下層の掘り込みが78号住居内にも巡っており、辺長が6m前後に、床面積も約36mに推定され、今報告中最も大型の住居跡となる。平面形は南東壁が広くなる台形状を呈す。主柱穴も竪穴部と相似形に配置されていた。

床面下層の掘り込みは明瞭な溝状を呈し、幅 $0.6m\sim1$ m、床面より $0.11m\sim0.15$ mの深さで一周する。主柱穴 $P_2\sim P_4$ 間で検出した土壙は、北東壁外に存する17号土壙と同一となり、床面下層土壙ではない。

カマド 北西壁中央に付設した造り付け型カマドである。両袖も旧態を止めず、粘土と焼土が 散乱していた。火床面の形状も不明であり、支脚も残存していなかった。

図示した土器は埋土中から出土した。接合資料の J45・J46と鉄製刀子も埋土より出土。図示した外には、須恵器の甕が3個体、土師器の甕が9個体、同坏が1個体出土している。(武田)

出土遺物 (図版79. 第121·122·156·93図)

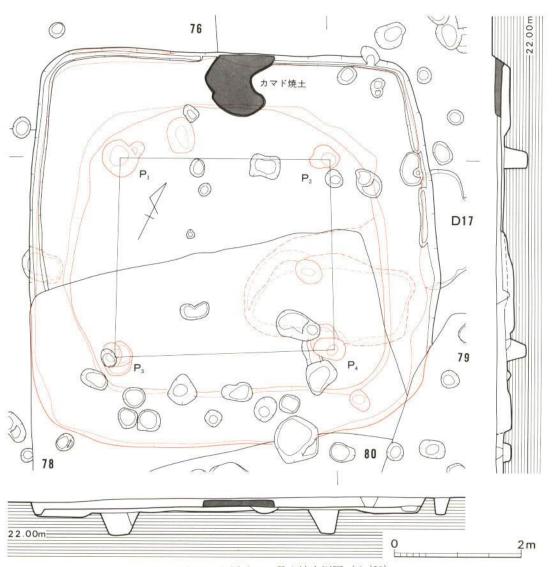
2は底面を回転へラケズリにて調整する。5もつくりはシャープである。7・8は甑になるのかもしれない。

第156図 J45·J46は78·80·96号住居跡出土品と接合している。

(伊崎)

鉄製品 (図版79, 第93図10) 刀子の茎部分であろう。現存長 4 cm。

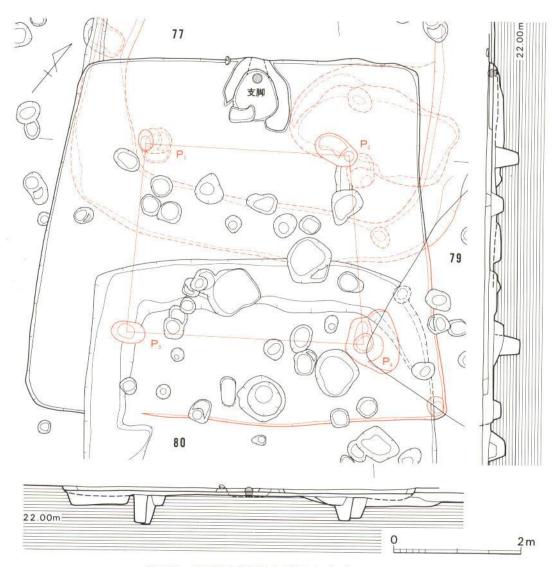
(児玉)



第43図 77号竪穴住居跡・17号土壙実測図 (1/60)

78号竪穴住居跡 (図版32, 第44図)

77・78・80号住居は各住居の約半分程を切り新しくなるに従い順次南下する。当住居が真中に位置し、79・80号住居に南半分程を切られる。77号住居と同様に床面下層の掘り込みで、住居の規模と形状が判断出来た。北西辺長が5.1m、南東辺長が約6.5mを測り、平面形は台形を呈す。床面積も約32m以上を測る大型住居になろう。壁高は最大8cmを測りやや浅い。主柱穴も竪穴部と全く相似形に配置していたが、主柱間エリアは床面積の約32%を占め広い。床面下層の掘り込みはやや不明瞭であり、下層土壙は存しない。



第44図 78号竪穴住居跡実測図 (1/60)

カマド (図版33) 北西壁中央に付設した造り付け型カマドである。図では馬蹄形を呈しているが、崩落した壁体と基底部に殆ど差異が認められないので、破線で図示した形態になるのかもしれない。奥壁より30cm内方で、火床面中央に支脚が残存していた。土師器の甕を逆向きにして転用している。

図示した1~9で、6は支脚に転用した品。3がカマド左壁際の埋土中より出土。7は床面下層より出土したが、他は埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏と甕が各1個体、土師器の甑が1個体、同坏が6個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版56, 第122図)

1の坏蓋はきわめて精良な土器である。3は外底部にX字形のへラ記号がある。拓本をとろうとしてできなかった。4の内面はヘラ先で横方向に擦過している。6の外底部には5mm間隔で刻みを入れた平行タタキの痕跡が伺えるけれども、その上に刷毛目を施しているので明瞭には見えない。 (伊崎)

79号竪穴住居跡 (図版32, 第45図)

78号住居の東に位置するが、近辺の76~78・80号住居とは規模と主軸方位を大いに異にする。 78・80・103号住居と51号掘立柱建物より後出する住居となる。

辺長が3.6m前後,床面積が約12.5mを測り,小型の規模に属す。平面形は隅円方形を呈す。 主柱穴は $P_1 \sim P_2$ 間が若干狭くなり,台形状の平面形を呈す。壁高は最大10cmを測るが,壁面下 に壁小溝は存しなかった。

床面下層にはやや不明瞭な掘り込みが存し、下層土壙は見受けられなかった。

カマド (図版33) 西壁の略中央に付設した造り付け型カマドである。袖は0.63mと0.48m の長さが残存し、基底部の幅は0.25m ~ 0.3 mを測る。火床面は僅かに窪み、長軸が0.75m、短軸は0.4mとなり、平面形はやや不整な楕円形となる。支脚は残存していない。

図示した3はカマド内より、2は床面上より出土し、1は埋土中より出土。接合資料J36も埋土中出土品。鉄鏃も埋土中出土品。図示した外には、須恵器坏が1個体、同甕が4個体、土師器の甕が2個体、同甑・坏が1個体出土している。鉄滓も埋土中より出土している。(武田)

出土遺物 (図版80, 第122・155・94図)

1の内面当具痕はきわめて粗々しい。外面は平行タタキの上にカキ目を施している。3は口 頸部の屈曲に特徴がある。

第115図 J 36は108号住居跡やピットの出土品と同一個体と思われるものがある。 (伊崎) **鉄製品**(図版80, 第94図28) さびて剝離しているが, 鉄鏃の茎片であろうと思われる。現存 長5.8cmである。 (児玉)

80号竪穴住居跡 (図版32, 第46図)

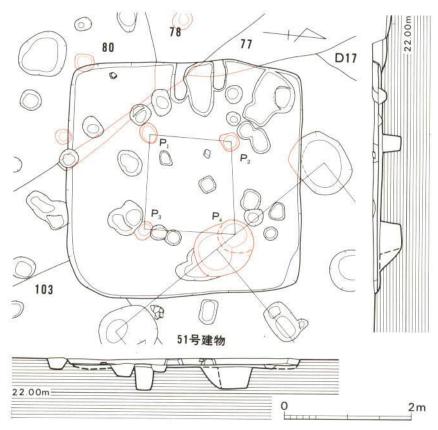
略同規模の76~78・80号住居が直線的に並ぶが、その内で最も新しく、南端に位置する住居跡である。79号住居に北西隅を切られている。辺長は5.2m~5.5mで、床面積は約29㎡を測り、大型の規模に属す。竪穴部の平面形は隅円方形を呈す。主柱穴は竪穴部と相似形に配置し、主柱間エリアが床面積の約½と広く占地する。最大壁高が7cmと残存状況はやや悪く、壁小溝も存しなかった。

床面下層には、溝状を呈す掘り込みが存したが、南東隅と北東壁中央部で不明瞭となる。床面より最大13cmの深さとなる。

カマド 北西壁中央に付設した造り付け型のカマドである。残存状況は不良であり、崩落した 壁体と袖との判別が難解であった。上記より火床面の幅は若干広くなろう。支脚は存しなかった。

図示した品は全てが埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏が3個体、同甕が2個体、同高坏が1個体、土師器の甕が10個体、同坏が6個体、同高坏が1個体出土している。

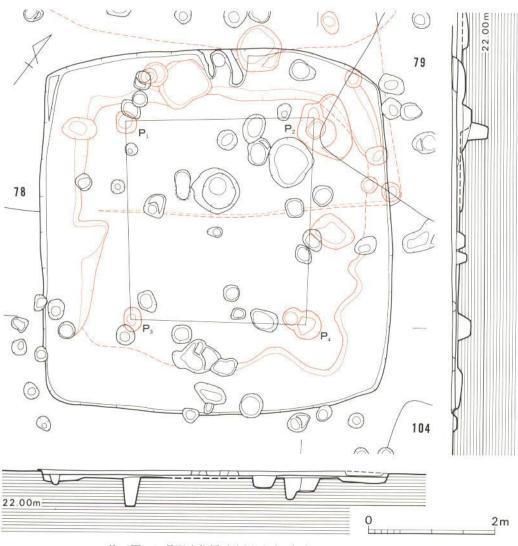
(武田)



第45図 79号竪穴住居跡実測図 (1/60)

出土遺物 (図版56, 第122図)

1と2とはセットと考えられなくもないが、ヘラ記号が異なることもあり、否定的に捉えておいた方がいいだろう。1は歪みがある。2の口唇部には打欠きを認める。3は2に比してつくりがスマートではない。6は焼き膨れがあり、また灰被りにて焼成されている。胎土は小豆色をなし、きわめて精良な土器である。8は精製の土器だがつくりがやや分厚い。9と10はよく似た口縁形態を示している。 (伊崎)



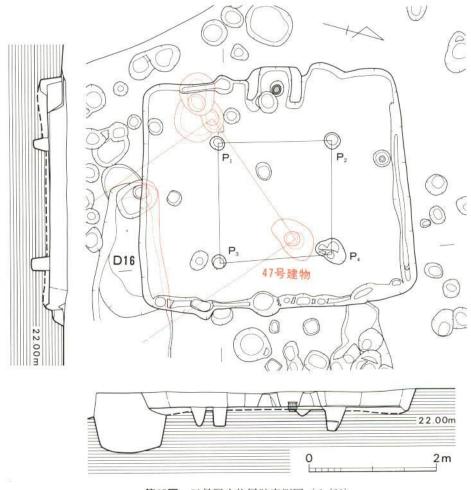
第46図 80号竪穴住居跡実測図 (1/60)

81号竪穴住居跡 (図版34, 第47図)

79号住居の東方 4 mに位置する。16号土壙と47・48号掘立柱建物を切っているが、住居とは切り合いを有しない。辺長が3.2m前後を、床面積も10m以下を測る小型規模となる。竪穴部の平面形は隅円方形を呈す。主柱穴も竪穴部と相似形に配置していた。壁面は急勾配に立ち上がり、最大27cmの壁高を測り、残存状況良好な住居跡である。壁小溝は、北壁下と東壁下に2条存し、溝内にはやや大きめの小穴を検出した。

床面下層には不明瞭だが掘り込みが存し、下層土壙は存しない。

カマド (図版34, 第48図) 西壁中央部に付設し、燃焼部が若干壁外に突出したタイプのカマドである。突出部は0.78mの幅で、奥行き0.17mの掘り方となる。突出部隅より黄褐色粘質土を積み上げて袖となし、袖の長さは0.65mと0.68mを、基底部幅が0.24m ~ 0.28 m、高さ0.65mと0.68mを、



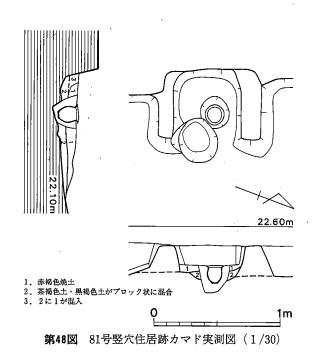
第47図 81号竪穴住居跡実測図(1/60)

24mを測る。火床面は、左袖付近に後世の柱穴が掘られているも、長楕円形の平面で略水平となる。奥壁より0.3mで右袖寄りの火床面上で、完形の土師器甕を埋納したピットを検出した。このピットは後世の柱穴ではなく、住居廃棄時に掘られたものと考えられる。土器17は著しく二次加熱が認められるので、支脚に転用した品であろう。上記より、支脚を撤去した後にピットを掘り、再びピット内に支脚を埋納したと考えられる。これらは連続した祭祀行為と判断されよう。

図示した1~23で、7と11がカマド内より、8が壁小溝内より、5・13・20・22と23は床面上より出土した。4はP4と切り合う南側の柱穴内と埋土中より出土。19もP₂内と床面上及び埋土より出土している。他は埋土中出土品。土錘・砥石と紡錘車も埋土中出土品。 J 19も埋土よりの出土品。不明土製品も埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏と甕が各3個体、土師器の甕が64個体、同甑が7個体、同坏が3個体、同壺が7個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版56・75・76・78, 第123・154・90・91・96図)

2の撮みは擬宝珠に近い形状をなす。またへう記号はT字形を呈する。 4 はやや膨らみのある蓋となる。 5 の高台と身の接着部分には貼り付けが容易にできるように二条の沈線を刻みこんでいる。15の口縁部には押えつけてくぼみにした部分がある。17はカマド内からの出土なので支脚としていたものだろう。底部は平底になる。体部に黒斑と、口縁部外側の一部に煤が付着している。18の口縁下には回転横なでによって段が生じている。19の体部は丸味をもった長



胴形で樽形と称してよい形状をなす。外面は粗い刷毛目を施す。21 の甑は径7mm程の孔を穿っている。 23は19と似た形態となろう。

第154図 J 19は16号土壙出土品 その他と接合している。

土鐘(図版75, 第90図4) 長さ も径も半分以下となっている。現 存長は3cm, 重さ6.14g。

石器(図版76, 第91図5) 現存 長8.8cmで断面が変形六面体となる仕上砥石である。破損した面に も二本の条線が入っているのでこ こも使用している。東側周壁溝内 から出土した。

紡錘車(図版78, 第96図3)滑石

製で断面台形の截頭円錐形をなす。上辺径2.5cm,下辺径3.3cm,高さ1.1cm,重さ21gとなる。 (伊崎)

82号竪穴住居跡 (図版35・36・37, 第50図)

81号住居の東方11m,62号住居の南4mで、A地区の略中央部に位置する。84号住居に切られるが、83号住居と42号掘立柱建物を切っている。辺長が3.2m前後を、床面積も10m以下を測る小規模の住居跡である。竪穴部の平面形は隅円方形を呈す。主柱穴も竪穴部と相似形に配されているが、主柱間エリアは床面積の12.7%しか占有せず、極めて狭い空間となる。北東隅付近が床面より一段高くテラス状を呈しているのは、83号住居まで掘りすぎたのかもしれない。

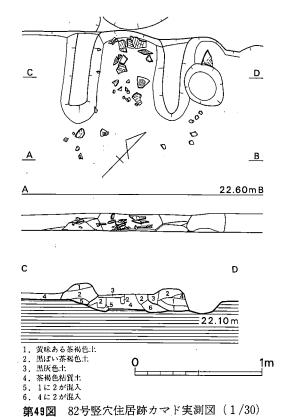
床面下層で掘り込みを検出した。若干凹凸をなしてはいるが、溝状を呈して一周していた。 北西隅が更に一段と深くなり、壁隅土壙かもしれない。長軸1.0m、短軸0.85m程を測り、平面 形は不整な長方形を呈す。床面より最大0.16mの深さとなる。

カマド (図版36, 第49図) 北西壁中央に付設した造り付け型カマドである。右袖の一部を

柱穴に切られるも、比較的残存状況は良好である。袖長が0.6mと0.7m、基底部幅は0.28mを測る。火床面は長方形を呈し、略水平である。カマド内より数多くの土器が出土し、支脚は残存していなかった。

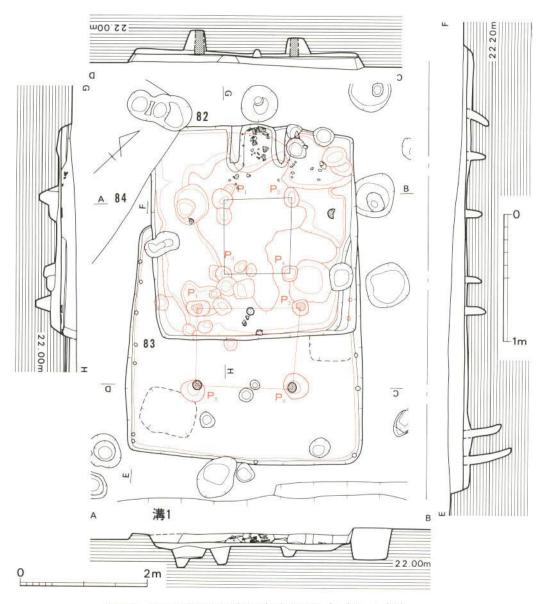
図示した1~15で、1・7・9・10と14 がカマド内及び周辺より出土し、3と13が 南東壁際の床面上より、2が北東壁際の床 面上より出土した。他は埋土中出土品であ る。不明土製品も埋土中出土品。図示した 外には、須恵器の坏と甕が2個体、土師器 の甕と甑も各2個体出土している。(武田)

出土遺物 (図版56・57, 第123・124図) 2 は撮み周辺を低くしているため全体としてかなり低平な形状となる。 7 は 9 のような底部がつくだろう。 8 は手捏ねである。12は脚台の付く器形だがかなり細身になる。全体は予想しにくい。14は甑になるかもしれないが精製品である。 (伊崎)



83号竪穴住居跡 (図版35·36·37, 第50図)

82号住居に北西側の約半分程を削平された住居跡である。辺長が3.5m前後に,床面積6.12m程に復原出来,小振りな中型規模となろう。竪穴部の平面形は隅円方形を呈すが,主柱穴は $P_1 \sim P_2$ 間がやや広くなる逆台形状に配置していた。壁面はやや緩やかな勾配で立ち上がり,壁面下に壁小溝は存しなかった。しかし図示した如く小穴を壁面下において検出したが,深さも一



第50図 82·83号竪穴住居跡·杭痕実測図 (1/30, 1/60)

定でなくかつ、間隔も規則的に配列していない。この小穴を検出するに当り、床面上を精査すると夥しい小穴が万遍なく存した。順次断ち割りを行ない、木の根等を除外するための確認を行なった結果、西南壁に7個、北東壁で5個、東南壁で1個の計13個が杭痕と判断出来た。これについては後章で再検討を行なう。

カマド位置は削平された北西壁に存したと考えられ、調査した床面上には粘土や焼土は全く 検出していない。床面下層は僅かな窪みをなしてはいたが、万遍なく掘り込まれていた。

図示した1は埋土中より出土。他に小片が僅かに出土した。

(武田)

出土遺物 (第124図)

図示しうる1点は土師器の坏か埦の破片である。内面はミガキに近いナデを施す。 (伊崎)

84号竪穴住居跡 (図版38, 第51図)

隣接する82~85号住居の中で最も新しい住居跡となる。42号掘立柱建物を切るも、46号掘立柱建物よりは後出する。辺長は3.6m~4.0mを、床面積は約14mを測り、中型に近い小型規模に属す。竪穴部の平面形は東壁側が広い台形状を呈す。主柱穴は竪穴部と相似形ではなく、P₁~P₂間が広い逆台形状に配している。壁面はやや急勾配に立ち上がり、最大0.15mの壁高を測る。壁小溝は存しない。床面下層の掘り込みはやや不明瞭であった。東南隅で検出した土壙は壁隅土壙であろうか。長軸が1.0m、短軸は0.9mを測り、壁面に略沿って掘り込まれていた。平面形は不整な方形を呈す。

カマド 北壁略中央に付設し、燃焼部が0.15m突出したカマドで、81号住居カマドと略同じ形態である。袖は0.3mと0.4mが残存する。火床面は、長軸が0.85m、短軸は0.4mを測り、床面より僅かに深くなるも略水平である。平面形は長方形を呈す。支脚は存しなかった。

図示した1~11で、8が床面上より出土し、7は床面下層より出土した。他は埋土中出土品。接合資料も埋土中品である。土錘の3点、不明土製品も埋土中出土品。鉄鎌は西壁際の床面上より出土した。図示した外には、須恵器の坏が2個体、同甕が1個体、土師器の甕が3個体、同甑と鉢が各1個体、同坏が2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版57・75・79, 第124・154・90・93図)

1はスマートなつくりの坏で深みがある。口縁に一部ひずみがあり、また外面は灰被りの所がある。2は胴部に突帯を有する壺だろう。5は黒色土器である。6はかなり厚ぼったいつくりをなす。8の口唇部には刻み目があるも意識しての所作か否かわからない。9の口縁部内外には黒いウルシ状のものが付着している。10は甑になるか。口縁部に煤が付着する。

第154図 J 10・ J 13・ J 15は65・92・89号住居跡等との出土品と接合している。

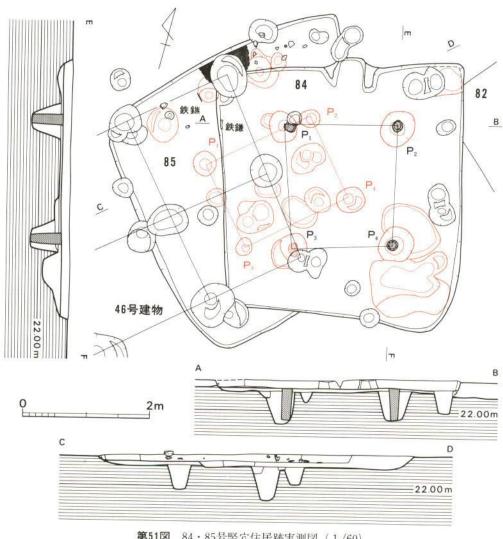
土錘(図版75, 第90図5~7) いずれも破片となっている。5が現存長6.1cm, 13.41g。6

113.09g。 (伊崎)

鉄製品(図版79, 第93図13) わずかに曲刃する鎌で,全長14.6cm,最大幅3.2cmを測る。木 柄と身の装着角度はほぼ直角である。

85号竪穴住居跡 (図版38, 第51図)

84号住居に東側を削平され、46掘立柱建物にカマド等を切られている。辺長が4m程に、床 面積も約16m²に復原され、中型規模の住居跡となろう。主柱穴は若干北東側に偏るけれども、



第51図 84·85号竪穴住居跡実測図 (1/60)

平面形は長方形を呈す。壁面はやや緩やかな立ち上がりとなり、壁小溝は存しない。最大0.12 mの壁高を測る。床面下層は万遍なく掘られ、掘り込みは不明瞭となる。土壙は存しない。カマドは北西壁中央に付設され、造り付け型のカマドである。掘立柱建物と84号住居に削平され、旧態は全く不明である。

図示した1~9で、4・5・7~9が北西壁側の床面上より出土し、1と3は床面下層より出土した。他は埋土中出土品である。鉄鏃も床面上より出土した。土錘と不明土製品も埋土中出土品。図示した外には、須恵器の坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版57・75・80, 第124・82・90・94図)

1は身として図示したが蓋でないとも言い切れない。外面は灰被りである。3は黒色の内面にミガキがなされているので黒色磨研風の土器となる。いわゆる黒色土器と称されるものである。全体にはやや粗雑なつくりである。4のヘラ記号は彫りが深い。5は手捏ねである。7・8ともにやや粗いつくりである。

第82図85-9は手捏ねの小型品である。径1.9cmの小さな平底を有する。

土錘(図版75, 第90図 8) 小破片である。現存長2.4cm。

(伊崎)

鉄製品 (図版80, 第94図15) 茎尻を欠失し, 現存長16.7cmを測る鉄鏃である。両丸造りの身は薄く, 厚さは 2 mm程である。 (児玉)

86号竪穴住居跡 (図版38, 第52図)

86~111号住居の26棟が、切り合いかつ重複して連綿と東西30mに渡る。狭い面積の中に夥しい住居が密集していたので、切り合い関係は難解であった。また調査が二度に渡ったことで、 更に混迷の度を増す結果となった。最終的には報告する様な切り合い関係となる。

当住居は、北側の住居群では95号住居の次に新しくなる。当住居の調査は2度にわたり、略中央で東西に分かれて発掘したのと、他の住居との差異が極めて不詳であったことから、床面下層より復原して一部破線で図示せざるを得ない住居となった。カマドも89号住居カマドと近接していたこと等から、北壁中央に付設した突出型カマドと推定されるが旧態は不明となる。南北が3.15m前後、東西が3.8m~4m程の辺長となり、床面積が12m程を測る小型規模の住居であろう。竪穴部の平面形も、東南隅が15号土壙に切られているが、台形状に近い長方形となろう。主柱穴は竪穴部と略相似形に配置していた。

床面下層で4基の土壙と掘り込みを検出した。掘り込みは若干凹凸をなして溝状に巡る。土壙については、北東隅は89号住居に、 P_2 の北側が90号住居に帰属するのは略間違いなかろう。主柱間エリア付近の土壙で切り合いが認められ、東側が新しい土壙となる。このことより、東側の土壙が当住居に伴うと思われるが、位置的に87号住居の主柱間エリアに相当し、87号住居

の中央土壙となる可能性も有す。西側の土壙は92号住居の壁隅土壙に当るかもしれない。しか し、貼床下の遺構であり、判断は差し控えたい。

図示した1~33で、14・30と32が床面より出土し、1・3・6・12・20・21・23・24と29が床面下層より出土した。22と26が東側の土壙より出土し、87号住居に伴う可能性もある。2・25・27と31が西側の土壙より出土し、94号住居に伴うかもしれない。他は埋土中出土品。砥石は南東隅の床面上より出土。古式土師器の3、鉄刀子、土玉は埋土中出土品。土製品の34・35は床面下層より出土。不明土製品は、床面下層と土壙及び埋土より出土している。図示した外には、須恵器の坏類と甕が各4個体、土師器の甕が55個体、同甑が4個体、同坏が13個体、同鉢が2個体出土している。

出土遺物 (図版76·79、第125·82·91·93図)

2の撮みは釦状のもので大きめである。5・6は7・8に比すと細身のつくりとなる。12はやや大きめだが平瓶の口縁部になろうか。13は口縁部として図示したがどのような器形になるのかわからない。23・24は壺のような器形になるのだろう。25・29は精製の土器である。30はやや特異な器形としてよい。

第82図86-33は手捏ねの凹凸が著しい土器である。高台風になった底部は径2.3cm。

第82図86-34は最低3本の粘土紐または粘土帯をくっつけ、押しつぶした結果として何が何だかわからない土製品となっている。何を意図したのかも皆目検討がつかない。胎土は精選されていてきわめて良質である。長さ4.3cm。同35は粘土をまるめて偏球体とした玉である。胎土はきわめて良質で堅く焼成されている。長軸2.7cm、短軸2.2cm、重さ10.05g。

石器 (図版76, 第91図 6) 砂岩製の中砥である。現存長10.3cm。 (伊崎)

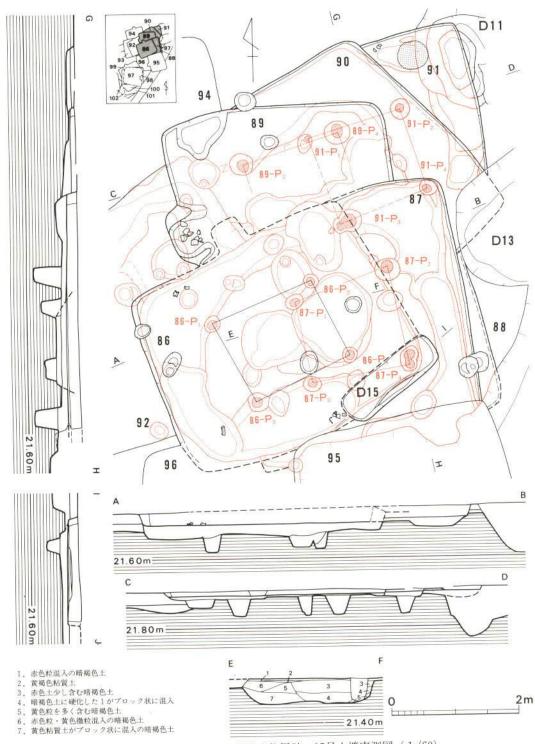
鉄製品(図版79, 第93図7) 現存長5.5cmを測る刀子片である。使用減りのためか身の先端に向かって幅が細くなる。 (児玉)

87号竪穴住居跡 (図版38, 第52図)

86号住居の東に位置し,15号土壙と86・95号住居に大半以上削平される。88~91号住居を切るが,96号住居との先後関係は不明となる。東辺が3.6m以上を測り,主柱穴配置等から小型規模の住居跡となろう。形状は不詳。主柱穴は $P_1 \sim P_3$ 間が狭い台形状に配されていた。最大0.18mの壁高を測るが,壁小溝は存しなかった。

床面下層には、溝状を呈す掘り込みを検出した。0.45m~0.85mの幅で、底は若干凹凸をなし最大0.23mの深さを測る。土壙は86号住居で説明した通り不詳である。カマドは検出していない。

図示した1~15で、2・3・7・10と14が床面下層より出土し、他は埋土中出土品。不明土



第52図 86~91号竪穴住居跡・15号土壙実測図(1/60)

製品もM1が床面下層より出土し、他は埋土中出土品。図示した外には、須恵器の坏類が2個体、同甕が1個体、土師器の甕が11個体、同甑が2個体、同坏が1個体出土している。(武田) 出土遺物 (第125図)

小破片ばかりが目立つ。4の撮みは直径2.8cm。7はシャープなつくりであるが焼き膨れがみられる。11・12は器壁が分厚い。12の底部外面には木葉圧痕がある。14は精製のつくりである。15は甑になるか。 (伊崎)

88号竪穴住居跡 (図版38, 第52図)

87・90号住居に殆ど削平され、僅かに東壁付近のみ検出した残存不良な住居跡である。95号住居と13号土壙にも切られている。壁高も4cmを測るのみである。主柱穴とカマドも削平され検出していない。

出土遺物は皆無である。

(武田)

89号竪穴住居跡 (図版38, 第52図)

86号住居の北側に位置し、同住居に約半分程削平されている。 $90\sim94$ 号住居を切っている。 北辺が3.4mを測り、小型規模の住居に復原される。若干歪つな形状を呈しているが不詳である。主柱穴は P_2 と P_4 を検出したが、あまりにも北壁に近い所に配置している。しかし、南壁とは略直交をなし異和感を覚えない。壁面はやや急勾配に立ち上がり、最大 $8\,\mathrm{cm}$ の壁高を測る。

床面下層の掘り込みは、他の住居の掘り込みと切り合い不明な点が多々存した。前述した土 壙が当住居に伴うと考えられ、長軸が1.15m、短軸は0.65m、床面より0.42mの深さを測る、 長楕円形の平面形を呈す。

カマド (図版39) 西壁に付設し、燃焼部が0.25m突出したカマドである。突出部隅より粘土を積み上げ壁体を築いているが、袖長は0.55mと0.7mを測る。火床面は床面より僅かに浅くなり、長軸が0.65m、短軸は0.5mを測る。火床面中央で支脚内に充塡されていたと考えられる焼土塊を検出した。家屋廃棄時に支脚に転用した甕を壊したと想定される。

図示した1~12で、4・7~9と12がカマド内より出土し、他は埋土中出土品である。接合 資料の4点も埋土中出土品。図示した外には、須恵器の坏類が2個体、同甕が3個体、土師器 の甕が17個体、同甑が2個体、同坏が4個体、同高坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第126·154図)

1~6の坏蓋はその口縁形態で三類に分けられそうだ。しかし時期差はあまりないだろう。 10は口縁端から2cm程内側の所に籾圧痕が1個ある。またそこより下位には黒いコゲが付着し ている。11は精製された土器である。

第154図 J 11・ J 15・ J 23・ J 29はこの住居跡と55・84・99・57号住居跡等との出土品が接合したものである。 (伊崎)

90号竪穴住居跡 (図版38, 第52図)

87・89号住居に殆ど削平され、南東隅も13号土壙に切られている。北東側が若干残存する不良な住居であるが、88・91号住居を切っている。辺長が約3.7m程と推定され、小型の規模となろう。壁高も6cm程しか測りえない。主柱穴とカマドは検出していない。

床面下層で掘り込みを検出し、溝状を呈して巡っているが、89号住居カマド付近では不明となる。87号住居で述べた如く、 P_2 横の土壙が当住居の壁隅土壙に当たると考えられる。長軸が0.7m、短軸が0.6m、床面より0.52mの深さを測り、平面形は楕円形を呈す。

図示した2点は埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏が1個体、土師器の甕が4個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第126図)

1は須恵器坏の器形をまねた土師器である。まねてはいるが須恵器のそれとの違いは体部の外上方への開き具合にある。2は外面頸部にタタキの痕跡を認める。 (伊崎)

91号竪穴住居跡 (図版38, 第52図)

住居群の北西端に位置し、90号住居と13号土壙に殆ど削平され、北西隅部のみ残存する不良な住居跡である。11号土壙を切っている。規模と形状は不詳であるが、主柱穴配置より小振りな住居と考えられる。主柱穴は図示した 4 本が想定されるが、 P_3 が他より20cm程深く掘り込まれている。平面形は長方形を呈す。壁高は最大 7 cmしか測りえない。北壁際の床面上にまとまった粘土を検出したことより、90号住居北西隅付近にカマドが位置していたと推定される。

床面下層の掘り込みは、検出分では溝状を呈し、床面より最大10cmの深さを測る。主柱間エリアに中央土壙が存したと思われるが、他の遺構と切り合い形状は不明となる。床面より最大18cmの深さを測る。

図示した1~6で、2・3と5が粘土付近の床面直上より出土し、他は埋土中出土品である。 図示した外には、須恵器の甕が1個体、土師器の甕と坏も各1個体出土している。接合資料J 12も埋土中出土品である。 (武田)

出土遺物 (第126·154図)

1の坏は体部の湾曲の仕方に特徴がある。4は手捏ね風のつくりで器壁が厚い。粘土帯の積

上げとは思えない。

第154図J12は11号土壙出土品と接合している。

(伊崎)

92号竪穴住居跡 (図版38·39, 第53図)

86・89号住居に東側の半分程を削平された住居跡で、93・94号住居を切っている。辺長が3.5m前後を測り、床面積が約12.5mに復原される。小型の部類に属し、平面形は隅円方形となろう。主柱穴は P_2 と P_3 を検出したが、他は住居と切り合っているため不明となる。壁面は急勾配に立ち上がり、壁小溝は存しない。壁高は22cmを測る。

床面下層で溝状を呈する掘り込みを検出したが、高低差をなしたり、幅広くなる部位が存するのは、切り合った住居の掘り込み等と重複したためであろう。本来の幅は0.65m~0.8m程となり、床面より10cmの深さと思われる。前述した様に、86号住居の主柱間エリアに存する土壙が、当住居の壁隅土壙に相当するのかもしれない。長軸が1m、短軸は0.85m、床面より0.52mの深さを測り、平面形は楕円形を呈す。

カマド (図版39) 北壁中央に付設し、壁面より20cm突出するカマドである。81号住居のカマドと略同形態となり、突出隅より粘土を積み上げた壁体である。袖長は0.8mと0.9mを測る。火床面は床面より僅かに浅く、略水平である。長軸0.8m、短軸0.4mを測り、平面形は楕円形を呈す。火床面の略中央に焼土化した高さ17cmの土柱を検出した。支脚に転用した甕内に充填した粘土塊と解され、支脚の甕はカマド内外より出土した13と考えられる。家屋廃棄時に支脚を破壊するだけに止めた祭祀行為の名残りであろうか。

図示した1~13で、4が床面上より出土し、13はカマド周辺より出土。7と12が床面下層より出土し、他は埋土中出土品である。土錘の3点も埋土中出土品である。接合資料の2点と縄文土器及び不明土製品も埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏が1個体、同甕が3個体、土師器の甕が9個体、同甑・坏・高坏が各1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版57・75, 第126・154・90・100図)

4 はスマートな器形である。 6 はどのような器形になるのかわからない。10は粗製である。 13は同一個体と思われる破片を図上で復原した。底部はかなり厚い。

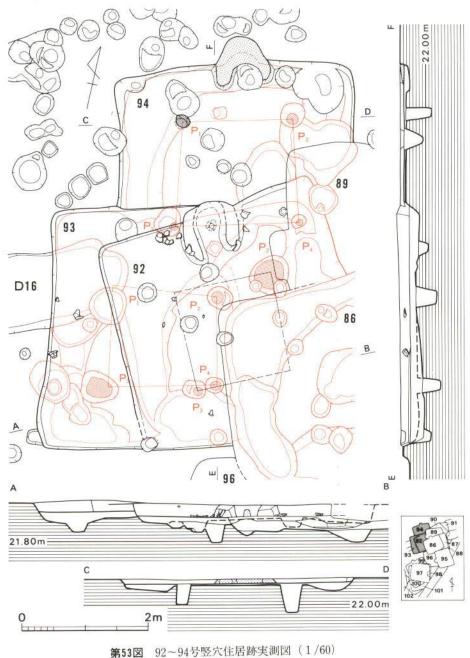
第154図J10・J16は65・84号住居跡等の出土品と接合したものである。

土錘(図版75, 第90図 9~11) 9が現存長6.1cm, 最大径1.8cm, 重さ17.54g。10はやや膨らみをもち, 現存長5.4cm, 最大径2.1cm, 重さ19g。11は破損している。

第100図 3 は埋土中出土の縄文土器(手向山式)である。 (伊崎)

93号竪穴住居跡 (図版38, 第53図)

92号住居の東側の¾程が削平された住居跡で、94号住居と48号掘立柱建物及び16号土壙を切 っている。西辺は3.7mを測り、主柱穴配置等からも小振りな住居と考えられる。主柱穴は P_1 が



16号土壙と重複する位置に想定されたが検出し得なかった。壁面は急勾配に立ち上がり、最大20cmの壁高を測る。壁小溝は存しなかった。カマドは92号住居のカマドと略同位置に存したと推定されたが、削平されていて不明である。西壁際の床面下で掘り込みを検出したが、他の部位については不明となる。

図示した1~10で,5 と6が西壁際の床面上より出土し,他は埋土中出土品である。接合資料のJ34も埋土中出土品。不明土製品も埋土より出土。図示した外には,須恵器の坏が1個体,土師器の甕と坏が各3個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第126・127・155図)

1はかなり大ぶりな蓋になろうか。4の鉢はあまり精良とはいえない。5と6の甕ではつくりが全然違っている。5の刷毛目は細かく、6のそれは粗い。また内面へラケズリの方向までも異なる。作者は全く別人と考えるべきだろう。7の肩部には回転横なでによって僅かな段ができている。9の把手はやや扁平なつくりで、きわめて精良である。

第155図J34は93号住居跡出土品と接合したものである。 (伊崎)

94号竪穴住居跡 (図版38, 第53図)

89・92・93号住居に南壁側が削平されてはいるが、この付近では比較的残存良好な住居跡となる。北東隅が46号掘立柱建物に切られている。北辺は3.6mを測り、床面積も12㎡前後に推定される小振りな住居になろう。竪穴部の平面形も隅円方形に復原される。主柱穴は竪穴部と略相似形に配置し、若干広めの主柱間エリアとなる。壁面は緩やかに立ち上がり、最大7㎝の壁高を測る。壁小溝は存しない。

床面下層には掘り込みと中央土壙を検出した。掘り込みは溝状を呈して巡る。中央土壙はP₄ 寄りに存し、92号住居に約半分程が削平されている。長軸が1.2m前後に、短軸は0.95m前後に 復原され、床面より0.2mの深さを測り、平面形も楕円形と推定される。

カマド 北壁中央に付設し、約0.4m程壁面より突出したカマドである。カマド中央が後世の柱穴に切られ、崩落した壁体と袖との判別が難解でもあり、旧態は不明と言わずばなるまい。屋内の袖は0.4m程を測る。支脚は存しない。

図示した3点は埋土中出土品。土錘は床面下層より出土した。図示した外には、土師器の甕が2個体、同甑と坏が各1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版75、第127·90図)

2は甑に、3は鍋になるかもしれない。

土錘(図版75, 第90図12)現存長4.3cm。床下層より出土した。 (伊崎)

95号竪穴住居跡 (図版40·41, 第54図)

連綿と続く住居群の北半分では最も新しくなる住居跡となる。1号溝が完全に埋没した後築造され、14号土壙と45号掘立柱建物も切っている。辺長は3.2~4 m を, 床面積も約12.6㎡を測り小振りな住居となる。竪穴部の平面形は若干歪つな隅円長方形を呈す。主柱穴も竪穴部と相似形に配置して、主柱間エリアも一般的な広さとなる。壁面は急勾配な立ち上がりとなり、最大32cmの壁高を測る。壁小溝は存しない。堆積状況は南側から埋没し始め、順次中央部、東壁側と北壁側へ埋没した様相を呈すが、投棄した様相でもある。カマド対面側の床面上で粘土を検出したが、量的には少なく性格は不明である。

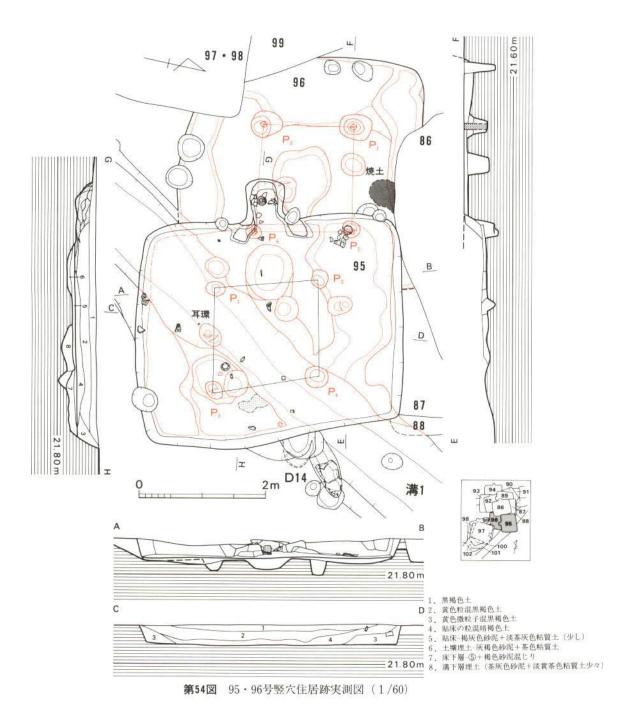
床面下層には土壙と掘り込みが存した。掘り込みは北壁側と東壁側が明瞭で溝状を呈す。土壙は主柱穴 $P_1 \sim P_2$ 間のカマド前面に位置し、中央土壙や壁隅土壙と呼称し得ない位置で検出した。長軸が0.9m、短軸は0.75m、床面より0.18m の深さを測り、平面形は楕円形を呈す。主柱穴 P_3 付近に土壙状と呈す遺構は、当住居か45号掘立柱建物に伴なう遺構か、独立した遺構なのかは不明である。長軸が0.85m、短軸は0.7m、床面より0.13m の深さを測り、平面形は楕円形を呈す。

カマド (図版41, 第55図) 西壁中央に付設した突出型カマドである。残存状況が極めて良好で、突出型カマドの旧態を窺い知る資料の一つとなる。検出面では粘土と焼土が広く散布していたが、破線で図示している所は粘土と焼土を殆ど含まず円形を呈す。土層断面と支脚の位置等より掛口に当ると判断された。突出部は奥行き0.65m、幅0.6m の掘り方となる。掘り方の下端より粘土を貼付する様に積み上げて壁体となすが、突出部奥壁にも薄いが壁体は認められた。壁体は最大0.15m の厚みを測り、補強材として土器片も混入していた。壁体は両袖として竪穴部内にも若干伸展しているが、大半が崩落して基底部のみ残存し、また右袖は後世の柱穴に切られていたが「ハ」の字状に開口していた。火床面は奥壁側が僅かに高く、緩やかな勾配をなし床面に続く。奥壁から0.57m までが強く火を受けて赤化し、灰も若干認められた。

支脚は奥壁より0.2mの火床面やや左寄りに存し、底部を欠損するが土師器の甕を逆位でもって転用していた。甕内には褐色土混じりの茶灰色粘質土が充塡し、火床面を少し掘り窪めて設置している。縦断した土層図で崩落した天井部と考えられる厚み0.13m~0.15m に達する粘土層は、この支脚位置と掛口より判断して、0.1m 奥壁側に向って崩れ落ちたと推定される。住居の堆積状況とカマドの残存状況だけでは、祭祀行為が存したか否かは判断し難い。

図示した1~21では、4と19がカマド内より、12と13がカマド右側床面上より出土。16は主柱間エリア床面上より出土し、6・7と15は埋土と床下層より出土。11と21は床面下層より出土した。他は埋土中出土品。接合資料のJ44も埋土中出土品。J47はカマド付近と南壁側の床面上より出土した。J1は床面上と床面下層より出土。耳環、鉄鏃、砥石と瓦も埋土中出土品。土錘は床面下層より出土し、他の4点は埋土中出土品。手捏ねは床面下層より出土した。不明土

製品はカマド内より出土し、他の7点は埋土中出土品。図示した外には、須恵器の坏が2個体、同甕が3個体、土師器の甕が16個体、同甑が6個体、同坏が12個体出土している。

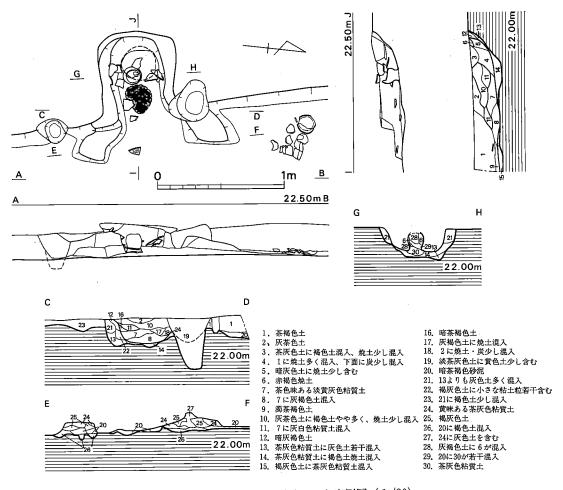


鉄鏃は整理中に所在不明となってしまった。後日再発見と相なったら宮原 D 地区の報告の折に紹介することとする。 (武田)

出土遺物 (図版57·58·75·77·83·84, 第127·154~156·82·90·92·97図)

3の撮みは中央が形よく盛り上がっている。4は僅かにひずみがある。5の高台は細く,端部は外側へ跳ねたような形状となる。8はどっしりとして均整のとれた形態といえよう。11は長頸壺の口縁部であるが,上端部は外返しつつ面を持っている。きわめて精良な土器である。13は内底面に籾圧痕がひとつある。15は二次火熱を受けて少し赤く変色している。19はカマド支脚として使われていた甕である。20の外面刷毛目は下(底部側)から上(口縁部側)へ施されたことが,その終点によってよくわかる。21はわりと精良なつくりで,口縁内面に繊維質のもので押えつけてついた圧痕が見られる。

第154~156図のJ1・J44・J47は13号土壙,99・97号住居跡等の出土品と接合している。



第55図 95号竪穴住居跡カマド実測図 (1/30)

第82図95-22は頗る小さな土器で、外径 $2\sim2.3$ cm、高さ1.4cm、内径は $1.2\sim1.4$ cmに深さが0.4cmを測る。丸めた粘土塊を指先で押しくぼめただけでもつくりうる。やや粗雑なつくりである。床下層からの出土。

土錘 (図版75, 第90図13~17) ともに土錘の破片である。なぜか全て破片である。

石器(図版77, 第92図16) 砂岩の中砥で現存長13.8cm。四面ともに使用し、破損面も一部使っている。

瓦(図版83, 第97図3) 平瓦の破片である。幅8.2cm, 長さ6.4cmのごく一部が残るにすぎない。表面は粗い格子目タタキ, 裏面は1cmあたり10本を数える布目圧痕がある。焼成はややあまい。

耳環(図版84, 第97図 8) 青銅製で全体に小さめで外径1.8cm, 内径1.1cmを測る。錆が著しい。 (伊崎)

96号竪穴住居跡 (図版40, 第54図)

95号住居の西側に位置し、86・95・97~99号住居に切られ、検出面が床面となる残存不良な住居跡である。辺長が3.7m程に、床面積も14㎡に復原され、小型の規模になろう。主柱穴には径10㎝の柱痕を検出し、略長方形に配置していた。86号住居に切られた北壁側で焼土を検出し、この付近にカマドを付設していたと考えられる。

床面下層より掘り込みと中央土壙を検出した。掘り込みは、若干高低差をなして溝状に巡っている。床面より最大で12cmの深さとなる。中央土壙は、東端が95号住居に削平されているが、長軸が1.1m、短軸は0.9m、床面より最大0.21mの深さを測る。平面形は少し歪つな楕円形となろう。

図示した1~28で、6が床面下層より出土し、他は床直土の埋土中出土品である。接合資料の J34が床面下層より出土し、他の3点は埋土中出土品。土錘が床面下層より出土し、18は埋土中出土品。不明土製品も埋土中出土品。図示した外には、須恵器の坏が2個体、同甕が6個体、同器種不明が2個体、同高坏が1個体、土師器の甕が9個体、同甑が3個体、同坏が6個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版58・75, 第128・155・156・90図)

1の撮み径2.1cm。4の口縁端部はもう殆んど立上りを待たず丸くなっている。11は坏でよいのかもしれないが器壁の厚さなどからみて壺としておく。12は大甕の胴部破片である。底部に近い部分であるのだが、図幅の関係上傾きを無視している。外面は縄目のついた擬格子タタキとカキ目、内面は同心円当具痕がのこる。13は胎土がきわめて精良である。14と15は接合はしないけれども同一個体のようにあるので図上で復原した。図示した復原高は42.8cm。24は成形

時の粘土紐の幅が1cm前後であったことを断面にて示している。内面はケズリを行ってはいるが殆んど未調整に近い。外面に煤が付着している。27の刷毛目はタタキと見まがうほどに粗々しい。

第155・156図 J34・J39・J41・J46は93・50・59号住居跡出土品と接合したものである。

土錘(図版75, 第90図18・19) 18が現存長5.2cm, 最大径1.8cm, 重さ14.09g である。19は 小破片にて説明するにたえない。 (伊崎)

97号竪穴住居跡 (図版42, 第56図)

延々と切り合いをなして連らなる住居群の中程に位置し、96・98~102号住居を切っている。 当住居も調査が二度に及び、カマドを付設した東壁際が境となり、結果的にカマドの一部と壁 が不明となる。

辺長は約 $3.8m\sim4.1m$ を,床面積は約15mを測り,中型規模でも小振りとなる。平面形は縦長の隅円長方形を呈す。主柱穴は $P_1\sim P_2$ が若干広い台形状に配置されている。壁面は急勾配に立ち上がり,最大13cmの壁高となる。壁小溝は存しない。

床面下層より多数の柱穴,土壙が2基,掘り込み等を検出した。掘り込みは明瞭な溝状を呈して巡る。幅が0.35m~1.0mで、床面より0.2mの深さを測る。東南隅の壁隅土壙が当住居に伴なう。壁面に略沿って掘り込まれており、長軸が1.0m、短軸は0.85m、床面より最大0.37mの深さを測る。平面形は不整な長方形を呈す。主柱間エリアで検出した土壙は、98号住居の中央土壙か、100号住居の壁隅土壙に相当する位置である。上記より当住居に伴なわない可能性が強い。

カマド 東壁のやや北寄りに付設したカマドである。前述した理由等で旧態は不明となり、焼土を検出しただけであった。火床面が床面よりやや深くなり、土器とともに焼土が充填していた。支脚は存しない。

図示した1~14で、4が床面上より出土し、8と11がカマド内より出土した。11は支脚に転用された痕跡が認められなかった。他は埋土中出土品。接合資料のJ44、手捏ね土器、2点の土錘、砥石、不明土製品も埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏が3個体、同甕が2個体、土師器の甕が7個体、同坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版58・75・76, 第129・155・82・90・91図)

4は撮みを欠失している。5は胎土が小豆色をなす精良な土器で、口縁周辺には回転なでの時にできた突線ふうの粘土の盛り上がりがいくつかある。8は内面黒色の黒色土器である。11はカマド内の出土だが二次火熱を受けてはいない。成形時の粘土紐の幅は1.2~1.3cmである。11~14は精製の土器である。

第155図 J44は95号住居跡との接合資料である。

第82図97-15はミニチュア土器で口径2.8cm, 高さ1.8cmと頗る小さい。

土錘(図版75, 第90図20·21) 2点ともになぜか小さく半分以下に割れている。20の現存長4 cm。

石器 (図版76, 第91図9) 硬砂岩の中砥で、現存長9.7cmをはかる。やや茶色がかった石材である。

98号竪穴住居跡 (図版42, 第56図)

97号住居に殆ど削平を受け、東西の両壁際が残存した不良な住居跡で、99・100・106号住居を切っている。当初は小型住居が 2 軒存すると考えたが、97号住居床面下の柱穴配置と東西の床面高が略同じとなり、長方形の住居と判断した。東西が4.5m 程で、南北が3.2m 程に復原される。主柱穴は $P_1 \sim P_2$ 間が広い台形状に配置していた。壁面は急勾配に立ち上がり、最大21cmの壁高を測る。壁小溝は存しない。カマドは検出しなかったことにより、北壁に付設していたと思われる。

床面下層は、97号床面下層で検出した土壙が、当住居の中央土壙に当るかもしれない。長軸が1.2m、短軸は1.0mを、床面より20cmの深さを測り、平面形は不整方形を呈す。

図示した6点は埋土中出土品である。接合資料のJ33も埋土中出土品。図示した外には、須恵器の甕が1個体、土師器の甕が2個体、同坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第129・155図)

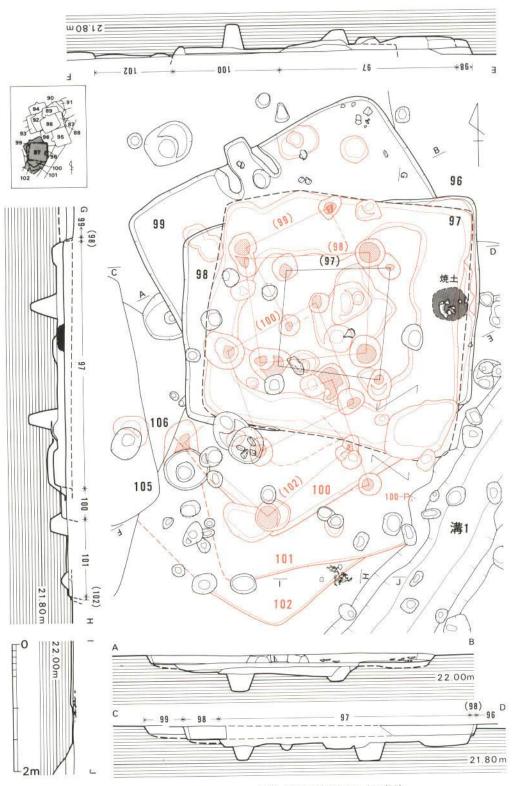
1はやや丸みをもった天井部に2本の平行線のヘラ記号を入れている。4の外面はミガキ風のケズリを行っている。5は精製の土器であり、内面は黒色、胎土までもが黒化している。黒色土器である。

第155図 J33はピット出土品と接合したものである。 (伊崎)

99号竪穴住居跡 (図版42, 第56図)

97・98号住居に南側の大半を削平された住居跡であるが、96号住居を切っている。北壁で4. 25m を測り、主柱穴の配置等から判断して中型規模に復原される。竪穴部の平面形も隅円方形になろう。主柱穴の P4が97号住居主柱間エリア内の土壙付近と考えられるが、削平されたのであろうか検出し得なかった。他の柱穴は竪穴部と略相似形の方形に配置していたと想定される。壁面はやや緩勾配に立ち上がり、最大12cmの壁高を測る。壁小溝は存しない。床面下層の掘り込みは明瞭でなく、土壙は検出してない。

カマド 北壁略中央に付設し、燃焼部が0.3m 突出するカマドである。突出部にも壁体が僅か



第56図 97~102号竪穴住居跡実測図(1/60)

に残存していたが、屋内側へ袖として長く伸展していた。袖長は0.6m を、高さ0.1m を測る。 火床面は、長軸が0.65m、短軸は0.46m を測り、平面形は長方形を呈す。床面は奥壁が若干高 くなるも、略水平である。支脚と考えられる土師器の甕6は壊されて出土した。

図示した1~9で,6と7がカマド内より出土し,6は支脚に転用された品であろう。他は埋土中出土品である。接合資料のJ47はカマド内出土品,J23は埋土中出土品である。手捏ね土器・土錘と不明土製品も埋土中出土品。図示した外には,土師器の甕が7個体,同坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版58・75, 第129・154・156・82・90図)

3は天井部付近がかなり分厚い。4は外底面をへう削りしているが、その時生じた凹凸が平行タタキを施しているように見えている。また内底面に布目らしき圧痕があるものの断定はしえない。5の内底面にも4と同じく布目痕らしきものがあるけれどもよくわからない。6はカマド内出土で二次火熱を受けているので支脚としていたものだろう。7は胴部が樽形に近い形状となり、底部はしっかりした平底をなす。8の内面には黒い吹きこぼれまたはこげが付着している。

第154・156図 J23・J47は89・95住居跡等との出土品と接合したものである。

第82図99-10は把手付のミニチュア土器で、口径は外径で3.4~4.0cm、内径で2.5cmを測る。 把手は片方を欠失する。

土錘 (図版75, 第90図22) 半分以下に割れている。現存長3.3cm, 重さ9.86g。 (伊崎)

100号竪穴住居跡 (図版42, 第56図)

97・98号住居に北側が大半以上削平された残存不良の住居跡であり、106号住居にも切られるが101・102号住居を切っている。検出面で床面が露呈し、壁面は殆ど存しなかった。規模と形状は不詳となるが、主柱穴配置より中型規模に属すと推定される。主柱穴は若干歪つな方形に配置していた。カマドも検出していない。床面下層に掘り込みを検出したが、溝状を呈すが全容は不詳となる。97号住居床面下層より検出した土壙が当住居の壁隅土壙に相当するかもしれない。規模と形状は98号住居で説明している。

遺物は土器片が僅少出土したものの,図化にたえるものはない。 (武田)

101号竪穴住居跡 (第56図)

100号住居の南に位置している。北側の殆どが100号住居に削平され、かつ最大壁高が4cmしか測り得ない残存不良な住居跡である。東壁側は1号溝を切ってはいるが、殆ど残存せず住居

プランも検出し得なかった。102号住居も切っている。竪穴部の規模と形状も不詳である。主柱穴も2本検出したが、他は後世の柱穴や後出する住居に削平されたのであろう。カマドも検出していない。床面下層の掘り込みは浅く、床面より3~4cm程の深さである。土壙も検出していない。

図示した1~6で、1~3と5が床面下層より出土し、他の2点は埋土中出土品である。土 馬の頭部も床面下層より出土した。図示した外には、土師器の甕が2個体、同坏が1個体出土 しているだけである。 (武田)

出土遺物 (図版82, 第130·95図)

小破片が殆んどである。5は甕ながら精製の土器である。6は甑か。 (伊崎)

土製品(図版82, 第95図2) 土師質の土馬で口,鼻から喉にかけての破片である。1と比べて大型で現存長4.8cmを測る。口や鼻の表現は粗く,喉には指圧痕が残る。部分的にハケ目やナデ調整が見える。胎土に微砂粒を含み,焼成良好で茶灰色を呈している。欠損後に二次火熱を受け,喉から欠損面が赤化する。

102号竪穴住居跡 (第56図)

検出時に床面の一部を喪失する残存不良な住居跡で、101号住居に北側の大半が削平され、105・106号住居にも南西側が切られている。図示したラインは床面下層の掘り込みで、南東側で土器がライン外にも散布することから、規模は図示した線より若干広くなる。規模・形状及びカマドは不詳。主柱穴は3本検出したが、残りの1本は97号住居のP4と重複する位置が想定される。床面下層遺構も殆ど不明となる。

図示した 2 点は床面上より出土した。それ以外は小さな破片しか出土しなかった。 (武田)

出土遺物 (図版58, 第130図)

1は精製に近い土器である。内面には赤茶色の化粧土がかかる。 (伊崎)

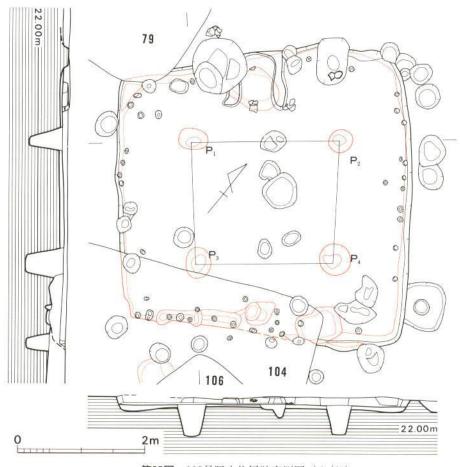
103号竪穴住居跡 (図版43, 第57図)

102号住居の北西 5 mに位置し、79号住居に北西隅を、104号住居に南側を、51号掘立柱建物にカマドと北西壁を切られた住居跡であるが、48号掘立柱建物を切る。辺長が4.05m~4.52mを、床面積も約19㎡を測り、一般的な中型規模に復原出来る。竪穴部の平面形は、南西辺が若干狭くなるも略隅円方形となろう。主柱穴は長方形に配置し、床面積における主柱間エリアの占有率は高い。壁面はやや急勾配に立ち上がり、最大0.13mの壁高を測る。壁小溝は南東壁に1.35mの長さだけ存したが、壁面下で多数の小穴を検出した。大半以上は整然と並んでいる

が、屋内側にも存し、かつ断面観察も行なわなかったので、全てが伴うとは断定し難い。後章で若干考えるのでここでは省略する。深さは0.11m~0.28m を測る。床面下層の掘り込みは万遍なく掘られて、壁際が若干深くなる。土壙は存しない。

カマド 北西壁中央に付設した造り付け型カマドである。左袖の大半が51号掘立柱建物に切られて喪失している。右袖は、長さが0.9m、基部最大幅が0.28m、最大高は0.12mを測る。火床面は良く焼けており、長楕円形を呈し、煙道側が僅かに高くなるが略水平である。支脚は原位置を保っていなかったが、焚口部より出土した土師器の甕5を転用していたのであろう。家屋廃棄時に壊したと想定される。

図示した1~13で、5と13がカマド内より出土し、5は支脚に転用した品か。6と7が床面より出土し、1と12は床面下層より出土した。他は埋土中出土品。陶質系土器・手捏ね土器も埋土中出土品である。鉄製刀子は主柱間エリア床面上より出土した。完形の不明土製品はカマ



第57図 103号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ド内より出土し、他は埋土中出土品。図示した外には、須恵器の甕が5個体、土師器の甕が2個体、同坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版80, 第130·82·98·94図)

1は蓋か身かよくわからない。3は精製土器ではあるけれども少し粗い。4は二次火熱を受ける。5はカマド内出土で二次火熱を受けているので支脚としていたものだろう。6は平底風になる。8の内面は縦へラ削りのあと横方向へのへラ削りを行っている。10と13は同一個体と思われるが接合はしていない。

第82図103-14はミニチュア土器で口径2.4cm, 器高1.8cmを測る。

第98図8は陶質系土器の甕の頸部破片である。

(伊崎)

鉄製品(図版80, 第94図18) 身の先端と茎の大半を欠失する細身の刀子である。銹のため関の形状は不明瞭だが両関であろう。現存長8.2cm, 身の最大幅1.9cmである。 (児玉)

104号竪穴住居跡 (第58図)

103号住居の南に位置し、東南側の半分程を106·108号住居に削平され、カマドの位置が不詳となる住居跡である。一方では103号住居を切っている。北西辺は約4.5m を測り、主柱穴配置等から中型規模になろう。主柱穴は壁面と平行な長方形に配置し、P₂は他より若干深い掘り方となる。壁面はやや緩やかに立ち上がり、最大壁高8cmを測る。壁小溝は存しない。床面下層は若干凹凸をなすが万遍なく掘り込まれている。106号住居床面下層で検出した土壙は、当住居の壁隅土壙とも考えられる。長軸が1.5m、短軸は1.1m、床面より最大0.4mの深さを測る。平面形は不整な楕円形を呈す。

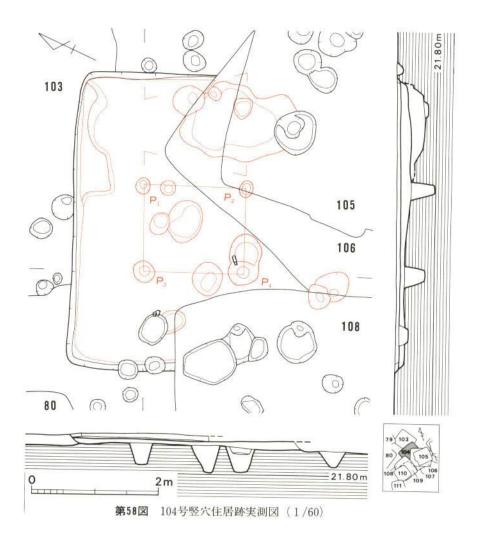
図示した9点は全て埋土中より出土した品である。図示した外には,須恵器の坏が2個体,同甕と器種不明が各1個体,土師器の甕が7個体,同甑と坏が各4個体出土している。(武田)

出土遺物 (図版58, 第130図)

1・2はともに蓋としておく。細身のつくりである。 6 はかなり小さいが器壁は厚い土器である。 7~9 はよく似た器形をなし、口径もほとんどかわらない。 (伊崎)

105号竪穴住居跡 (図版43, 第60図)

97号住居の西方 1 m に位置し、夥しい住居群の中では最も新しい部類の住居となろう。辺長は3.7m~3.9m を、床面積が約14㎡を測り、中型規模となる。竪穴部の平面形は若干歪つな隅円方形を呈すが、主柱穴は縦長の長方形に配置する。壁面は緩やかに立ち上がり、最大壁高は16cmを測る。壁小溝は存しない。床面下層の掘り込みはやや不明瞭であり、土壙は存しない。



カマド (第59図) 西壁中央に付設し、燃焼部が0.2m 突出するカマドである。住居の中軸線は支脚上を通る。突出部隅より茶褐色粘質土を積み上げて壁体となる。袖は長さが0.7m と0.55m となり、基底部の幅は最大0.25m を測る。火床面は略水平で、平面形は長方形を呈す。煙道側より0.25m の位置に支脚を設置し、土師器の甕を逆位に用いている。壊れる所なく完形で検出したが、僅かに右方に傾斜しているだけである。カマド前面で多くの土器が出土したが、大半以上は埋土中と考えられる品。

図示した $1\sim23$ で、15はカマドの支脚に転用されていた品である。 1 は床面下層より出土した。カマド前面より一括して出土した品は $9\sim12\cdot14\cdot16\sim18\cdot20\cdot22\cdot23$ と多いが殆どが埋土中出土品に帰属する。他も埋土中出土品である。接合資料の J 8 は埋土中出土品で、J20 は床面下層より出土した。 鉄製品 2 点はカマド前面の埋土中出土品である。 不明土製品も全て埋土

中出土品である。

図示した外には、須恵器の坏が5個体、同甕が4個体、土師器の甕が7個体、同甑が5個体、 同坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版58・59・79・80, 第131・154・82・93・94図)

2は蓋にしてよいものかわからない。7の高台にあるへラ記号はワラのような植物繊維質のもので施している。10の外底部へラ削りは凹凸ができて99-4と同様にタタキ痕のように見えている。11はわりと精製の土器であるのにつくりは雑である。15は支脚としていたものであろう。下膨れの器形になる。16は精製に近い土器である。18の口縁下にある僅かな段(線)は回転ナデによってできたものである。20の把手は断面図でわかるように横に幅広い形態をなす。21・22は鍋になろうかと思われるが、22は精製に近いつくりである。

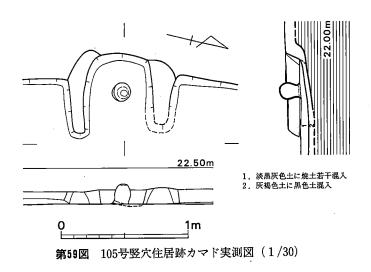
第154図 J 8 · J20は溝 1 · 108号住居跡 · 19号土壙と接合した土器である。

第82図は105-23は手捏ね土器である。ごく僅かに平底部分がある。 (伊崎)

鉄製品(図版79・80, 第93・94図 8・31) 8 は身の先端側と茎尻側を欠失する両関の刀子である。現存長8.1cm, 身の最大幅1.1cmで使用減りのためか, 身幅は関部が最大で先端側に向かって細くなる。31は鉄鏃の茎片かと思われる。現存長5.7cmである。 (児玉)

106号竪穴住居跡 (第59図)

105号住居が当住居の略中央に位置して、大半以上削平された住居跡である。他の住居との切り合い関係は、100~102・104・107号住居を切るが、98・108号住居に切られている。残存状況は不良であるが、規模と形状については略旧態が窺い知れる。辺長は4.6m~5.1mを測り、床



— 97 —

面積は約23.5㎡となる。大振りな中型規模に属し、竪穴部の平面形は若干歪つとなるも隅円方形に復原される。主柱穴は $P_2 \sim P_4$ 間が広い台形状に配置され、竪穴部とは相似しない平面形となる。壁面がやや急勾配に立ち上がり、最大壁高は15cmを測る。壁小溝は存しない。北壁略中央に焼土を検出したが、この付近にカマドを付設していたと思われるも、105号住居に削平されたのであろう。床面下層の掘り込みは判然としなかった。北西隅で検出した土壙は、当住居と104号住居のどちらかの壁隅土壙となるが断定出来なかった。

図示した1~6で、4が床面下層により出土し、他は埋土中出土品となる。図示した外には、 土師器の甕が4個体、同甑が2個体、同高坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第131図)

4 は脚台の付く甕になるものと思うが、とすれば天地逆の図示にすべきかもしれない。しか しそうであっても違和感があるので図のようにしておく。くびれ部径5.9cm。6 はもう少し傾き があるかもしれない。 (伊崎)

107号竪穴住居跡 (第60図)

106号住居の南に位置する。104~106・108号住居に殆ど削平され、僅かに南壁側の床面と主柱穴を検出した不詳な住居跡である。主柱穴は略方形に配置され、主柱間エリアは約2.8㎡で平均的な面積である。床面下層の掘り込みは溝状を呈している。幅が0.45m~0.7mで、床面より12cmの深さである。

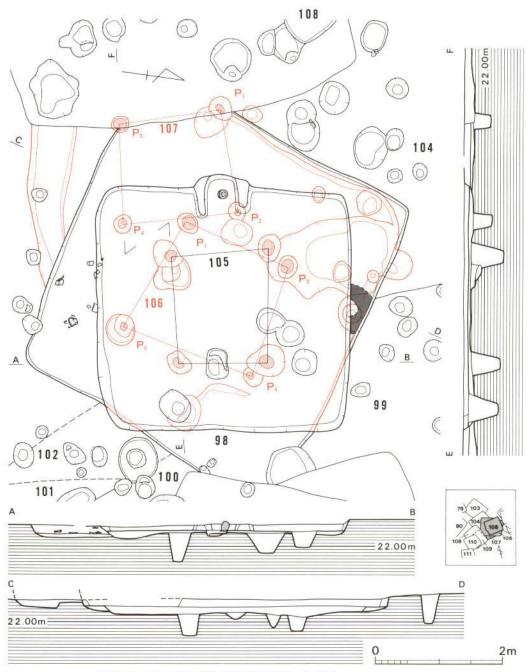
図示した土器は床面直上で埋土中出土品となる。不明土製品は床面下層より出土した。図示した外には、土師器の坏と高坏が各1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第131図)

図示しうるのは1点のみである。口縁部の形態は106号住居跡出土品等に類似する。 (伊崎)

108号竪穴住居跡 (図版44, 第61図)

105号住居の西方 1 mに位置する。南西側を110号住居に削平されているが、104·106·107号住居を切っている。110号住居を調査した後、1 軒の住居と考えて掘り下げた。床面は煩雑である。やや硬化した床と思しき面は黄色砂質粘性土であり、堆積土も略同じで識別するのは難解であった。結果として床面を掘り過ぎてしまったが、下層の柱穴と掘り込みより 2 軒の住居が存したと考えられた。検出面において、切り合い関係が存しなかったことで、当住居は図示した様になる。また、109号住居の南壁と東壁は当住居の壁面と略同じと考えられる。上記より床面は破線で復原せざるを得なかった。また出土遺物では、埋土中出土品が当住居に帰属するも、



第60図 105~107号竪穴住居跡実測図 (1/60)

下層の遺物は当住居に属す可能性は高いが、断定する迄には至らない。上記から、辺長は4.8m~5.1mを測り、床面積も約24㎡に復原される。竪穴部の平面形は東壁側が長くなる台形状になろう。主柱穴も竪穴部と略相似形に配置している。壁面はやや緩やかに立ち上がり、推定床面より最大18cmの壁高となる。壁小溝は存しなかったと思われる。床面下層で掘り込みを検出したが、南壁側の掘り込みは109号住居に伴うと考えられるので、壁側が若干深くなるタイプと想定される。中央土壙は主柱穴配置より109号に帰属すると思われる。

カマド 北壁に付設した造り付けカマドである。中軸線が右袖上を通り、西偏した位置となる。袖と崩落した壁体の判別は難解であり、詳細は不明となる。支脚は存しなかった。

図示した1~14は全て埋土中出土品である。接合資料のJ36はカマド内より出土し、J4とJ20は埋土中出土品。J9は検出時に出土し、110号住居に帰属するかもしれない。鉄製品の3点と銅製品、不明土製品も埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏が4個体、同高坏が1個体、土師器の甕が3個体、同甑が2個体、同坏が5個体、同高坏が1個体出土している。床面下層より土錘が出土したが、整理中に紛失した。再発見の節は次回の報告に掲図したい。 鉄滓も埋土中より出土している。 (武田)

出土遺物 (図版59・84・79・80・82, 第132・154・155・97・93・94・95図)

3の外天井部は手持ちへラ削りを行っている。8・9は精製とは言い難い。9は手捏ね風で、外面に粘土のヒビが多数見られる。12・13はおそらく同一個体であろう。14の把手は横広のものである。

第154・155図 J 4・J 9・J20・J36は19号土壙・110・105・79号住居跡等との接合資料である。

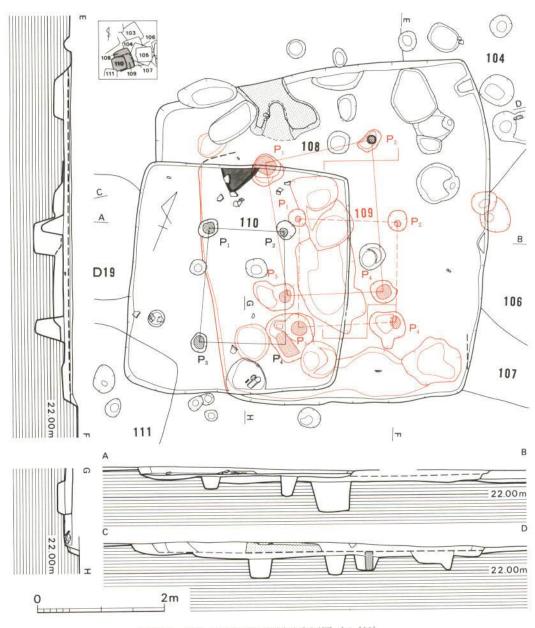
青銅製品 (図版84, 第97図 6) 青銅製の薄板状の金具である。残存状態がよろしくないため、イキている所と破損している所の区別さえはっきりしないのが実情である。まず図面左側の2つの突起がこれで終わりなのか続くのかわからない。続くとすれば破線で図示したようにここに長方形の透し孔が入ることとなる。また1個だけ鋲が遺存しているので、孔と鋲の存在から何かの留金具としての可能性もでてくる。飾り金具と考えられないこともない。ともあれ、今は用途・形状不明の金具とせねばなるまい。埋土中からの出土である。現存長3.3cm、最大幅2.1cm、平坦部での厚さ1.88mm、重さ3g。 (伊崎)

鉄製品 (図版79・80, 第93・94図 5・29・33) 5は刀子の身の破片である。現存長4.3 cm, 幅1.1cm, 背部の厚さ0.3cmである。29・33は接合しないが同一個体の可能性がある。断面は矩形を呈し、33は湾曲し、下に向かって細くなる。現存長は、29が4.8cm、33が10.7cmである。

土製品 (図版82, 第95図5) 土師質の土馬の足かと思われる。現存長4.8cmを測る。器面には指圧痕やナデの他、ハケ目調整痕が残る。胎土は微砂粒を若干含み、焼成良好でくすんだ淡茶褐色を呈する。 (児玉)

109号竪穴住居跡 (図版44, 第61図)

108号住居内にすべて納まり、床面下層の遺構から想定された住居跡である。主柱穴の4本は略方形に配置され、西側の掘り込みは108号住居の壁面より0.6m内側に位置して、更に深く掘り込まれていた。南壁側には溝状を呈した掘り込みが西壁より続く。この状況より判断して、南壁と東壁は108号住居と略同じ位置と方位を有していたと思われる。北壁は108号住居のカマ



第61図 108~110号竪穴住居跡実測図 (1/60)

ド前面付近に相当しよう。上記より辺長が約4.2m 程の住居が想定され、中型規模となろう。主柱間エリア内に存す土壙が、当住居の中央土壙に相当する。北側が柱穴と切り合い不明となるも、長軸が約1.3m で、短軸は0.9m を測り、0.25m 以上の深さとなろう。平面形は少し歪つな楕円形を呈す。その他の事項は不祥である。

出土遺物は、108号住居の床面下層より出土した品が、この住居に帰属する可能性を僅かに有すが、断定できないので図示していない。 (武田)

110号竪穴住居跡 (図版44, 第61図)

108号住居の南に位置して、南西隅を111号住居に切られているが、108号住居と19号土壙を切っている。辺長は3.3m ~ 3.5 m を、床面積が約11m を測り、小型規模となる。竪穴部の平面形は隅円方形となる。主柱穴は縦長の長方形に配置していたが、 P_4 は他の柱穴と重複していた。壁面は緩やかに立ち上がり、最大壁高10cmを測る。壁小溝は存しない。床面下層の掘り込みはやや不明瞭で、土壙は存しなかった。

カマド 北壁中央に付設した造り付け型カマドであろう。壁体は何ら残存せず、焼土と粘土が 散乱しているのを検出した。周辺部に土器が若干散らばっていた。

カマド対面土壙 やや東寄りの南壁際に位置する。平面形は半円形を呈し,径は0.6m を測る。擴底は略水平となり,深さは床面より0.13m とやや浅い。擴内より土師器の皿,手捏ね風土器片,紡錘車と砥石が出土し,各遺物の上端面は床面より下方となる。貼床面は確認していない。

図示した1~24で、5と15がカマド対面土壙より出土し、18もカマド対面土壙周辺の床面上で出土した。他は埋土中出土品である。接合資料のJ31は埋土中出土品で、J9は108~110号住居検出時に出土した品であり、当住居か108号住居のどちらに帰属するかは不明となる。鉄器と鉄滓は主柱間エリアの床面上より出土。小さい砥石は北西隅の床面上より、大きい砥石と紡錘車はカマド対面土壙内より出土した。図示した外には、須恵器の坏が5個体、同甕が2個体、土師器の甕が11個体、同坏が2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版59・76・78・79, 第132・154・155・91・96・93図)

4の高坏の坏と脚の接合部径は2.8cm。5の内底面はなでにて調整するが、これはミガキ風の 丁寧なものである。6の内底面は煤けている。15・16はかなり分厚い底部をしており、15には 粘土紐を丸めて成形した痕跡がある。16の外底部木葉痕は小さな葉脈までもわかる。21は23と 同一個体である。

第154・155図 J 9 と J31は、108号住居跡、15号土壙と接合した資料である。

石器(図版76, 第91図1) 砂岩の仕上砥で6面全てを使用している。全長6 cm, 最大幅2.1

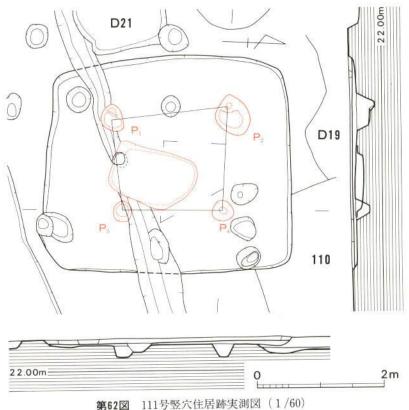
cm。床面から出土している。19は屋内土壙より出土の中砥で破損面以外は使用している。現存 長22.2cm。

紡錘車(図版78, 第96図3) 滑石製で直径4.1~4.5cm, 厚さは片面破損のため不明だが, 現状 で0.85cm, 孔径0.6cmをはかる。表面には車輪のスポークのように11本の条線が放射されてい (伊崎) る。

鉄製品(図版79, 第93図3) 身の過半と茎尻を欠失する両関の刀子で現存長9.1cmを測る。 (児玉)

111号竪穴住居跡 (図版44, 第62図)

110号住居の北西隅を僅かに切り、西方に伸展する住居跡である。略中程の北側と南側に分か れて二度にわたる調査となり、一部不明な個所が存する結果となった。辺長は3.2m~3.79m を、床面積が約12mを測り、小型規模の住居となる。竪穴部の平面形は隅円長方形を呈す。主 柱穴は台形状に配置され、床面積における主柱間エリアの占有率はやや高くなる。壁面は緩や

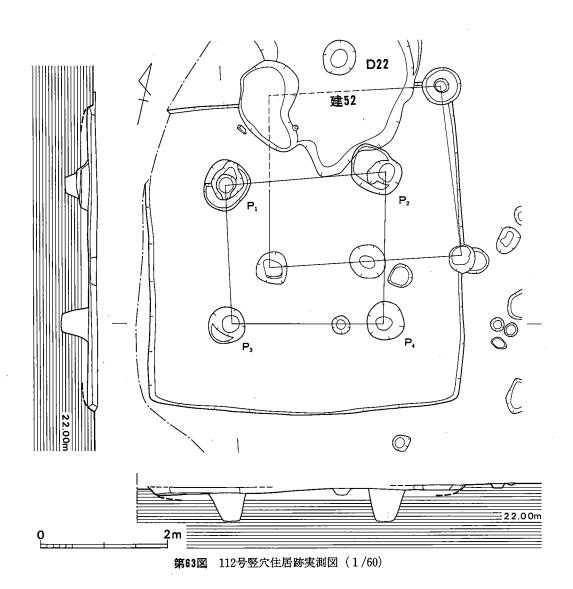


かに立ち上がり、最大壁高 6 cmを測る。壁小溝は存しない。カマドは前述の状況と残存やや不良な住居であったこと等が重複して不明となる。床面下層の掘り込みは不明瞭であった。中央土壙は P_3 寄りに位置し、長軸が1.3m を、短軸は0.9m を、床面より0.18m の深さを測る。平面形は少し歪つな長方形を呈す。

図示した7点は全て埋土中出土品である。図示した外には、須恵器の坏が1個体、土師器の 甕と甑が各1個体、同坏が3個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第133図)

2は口縁端部の打欠きが著しい。4の内底面には2条の平行条線を刻んだへラ記号がある。



— 104 —

7は一見土製品とするしろものであるが、たぶんカマド形土器の庇にあたる破片であろう。二 次火熱を受けた痕跡もある。 (伊崎)

112号竪穴住居跡 (第63図)

調査区内の西南端で、111号住居の西方8 mに位置する。当初は、22号土壙が古いと思われたが、拡張した西壁側にもカマドが存しなかったので、最終的には22号土壙が新しくてカマド周辺部を削平したと判断された。52号掘立柱建物は当住居より新しく、22号土壙より古くなる。

辺長は4.75m~5.05m を測り、床面積は約23mとなる。大振りな中型規模となり、竪穴部の平面形は隅円方形を呈す。主柱穴は竪穴部と相似形に配置し、主柱間エリアはやや広い。壁面は緩やかに立ち上がり、最大壁高は10cmを測る。壁小溝は存しなかった。

カマドは前述した通りで、北壁側に付設していたと考えられる。床面下層は不祥である。 図示した10点は埋土中出土品である。鞴の羽口と不明土製品も埋土中出土品。図示した外に は、土師器の甕が10個体、同甑・坏と鉢がそれぞれ1個体出土している。

出土遺物 (図版80, 第133・94図)

2の体部外面は回転ナデによる小さな凹凸が著しい。3の畳付きにはカキ目風の条線が入る。 5は脚台になろう。くびれ部の径5.6cm。6は須恵器をまねた土師器で、胴部外面にはミガキを施している。胎土はきわめて精良。 (伊崎)

第94図36は鞴の羽口の先端部分である。外面は硬化し黒灰色を呈する。内面は、上半部は赤変し、下半部は暗灰色である。 (児玉)

註

福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告――8 ――』 1986



Fig. 2 作業風景①

2. 掘立柱建物跡

31号掘立柱建物跡 (第64図)

39号住居の東方 1 m に位置する。 2×2 間の倉庫棟と考えられ,8 本柱となる。規模は平均値で梁行3.14m×桁行3.5m を,面積は11.0mを測る。桁行方位は $N-67^{\circ}-\text{E}$ をとる。 P_{5} の最深部は標高20.44m である。四隅の柱穴はやや台形状に配置していた。柱穴の P_{5} と P_{6} より陶質系土器 3 が出土した。 3 は P_{6} よりの出土品と $41\cdot42$ 号住居よりの出土品が接合し,また P_{5} よりの出土品と46号住居,54号掘立柱建物よりの出土品が同一個体となる。 (武田)

32号掘立柱建物跡 (第64図)

31号掘立柱建物の西方 1 mに位置し、 $39\sim41$ 号住居と 7 号土壙に切られる。 2×2 間の倉庫棟で、9 本柱である。規模は平均値で梁行 $3.63\text{ m}\times$ 桁行3.94 mを,面積は14.04 mを測る。桁行方位は $N-68^\circ$ -W をとる。 P_4 と P_5 の最深部はそれぞれ標高22.18 m と22.25 m である。当建物は建て替えられた可能性を有すが,断定するまでには至らない。整然とした柱配置である。柱穴の P_9 より陶質系土器 7 が出土したが、45号住居よりの出土品と同一個体となる。 (武田)

33号掘立柱建物跡 (第64図)

 P_7 から 4 が, P_{12} から 1 ~ 3 が出土した。

 $31\cdot 32$ 号掘立柱建物と切り合わず,西南方へ僅かの距離に位置して, $41\cdot 45\cdot 46$ と48号住居に切られている。 3×4 間となり,20本の柱で構築される。当遺跡では唯一の例で判断に苦しむが,現時点では倉庫棟と紹介しておくが,その他の建物であるかもしれない。規模は平均値で梁行5.03m \times 桁行5.18m $\,$ e,面積は25.95m $\,$ e $\,$ m $\,$ a。桁行方位は N-42° $\,$ - $\,$ W $\,$ e $\,$ e $\,$ e $\,$ a。

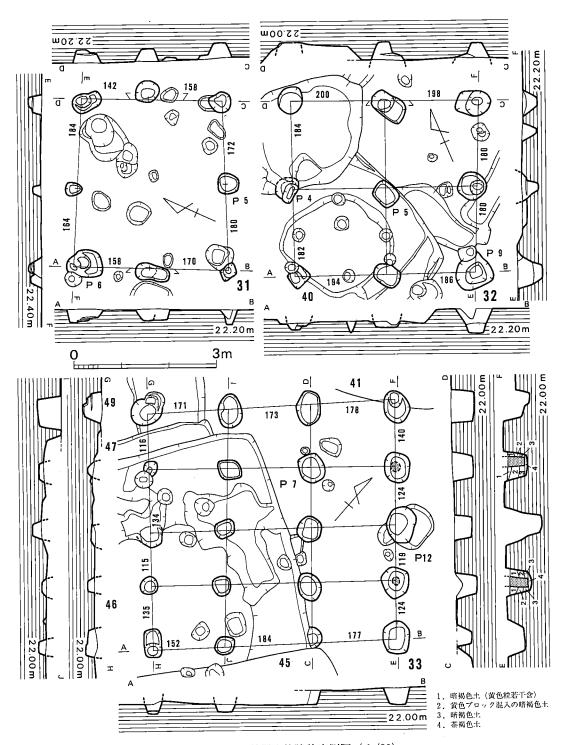
(武田)

出土遺物 (第133図)

1の撮みは径3.1cm, 高さ0.4cm。 4の高坏は古手の土師器である。 6世紀以降のものではない。屈折部から外反する部分の長さ5.4cm。 (伊崎)

34号掘立柱建物跡 (第65図)

33号掘立柱建物の西方 1 mに位置し、 $46\cdot47\cdot49$ 号住居と35号掘立柱建物を切っている。しかし、35号掘立柱建物と略重複する位置関係にあり、若干疑問をおぼえるが事実通り報告しておく。 1×2 間の倉庫棟で、6 本柱で構築する。規模は梁行2.2m×桁行3.0mを、面積は6.6m²を測る。桁行方位は N-21°30′-W をとる。 (武田)



第64図 31~33号掘立柱建物実測図(1/80)

35号掘立柱建物 (第65図)

34号掘立柱建物と略重複する。当建物は $46\cdot47$ と49号住居の床面下で検出し、住居より古くなる。 1×2 間の倉庫棟と考えられ、6 本柱で構築する。規模は梁行1.78m×桁行2.98mを、面積は5.23m²を測る。桁行方位は N-19°30′-W をとる。

36号掘立柱建物跡 (図版45, 第65図)

A地区の北端中央部で方位を異にする3棟の掘立柱建物を検出したが、当建物が最も東側に位置する。3棟の切り合いで、当建物が最も新しく、37号掘立柱建物が古いと考えられた。2×2間の倉庫棟と考えられ、9本柱で構築する。規模は平均値で梁行3.23m×桁行3.41mを、面積は11.02m を測る。桁行方位はN-36-Eをとる。四隅の柱穴はやや台形状に配置している。 (武田)

37号掘立柱建物跡 (第66図)

36号掘立柱建物に切られて、西側に位置する。38号掘立柱建物とは略同位置に存するが、桁行方位が70°以上の振れをなす。3棟中最も古い建物と考えられる。2×2間の倉庫棟で、9本柱で構築されていると考えられる。P₁が調査区外となり検出していない。規模の平均値は梁行3.09m×桁行3.67mを、推定面積は11.44m²を測る。桁行方位はN-64°-Eをとる。P₂の最深部は標高22.55mとなる。整然とした柱穴配置である。 (武田)

38号掘立柱建物跡 (第66図)

37号掘立柱建物と略同位置に存す。 2×2 間の倉庫棟と考えられ, 9 本柱で構築していたと想定出来るが,北西の柱穴は調査区外となる。規模は平均値で梁行 $3.35\,\mathrm{m} \times$ 桁行 $3.94\,\mathrm{m}$ を,推定面積 $13.14\,\mathrm{m}^2$ を測る。桁行方位は $N-53\,^\circ30'-W$ をとる。 P_2 の最深部は標高 $22.52\,\mathrm{m}$ となる。 $36\cdot38$ 号掘立柱建物に比べても若干歪つな形状を呈すが,柱穴の切り合い関係から図化した建物となる。柱穴 P_3 より 1 が出土している。四隅の柱穴は台形状の配置となる。 (武田) 出土遺物(第133図)

土師器の高坏になろうかという破片で精製の土器である。 (伊崎)

39号掘立柱建物跡 (第66図)

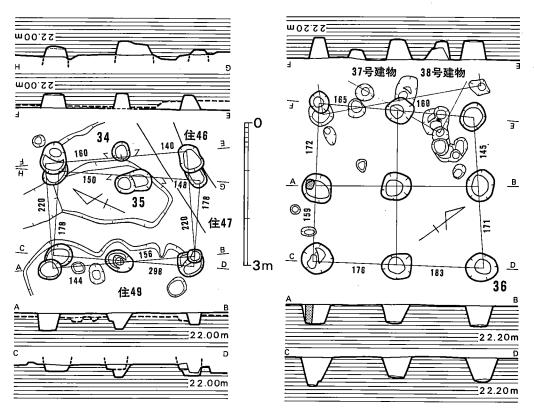
36号掘立柱建物の南12 m、44号住居の西2 m に位置する。 2×2 間の倉庫棟で、9 本柱で構築する。規模は平均値で梁行2.93 m×桁行3.47 mを、面積は10.17 m²を測る。桁行方位は N-

40号掘立柱建物跡 (図版45, 第66図)

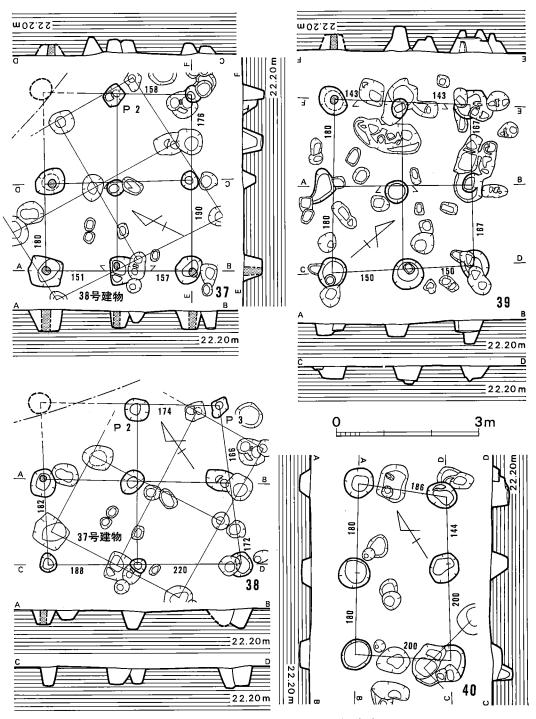
39号掘立柱建物の南12m, 51号住居の西4.5mに位置する。41・55号掘立柱建物と切り合う。 新旧関係は不明であるが, 55号掘立柱建物が最も新しいかもしれない。 1 × 2 間の倉庫棟で, 6 本柱で構築する。規模は平均値で梁行1.93m×桁行3.52mを, 面積は6.72mを測る。桁行方 位は N-32°-E をとる。四隅の柱穴は少し歪つな長方形に配されていた。 (武田)

41号掘立柱建物跡 (図版45, 第67図)

40号掘立柱建物と略同位置となるが,桁行方位は約50°東に振れる。 1×2 間の倉庫棟と考えられ,6本柱で構築する。規模は平均値で梁行 $1.85\,\mathrm{m}\times$ 桁行 $2.87\,\mathrm{m}$ を,面積は $5.25\,\mathrm{m}$ を測る。桁行方位は N-80°-E をとる。四隅の柱穴は少し歪んだ平行四辺形に配置している。(武田)



第65図 34~36号掘立柱建物実測図(1/80)

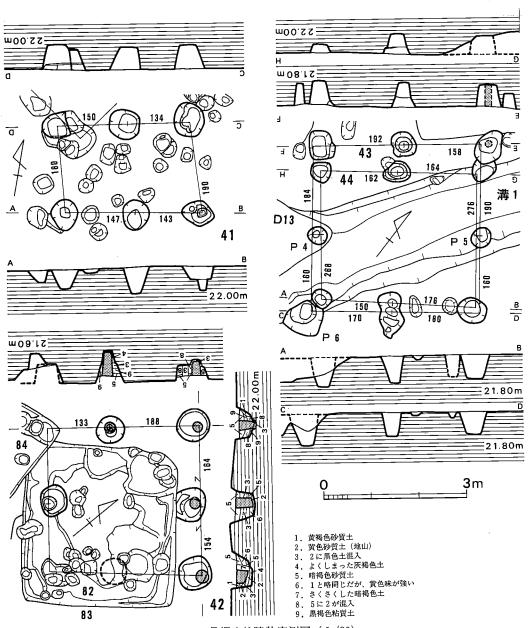


第66図 37~40号掘立柱建物実測図(1/80)

42号掘立柱建物跡 (第67図)

41号掘立柱建物の北10mに位置し、82・84号住居に切られている。 2 × 2 間の倉庫棟と考えられ、8 本ないし 9 本柱で構築されたと想定される。柱痕を確認したが、深さと太さ及び柱間隔も均一とはならない。82号住居床下層で検出した柱穴状遺構は伴う可能性大である。規模は梁行3.1m×桁行3.21mと、面積も9.82㎡程に復原される。桁行方位は N-52°-W となろう。

(武田)



第67図 41~44号掘立柱建物実測図 (1/80)

43号掘立柱建物跡 (第67図)

42号掘立柱建物の南 2 mに位置し、44号掘立柱建物とは位置・規模と方位を略同じとする。中央を 1 号溝が横断しているが、建物が後出する。83号住居も切っている。 2×2 間の倉庫棟であろう。44号掘立柱建物の柱穴と重複しているが、8 本ないし 9 本柱で構築していたと考えられる。規模は平均値で梁行3.47 m × 桁行3.5 m を、面積は12.15 m を 測る。桁行方位は N -51 ー E をとる。図化していない柱穴の最深部は、 P_4 が標高21.87 m、 P_5 は標高22.08 m となる。柱穴 P_6 内より図示した 1 が出土した。四隅の柱穴は若干歪つに配置されている。 (武田)

出土遺物 (第133図)

須恵器蓋の破片であるが、外天井部には別個体の高台付坏身が融着している。また、身受け部分のくぼみの所にも別個体の須恵器破片が融着している。どうしてこのような土器が集落へ持ち込まれてきたのかわからない。 (伊崎)

44号掘立柱建物跡 (第67図)

43号掘立柱建物と略同位置で、若干小振りの規模となる。 1 × 2 間を検出したが、43号掘立柱建物の柱穴と重複していると考えるのが妥当である。 2 × 2 間の倉庫棟となり、8 本ないし9 本柱で構築したのであろう。規模は、平均値で梁行2.72m×桁行3.26mを、面積8.87mを測る。桁行方位は N-52°30′-E をとる。 (武田)

45号掘立柱建物跡 (第68図)

44号掘立柱建物の南5mに位置し、95号住居に切られている。 1×2 間の倉庫棟と考えられ、6 本柱で構築する。規模は平均値で梁行 $1.98m\times$ 桁行2.89mを、面積は5.7mを測る。桁行方位は $N-22^{\circ}-W$ をとる。柱痕は $10cm\sim 17cm$ を測り、やや細い。柱穴配置は整然としている。

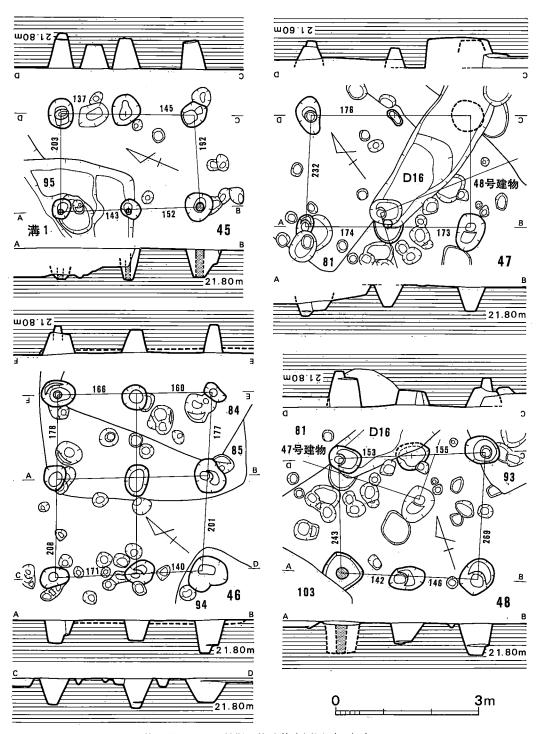
(武田)

46号掘立柱建物跡 (図版46、第68図)

45号掘立柱建物の北9 mに位置し、84・85・94号住居を切る。 2 × 2 間の倉庫棟と考えられ、9 本柱で構築する。規模は平均値で梁行3.19 m×桁行3.82 mを、面積は12.05 mを測る。桁行方位は N-53°-E をとる。四隅の柱穴は台形状に配置している。 (武田)

47号掘立柱建物跡 (第68図)

46号掘立柱建物の南5mに位置し、81号住居、16号土壙と48号掘立柱建物に切られる。北東の柱穴は削平されて存しなかったが、1×2間の倉庫棟と考えられ、6本柱で構築していたと



第68図 45~48号掘立柱建物実測図 (1/80)

想定される。規模は検出分で梁行 $2.32\,\mathrm{m}\times$ 桁行 $3.47\,\mathrm{m}$ を測り,面積は $7.94\,\mathrm{m}^2$ と推定される。桁行方位は N $-52^\circ30'-\mathrm{W}$ をとる。 (武田)

48号掘立柱建物跡 (第68図)

47号掘立柱建物と一部重複し、 $81\cdot93\cdot103$ 号住居に切られるが、16号土壙と47号掘立柱建物を切っている。 1×2 間の倉庫棟と考えられ、6本柱で構築する。南西隅の柱穴は柱痕を検出するに止まり完掘していない。規模は平均値で梁行 $2.56\,\mathrm{m}\times$ 桁行 $2.98\,\mathrm{m}$ を、面積は $7.49\,\mathrm{m}$ を測る。桁行方位は $N-72\,\mathrm{m}$ をとる。四隅の柱穴は若干歪つな配置となる。 (武田)

49号掘立柱建物跡 (図版46, 第69図)

48号掘立柱建物の北7.5mに位置し、65号住居に切られている。 2 × 2 間の倉庫棟と考えられ、9 本柱で構築している。規模は平均値で梁行2.53m×桁行3.55mを、面積は9.37㎡を測る。桁行方位は N-47°-E をとる。整然とした柱穴配置である。 (武田)

50号掘立柱建物跡 (図版47, 第69図)

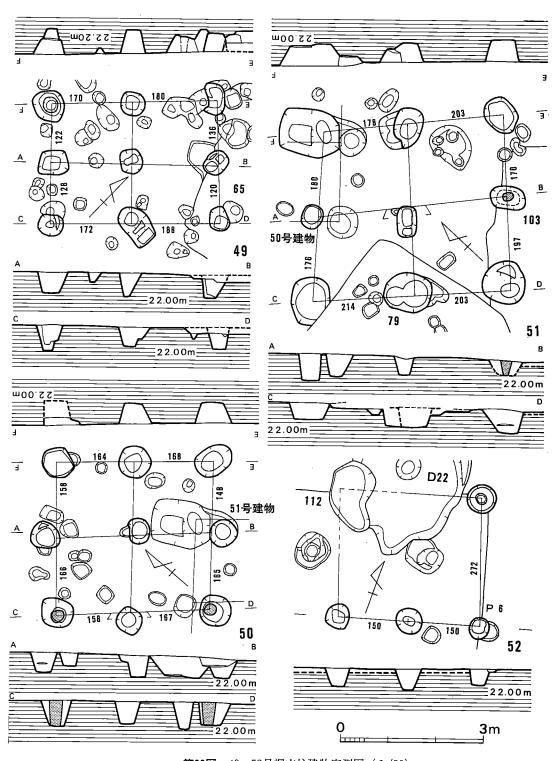
49号掘立柱建物の西方 5 mに位置し、51号掘立柱建物と一部重複するが、切り合い関係は不明である。 2 × 2 間の倉庫棟で、 9 本柱で構築する。規模は平均値で梁行3.18m×桁行3.29mを、面積は10.39mを測る。桁行方位は N-44°-W をとる。四隅の柱穴は整然とした方形に配置している。 (武田)

51号掘立柱建物跡 (図版47, 第69図)

50号掘立柱建物の南に位置し,一部重複しているが略同じ方位である。79号住居に切られるが,103号住居を切っている。 2×2 間の倉庫棟で,9本柱で構築する。規模は平均値で梁行3.62m×桁行3.99mを,面積は10.39m²を測る。桁行方位は N-49°-W をとる。四隅の柱穴は若干台形状に配置している。

52号掘立柱建物跡 (第69図)

調査区の西南端で、51号掘立柱建物の西方15mに位置する。112号住居を切っているが、22号 土壙に北西側の柱穴2個が切られている。1×2間の倉庫棟と想定され、6本柱で構築してい たと考えられる。規模は梁行2.72m×桁行3.0mを測り、面積は8.08mに復原される。桁行方位



第69回 49~52号掘立柱建物実測図 (1/80)

は N-73°30′-E をとる。整然とした柱穴配置と思われる。柱穴 P_6 より 1 と 2 の土器が出土している。 (武田)

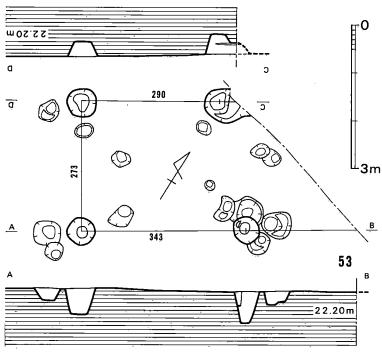
出土遺物 (第133図)

1は甕口縁部, 2は同胴部片である。2の方は胴がかなり球形に近く膨らむ。 (伊崎)

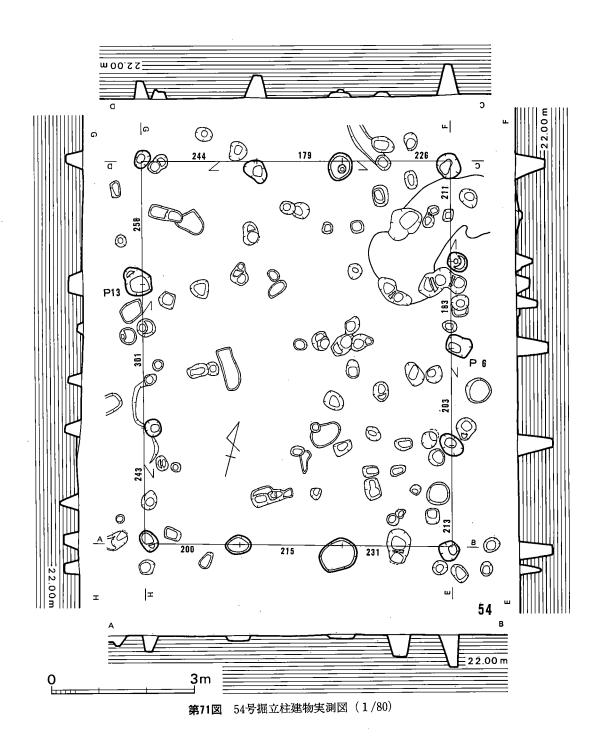
53号掘立柱建物跡 (第70図)

A 地区北東端に位置し、 6 号土壙の東 2 mに当たる。北東側の調査区外に伸展すると考えられ、 1×2 間以上となる建物である。しかし柱間隔が不規則で広いことから、再考が必要な建物かもしれない。桁行方位は $N-58^\circ-E$ をとる。 1×1 間の性格不詳な建物かもしれない。

(武田)



第70図 53号掘立柱建物実測図(1/80)



—117 —

54号掘立柱建物跡 (第71図)

53号掘立柱建物の南 3 m に位置する。 3×4 間の住居棟と考えられ,13本ないし14本で構築していたのであろう。西側の柱穴位置が不規則となるが,他は略整然と配置している。柱穴の深さも不規則となるが,当初の調査でもあり掘り過ぎたことは否めない。規模は梁行6.45m×桁行8.06mを,面積は51.89m²を測る。桁行方位は N-15°-W をとる。柱穴 P_{13} より 1 と 2 の土器が出土している。また,柱穴 P_6 より陶質系土器 3 が出土したが,3 は $41\cdot42$ 号住居と31号掘立柱建物よりの出土品が接合し,46号住居と当建物よりの出土品が同一個体となる。(武田)

出土遺物 (第133図)

1はきわめて小破片、2も径を出すに至らない。2の外面は灰被りである。 (伊崎)

55号掘立柱建物跡 (第72図)

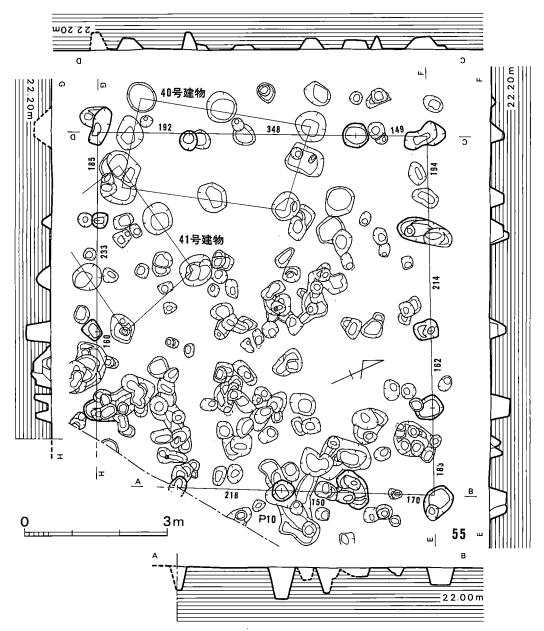
 $40 \cdot 41$ 号掘立柱建物と重複する位置に当たる。南東隅の柱穴が調査区外となるが、 4×4 間の住居棟と考えられる。規模は梁行 $6.88m \times$ 桁行7.5mを、面積は52.31mを測る。桁行方位は $N-67^\circ-W$ をとる。柱穴 P_{10} より 1 と 2 の土器が出土している。 (武田)

出土遺物 (第133図)

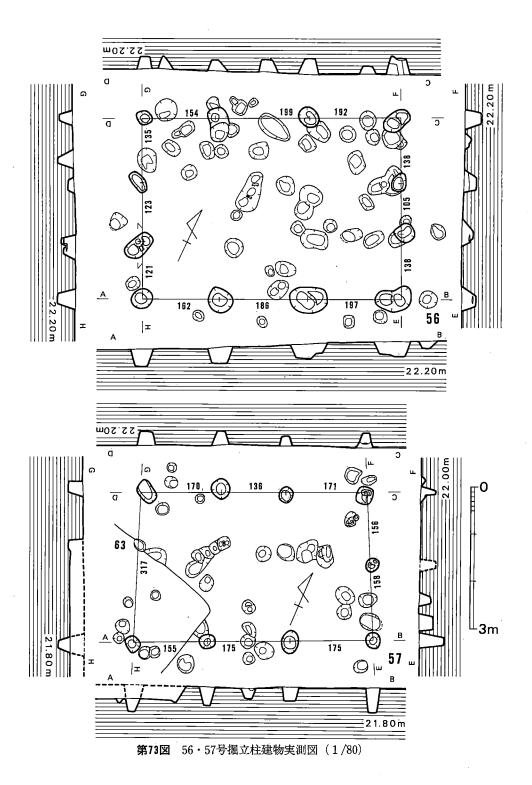
1はシンプルな形態をなし、土師器坏としてもおかしくないくらい形態上で通じるものがある。2は甕口縁破片で、肩部外面はたて平行タタキ、同内面は同心円当具痕をみる。 (伊崎)



Fig. 3 作業風景②



第72図 55号掘立柱建物実測図 (1/80)



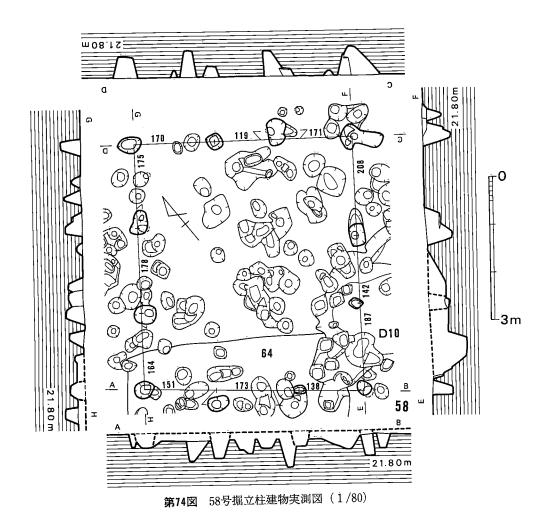
— 120 —

56号掘立柱建物跡 (第73図)

55号住居の南東 1 mに位置する。 3×3 間の住居棟と考えられ、整然とした柱穴配置の12本柱で構築している。規模は梁行3.79 m×桁行5.44 mを、面積は20.75 mを測る。桁行方位は $N-64^{\circ}30'-E$ をとる。 (武田)

57号掘立柱建物跡 (第73図)

56号掘立柱建物の南西方5.5mに位置し、63号住居を切っている。2×3間の住居棟と考えられ、略整然と並ぶ10本柱で構築している。規模は平均値で梁行3.14m×桁行4.92mを、面積は15.68㎡を測る。桁行方位はN-66°-Eをとり、56号掘立柱建物と略同じである。 (武田)



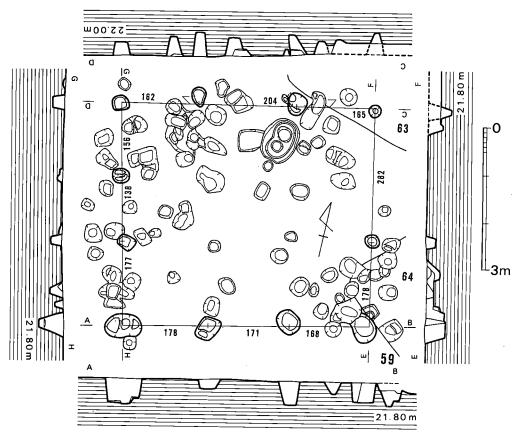
— 121 —

58号掘立柱建物跡 (第74図)

57号掘立柱建物の僅か南に位置し,64号住居と10号土壙を切っている。 3×3 間の住居棟と考えられ,若干不揃いとなる12本柱で構築している。規模は平均値で梁行4.63m \times 桁行5.25mを,面積は23.92m*を測る。桁行方位はN-38°30'-Eをとる。 (武田)

59号掘立柱建物跡 (第75図)

58号掘立柱建物の西方2.5mに位置し、 $63\cdot64$ 号住居を切っている。 3×3 間の住居棟と考えられ、若干不揃いとなるが11本柱で構築している。規模は平均値で梁行4.63m×桁行5.25mを、面積は23.97mを測る。桁行方位は $N-77^\circ30'-E$ をとる。 (武田)



第75図 59号掘立柱建物実測図 (1/80)

3. 土 壙

6号土壙 (図版48, 第76図)

A地区の東寄りで北端に位置し、約半分程が調査区外に伸展する。形状より複数が切り合うと思われたが、堆積状況は大きく2つにしか区分出来ず、深い処より順次埋もれていったと解釈された。1号溝とは僅かに切り合いが存し、当土壙が溝を切っていた。長さは3.3m以上に、幅は4.4mを測り、平面形は不整形を呈す。壙底は、4~5基が切り合った様相を呈して起伏に富み、最深部は0.75mを測る。埋土は上層が黒褐色土が主体となり、下層は黄褐色土が混入する暗褐色土が主体となるが、遺物の取り上げも上記を目安とした。

図示した1~13で、3と7が下層より出土し、他は上層より出土した。しかし、6は上層と下層より出土し接合する。図示した外の器種構成は、須恵器坏が2個体、同甕が8個体、同壺が1個体、同器種不明が3個体、土師器甕が6個体、同甑と鉢が各1個体出土している。不明土製品の2点が切削物である。 (武田)

出土遺物 (図版59・71, 第134・82図)

2の坏は器壁が薄く華奢なつくりをしている。4・5は器壁がかなり厚い。6~12の甕のうち、8と9、11と12の口縁形態はよく似ている。8・9は長胴のプロポーションとなろう。

第82図 D 6-13は手捏ねのミニチュアである。全体として凹凸の著しい器形をしている。口径5.5cm、器高3.6cm。 (伊崎)

7号土壙 (図版48, 第76図)

40号住居の北側に位置し、39~41号住居と32号掘立柱建物を切る。長軸は3.4m を、短軸が2. 18m を、最深部が0.55m を測る。平面形は少し歪つな楕円形を呈す。壁面は急勾配に立ち上がる。堆積状況は、上層は茶灰色土が主体で、下層は灰褐色土が主体となる。遺物の取り上げも上記を目安とした。焼土や炭化物等の特記すべき事項は検出していない。

図示した1~21では、3・4・11と19が下層より出土し、9は上・下層より出土し接合する。他は上層より出土した。接合資料のJ22も上・下層より出土。J21と27は上層より出土した。陶質系土器は下層より出土。権と土製品は上層よりの出土品である。図示した外には、須恵器の甕が2個体、土師器の甕が3個体、同坏が2個体、同鉢が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版60·72·83, 第134·135·154·82·97·98図)

2の蓋には撮みがあったのか否か定かでない。3は撮みを欠失している。9は高台を欠失するが、体部のプロポーションは整美である。10は算盤玉形の胴部をもつ長頸壺の破片であろう。12は口縁直下に穿孔を有する。現状では口縁端部とつながっており、単独の孔とはならない。

どういう意味あいの穿孔かわからない。外面には煤が付着している。15の外面にも煤の付着を 見る。17は内面に煤が付着する。17・18は口縁端部のつくりが似ている。

第154図 I21・I22・I27はピットや43・40・41号住居跡等との接合資料である。

土製品(図版72, 第82図 D 7 ─22) 棒状のもので何かにとりついての脚部か把手のような部分だろうと思うがはっきりしえない。現在長6.5cm。

権(図版83, 第97図2) 土製である。孔の部分より上と、本体側面の一部を欠失するも、およそ全形は知れる。底面は2.5×2.8cmの長方形でごくわずかに上げ底気味となっている。孔の方(上方)へややすばまるようになってゆき、孔付近での平面形は1.8×2.1cm程となる。高さは現状で3.0cm、復原すると3.7cm程になろう。重さ24.5g。外表面はミガキに近いナデ調整を施している。

第98図2は陶質系土器で高坏の脚部になる。

(伊崎)

8号土壙 (図版23, 第27図)

A 地区北西端に位置し、54・55号住居に切られている。長軸は2.75m を、短軸が1.95m を、 最深部は0.35m を測る。北東隅が調査区外となるも平面形は隅円長方形となろう。壁面はやや 急勾配な立ち上がりとなる。南西隅で焼土を検出したが、壙底に存したが量は少ない。

図示した1~9で、5が下層より出土し、他は上層よりの出土品。接合資料J3も上層より出土し、砥石は擴底より出土した。不明土製品中に切削物が1点存す。図示した外には、須恵器の坏が2個体、土師器の甕が5個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版60・76, 第135・154・91図)

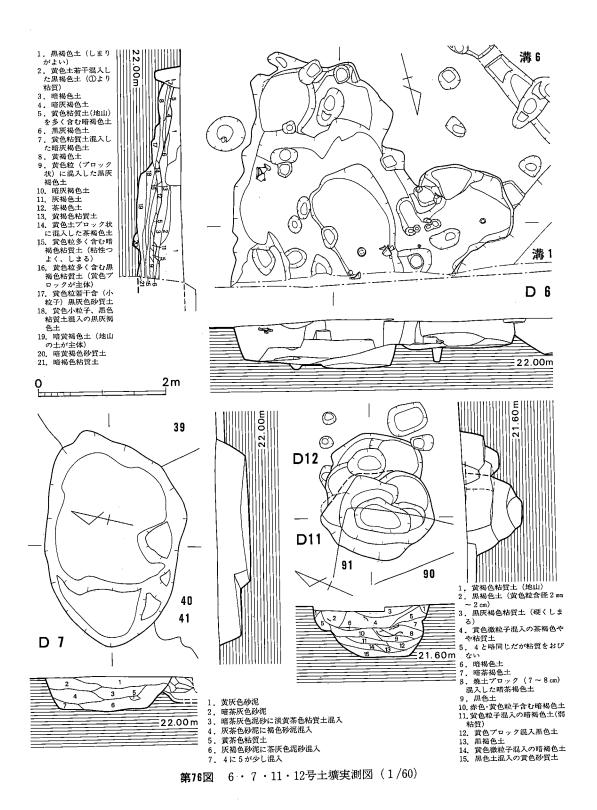
1の撮みは冑形と称しうる形状で特徴的である。3・4の口縁端部は打欠きがあり、特に4のそれは甚しいもので、本来の端部面は全く残っていない。9は穿孔による多孔式の甑である。現存の破片で17個の孔がある。

第154図 J 3 は55号住居跡との接合資料である。

石器(図版76, 第91図4) 仕上砥である。61号住居跡出土の砥石と同一の石材で凝灰岩のようである。所々に欠損部があるものの砥石としては完結した個体である。長さ12.6cm, 最大幅4.7cm。器表面に石材そのものの節理が弧状に現れている。 (伊崎)

9号土壙 (図版23, 第27図)

8号土壙の西3.5mに位置し、西側が調査区外に伸展する。長軸が1.5m以上を、短軸が1.1mを、最深部は0.37mを測る。平面形は少し歪つな長方形となろう。壁面はやや急勾配に立ち上がり、壙底は略水平である。



— 125 —

図示した外には、土師器の甕が5個体、同坏が1個体出土している。

(武田)

出土遺物 (第135図)

1は身となる可能性もある。3は器壁がかなり分厚い。

(伊崎)

10号土壙 (図版49、第77図)

A地区の略中央部に位置し、62号住居と58号掘立柱建物に切られ、64号住居を切っている。 長軸が4.5m以上を、短軸は3.35mを、最深部は0.64mを測る。平面形は一部不整となる長楕円 形を呈す。 擴底は南側の突出部が二段掘りを呈すが、他は略水平となる。北側の底面で粘土を 検出したが、量は少量である。埋土は黒褐色土が大半以上を占め、焼土もブロック状に混入し ていた。相対的に壁面は緩やかな立ち上がりとなるが、一部オーバハングする所も存す。

図示した品では、3と6が底面より出土した。接合資料 J26、鉄鏃、砥石も埋土中品である。 図示した外には、須恵器の坏が12個体、同壺が2個体、土師器の甕が8個体、同坏が2個体出 土している。 (武田)

出土遺物 (図版60·76·80, 第135·154·91·94図)

1は厚みのあるつくりをなす。外天井部は未調整のままである。5の内底面にはヘラ記号があり、いまは一本の線しか残らないがもとは十字形をなしていたものか。6はかなり堅く焼成されている。外面には煤が付着する。7は完全な平底ではないものの、それに近い底部となっている。

第154図 J26は13号土壙との接合資料である。

石器 (図版76, 第91図7) 砂岩製の砥石で中砥である。赤みがかった石材である。四面とも 研面としている。現存長5.5cm。 (伊崎)

鉄製品(図版80, 第94図19) 現存長7.6cmを測る鏃の茎片である。銹ではっきりしないが, 篦被があるようである。 (児玉)

11号土壙 (第76図)

10号土壙の南12mに位置し、91号住居に切られている。当初12号土壙と同一と考えられたが、掘り下げ中に形状と堆積状況の違いが判明し、当土壙が新しくなることも分かった。長軸が1.8mを、短軸は1.4mを、最深部は0.9mを測る。平面形はやや不整な楕円形を呈す。摺鉢状の断面となり、壙底は略水平で、壁面は一部オーバハング気味になるも急勾配に立ち上がる。堆積状況は、上層は黒褐色土が主体となる。中程には略完形に復原された土師器の甕が存し、また焼土が多く混入した層も存した。

図示した1~13では、4・10・11と13が下層より出土。他は上層よりの出土品。接合資料

J12, 土錘, 砥石も上層より出土。図示した外には, 須恵器の坏が3個体, 同甕が1個体, 土師器の甕が3個体, 同甑が1個体, 同坏が2個体出土している。 (武田)

出土遺物(図版60・75・77, 第135・136・154・90・91図)

4の土師器は器表面の起伏が著しい。6の小甕は精製品である。7の甕は口径の割に器高がないためかずんぐりした印象を受ける。9は細身の長胴形をなしている。胴上半の刷毛目は1cmあたり9~10本の単位となる。胴下半にはタタキ痕と思しき痕跡がある。外面には煤が付着している。10は胴下半部外面に煤が付着する。鍋として使われたものだろう。口縁には一部歪みがある。11の裾部周辺は回転なでを強く行ったようで、外面には段ができている。13は器形全体に丸みがある。指頭圧痕の目立つ把手は扁平なもので、口縁下10cm程の所にとりつく。把手より下方には煤が付着している。

第154図 J12は91号住居跡との接合資料である。

土錘 (図版75、第90図23) 破片でごく一部しか残っていない。現存長4.2cm。

石器(図版77, 第91図15) 石質は片岩らしいが、砥石とするよりも、何かの作業用に使った石とする方が妥当なようである。現存長11.8cm。 (伊崎)

12号土壙 (第76図)

11号土壙に約半分程が削平され、東側に位置する。規模と形状は略同じとなるが、最深部が 0.57m となりやや浅くなる。壙底は中央部が円形状に深く掘り込まれ、北側は一段高くテラス 状を呈してしる。11号土壙より僅かに古い時期に存したと想定される。

図示した8点と接合資料J6は上層として取り上げた品である。図示した外には、須恵器の坏と壺が各1個体、同甕が4個体、土師器の甕が2個体、同甑が1個体出土している。(武田)

3・4の体部はともに薄手のつくりをなす。8は上半部と下半部が接合しえないのを、図上にて復原したものである。把手の付く所はかなりの胴張りとしている。また底部は平底にはならないもののそれに近い形状となる。

第154図 J 6 は溝1出土品と接合した資料である。

(伊崎)

13号土壙 (図版49, 第77図)

出土遺物 (図版60、第136・154図)

11号土壙の南1 mに位置し、88・90・91号住居と1号溝を切るが、43・44号掘立柱建物との切り合いは不明である。長軸は3.5m を、短軸が2.1m を、最深部は0.95m を測る。平面形は北東側が少しすぼまり気味の楕円形を呈す。壙底は略水平となるが、北側にやや不整な長方形の掘り込みが存す。壁面は急勾配な立ち上がりとなる。堆積状況は、上層は褐色土が大半を占め、

中程に地山の粘質土が流入し厚い層をなしていた。下層は地山の粘質土が混入した褐色土が主体となる。この堆積状況より、若干長い期間開擴していたと考えられる。

図示した1~26で,1・3・7・9~11,18~20と23が下層よりの出土品。他は上層より出土した。接合資料のJ26は下層より出土し,J1の出自は不明である。土錘の2点,鞴の羽口,鉄器の小片も下層より出土した。図示した外には,須恵器の坏が7個体,同甕が2個体,土師器の甕が33個体,同甑が4個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版75, 第137·154·90図)

1~4はよく似た形状の蓋だが、仔細に見れば各々特徴がある。4点ともに本来は撮みが付くのだろう。10の外天井部にはヘラ記号の一部がみえる。13の高台は細くて高い。14の胴部は稜がついて屈折する。15は長頸壺の口頸部になる。16は甕の胴部破片であるが、外面は擬格子目タタキのあとに回転なで、内面は同心円当具痕を見る。その同心円当具痕は弧線に直交する線が入っている。17~20の坏・境は器壁が厚く精製とはいえない。21の外面は熱を受けている。26は外面に煤が付着する。

第154図 J1・J26は、95号住居跡等の出土品と同一個体である。

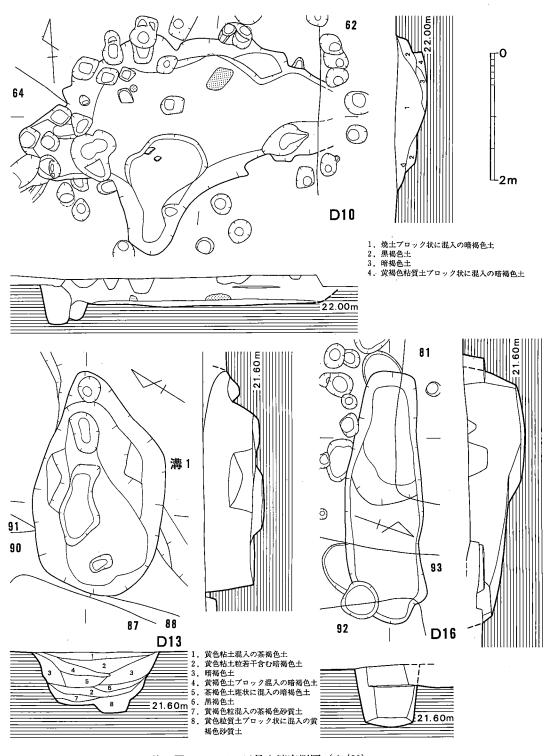
土錘 (図版75, 第90図24・25) ともに破片である。24の現存長は5.4cm。 (伊崎)

14号土壙 (図版50, 第78図)

13号土壙の南2 mに位置し、1号溝上に造られているが、南側を95号住居に削平されている。当初の検出面では、底部を穿孔して2個の甕を連なっているのが露呈した。遺物実測後の土層確認において、甕の口縁部方に土壙が存することが判明した。土層断面図でも分かる様に、甕の掘り方と土壙との関連は微妙となる。一応関連する可能性も僅かに有すと考えて、複合した図化を試みた次第である。

連結した甕は、上面を欠損していたが、底部を穿孔して甕を一方の口縁内に挿入している。接合部には粘土等の目張りを施してはいない。挿入する甕を深く据えて、水平より約10°の勾配をなしていた。また、挿入している甕の外面に煤が付着しているので、転用された品であった。連結した甕の南西10cmより土壙が開口し、主軸方位は33°東偏する。95号住居に南西側の約半分程を削平されたと考えられる。長軸は0.85m以上を、短軸が0.7m程を、最深部は0.62mを測り、平面形は楕円形と推定される。壙底は2段のテラスが存し、上段テラス部とオーバハングした部位に焼土が認められた。壁面は略垂直に立ち上がり、東壁側は大きくオーバハングしていた。東端の小穴は地質調査のボーリング痕であろう。

上記が事実経過であるが、以後若干補足しておきたい。連結した甕はカマドの煙道とも考えられるが、95号住居は深く掘削しているも、西壁にカマドを付設していた。これより、95号住



第77図 10·13·16号土壙実測図 (1/60)

居に全く削平された住居を想定しない限り、周辺の住居に伴うカマド煙道とはなり得ない。周辺の遺構配置と95号床面下における柱穴等を考慮すると、この連結した甕を煙道と考えるのは極めて可能性は薄くなる。甕棺墓とも考えられる。当遺跡において、該当する時期の甕棺墓は全く存しないという事実から首肯くには一抹の疑問を抱く。土壙に付随する遺構と考えるのも、主軸方位を大きく異にするので断定し難い。上記の様に種々な考えが想起されたので、個別に図示するよりも一つに図化した次第である。この遺構も後章において若干検討してみたい。

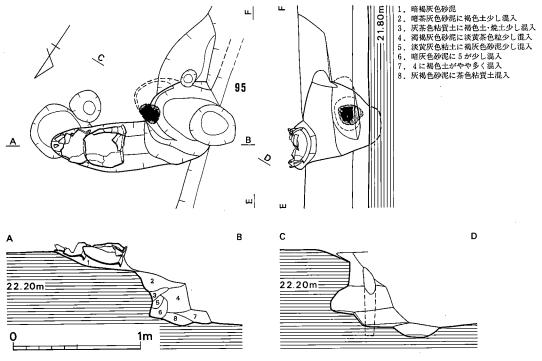
図示した $1 \sim 3$ が土壙内より出土した。 $4 \geq 5$ が連結した甕であり、 5 の方が挿入した品である。図示した外には土壙内より土師器の甕が 2 個体出土している。 (武田)

出土遺物(図版61, 第137図)

1の坏は立上りが中膨みするなどあまりスマートとはいえない。 3~5の甕は口縁の外反度がそっくりである。5は外面肩部より下位に煤が付着する。また内面に黒斑がある。4・5が特別のつくりであるかといえばそうでもない。 (伊崎)

15号土壙 (第52図)

14号土壙の北西1.5m に位置し、86・87号住居を切っている。密集する住居群の真中で検出



第78図 14号土壙実測図(1/30)

し、北西側が掘り過ぎて不明となる。一見土壙墓状を呈す。住居群中に位置することより土壙墓とは考え難いが、住居より若干後出する時期ならば土壙墓の可能性も有す。長軸が1.7m程を、短軸は0.55m以上となり、最深部は0.14mを測る。性格は不詳である。

図示した外には、土師器の甕・甑と坏がそれぞれ2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第138・155図)

3は手捏ねの土器で体部はかなり分厚い。外面に黒斑がある。

第155図 J31は110号住居跡出土品と接合した資料である。

(伊崎)

16号土壙 (図版38, 第77図)

15号土壙の西方 8 mに位置し、81・93号住居と48号掘立柱建物に切られるが、47号掘立柱建物を切っている。長軸が 4 m を、短軸は1.25m を、最深部は0.9m を測る。平面形は細長い長方形を呈す。壙底は東端から中程まで順次緩やかに下る。中程で約20cm段状をなして深くなる。中程から西端は中央部が深く、両端が僅かに高まり舟底状を呈す。壁面は壙底より略垂直に立ち上がる。規模と形状から不整形な土壙とは明確に区分出来るが、性格については不詳と言わずばなるまい。後章において若干考えてみたい。

図示した14点と接合資料のJ19も埋土中品である。図示した外には,須恵器の坏が1個体,土師器の甕が7個体,同甑と坏が各2個体出土している。 (武田)

出土遺物 (第138・154図)

1は須恵器の中でも精良な土器としてよい。4は高台が高く、体部の厚みをみても坏でなく 壺になろうかと考える。7は深みのある坏で、体部には回転なでによる小さな起伏がたくさん ある。10は口唇部を丸くつくる。

第154図 J19は81号住居跡等の出土品と接合した資料である。 (伊崎)

17号土壙 (図版32, 第43図)

77号住居の床面下層で検出した土壙であり、住居の東壁外で検出した土壙とは同じと考えられる。形状は不整形を呈す。壙底は住居内の方が深くなり、二段掘りの様相を呈す。住居側は、長軸が2.6m を、短軸は1.3m を測り、楕円形の平面形となる。壙底の最深部より0.1m 上方で略水平な底となり、北方に伸展して住居壁外へ続く。最深部は検出面より0.28m の深さとなる。

図示した1~12で,7~10が住居床面下層から出土した。接合資料J17は住居壁外よりの出土 品。図示した外には、土師器の甕が9個体、同坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物(図版61, 第138·154図)

1はかなり細身のつくりをなす。6は口径が小さいので鉢になるかもしれない。8は二次火

熱を受けている。9の破損面は成形時の粘土接合面が剝離してできたもので、その面には刷毛 目工具による刻み目が入っている。つまり接合する時にくっつきやすいように刻みを入れたも のであろう。成形工程の一段階をそこに見ることができる。

第154図 J17はピットとの接合資料である。

(伊崎)

18号土壙 (第41図)

71号住居のカマド部を殆ど削平している。長軸が1.2m を, 短軸は0.9m を測る。平面形はや や不整な楕円形を呈す。下端の図化と標高の注記を忘れていたので, 更に性格は不明となる。

図示した外には、土師器の甕が6個体、同甑が1個体出土している。 (武田)

出土遺物(図版61, 第138図)

2の外面下半は粘土のヒビ割れが多く目につく。4もつくりは粗い。7は大型の甕になるが、 器壁も薄く精製に近い胎土をもつ。 (伊崎)

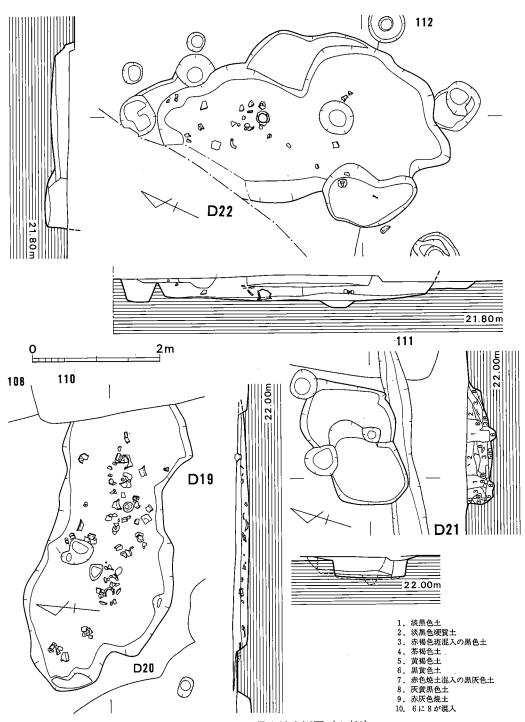
19号土壙 (図版50, 第79図)

110号住居に東端を切られ、西側に伸展する土壙である。長軸は4.5m以上を、短軸が2.3mを、最深部で0.25mを測り、浅くて細長い。壙底は中央部が深くて、順次緩やかな勾配でもって高くなる。壁面もやや緩やかな勾配で立ち上がる。壙内より数多くの土器類が広範囲に散乱して、ゴミ棄て場的様相を呈している。

図示した1~40は床面上及び床直上より出土した。接合資料のJ4・20も同じである。図示した外には、須恵器の坏が1個体、同甕が2個体、土師器の甕が11個体、同甑が2個体、同坏が4個体、同高坏が1個体出土している。 (武田)

出土遺物 (図版61~63·70, 第139·140·154·82図)

2は焼成が悪く、土師器と見まがう程である。3はあるいは蓋でよいのかもしれない。4の外天井部にはへラ記号の一部が見える。6の外底部にあるへラ記号は見ようによっては "刀"という字にも見える。7の体部には幅2mmくらいの浅い沈線が入る。また口縁に若干のひずみがある。9は平瓶の口縁とするが妥当だろう。10は脚の付く長頸壺になろう。肩部にはカキ目のあとに刻み風の押圧文が三段に入る。12の坏は口径がかなり大きくなる。15は珍しいタイプの高坏である。赤褐色粒子をかなり多く含んでいる。坏部の深さは4.5cm。16~18はいずれも粗製品である。17の外底部には木葉圧痕がある。20・22は肩部に張りがなく下膨らみの器形となる。30の口縁内側には黒色の吹きこぼれと思われるものが付着している。32の外面には煤が付着する。33はまんまるの殆んど球形と言ってよい器形をなしている。38は両把手間の相対する2ヶ所に黒斑がある。口径の割には器高が低いように感じる。38は接合しない2点を図上にて



第79図 19·21·22号土壙実測図 (1/60)

復原した。かなりどっしりした感じの把手付甕である。外面に煤が付着している。

第154図 J 4 · J20は108 · 105号住居跡出土品との接合資料である。

第82図 D19-40はミニチュア土器である。口径2.4cm, 器高1.5cmと小さい。 (伊崎)

20号土壙 (図版51, 第80図)

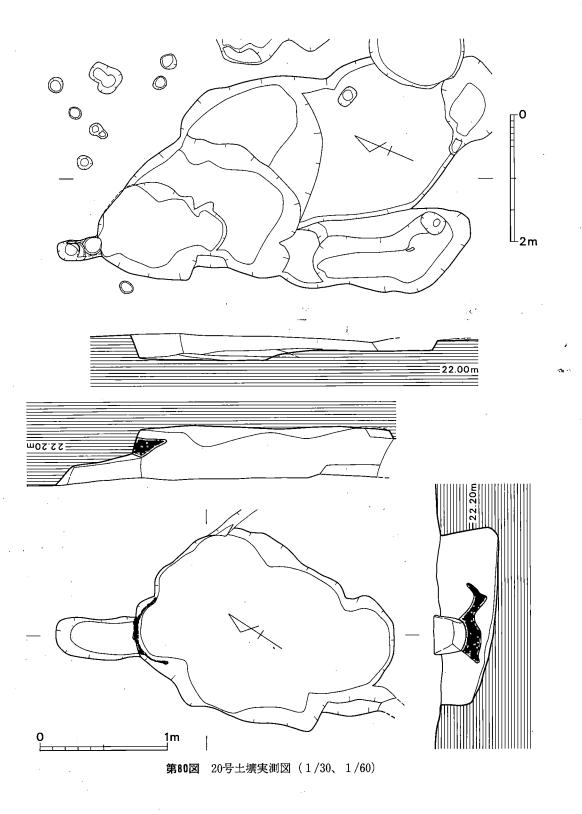
19号土壙と隣接し、僅か20cm西方に位置する。検出当初は3基の土壙が重複する態をなしていた。しかし、出土品に大差なく、接合関係も存したことから単独の土壙と考えられる。検出したラインは堆積状況の相違で生じたのであろうか。当土壙はやや幅広な楕円形に、西側の細長い小土壙が付属した形状を呈す。長軸は6m以上を、短軸は3.1mを測る。壙底は東南側が最も高くなり、北西方に向って順次深くなる。西南部は中央部と略同じ深さとなり、最深部で0.26mを測る。埋土は黒褐色土が主体となる。

以上が大略な説明で、当土壙で問題となるのは、北西端の壁面が著しく焼土と化し、その外方に煙道と想定される遺構が伴うことである。第80図の上図には検出した状況を図示した。下図の方は掘り上げた図である。上図を説明すると、土壙より北西30cmに甕の胴部を出土したピットが存し、ピットと土壙間は浅い窪み状となる。当初は、窪みの底が地山と同じ黄褐色粘質土であったので、ピットと窪みは独立した遺構と考えられた。ピット内の土器を取り上げた時に、ピット内に焼土を確認し、焼土が土壙方へ伸展することが判明した。一方、土壙を掘り進めて行くと土壙埋土と異なる土質となるのは、下図における煙道側の突出部に相当する位置である。下方には焼土と炭化物が多量に混入し、上方は焼土が多く認められた。更に掘り進めると、壙内方の幅は0.67m、煙道側の幅が0.41mで0.2m程突出する。上面で検出し得なかったのは、浅い窪みと同じ陥没した天井部が続いていたからである。最終的に下図のごとくなり、突出した壁面は焼土化し、ピットと窪みは煙道部になることが判明した。煙道は上端で、長さ0.6m、幅は0.32mを測る。煙道の高さは天井部が崩れているので不明である。

上記より窯跡と考えられるが、詳細な検討を後章で行ないたい。また、土壙本体と、窯跡と 考えられる突出部は同じ遺構と考えるのが妥当であろう。

図示した1~39のうち、1・2・7・11・13・18・20・21・23~26・29~31と36が北西部より出土した。32・34と37~39が南西部より、5・8・10・17・22・27・28と33が南東部より出土した。35は煙道よりの出土品である。鉄鏃(20)と砥石は北西部より、もう1点の鉄鏃(22)と鉄鎌が南西部より、棒状土製品が南東部より出土した。不明土製品も多く出土したが、切削物が4点含まれている。図示した以外には、須恵器の坏が8個体、同甕と壺が各1個体、土師器の甕が45個体、同甑が9個体、同坏が5個体、同鉢が4個体、同高坏が1個体出土している。

(武田)



出土遺物(図版63・64・77・79・80・82, 第141・142・92・93・94・95図)

2の外天井部は手持ちへラ削りを施す。10の蓋はかなり扁平な形状を呈する。口縁身受けの外端部は何かに押しつけたあと平坦に面をとっている。13は須恵器の生焼けで土師器と見まがうほどである。17は鉢になろうか。23は手捏ねである。24は蛸壺のような器形をなす。25の外面には煤が付着している。26は二次火熱を受けている。29の肩部には回転なでによってできた僅かな段が見られる。30・31はよく似た器形である。31の外面には煤が付着している。34の胴部は丸く張っており球形に近い。37は把手間の距離は39.3cm。把手はソケット式で本体に差し込んでいるのがわかる。38もよく似た器形である。39は外面上半部に化粧土がかかる。大型の甕とかにも精製に近い良品が多い。

石器 (図版77, 第92図17) 砂岩製の中砥である。現存長15.7cm。四面ともに使用しており、 短辺部も一部使用痕がある。 (伊崎)

鉄製品(図版79・80, 第93・94図14・20・22) 14は身の中央を欠失するが全長13.5cm程に復原される曲刃の鎌である。身幅は2.7cm程である。木柄の装着部の刃部側に抉りがある。20は現存長5.8cmを測る鏃の破片である。銹で明瞭ではないが箆棘があるようである。22は現存長4.3 cmの鏃の茎片である。

土製品(図版82, 第95図3) 土師質の土馬の足である。現存長9cmの大型品である。器面に 指圧痕や指紋が残る。胎土は精良で、焼成良好で、明るい茶灰色を呈する。 (児玉)

21号土壙 (第79図)

20号土壙の僅か南に位置する。長軸が1.9m を, 短軸は1.5m を, 最深部は0.45m を測り, 平面形はやや不整な楕円形を呈す。壙底は西側が深い二段掘りである。西端が若干凹凸をなすも略水平となり, 中程で5cm程の段をなす。段上より東端には順次緩やかな勾配でもって高くなる。壁は略垂直な立ち上がりである。床面上と床直上に少量の焼土を検出したが, 壁面には何ら認められなかった。

図示した外には、須恵器・土師器の甕が各1個体、土師器の坏が2個体出土した。 (武田) 出土遺物 (第142図)

1は厚みのある蓋である。5は精良な胎土を用いているが、6はそれほどでもない。(伊崎)

22号土壙 (図版51,第79図)

調査区の西南端に位置し、北側が調査区外に伸展する。112号住居と52号掘立柱建物を切っている。両側壁に突出部が取り付く態をなし、長軸が5 m以上を、短軸は約2.2mを測り、平面形は不整な楕円形を呈す。西南の突出部が最も深く0.35mを測る。壙底は略水平となり、壁面

はやや急勾配に立ち上がる。形状及び埋土に若干の差異が認められたが、6・20号土壙と同じく単独の土壙と考えられる。20号土壙に相似した形態となるが、性格が同じとは断定されない。 遺物は略万遍なく出土した。図示した外にも多量に出土しているが、須恵器の坏と壺が各1 個体、同甕が9個体、土師器の甕が21個体、同甑が5個体、同坏が11個体、同高坏が1個体である。鉄製品と不明土製品も2点出土している。

出土遺物 (図版64・80, 第143・94図)

2は内面に灰を被っている。3はかなり器壁が厚いので坏ではないのかもしれない。9の内面は口縁直下を横ミガキ、それ以下は縦ミガキ、外面は横ミガキを施す。そして内面は黒色である。外面も黒色部分と黄褐色部分とがある。胎土は精良にして焼成良好。これは特異な感じのする黒色土器である。15~18の甕は口縁が大きく外反して、肩部はあまり張らない。時期的な特徴であろうか。20の内面は一見へラ削りのように思えるが、これは布みたいなもので強烈な擦過を行っているようだ。21の穿孔は内面から穿っている。22は土器そのものはありふれているのだが、この土器の特に肩部から口縁部にかけて、ねずみのものらしい足跡(爪形)が刻みこまれている点は特筆に値する。土器を乾燥させておく時に、そのまわりで小動物(ねずみ)がちょろちょろ動き回っていたことの証左にほかならない。

鉄製品 (図版80, 第94図23·24) ともに銹がはげしいが、鏃の茎片であろう。現存長は、23が4.8cm、24が2.4cmである。 (児玉)



Fig. 4 作業風景③

4. 溝

溝1 (図版12・13・15・16・18・40, 付図 2)

報告済みの B·C 地区の溝 1 の続きである。若干蛇行しつつ当遺跡の東縁辺部を南北に走っていると考えられ、更に南に位置する D 地区でも検出している。 B・C 地区と同じく今報告分では、溝が完全に埋没した後に、42~44・95号住居と13・14号土壙が営まれている。出土遺物は多岐に渡るが、大半以上の品は前述の遺構より前出すると言える。 (武田)

出土遺物 (図版65~67・72, 第144~146・154・156・82・100図)

先の報告で1~8の土器が図示されているので、ここでは9から始める。

M1-9~M1-31はこの溝1に本来伴っている土器で、古式土師器である。

9は胴部に僅かながら稜が入る。10~15は口縁部が外湾しつつ外反している。15の胴部穿孔は外からなされている。また底面には煤が付着する。16は口縁部と底部とが接合しえないけれども同一の個体である。この個体は他に比べてやや大ぶりとなろう。頸部外面と底部~胴部にへら先による刻みが入っている。どのような意味の施文かわからない。18~20は口縁が内湾しつつ外反してゆく類である。21は大きな高坏になる。23は二重口縁の退化した形状を示す。肩部より下位の外面には化粧土がかかる。24は直口になる壺で肩部の張りが大きい。25は下膨れの形態となり、外面の刷毛目は粗い。また外面に煤が付着している。26~31の口縁はやや外湾気味かまたはほぼ直に外反している。30の口縁外側は僅かに膨らみを持つ。

M 1-32~M 1-67は溝1から出土したものの,溝が掘削されてすぐの本来の機能を果たしていた時期を示すものではない。

33は口縁と体部の境に沈線が入り、古いくせをとどめている。34の口縁は打欠きが著しい。36は撮みを欠失するが、37には撮みはつかない。43の蓋は口縁の身受けも殆どわからないくらい退化している。48の土器は通常の須恵器とやや異なり、胎土・焼成ともきわめて良好で、白っぽく焼成されている。金属的な感じを強く受ける。あるいは陶質系の土器かもしれない。49の横瓶はごく一部しか残存しないが、胴部の短い方の径は25.5cmを測り、長い方は推定で34~35cmくらいとなろう。51は整美な土器で、体部外面には化粧土がかかる。57は胴の張りが著しい。61は下膨れの器形になる。67は把手のとり付く位置が、他例よりかなり下位にある。61・62は外面に煤が付着する。

第154・156図 J6・J8・J28・J47は12号土壙,105・62・95号住居跡等との接合資料である。 第82図 MI-68は棒状の土製品である。三角柱状になっているが,粘土をこねて偶々そうなっ たのかもしれないし,別に意図するところがあるのか否かこれもわからない。全長6.8cm。

第100図7は溝1から出土した鏃であるが,時期が全く違うので別項にて述べる。 (伊崎)

溝 6 (図版14·48, 付図2)

A 地区北端で検出した。溝1より始まり、東南方に10.5m 流れてゆく。最大幅0.6m で、浅い。埋土は黒色土であった。溝1との切り合いは不明で、分流とも考えられる。遺物は皆無である。 (武田)

現代溝 (図版12~14, 付図2)

AI 地区の東端と南端で検出した。調査前に存した農道の下に当り、平行に 2 条走ることから、旧農道の側溝と考えられる。旧農道の幅は約1.5m を測る。遺物は若干出土し、時期差が認められる。そのうちの石器については C の項で触れる。 (武田)

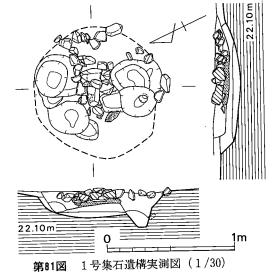
5. その他の遺構・ピット

ここでは、集石遺構とピット、そしてどの遺構に伴うかわからない遺物について述べる。

a. 1号集石遺構 (図版13, 第81図)

A·D 地区の境付近で、最も近い107号住居の南6 mに位置する。後世の柱穴7本に切られて

一部不明となるが、拳大より23cm大の石がまとまった状態を検出した。掘り方は明瞭でないが、径が約1 mを測る円形状になると思われる。石材は大半が角礫であり、略水平に並べていたが、焼成を受けた痕跡は認められなかった。一方、中央部の石の下方には、厚さ3cm~5cm、30cm~40cmの幅で、多量に炭化物が混入する層が認められた。更に約10cm下方まで炭化物が若干含まれる。一応この層までが掘り方と考えられた。上記より、炉址とは考え難い要素が認められた。性格は全く不詳となる。遺物も何ら出土していない。



(武田)

b. ピット

無数にある、と言ってよいほど多数にあるピットからそこそこの土器が出土している。ピット内に特別に埋納したと思われるような出土状態を示すものはなかった。以下、出土遺物をまず須恵器と土師器とから説明してゆこう。

須恵器 (図版67・68, 第147・148図1-61) 1・7はきわめて精良な土器である。12の立上りは細く端部が丸みを持つ点,他と異なる。14は口縁の打欠きが著しい。27の口縁部はごく僅かに屈折するのみである。28のヘラ記号は10のそれとほぼ同じものであるが,これは土器が乾いてから施している。31は外底部に粘土がこびりついているように見えるが,これは貼り付けた高台がつぶれて形をなさなくなってしまったものである。51は外底部に板目圧痕がある。53はカキ目が著しい。56の胴部は算盤玉状の屈折はないものの稜はきれいに入る。59は平瓶か長頸壺の口頸部であろう。60は鉄鉢形になるのであろうか。

土師器 (図版68, 第148・149図62~100) 62は内外ともに化粧土をかける。65は須恵器をまねた土師器である。内底面はミガキを施している。67・68ともに器形としては須恵器のそれに近い。67の外底部は一度ケズりに近い擦過を行っている。72は黒色土器である。74は特異な器形である。96の器表面はかなり起状がある。98の口縁内側には等間隔で縦長の刻みが入っている。

第154・155図の J5・J14・J17・J18・J21・J24・J25・J30・J33・J37・J38・J40・J42・J43は ピット出土品同士あるいは他の住居跡や土壙の出土品と接合した資料になる。

第82図の P1184はミニチュア土器である。口径3.0cm, 高さ2.5cm。約1/4の破片。

土錘(図版75, 第90図26·27) 26は P1183から27は P2182から出土した。ともに破片となっている。

石器(図版77, 第91図13) 緑簾片岩と思われる石材で、一面のみ擦れているようにみえる。 ただ砥石とするにはやや躊躇がある。全長9.4cm。p746から出土した。 (伊崎)

鉄製品(図版79, 第93図11) P311より出土した。扁平で幅広な身に、断面が円形の茎状のものがつくものである。図の上端で完結するか否か、銹のため判然としない。用途についても不明である。 (児玉)

焼塩土器 (図版84, 第97図10) 小破片で二次火熱を受けている。65号住居跡の中に存するピット (P14) から出土した。

紡錘車(図版78, 第96図1) 土製である。半分を欠するが、現存の最大径5.0cm、厚さ1.55 cm、重さ18.1g をはかる。P478から出土した。

第99図7はP1226より出土の古式の高坏である。

第100図 2 は P68出土の押型文土器片である。

(伊崎)

C. その他

ここでは遺構検出時に採集された土器,包含層に含まれていた土器,表採の土器等々を取り上げる。本来どの遺構かに含まれていた土器もあると思われるが、今となっては何如ともしがたい。注記のとおりに掲示する。

- ●10号土壙周辺の土器 (図版68, 第150・151図 0 − 1 ~63)
 - 1~20は10号土壙の西側で出土した土器である。

4の蓋はかなり小さい。6は丸みをもった底部に高台を付けただけの成形である。14は細い 円筒形で特殊な用途の土器か。18は他に比してかなり薄手のつくりとなる。

21~29は10号土壙東側からの出土である。

25と27はそっくりである。26は胴の張りが大きい。28の口縁の折返しも特徴的である。29の外面刷毛目には木片ではない別のもので施されたのがあるようだ。

30~45は62・64号住居跡の間やその周辺で出土した土器である。

31~34の高台は外方へ踏ん張っているのが多い。34の体部中位から口縁へ外反するラインは器形全体から見て流麗な感を受ける。37は先の25・27とよく似た土器である。38の口縁端部は粘土がへしゃげた所を指で押さえている。また外面に煤が付着している。42~44はよく似た外反度を示している。

46~63は62~65号住居跡の周辺で出土した土器である。

46は甲高な器形になるが、撮みの有無はわからない。55は粗製の埦である。

●その他 (図版68・69, 第152・153図 O-64~134)

以下は、71・73号住居跡や、84・92・95・97号住居跡等の周辺で出土した土器、および表採の土器をとりあげる。

66のヘラ記号は土器がある程度乾いてから施している。73の内天井部は黒ずんでいる。79の 外底部を見ると、粘土紐を巻いて成形したのがよくわかる。86の土器は薄手できわめて金属的 な感じがする。口縁端部のつくりも他とちがう。

91は土馬といっしょに取り上げられた土器であるが、壺の頸部であろう。瓦質に近い焼成となっている。95は内面に黒ウルシの痕跡がある。101は内面にヘラ記号を持つ点が珍しい。116の外底部ヘラ記号はヘラ先によるのでなく、繊維質のもの、例えばカヤのようなもので施している。117は高台を欠くが、その剝がれた所を見ると、貼り付けの際に接着しやすいように二条の沈線を掘り込んである。128の外底部は回転ヘラ削りを施し、その上に"木"とも読めるヘラ記号がある。これが文字を意図したものか、未だ断定はできないが可能性は高いと考えている。130の木葉圧痕はきれいに現れている。

以下は特殊な器物について説明する。

土製品(図版71, 第82図 O-135・136・137)135・136はミニチュア土器である。135は口径 3 cm, 高さ2.3cmで, やや角張った感じのつくりとなる。136は小破片で口縁が少し波打つらしい。137は小さい棒状のもので用途不明としか言いようがない。粘土をまるめただけという感じである。現存長3.5cm。

土錘(図版75, 第90図28~34) 28は97号住居跡, 29·30は81号住居跡, 31が62号住居跡の各々の近辺から出土している。32~34は表採で場所もわからない。28が全長6.2cm。最も残存度の良好である32で全長5.8cm, 直径1.9cm, 重さ20.65gをはかる。表採品の方が残存度が良好なのはどうしてであろうか。

石器(図版77, 第91・92図12・20) 71・73号住居跡上面から出土したもので、片岩の自然石であるが、打欠いて抉りを入れた所があるので錘として用いたものかもしれない。直径8.7~9.6cmのほぼ円形で、厚さは最大1.2cm。重さ135g。12は場所のわからない表採資料である。長径6.6cm、短径6.3cm、厚さ2.9cm、重さ160gの花崗岩礫であって、器表面が風化していて使用痕など皆目わからないことも加えて石器としてよいものかどうか判断に苦しむ。石器とすれば叩石であろう。 (伊崎)

鉄製品(図版79・80, 第93・94図1・12・16) 1と12は70号住居跡の東側から出土。1は刀子で全長12.4cm,身幅1.7cmを測る完形品である。通常の刀子とは異なり、身の平面形は包丁形を呈する。身は極めて薄く、背で厚さ1.5mm程である。12は鑿であろう。現存長4.3cm,身幅1.2cmを測る。厚さは銹のため推定図である。16は20号土壙の南側からの出土。現存長13.3cmを測る鏃である。銹のため不明瞭な部分を残すが、身は平造りで片刃である。

土馬(図版81・82, 第95図1・4) ともに50・51号掘立柱建物の周辺で採集されたものである。1は須恵質の土馬で、馬具をほぼ完全に表現した飾馬である。右前脚と左耳を欠損し、体部の表面が剝落しているが、ほぼ全容のわかる資料である。全長13cm、高さ9.4cmでユーモラスな表情をし、体部に比べて脚を太くしっかりとつくっている。粘土と沈線を併用して顔や乗馬用の装備を表現している。すなわち、目・耳は粘土を貼り、ヘラ状器具で耳穴や目玉を、ロ・鼻はヘラ状器具で写実的に表現している。体部が剝落しているが、粘土で鞍を表現していたと考えられる。手綱等の革帯はヘラ状器具を用いて沈線で表わしている。器面はヘラケズリ、ナデにより調整され、指圧痕や指紋が残る。胎土に砂粒を含み、焼成良好で暗灰色を呈する。4は土師質の土馬の脚で、現存長5cmを測る。器面にわずかに指圧痕が残り、ナデ調整されている。胎土は精選され、焼成良好で淡茶灰色を呈する。

権(図版83, 第97図1) 土製で完形である。底面は2.3×2.9cmほどの偏円形を呈し、中央がほんの少しだけくぼむ。これは意識的にくぼめたのでなく整作時の偶然の所産であろう。胴部の最大径は3.3cm。穿孔のある撮み状の部分は截頭方錐形に近い形態となる。体部は側面から見ればやや膨らみのある形状を示す。全体の形状としては円筒状に近いと言ってよいだろう。器

表面はミガキに近い丁寧なケズリで多くの面をとる。体部から底面にかけて黒いウルシ状のものが一部に付着しているが、これの意味するところはわからない。長石粒をやや多めに含み、赤褐色粒子をごく僅かながら含んでいる。焼成は良好。全体にやや黒ずんだ茶褐色を呈している。高さ3.7cmで33.75g をはかる。排土中との注記があるも、詳細な出土部位が不明なのは残念である。

瓦(第97図4) 10号土壙西部から出土した平瓦の破片である。内面の布目痕の部分のみ本来の面が残る。布目は1cmあたり10本の単位である。95号住居跡出土の平瓦片と接合はしないけれども同一の固体と思われる。

製塩土器 (図版84, 第97図11) 土師器の肩部あたりの小破片である。製塩に関与する土器であろうと考えるが、表題に反するけれども断定するのはいま少し控えたい気もする。外面は木目直交の横平行タタキで、内面は平行刻みの当具痕のようでもあるし条痕風でもある。砂粒がかなり多くて胎土は粗々しい。焼成はふつうだが、特に内面は二次火熱を受けて器肉の厚さ2~3 mm程が赤変している。全体に赤茶色を呈する。表採資料であり、どの付近からの出土なのかもわからない。 (伊崎)

6. 遺物各説

この項では、a. 接合・同一個体資料は各遺構を越えての資料としてまずとりあげ、そのあとは土製品、石製品、鉄製品として本文中でも触れたものを再度まとめておきたい。

a. 接合・同一個体資料 (図版69·70, 第154~156図)

遺構をこえて接合したり、明らかに同一個体であるとしうる資料をここに呈示する。土器への注記のとおりに記す。特記しない限り接合した資料である。

J 1

·95号住居跡 床面·床下層

·13号土壙土堤内

・ 溝 1

Ⅰ2 ——坏身で口縁端部は打欠きを行う。これは接合はしていない。

・77・78・80号住居跡

· 108号住居跡

J3――わりと深みのある坏になる。

・55号住居跡

・8号土壙

J 4	,
・108号住居跡	・19号土壙
J 5これの口縁端部も打欠きがある。	
· P242	· P555
J 6	
・12号土壙上層	・溝1上層
Ј 7	4
・105号住居跡	・108号住居跡
Ј 8	
· 105号住居跡	・溝1上層
Ј 9	
・71・73号住居跡	・108・110号住居跡
·50号掘立柱建物近辺	
J10	
・65号住居跡	・84号住居跡
92号住居跡	
J11	
•55号住居跡床下層	・89号住居跡
J12	
・91号住居跡	·98号住居跡周辺
・11号土壙南半上層	
J13	
・62号住居跡東側拡張区第2層黒色土	·84号住居跡拡張区第2層黒色土
J14――撮みを欠失しているのだろう。	
• P1198	· P1199
J15――これも撮みを欠失している。	
・89号住居跡	・84号住居跡拡張区東第2層
・83~98号住居跡上層	
J16	
・92号住居跡	・64~65号住居跡問東側第2層
J17	
・17号土壙	• P744
J18	

・64号住居跡西第2層	• P72
· P76	
J19	
・81号住居跡	• 16号土壙
· 86号住居跡周辺黑色土	
J20体部に沈線が一条入る。生焼けである。	
· 108号住居跡	・105号住居跡床下層
・19号土壙	
J21	
・ 7 号土壙	· P1132
• P2035	
J22	
・40号住居跡カマド	・41号住居跡
・7号土壙上層,下層	
J23	
・89号住居跡	· 99号住居跡
J24――高台を貼り付けていたのが重みでへしゃげてしまっている。	
• P126	• P142
J25	
· P2025	• P2031
J26	
・10号土壙東部	・13号土壙下層
J27	·
· 43号住居跡床下層	・7号土壙上層
J28	
- 62号住居跡内 P25	・62号住居跡東側
・溝1上層	
J29	
・57号住居跡	・89号住居跡
J30――ロ頸部と体部とは接合しない。図上での復原である。ロ頸部は表採。	
• P80	· P1057
・表採	
T31	

. **j**t

·110号住居跡 ・86号住居跡内土壙 J32 ・68号住居跡 ・70号住居跡 J33——きわめて精良な土器である。 ・98号住居跡 · P399 T34 ・82号住居跡床面,埋土 ・84号住居跡 ・89号住居跡埋土 ·64号住居跡西第2層 ・64~65号住居跡間東第2層 以上の5点と下記2点は接合しないが同一個体と思われる。 ·93号住居跡埋土 ·96号住居跡床下層 J35——下記の破片が接合するが、基本的には64号住居跡の埋土中にあったものが動いていると 考えられよう。 ·64号住居跡埋土 ・64号住居跡内 P 3 ·64号住居跡西側第2層 ・64~65号住居跡間第2層 ・表採 J36---これは接合したものはなく全て同一個体と思われる資料である。 ・79号住居跡 ・108号住居跡カマド内 ・溝1 · P2180 J37---以下3点は同一個体資料である。 · P2025 · P2026 · P2036 J38 · P2025 · P2026 J39 ·50号住居跡南西壁 ・96号住居跡 J40——同一個体としての資料である。 ・62号住居跡 ·64号住居跡西第2層 · P130 • P147 ・表採

J41

・59号住居跡

J42---同一個体資料である。

·96号住居跡

・51号住居跡埋土

· P2025

J43---以下も同一個体の資料である。

·51号住居跡

· P2025

· P2026

• P2072

J44

· 95号住居跡埋土

· 97号住居跡埋土

・表採

J45

·77号住居跡

・79・80号住居跡埋土

J46

· 96号住居跡

・77・78号住居跡

J47

・95号住居跡床面、カマド付近、埋土・99号住居跡カマド内

溝1

·86号住居跡近辺

以上に加えて、下記からの出土品は同一個体と思われる。

・52・82・97号住居跡

·13号土壙

(伊崎)

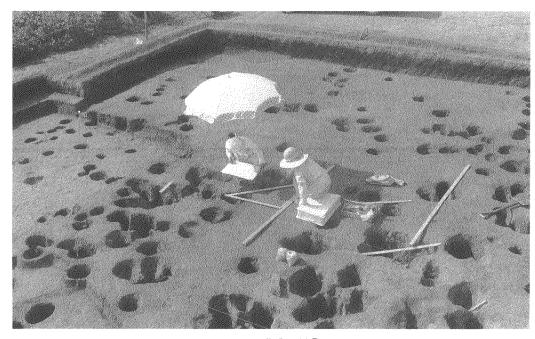


Fig. 5 作業風景④

b. 土製品

i. ミニチュア土器 (図版70·71, 第82図)

口径が3cm以下の本当に小さなミニチュアの土器は8点出土している(59・95・97・99・103号住居跡,19号土壙,P1184,その他)。それ以外はやや大ぶりの手捏ね土器であって,一般の土師器と区分しにくいものもなかにはあるが,一部主観的に掲図した。 (伊崎)

ii. 不明土製品 (図版72~74, 第83~89図)

今報告分も大略には立野遺跡と同じとなる。総じての特徴は、胎土と色調及び焼成が土器と 差異を全く認めないことである。また形状と器面に付した痕跡や祖形及び素因等も特徴となる。 上記から判断して細分化したが、立野遺跡の一部も若干修正を余儀無くされた。

A類 有溝円板及び類似する円板状品や楕円形品を総称する。今報告分には存しない。

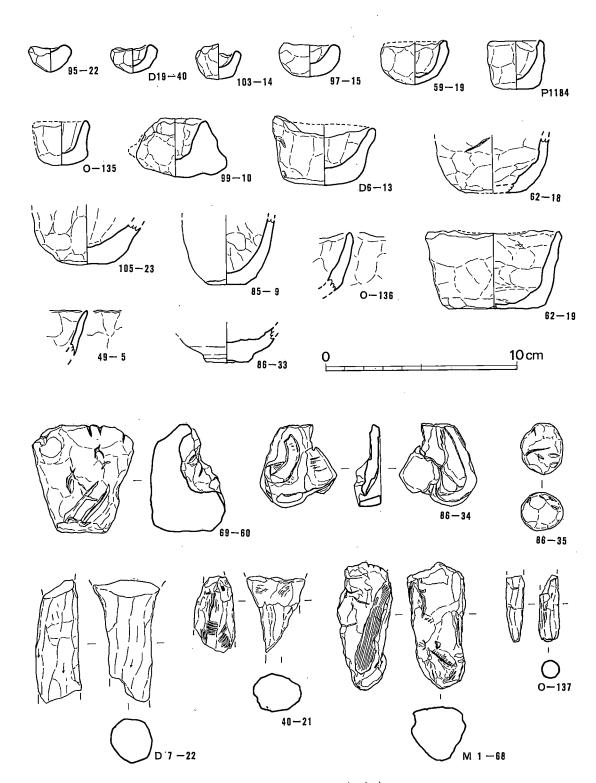
B類 全体の7割を占める。大半以上に植物繊維痕が認められるが,意図的に付けたと考えられる品は数少ない。また植物繊維痕にも押し潰れた痕跡と,断面「O」字状または「U」字状を呈す痕跡の二つに大別された。前者が稲藁の痕跡で,後者が麦藁ないし竹の痕跡と推定されるが確証を得ない。また,土器製作時に生じる切削物を蓆上に押し当てると出来るかもしれない。しかし,その品を焼成する,または焼成を受けること自体が問題となろう。一部C1も含むかもしれない。

- (B₁類) 上記の植物繊維痕が付着した品も含めたが、ナデまたは指オサエ等で調整が認められる。形状は円形ないし楕円形を呈し、やや丁寧さが窺える。穿孔品も含めた。
- (B₂類) 大半が不整形な形状を呈す。植物繊維痕が付着した後に調整を施さない品。焼成は 良好な品が多い。 2 点に布目痕が認められた。
- C類 今報告分においては、土器の切削物が36点を数えたので、単独の範疇を設けて C_1 類とした。この C_1 類を付加したことが修正した点である。 C類は $A \cdot B$ 以外の品を総称した。
- (C₁類) 切削物が焼成されている。切削物は、片面が削り面となり、他面は反り返える。また削りの方位と直交して収縮していた。この切削物を重ね合わせたり、折り曲げたり、また、3個以上を丸めた例も存す。

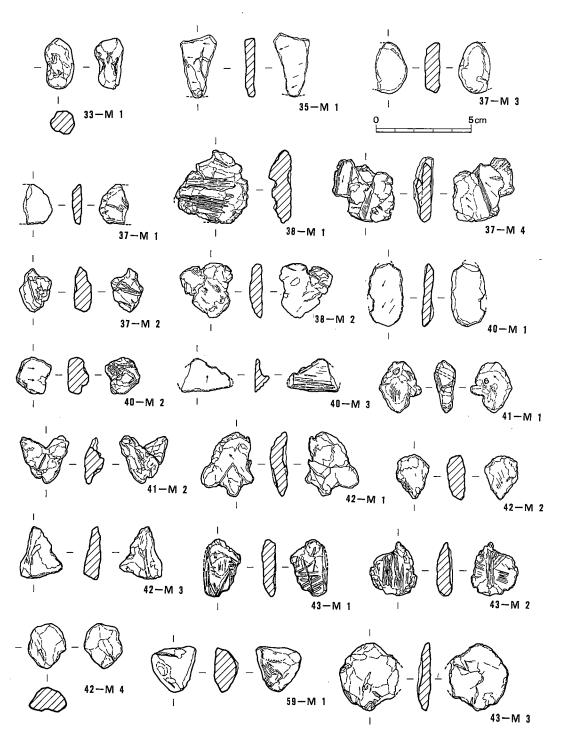
図示した141点は一覧表を付したので参照されたい。判断出来ない品が多いこともあり、図示していない品も若干存す。最後に形態別に個数をまとめると、 B_1 類が18点、 B_2 類が82点、 C_1 類が36点、C 類が5点となる。 (武田)

iii. 土錘 (図版75, 第90図)

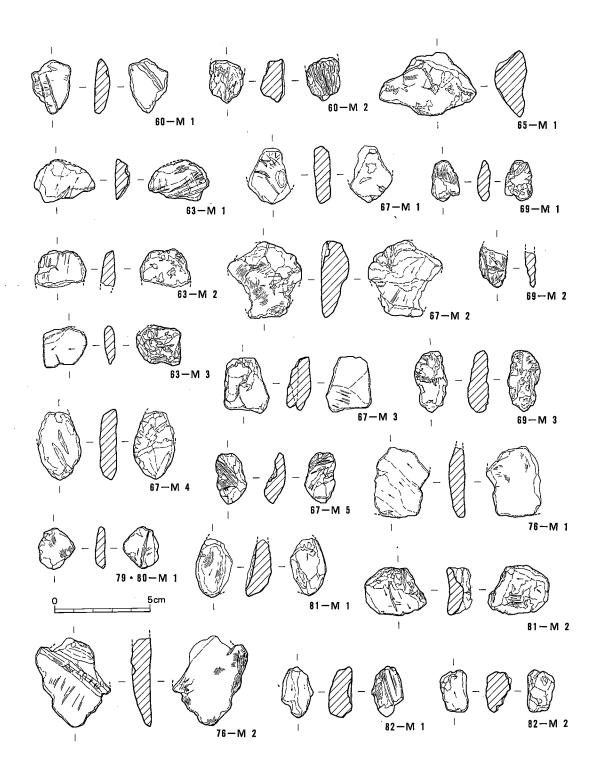
35個体が出土している(108号住居跡出土品は紛失中である)。34個体を通観して、まず破損



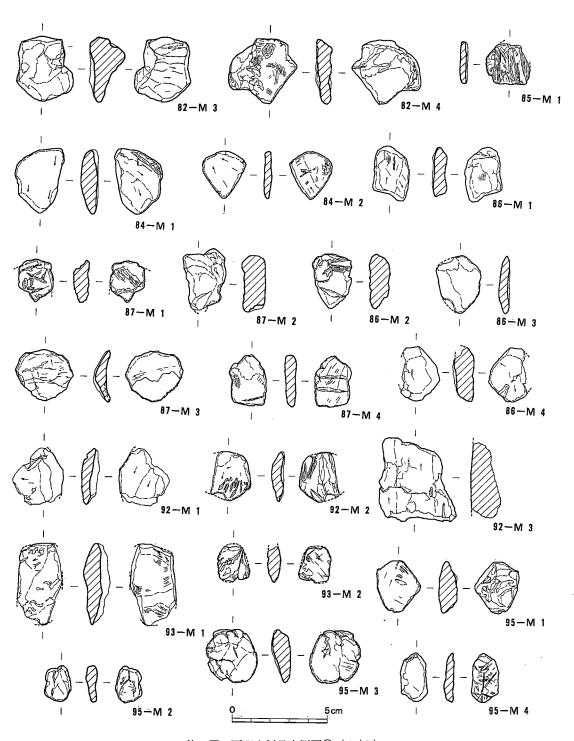
第82図 土製品実測図(1/2)



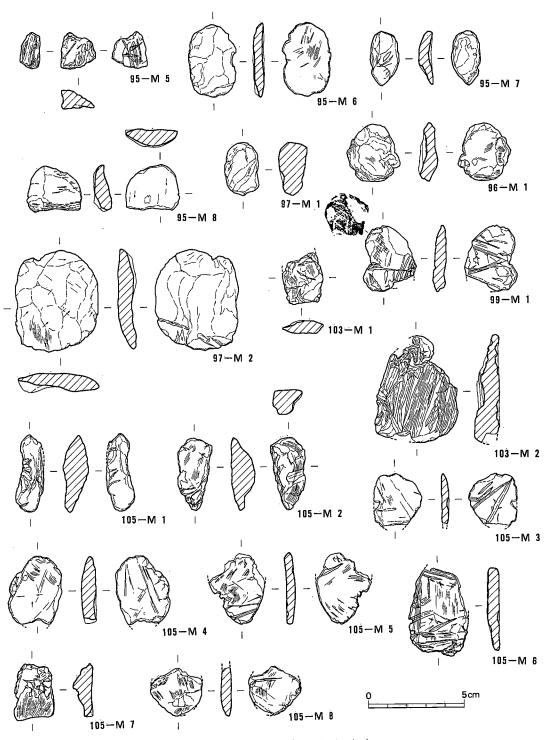
第83図 不明土製品実測図① (1/2)



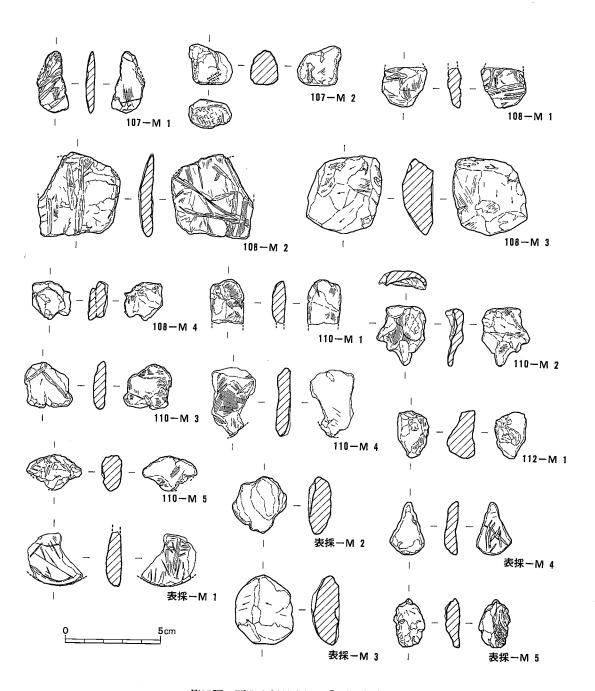
第84図 不明土製品実測図②(1/2)



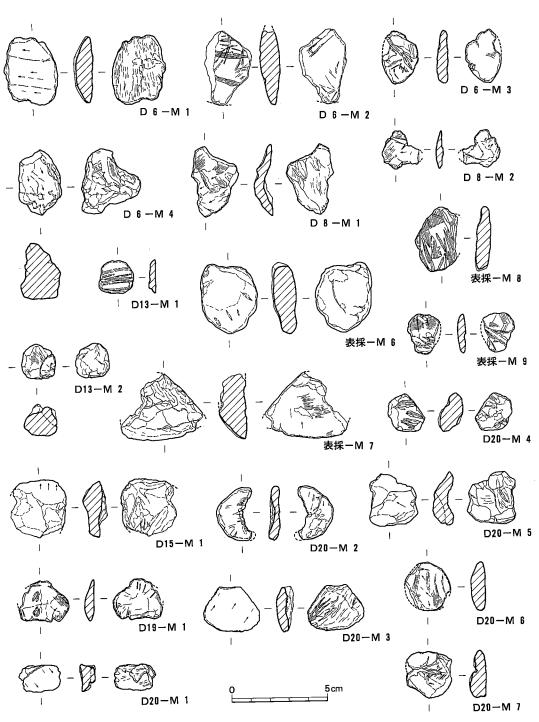
第85図 不明土製品実測図③(1/2)



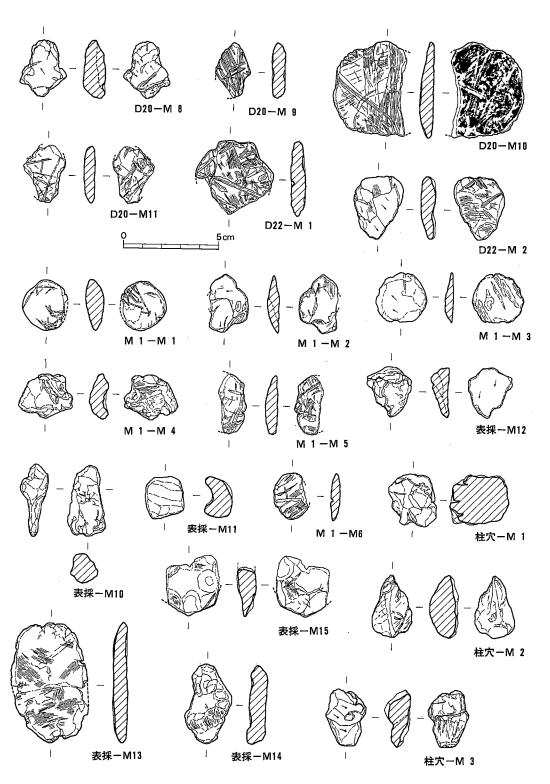
第86図 不明土製品実測図④(1/2)



第87図 不明土製品実測図⑤ (1/2)



第88図 不明土製品実測図⑥ (1/2)



第89図 不明土製品実測図⑦ (1/2)

品の多いことに驚かされる。それも縦に割れたものが多い。孔が孔として見られるもの,つまり一部なりとも断面が丸く捉えられるのは僅かに8個しかないのである。殆んどが半分以下,否,1/4以下に割られているようだ。いま割られてと記したが,自然に破損したものが多くの住居跡や土壙に遺存したとはどうも考えにくいように思う。破損の度合いが激しいからである。

これら土錘は最低でも大小2種類の大きさがあるようだが、復原すれば長さは7~8cm、最大径1.8~2.5cmくらいの中に納まりそうである。

住居跡から出土したのは 1=63, $2\cdot 3=65$, 4=81, $5\sim 7=84$, 8=85, $9\sim 11=92$, 12=94, $13\sim 17=95$, $18\cdot 19=96$, $20\cdot 21=97$, 22=99の22点である。土壙からは23=11, $24\cdot 25=13$ の 2 基 3点しかない。 $26\cdot 27$ はピットからで, $28\sim 34$ は明確な遺構に伴っていない。

(伊崎)

c. 石製品 (図版76~78, 第91·92図)

ここでは砥石とそれに近い石器のみを取りあげる。紡錘車は別項にて触れる。

砥石ははっきりそれと言える14点($1\sim10$, $16\sim19$)のうち,仕上砥が5点($1\sim5$)で,他は全て中砥としてよいだろう。荒砥に近いのもないではないが,中砥としておく。 $3\cdot4$ は石材そのものの節理が表面に縞模様となって見えている。

11~15,20~23の9点については、どれも石器と断じうるものはないし、かつまたそうでないと断じうるものもない。住居跡等からの出土ということからすれば、何かに使われていたであろう可能性が高いことは確かである。

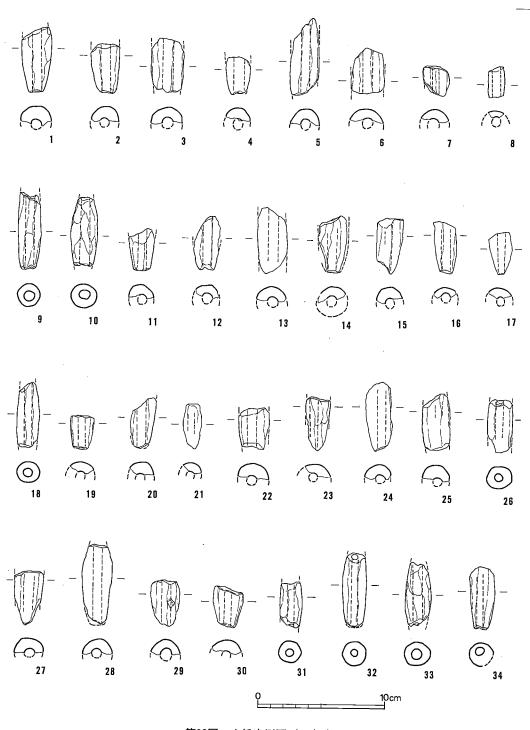
住居跡から出土したのは $1\cdot 19=110$, $2\cdot 10\cdot 14=75$, 3=61, 5=81, 6=86, $8\cdot 11\cdot 21=69$, 9=97, 16=95, 18=55, 22=53, 23=65の16点にのぼる。土壙が 4=8, 7=10, 15=11, 17=20の 4点である。13は P746からで, $12\cdot 20$ は明確に遺構に伴わない。 (伊崎)

d. 鉄製品 (図79·80, 第93·94図)

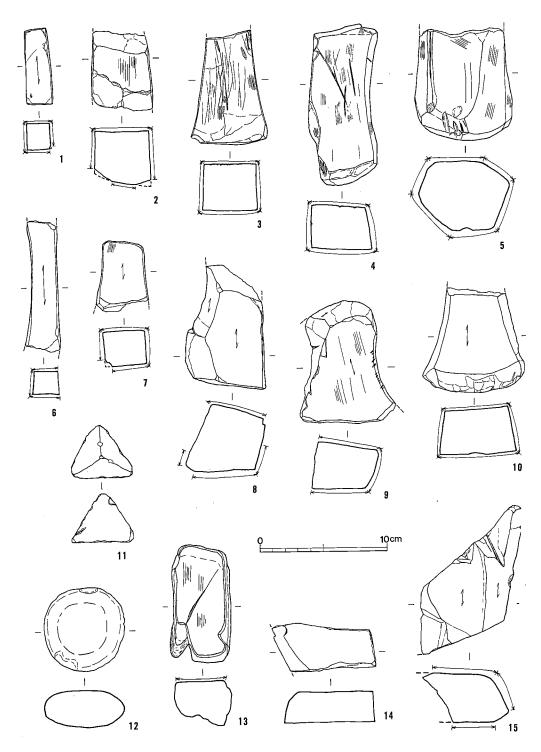
鉄器は確実でないものも含めて、刀子10、鑿1、鎌2、鏃20、不明1があり、種類としては 多くない。遺構別に列記すれば下記のようになる。(95号住居跡の鏃は紛失中)

- · 32号住居跡——刀子 1
- ·33号住居跡——鏃 1
- ·38号住居跡——刀子 1
- · 40号住居跡——鏃 3
- · 41号住居跡——刀子 1, 鏃 1

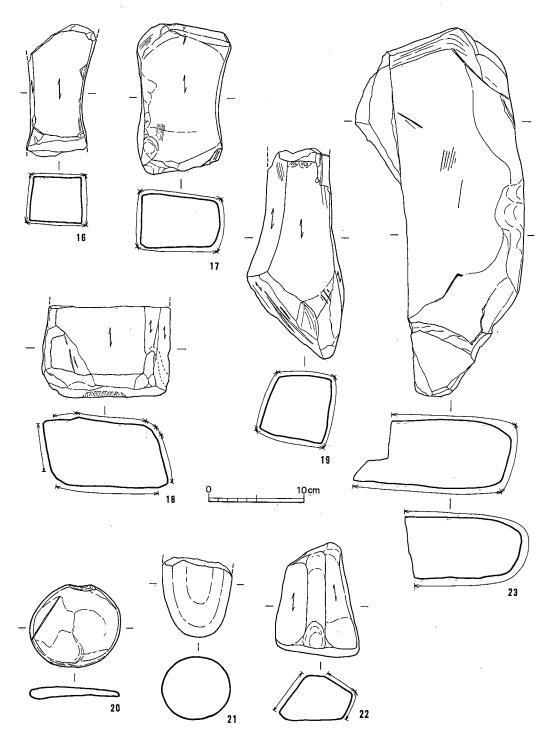
- · 50号住居跡——鏃 1
- · 63号住居跡——鏃 1
- ·64号住居跡——鏃 1
- ·77号住居跡——刀子1
- · 79号住居跡——鏃 1



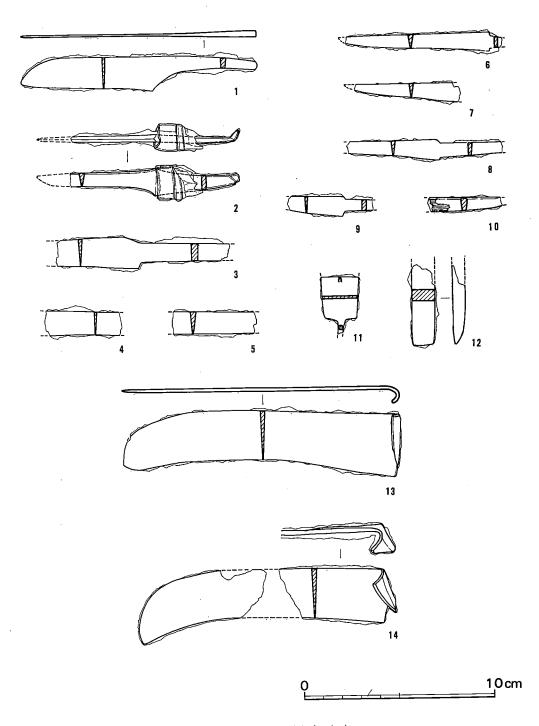
第90図 土錘実測図 (1/3)



第91図 石器実測図① (1/3)



第92図 石器実測図② (1/4)



第93図 鉄製品実測図(1/2)

·84号住居跡——鏃 1 ・10号土壙――鏃 1 ·85号住居跡——鏃 1 · 20号土壙··鏃 2, 鎌 1 ·86号住居跡——刀子 1 ・22号土壙――鏃 2 ·103号住居跡——刀子 1 ·20号土壙南側——鏃1 ·105号住居跡——刀子1,鏃1 ・P311——不明 1 ·108号住居跡——刀子1,鏃2 · P753——鉄片少量(不明) ·110号住居跡——刀子 1 (・95号住居跡---鏃1) ·70号住居跡東側——刀子1,鑿1 鞴の羽口を出土した遺構を下記に列記する。 ・66号住居跡カマド付近 ・112号住居跡カマド付近 ・67号住居跡カマド付近 ·13号土壙——図示不可能 スラッグを出土した遺構もいくつかある。 ・79号住居跡 ----- 2×1.3cm/まど ----- 3×2.5cmほど、あまり重くない ・108号住居跡 ・110号住居跡 ----6.5×3.5cmほど,あまり重量感はない床面出土 ・20号土壙 -6.5×5 cmほど · P336 -3×2 cmほど、スカスカで軽い · P379 ---4.5×3 cmほど ・溝1下層 ----2.5×1.5cmほど、重量感がある

e. 特殊遺物

特殊遺物と言えば特別視されがちであるが、ここでは土馬、権、瓦、玉、青銅製品、製塩土器、紡錘車についてまとめておく。

(伊崎)

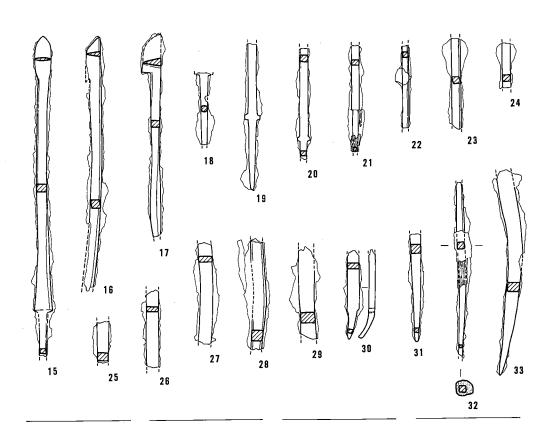
・31~33号掘立柱建物跡付近———6.5×5.5cmほど,あまり重量感はない

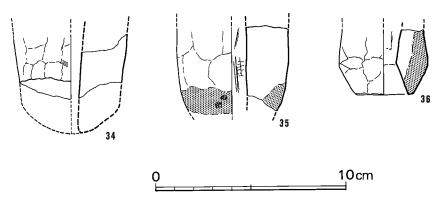
i. 土馬 (図版81·82, 第95図)

土馬本体としては50・51号掘立柱建物の周辺で遺構検出中に採集された須恵質のもの一体がある(1)。4本足のうち1本を欠く以外はほぼ完形としてよい。

上記のもの以外に、土馬の一部とみられる土師質の破片がいくつか出土している。

- ・101号住居跡床下層(2) ―――顔面部分の破片と思われる。
- ·108号住居跡 (5) ——脚の一部らしい。





第94図 鉄製品・鞴羽口実測図(1/2)

・20号土壙 (3)

----脚の一部

·50·51号掘立柱建物周辺(4)———やや小さめながらも脚の一部か。

これらが全て土馬の破片であるとすれば、2と5は同一個体の可能性もあるので、最低でも(1)以外に3体分の土馬があったということになろう。

ii. **権** (図版83, 第97図1・2)

土製のもの2点が出土している。1の完形品は調査中に排土の中から発見されたもので、出土地点をおさえられないのが悔やまれる。孔の部分を見る限り、おもりとして頻繁に懸垂に供されたという感じは伺えない。33.75g はやや軽い印象を受ける。

2は破損しているものの、完形であったとしても1の重さには及ぶまい。7号土壙上層からの出土。

iii. 瓦 (図版83, 第97図3 · 4)

2点の破片が出土しているが、おそらく同一個体の破片であるから、実質は1点としてよい。 3は95号住居跡から、4は10号土壙西部からの出土である。平瓦で、奈良時代頃に比定できる という。

このあとに報告予定の宮原遺跡 D地区でも瓦の破片が数点出土している。

iv. 玉 (図版88, 第97図5)

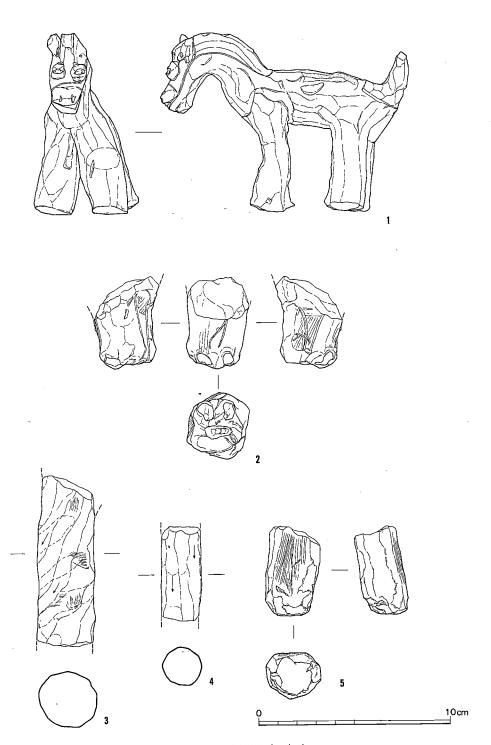
62号住居跡から1点が出土している。装飾品なのか祭祀用品なのか出土状態からではわからないが、滑石製であることを鑑みれば後者の可能性が高いといえよう。しかし、土玉等の出土はみない。

v. 青銅製品 (図版84, 第97図 6 ~ 8)

用途不明の製品と耳環2個がある。

108号住居跡出土の青銅製品は,原形については今のところ全く想定しえない。当初は帯金具の一つではないかとも思ったが,かような類品のあることを知らない。留金具か飾金具といったものであろうことは間違いなかろう。なお,宮原遺跡 D 地区では青銅製の鉈尾が出土していることを付け加えておこう。

耳環は 2 点があり、31号住居跡と95号住居跡から出土している。31号のものは大きく最大径 3.1cm、95号のものは逆にかなり小さくて最大径1.8cmしかない。 2 軒ともに、その周辺の住居群の中では最も新しく、規模もそれほど大きくないものである。



第95図 土馬実測図 (1/2)

vi. 製塩土器 (図版84, 第97図 9~11)

焼塩用の土器とされるもの2点(9,10)と,煎熬用の玄界灘式に似た1点(11)がある。 焼塩用の9は65号住居跡の埋土中からの出土。尖底に近い長胴形態になろうかと思うが,図 示したようになるかどうかははっきりしない。内面は布目痕でなく,条痕風の圧痕もしくは擦 過痕が見られる。10は65号住居跡の壁際にあるピットからの出土で,これも布目痕等は見ない。 かつて分類した I bか II bのいずれかだろう。

さて、11は表採資料であるが、玄界灘式と呼ばれる製塩(煎熬)用の土器に類似している。 いまひとつ気がかりな点もあるが、今後の類例増に期待しよう。

9は加熱の様子はよくわからないが、10・11は強い二次火熱を受けている。

vii. 紡錘車 (図版78, 第96図1~3)

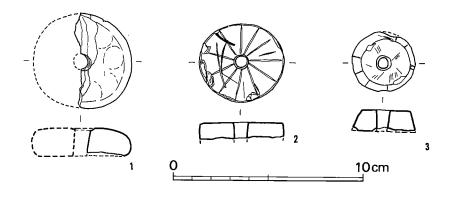
- 3点が出土している。
- 1点は土製で、P478からの出土。約半分に割れている。

石製の2点はいずれも滑石製で、2が110号住居跡屋内土壙から、3が81号住居跡から出土している。

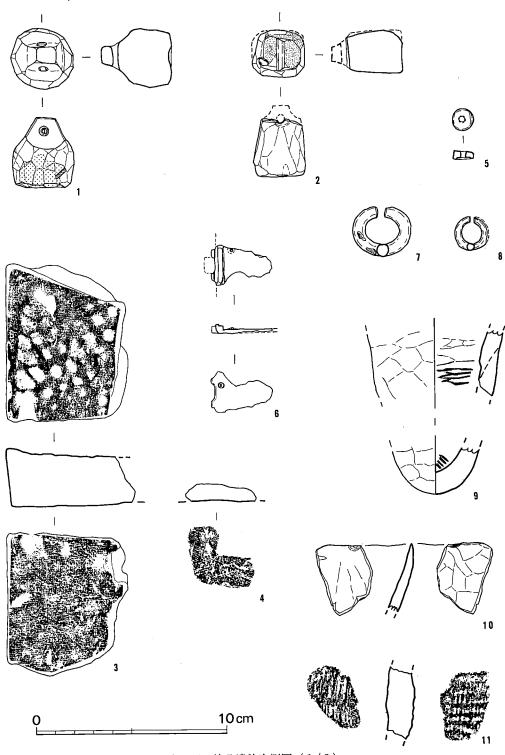
なお、図版中のもう1点は次回報告分のものである。今回手ちがいによりいっしょに撮影してしまったものである。 (伊崎)

註

- 1. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—8 —』 1986
- 2. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告—9—』 1987



第96図 紡錘車実測図(1/2)



第97図 特殊遺物実測図 (1/2)

7. 陶質系土器と古式土師器

i **陶質系土器** (図版86, 第98図)

住居跡や土壙の埋土中またはピットから出土した土器片で、この遺跡の主体を占める6世紀後半~8世紀代の須恵器とは明らかに異なるものがいくつか存した。それらは古式の須恵器と見てとれるものと、舶載の陶質土器ではないかと考えうるものとの双方がある。いまこれらの判別が容易になしえないこともあるので、適当な呼称とは思わないが、表題を陶質系土器としておいて、将来の分別を待ちたい。

1~8を通観して、まず3と8を除いて他の六点は胎土が殆んど同じという共通性が挙げられる。この胎土は水漉ししたような精良なもので、しかも小豆色をなしている。これは焼成不十分で発色不良となっているのではない。さらにはこの六点は、器表面が特有の色合いをなしていることも共通している。6のみが外面灰被りでわからないけれども内面は全てほぼ似ている。それはやや黒ずんだ青灰色と言ってよい。

1は高坏の坏部で五点の破片がある。全体で1/6程となろうか。内湾気味の体部から屈折したあとは外反して口縁端部に至る。口縁内側はごく僅かだがくぼみ状の平坦部をつくる。口縁内外は回転なで、体部は内外ともになでを行っている。口縁外面はなでの前に刷毛目を施しているらしい。また体部外面はミガキもあるように見える。復原口径17cm。37・40・41号住居跡の埋土中から出土している。

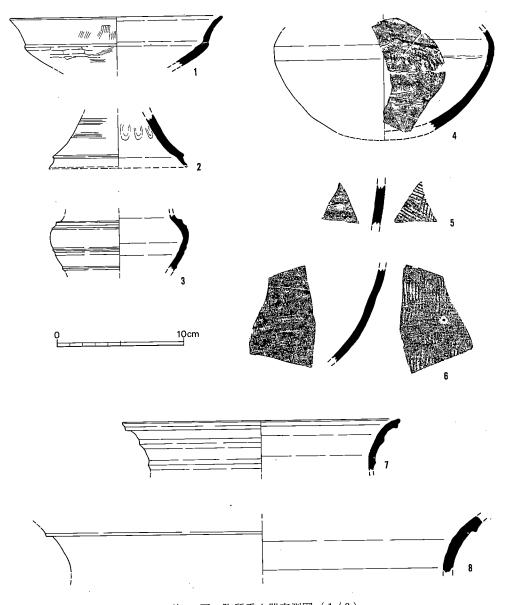
2は高坏の脚部と思しいが、1とは別個体であり、胎土に違いを見る。内外とも回転なでで、内面には指で押えたあとがみえる。外面はカキ目風の条線が入るがカキ目ではない。裾部の突帯は丸みがありシャープではない。約1/6程の破片だが透しの部分は見当らない。復原裾径11 cm。7号土壙下層からの出土。

3は壺形土器の胴部片で3点の破片がある。把手が付くのかどうかはわからない。これは通有の灰色をした胎土で砂粒も少し混じっている。小さな突帯が肩部に2条、胴部に1条、胴下半に1条の都合4条が見えるが、いずれも削り出しての突帯と思われる。肩部のそれは断面三角形で、他の2条は台形となる。内外ともに回転なでの調整のみ伺い知れる。肩部外面と胴下半部の内面に緑黄色の自然釉がかかっており、きれいな発色となっている。約1/6の破片で復原胴径11cm。40・41号住居跡から出土し、40号は床下層からである。

4 は壺胴部の破片で 6 点のうち 3 点は接合した。41・42号住居跡と P2013 (31号掘立柱建物のピットの1つ) 出土の破片が接合し、46号住居跡下層、P1110 (54号掘立柱建物)、P2012 (31号掘立柱建物) と31~33号掘立柱建物付近出土の 4 点は同一個体と思われる。外面は主になでにて調整し、所々に擦過を行う。内面は一部にタタキの当具痕が見えるもののほとんどなでにて消されている。1/6程の破片となって復原胴径17.2cm。

5 は甕か壺の破片で、これのみではどこの破片かもわからない。外面は細みの平行タタキ、 内面は当具痕の上をなでている。46号住居跡の埋土中から出土した。

6 も壺か甕かわからない。外面は灰被りで灰褐色を呈す。平行タタキの上に横なでが施される。内面も回転なでである。おそらく同心円の当具痕であるのだろうがほとんどなで消されている。表採品である。



第98図 陶質系土器実測図(1/3)

7は壺の口頸部片である。内外ともに回転なでの調整がなされ、口縁内面にはなでによる稜の形成もある。外面の2条の突帯はともになで引き出しのものであり、シャープさはない。突帯の間に文様はない。口縁外端部は少し中くぼみしつつ下端部が上端部より内側にある。下端部はわりとシャープさがある。内外ともに殆んど灰被りとなる。接合しない2片は45号住居跡とP2272(32号掘立柱建物)からの出土で、1/8ほどの破片である。復原口径は22cm。

8は甕の口縁部片で約1/10の破片である。これで復原するのはやや危なくもあるが、突帯径は34cm程となろう。口縁端部は恐らくこのまま伸びて終わるだけのコ字形断面となるのだろう。 突帯はなで引き出しでありシャープである。胎土は精選され、やや淡い紫色ががった灰色をなす。103号住居跡からの出土である。

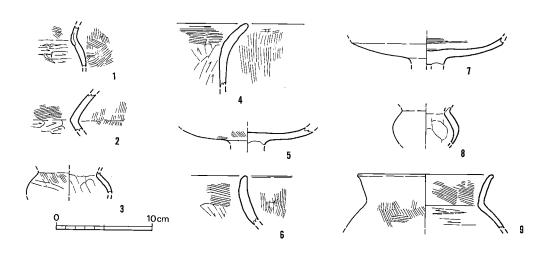
現時点では、1と3は陶質土器として可なる感じを強く持っているが、それとて胎土分析等々の判別後に再検討しなければならない。

以上の土器は、おそらく溝1の掘削された時期、あるいは先に報告している B·C 地区の 1~3 号住居跡の営まれた時期とほぼ同じ頃のものと考えられよう。 8 を除く 7 点は AI 区でも東端 部に近い37~47号住居跡の近辺から出土している。

ii. 古式土師器 (第99図)

もともと溝1と同じ時期の土師器のはずであるが、なぜか新しい時期の住居跡等から出土しているものがある。混入とするしかないが、それをここで説明する。

 $1\cdot 2$ は35号住居跡から出土した。 2 の方は床下層からである。 1 は小型丸底坩の, 2 は甕の破片である。 3 は38号住居跡から出土した。胴径 9 cm。 4 は45号住居跡のカマド周辺から出



第99図 古式土師器実測図(1/4)

土している。 $5\cdot 6$ は46号住居跡の埋土中から出土した。7 は P1226からの出土で5 とよく似ている。8 は $52\cdot 53$ 号住居跡上面から出土した。胴部径7 cm。かなりの小型である。9 は出土地不明。口径14.2 cm。

以上の土師器も調査区の東端に近く、陶質系土器と同じく37~47号住居跡のあたりで出土したものが多い。 (伊崎)

C. 縄文時代の遺物

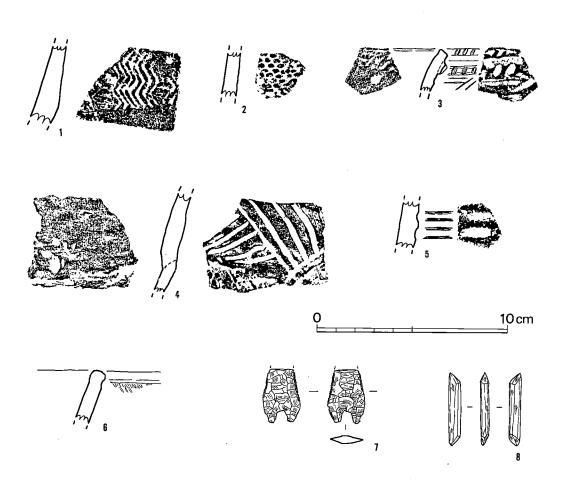
明確に縄文時代とわかる遺構はないが、若干の土器と石器が出土している。すでに報告した立野遺跡の A・B・C 地区や、このあと報告していく宮原遺跡 D 地区に落し穴とされる土壙がいくつか存するので、それに関連しての遺物かもしれない。また、この時代の住居跡等が調査区域外に占地している可能性もおおいにある。

1. 土器 (図版88, 第100図)

- 1・2は押型文土器である。1は縦方向に走る山形文を持つもので,角閃石を多く含んでいる。内面はなでらしい。31~34号住居跡を切って南北に走る現代の溝から出土した。2は長径3mmほどの楕円形を表出させた押型文である。57号掘立柱建物のすぐ東にあるP68から出土している。
- 3・4は手向山式土器である。3は一見して晩期の夜臼式土器に似た風情があるがそうではない。口唇部と口縁下突帯に刻み風の押圧痕があるも各々原体が異なるようだ。角閃石を含む。92号住居跡埋土中から出土した。4は胎土中にかなりの角閃石を含んでおり、器表面のあちこちでキラキラしている。外表面は鋸歯風の三角形中に沈線を充てこんだ所謂折帯文と称される文様の一部が伺える。この沈線はワラか茅のような繊維質のもので施されている。内面はなでらしい。屈折部では粘土の継ぎ目が明瞭にわかる。出土位置不明。
- 5は外面に二条の凹線のみえる破片である。おそらく縄文土器であろうことは伺い知れるが、 それ以上のことがわからない。角閃石と赤褐色粒子も含んでいて粗製である。35号住居跡埋土 中にあった。
- 6 も粗製の土器で、土師器とは思われず、縄文土器に胎土が近いのでこの項で扱うものの、 縄文土器としてもいつの所産のものかわからない。37号住居跡の埋土中から出土した。

2. 石器 (図版88, 第100図7)

7は溝1の埋土中より出土した打製石鏃である。側縁は鋸歯状になっている。現存長2.84cm, 最大幅1.97cm,重さ2.45g。漆黒でなく灰黒色のまだら風となった原材であり、姫島産のものか もしれない。



第100図 縄文土器·石器実測図 (1/2)

III. おわりに

1. 集落について

A. 竪穴住居のあり方

今回報告した竪穴住居は82軒であり、既に報告済みのB・C地区を加えても112軒となる。しかし、宮原遺跡はこの約2倍の竪穴住居が未報告であり、現時点では竪穴住居・掘立柱建物のあり方や集落に関して総体的には論及出来ない。ゆえに判明した事象より若干の問題を提起する次第であるが、問題提起のみに終止するかもしれないが了承されたい。

i 竪穴住居の配置について

まず最初に問題とすべき事項は竪穴住居の占地が著しく偏向していることである。調査時にはおぼろげに感じ取ってはいたが、全体図を観めると偏向した状況がより具体的に分り得た。取分けて西南側は33軒が延々と切り合いをなして連なっている。明らかに住居が偏向して存在していることを疑う術はなく、住居の占地に関して他律的規制が強く存した可能性があり、竪穴住居の構築法も順次変化したと考えられる。

斯る状況から群単位を抽出するのは比較的容易であり、後述する住居の規模と主軸方位や諸々の条件を加味して第101図上図の様な群構成が考えられた。図示した群構成には3点の特徴が見出される。A・C・D・H群では、住居の配置は略直線的に新旧関係をなして略同じ住居の規模となり、群内では同時併存は不可能となる。B・G・I・J群は住居配置の平面形態が円弧状を呈し、群内でも同時併存可能な新旧関係をとる。E群も同様になるかもしれない。F群は不規則となり、南側がI群に吸収されるかもしれない。K群はD地区の住居と群構成すると考えられる。これらの群構成を基本として、順次問題点を考えて行きたい。

ii 竪穴住居の規模

大・中・小の3つの規模で分布状況を考えたがやや不明瞭な感は否めず、従来の5つの規模に立ち戻り考慮すると第101図上図の様により鮮明な住居配置をとることが判明した。C・H群は大型規模の住居のみで構成している。A群もやや大型規模の住居で統一されている。B・E群は規模にばらつきが見られるも、基本的には小型の住居が新しくなる。F・J群も同じ傾向となるが、住居規模は極端な差異を示す。I群は大半がやや小型の規模となる。問題はG群であり、基本的には小型の住居が新しくなるが、69号住居と68・70号住居の新旧関係が全く逆となっている。規模が極端に違う住居間で、小型の住居が古くなる例はこの一例のみである。

上記は群単位を構成する住居規模について述べたが、以下2つの事が確証される。

- A・C・H群では同規模の住居を順次築造していったことが分かる。A・C群は6世紀後半~7世紀初頭の遺物が殆どとなり、他の住居群が長い時期幅を有しているのに比べ際立っている。H群も略同時期の遺物が主体となるが、77号住居に若干新しい遺物も出土している。
- ●B・E・I・J群で認められた、新しい住居の方が小型化していることである。図示した区分より2ランク以上規模が異なり、上記の関係を逸脱した例は殆ど認められない。唯一の例が前述したG群の68~70号住居間に認められるだけである。

iii 主軸方位について

大半の住居は北または北西に主軸方位をとり、ここでは極端な例のみ列挙する。

- ●東及び東北に主軸方位をとる住居―39・59・97号住居の3軒。98号住居も可能性を有す。
- ●西及び西南に主軸方位をとる住居―55・56・65・79・81・89・95・105号住居の8軒。

上記2つの項目に該当した住居11軒中に7軒がI・J群に属し、更に65号住居もこの近くに位置する。また、この8軒は切り合い関係でも新しい部類に属し、小規模な住居となる特徴を兼ね備えている。当遺跡では新しい時期に属すと思われるが、時期的な証左なのか集落の構成(配置及び広場等の主体が移動することも含む)の変化であるのかは不明となる。

iv カマドの有様

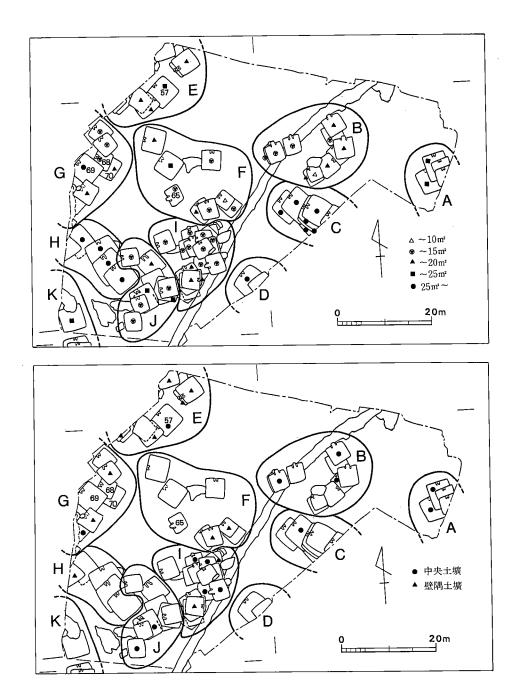
突出型カマドも群単位では極端に偏向した傾向を示している。確実に突出型カマドを付設した住居は16軒で、その内の15軒がB・I・J群に属す。例外となるのは前項目と同じ65号住居である。大型住居に付設した例はなく、住居内の空間が狭小化するに伴いカマドの形態が変化したと考えられる。iiiとivより I・J群は一際特異な住居群と見受けられる。

v 床面下層土壙について

今報告分には立野遺跡に見られなかった壁隅土壙を初めて確認した。一部床面下層の調査を行なってはいないが、一応中央土壙と壁隅土壙の分布状況は第101図下図の様になる。この遺構に関しては、E・F・G群では壁隅土壙が新しくなり、I群では逆の現象が認められる。その中でも問題となるのはE群の57号住居である。他の住居とは規模、主軸方位が全く異なり、床面下層土壙も他の5軒が壁隅土壙を有すのに57号住居のみ中央土壙を保有する。E群の中では異彩を放つ住居であり、築造時が大きく異なるのかもしれない。

vi 接合資料について

本文中に記述したことを第102図上図の様に図示した。この接合関係が同時併存したことを指標しているとは断定出来ないが、何らかの関係を有していることは間違いない。特に I・J群の住居は多くの接合関係を有しており、89号住居は5軒の住居と関係を有し、遠くは32mの距離を隔てて接合している。一方、切り合う遺構での接合関係は堆積状況と深く係わるので、この問題は後日に期したい。



第101図 (上) 竪穴住居の群構成と規模、(下) 床面下層土壙の形態

vii 切削物について

切削物については本文中と後章で述べているので、その分布する状況第102図下図に関して述べる次第である。図の如く略万遍なく出土しているが、A・C・H群には全く出土していない。一方、出土した群単位において、切り合い関係より比較的新しい住居から出土している。この2点より、切削物が多く輩出する時期が絞られよう。後章の2で再検討する。

viii おわりに

i~viiに列挙した問題点をまとめてみる。

- ●A・C・H群は出土遺物、住居の規模や主軸方位等から大略6世紀後半~7世紀初頭頃に比定出来よう。D群でも53号住居は略同時期の可能性を有す。これらの住居に共通する、一辺5mを超える住居は当遺跡でも古期に属すと言えるかもしれない。例外は69号住居のみである。
- ●小型規模に属し主軸方位が偏向する住居、突出型カマドを付設した住居等は切り合い関係でも上記とは逆に新しくなり、今報告分の住居が終末期を大略8世紀後半頃と考えられるので、この時期または若干朔上る時期が考えられよう。
- ●上記2点に該当しない住居は、i~viiの問題点及び出土品より大雑把に時期比定が可能となるかもしれない。しかし、集落のあり様が充分解明されていないし、残存不良な住居も多く、また出土遺物も幅広い時期差を示す住居も多々あり個々の時期比定は差し控えておきたい。
- ●列挙した問題点で、ある程度住居の流れは確認出来るが、宮原遺跡総体より考えて正確とは言い切れない。また、集落全体を度外視して各時期の有様を述べるのにも一抹の不安を抱く。

以上が現時点の住居に関してのまとめであり、i~viiの問題点も修正を余儀無くされる事例が現われるかもしれないことを付記して筆を置きたい。

B. 掘立柱建物のあり方

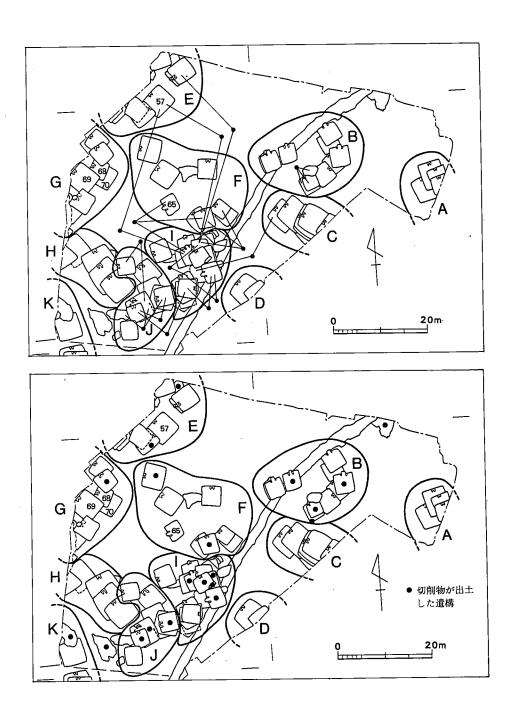
i 倉庫棟について

今報告分では22棟が倉庫棟と考えられる。多数の柱穴を検出したが、倉庫棟の柱穴は他の柱穴よりも一回り径が大きくかつ深く掘られていた。同様の形態をなす柱穴は他にも若干検出しているが、柱穴の配置等で建物と認定出来なかった。しかし、夥しく遺構が重複しているので、削平された倉庫棟が存したことも充分考えられる。上記を念頭に置き、細分化して検討する。

(a) 平面形態について

- 6 本柱の建物—31・34・35・40・41・45・47・48・52号建物の 9 棟。平均面積は7.11㎡。
- 8 本柱か 9 本柱かの不明となる建物―42~44号建物の 3 棟。面積の平均は10.28㎡。
- 9 本柱の建物―32・36~39・46・49~51号建物の 9 棟。面積の平均は11.76㎡。
- ●20本柱の建物―33号建物の1棟。面積は25.95㎡。

構築する柱数で上記の3ないし4種類に大別される。切り合い関係では,48号建物が51号建



第102図 (上)接合資料,(下)切削物の分布状況

物より古く、33号建物が34号建物より古くなる。各建物の築造年代を度外視して上記の切り合いから形態上の新旧関係を考えてみると、20本柱の建物が最も古く、次に6本柱の建物が、そして9本柱の建物が最も新しくなる。

一方、構築する柱数が増すにつれて規模は明らかに拡大する。このことは、形態上の相違か構造上の問題を提起しているだけではなく、収納する穀類等の増加又は減少を提示している。穀類等の増加及び減少は生産性が向上または下向したのか、集落の備蓄量が増加または減少したことに起因する。しかし、これらは集落の全貌を解明する過程で分かり得る問題であり、また社会背景も大きく関与していると思われ、今後の課題となろう。

また、形態上の相違は構造上及び築造時の相違だけではなく、形態の異なる建物が同時併存した場合は収納する穀類の性格が異なったとも考えられる。しかし、現時点においては形態の異なる建物が同時併存したことを証明する手立は見当らないが、後で述べる事象から可能性は少し存す。

(b) 方位に関して

●略同一方位をとる建物群(5°の差異まで含める)

34・35・45号建物,36・40号建物,32・48号建物,42・47・51号建物,38・46号建物,46・49号建物,43・44号建物,50・51号建物,33・50号建物の計9通り存した。

●略直交する方位をとる建物群 (5°の差異まで含める)

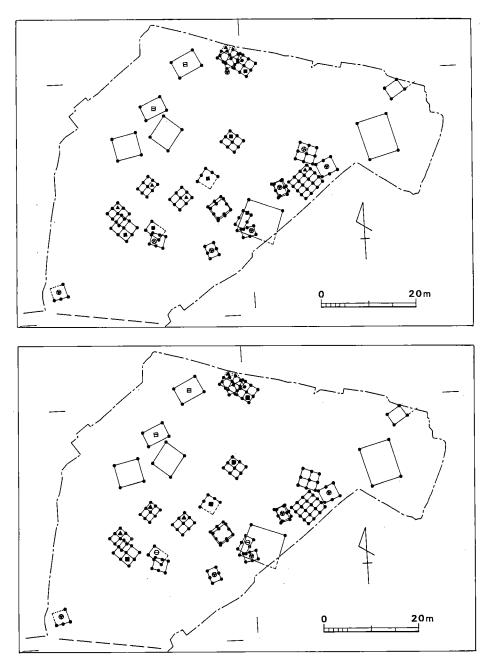
31号建物と34・35・45号建物, 37号建物と34・45号建物, 52号建物と34・35号建物, 36号建物と42・51号建物, 36号建物と39号建物, 49号建物と50号建物, 33号建物と46・49号建物の計7通り存す。

上記の2通り方位を桁行方位で記述したゆえ同一視すると、36・39・40・42・47・51号建物、31・34・35・37・45・52号建物、32号建物、48号建物の4グループが形成される。

(c) 位置関係について

同時併存が不可能な建物の関係を記す。34・35号建物、36~38号建物、40・41号建物、43・44号建物、47・48号建物、50・51号建物の6組みは大半以上切り合いが不明となるも切り合う位置に存し、同時に建つことは絶対不可能である。また、火災で延焼を避けるため間隔をとると想定した場合は更に同時併存不可能な組み合わせが増える。

以上(a)・(b)・(c)の共通項を拾い上げると、第103図上図となる。 2~6 棟で1 グループとなるが、47号建物と51号建物は平面形態が異なり、間隔も1.5mしか離れていない等から別グループと考えられる。37号建物は構成する建物群が全て6本柱の建物であり除外出来るかもしれない。またこのグループは34・35号建物が重複していることから、2 つのグループに細分化されるが構成は不明である。41号建物はこのグループとの方位差が35号建物と僅か9°であり、柱穴の大きさに起因して生じる差異を考慮に入れると、上記のグループに属すかもしれない。33号建物



第103図 掘立柱建物の構成

については出土品から1号溝と伴う可能性が有り除外した。上記より第103図下図の様な建物の構成が考えられ、2~4棟で1単位を構成し5グループが存す。上記は全て机上で考えたものであり、不確定要素を含んでいることは否定出来ない。また無印の建物も何れかのグループに属すか、調査区外またはAII、D地区の建物とグループを構成するかは不明である。

最後に、倉庫棟は住居とは大半以上が明らかに隔たりを有して建っている。しかし、住居と の構成及び平面形態が時期差を示すか等の問題は宮原遺跡総体で捉えるべきで、現時点では差 し控えたい。

ii 住居棟について

夥しい柱穴が存しているので、建物は相当数建つと思われる。私案の段階においても図示した7棟の外に15棟程が考えられたが、略建物と思われる7棟のみ図示した次第である。再検討を加えて建物が建った場合は、刊行予定の宮原遺跡D地区等に図示する予定である。

上記の理由で構成等は殆ど不明となる。唯一,56号建物と57号建物が相似している。方位の 差異は僅少であり、柱間の比率は梁行が1:0.9、桁行が1:0.84となり略類似している。

その外の建物については特記する事項は存しない。敢て取り上げるならば、54・55号建物は 方位を異にするが、面積が略同じとなる。

建物以外に柵列を考えてみたが、断定するまでには至らなかった。 (武田) 計

- 1 福岡県教育委員会 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」-14- 1988
- 2 福岡県教育委員会 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」 8 1986
- 3 福岡県教育委員会 「九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告」—2 1983

2. 土壙について

--- 切削物を傍証資料として ----

はじめに

本文中で20号土壙の北西部を何らかの窯跡と判断したが、同じ性格を有す土壙は殆ど報告されていないので断を下すのに長期間苦しんだ。当報告分の整理中に、不明土製品中に数多くの切削物が混入していることが判明して、この窯跡が土師器を焼いたのではなかろうかと考え始めた。なぜならば、切削物が土師器と何ら変わらぬ焼成であり、出土場所が限定されていることが分ったからである。以下、土師器窯の報告例が乏しいので、切削物を傍証資料として20号土壙等の本来の性格に迫りたいと考えている。

(1) 切削物について

切削物は本文中にも記したが、再度若干述べてみる。土師器の甕・甑や鉢等の器種の内面に

は一般的にヘラケズリが施されている。このヘラケズリ調整時に削り取られた"物"が土器と同様の焼成をされるに至って初めて"切削物"として取扱うこととなる。

個々様々な形状を呈しているが、共通する事象は片面にヘラケズリの痕跡が、裏面には収縮が認められる。ヘラケズリにより削り取られた"物"であるから、土器の内面に見られる砂粒の流れが同様に片面で認められる。その裏面にはヘラケズリ、(砂粒の流れ)の方向と直交して多数の収縮した線が平行して走る。また、ヘラ工具の相違であろうか、大きく灣曲した品と僅かに灣曲した品など様々な態をなす。この切削物の大半に、片面あるいは両面に指紋が付着しているが、ヘラ工具より取り除く時付着したものであろう。ヘラケズリは一度ならず、二度三度と連続して行なったのであろうか、角張った形状をなす品も僅かに認められた。これ以外には掌で丸めたと考えられる品も存した。また、両面がヘラケズリで、収縮した面が僅かに認められる様に折り合わせたか、重ね合わせた品も存した。際立つ例として柱穴一M13が挙げられ、丸めた後にヘラ状工具で6ケ所刺突している。

以上切削物の形状及び特徴について記したが、切削物として報告した品は総数36点を数えた。 B・C類と報告した中にも一部含まれるかもしれないので更に増えるかもしれない。この外に 布目痕が認められた品が2点存した。107号住居よりの出土品は、ナデ調整の副産物とも考えら れるが根拠は乏しい。この件は今後の課題としたい。

これより本題に戻り、出土遺物としてはあまり注目されず、かつ評価の低かった"物"が内包する問題を考えてみたい。まず最初に、どの様な過程を経て焼成されたかを考えてみる。土器製作時に副産物として生じ、ヘラ工具から取り離されて土器内に止まったと解釈される。なぜならば、土器の表面に付着していたならば剝離痕が切削物に認められるはずであり、その様な痕跡は切削物には認められない。上記のごとく土器内に止まっていたとすると、甕(鉢は確証を有しない)は口縁部を上に正位で乾燥させていたことになる。これは22号土壙より出土した甕に認められたネズミの爪痕からも判断される。この様にして乾燥させた後、土器と共に焼成されたと考えられ焼成後に土器から遊離したと考えられる。この様な切削物の派生から焼成までの過程が想定された。上記の過程を経た切削物が相当数出土したことは当遺跡に土師器窯が存したということの十分な証拠とはなり得ない。けれども後に述べる切削物の分布状況(第102図下図)から傍証資料の一つとなり得よう。

分布状況は図示した通りである。まず住居内よりの出土品について考える。「竪穴住居のあり 方」の項でも若干触れたが、切削物を出土した住居には二・三の傾向が認められる。

- (a) 16軒より出土したが、12軒が小型規模となり、その内の6軒が突出型カマドを付設した 住居となる。残り4軒も中型規模となり、大型住居からは1点も出土していない。
 - (b) 住居間の切り合い関係では殆どが新しい部類に属す。
 - (c) 各住居の時期を比定していない以上群細な時期を述べることは差控えるが、大略7世紀

中頃及び後半から8世紀代の遺物が多く出土している。6世紀代の遺物も若干出土していることは否定出来ない。

上記の3点から、各住居の時期比定ではなく、切削物を輩出した住居の大雑把な時期は目安として出し得よう。大略7世紀中頃及び後半以後と推定される。

一方の土壙では5基より出土している。最も問題となる20号土壙より切削物は4点出土している。この20号土壙よりの出土品には6世紀末~7世紀初頭の遺物も含まれるが、7世紀後半の遺物が主体となることから、当土壙はこの時期に比定されよう。6・22号土壙も20号土壙と大差ない時期が考えられるので、切削物の出土した住居とも考え合わすと、切削物は7世紀中頃~後半かそれ以後に輩出したと推定される。また、切削物が多数出土したことは、前述の土器製作過程が一般化したことを提示している。

上記の事項から複数の住居と土壙は数時期に亘って有機的な関係が存したことを指標している。また、窯で焼成された土器が焼成具合や使用可能であるか否か等を点検した時に切削物が土器内より落ち零れたとも解釈される。これらを総合的に考えるならば、ある程度限定された時期及び場所しか切削物が分布しないことより、充分とは言えないまでも切削物の土師器窯が存したとする傍証資料となり得るし、何らかの窯跡である20号土壙は土師器窯であった可能性が更に高くなろう。

(2) 土壙の有様について

我々と相見える時の土壙は終焉の姿を呈す。元来ゴミ穴として掘られた土壙以外は目的を終了した時点でゴミ穴等に再利用されたりして、自然堆積をなした様な状況を呈すると思われる。 20号土壙もこれに該当し、北西端が旧態を止めてはいるが、大半以上が自然堆積した状態であった。ここで20号土壙の北西端部を土師器窯であったと仮定して論を飛躍してみる。

須恵器窯でも同一の窯での操業は数度と考えられる。土師器窯は窯自体が殆ど不明であるが、須恵器窯と同様に同一の窯で数回使用したと考えるならば、順次窯を造り直したであろう。必然的に略同一の場所で操業したと考えられて、壁面は堅固でなければならないことから、20号土壙の様な形状をなして順次前方に進展したとも考えられて、操業の終了時の有様が北西端の形状となる。斯る推測より3度の改修を行なったのではあるまいか。20号土壙と同様の形態をなす6・22号土壙も土師器窯の可能性も無くも無いが、肝心の終焉時の形態が調査区外に当ると思われるので、可能性が存すとだけ付記しておく。また、14号土壙に関しては本文中にも種々の考えを述べたけれども、ここに至って土師器窯の可能性が僅かながらも存すことを付加しておく。連結した甕を煙道と考えることも出来るが、主軸方位のズレは如何ともし難い。

上記は20号土壙が土師器窯と想定して述べたが、逆接的な論法であることは否めない。

おわりに

様々な推測、想定を織り混ぜて論を進めてきたが、一つの切削物が土師器の製作過程だけで

はなく、土師器窯の解明の手懸りとなるのは言うまでもなく事実であろう。けれども土師器窯の窯自体が解明された訳ではなく、構造等も含めて不明な点が多々存す。現段階において、20 号土壙の性格は土師器窯以外に見当らないが、全ての疑念を払拭しきれない以上土師器窯であった可能性が高いに止めておく。以後類例が増えることを念し、今後の課題としたい。(武田)

3. 竪穴住居の壁際に見られる杭状痕

---- 83号住居を主体に"壁体"について ----

83号住居で確認した杭状痕を述べる前に壁体に関して若干考えてみたい。それは本文中でも述べた45号住居周辺で発掘区境東壁の堆積状況である。この周辺の住居群は6世紀後半頃より僅かの期間に営まれたと考えられ、略同じ主軸方位でもって大半以上が北東方に順次伸展して築造されている。平面プランや位置関係から順次建て替えた状況を呈している。しかし、堆積状況を見る限りにおいては、建て替えがなされた状況よりも、自然に堆積した状況であると強く印象づけられた。けれども短期間において、壁面が略垂直な状態に保ち得る程竪固に自然堆積するのであろうか。土層観察時においても上記を裏付けする様な堆積状況とは言い難い。また、土層観察時に認められた幅3~5㎝で壁面に沿った垂直な堆積層は何を物語るのであろうか。その中でも47号住居の壁面では、この堆積層は床面下層まで到達している。しかし、これらの住居には壁小溝を有した住居の方が少ない。上記の事項を勘案すると、この堆積層が壁体の痕跡ではなかろうかと推定され、壁体と考えた場合、壁小溝との関係について考えねばなるまい。

壁体について

壁小溝を有する住居が有しない住居より数量的には少なく、また、カマド部を除き壁小溝が竪穴部を巡る住居数は更に少なくなる。まず最初に、検出した壁小溝が排水施設であったか否かを検討する。甘木、朝倉地方において壁小溝(従来は周溝とされている遺構)が竪穴部外に流出させる施設を付随している例は報告されていない。確かに排水施設を有する例は県内においては見い出せるが、竪穴部外に排出する施設が存しない限り、屋内の壁小溝が排水施設であると断定出来ない。例外として八王子遺跡の42号住居があり、周溝上に蓋石をして暗渠をなしており排水施設と認めざるを得ない。しかし、この住居は削平を受けており、全容は不明となる。上記は例外の事象であり、一般的には浅い溝状を呈し、特記する事項として小穴が認められる程である。今報告分においても、壁小溝内に小穴を検出した例は多く存した。その内でも、63・64号住居は良好な資料となり、若干差異が認められるもある程度等間隔に存している。この小穴は後述する壁体に関連する杭状痕に当ると考えられるが、調査時に詳細な検討をしていないので不明と言わずばなるまい。しかし、床面上では杭状痕と羽目板痕と考えられる遺構し

か存せず、床面下層より溝状を呈す遺構(床面上で検出し得ないので周溝とは明確に区別すべきである)大竹遺跡で検出されていることから、当遺跡で壁小溝内に検出した小穴も何らかの関連を持つと思われる。以上、壁小溝内に小穴を有することで、壁小溝が排水施設とする説を否定する資料の一つに成り得ると思い取り上げた。小穴の性格を判断した後、改めてこの問題を整理する。

再び壁体について述べて行きたい。はじめに触れたが、壁際に何らかの遺構が存したことは窺い知れた。そこで論を進める前に、83号住居で検出した杭状痕について述べる。83号住居以外では103号住居が同じ様相を呈していた。本文中に記した如く住居内には多くの木の根痕が床面上において認められ、杭状痕と認定したのも含めて総数は約120個にも及んだ。順次断ち割りを行ない、歪曲したものと埋土等から木の根痕を削除した。その結果、木の根痕と判断した中に杭状痕が含まれたかもしれないが、増えることがあっても減ることはなく、確実に13個の杭状痕と確認した。杭状痕は一部図示した様に(第50図)先端部が尖り、殆どが検出面より15~20 cmの深さとなる。掘り込んだ後埋めたのではなく、杭状痕の形状から判断して打ち込まれたと判断される。これらの杭状痕は全て壁面下で検出され、大半が略垂直に打ち込まれていた。また、南西壁と北東壁は規則的とは言われないがやや整然と配置している。しかし、南東壁は数量が極端に少なくなるが、この壁面には出入口施設が存したと思われるので納得出来よう。

斯る杭状痕の有様と、45号住居付近の断面で確認した幅3~5 cmの壁面に沿った垂直な堆積層を考え合わせてみる。壁際に杭を打ち込み、そして壁面に沿って幅3~5 cmの厚みを有する物となれば"壁体"が考えられ、所謂化粧壁に相当する。近来、壁際で炭化した茅類が出土した例は多く報告されており、当遺跡には焼失家屋が存しないので断定出来ないが、杭と茅等を組み合わせた壁体が想定される。仮にこの様な壁体が存したとするならば、はじめに充分追求し得なかった問題も解決出来る。その問題とは、45号住居付近の堆積状況と住居の廃棄から築造する期間の問題である。旧住居跡が完全にかつ堅固に埋没していなくとも、新住居の竪穴部壁面に壁体を構築することも可能で土層図(第21図)に図示した堆積状況となり得て、略垂直な壁面が残存することも可能となる。また、旧住居が完全に埋没した状態でなくとも新住居を築造することは可能となる。これから判断して、壁体が朽ちた後に周辺の堆積土が混入して壁面際に様々な堆積状態を呈したと思われる。

更に47号住居について考えてみる。この住居の壁体と思われる遺構は床面下層までも達していることから、杭痕もしくは部分的かもしれないが床面下より壁体が存したことを示している。杭痕であるならば83号住居の杭痕と同じ性格と考えられる。床面下方より壁体を構築したのであるならば、どの様な問題が派生するのであろうか。本来、貼床面は堅固に踏み固まった住居も存するが、主柱間エリアとカマド周辺及びカマド対面等が堅く踏み固まる住居など個々様々な様相を呈している。しかし、壁際が堅固に踏み固められている住居は皆無に等しい。このこ

とから、壁体が床面下方より存した場合、我々と相見える時どの様な形態を呈しているのであろうか。所謂周溝状を呈しているのではなかろうか。前述した犬竹遺跡においては、周溝状に溝を掘った後杭及び羽目板を設置して再び埋め戻していた。また、当遺跡の壁小溝内に多くの小穴が検出されているが、小穴は杭痕とも考えられる。上記を考え合わせると、壁小溝内に壁体が存した可能性は無いとは断言出来ないであろう。では何ゆえに約10cm程の幅を有し、途切れたりするのであろうか。前述した様に壁際は住人が殆ど行動しない場所であり、踏み固められる可能性も少ない。この外に、住居廃絶後壁体を撤去することも考えられる。様々に撤去することでより幅広な痕跡となり得るし、途切れた壁小溝痕ともなり得る。

以上で壁面下に杭状痕を有する住居、壁面に沿って垂直な堆積層が認められる住居と壁小溝内に小穴を有する住居には壁体が存した可能性があるのではと考えて論及した。壁面に茅類が付着して出土しない限り断定されないが、壁体が存した可能性があることを指摘しておきたい。また、排水施設が竪穴部外に伸展した例が多く輩出すれば上記は否定されるが、現地点では当地方において見受けられない。地域性及び立地条件に起因するのかは今後の課題となる。

おわりに

前項で触れなかった周溝の問題を取り上げてみる。最近の調査で竪穴部外に1m前後の溝が巡っているのが確認されている。この遺構は雨水や土砂の流入を防ぐためだけとは考えられず、雨水を上屋から溝に流すためにも造られたと考えられる。防水に充分留意した結果、または必然的に造られた遺構であろう。この様な防水施設が考えているのに、より不健康な素因となる湿気を発する周溝を屋内に造るであろうか。竪穴式住居自体が現在の家よりも相当暗く湿気を滞びた造りとなるのに、更に疾患の素因となる様な遺構を造るのであろうか。私のイメージは上記の点より派生したものである。

以上,83号住居等より壁体(擁壁を主とした)について考えたが,未報告分の宮原遺跡には この問題に係わる遺構を検出しているので,その折再論しなければならないかもしれない。

(武田)

註

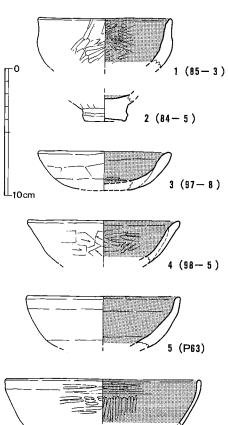
- 1 碓井町教育委員会 『八王子遺跡群II』 (碓井町文化財調査報告書 第2集) 1987
- 2 三輪町教育委員会 『犬竹遺跡』(三輪町文化財調査報告書 第4集) 1985
- 3 福岡県教育委員会 『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 8 —』 1986
- 4 福岡県教育委員会が九州横断自動車道建設に伴い調査した大迫遺跡で検出している。同遺跡は現在整理中で ある。

4. 黒色土器について

内面が黒色を呈する土器が数点出土している。いわゆる黒色土器Aと称される類と考えうるので、ここでとりあげてみよう(第104図)。

1は85号住居跡床下層からの出土で、砂粒を多く含む粗製の土器である。内面は擦過風のミガキを施すが、そのミガキには繊維質の条線が見える。外面はおそらく内面と同じ原体での擦過である。断面で見ると、内面の黒化は器表面のみであって1mmの厚さにもなっていない。復原で口径10.5cm。

2は84号住居跡出土であるが、胎土といい焼成といい、色調も1と全く同じである。84・85号住居跡は重複しているので、どちらかが混入したのだろう。それはともあれ、この2点が同一個体とすれば脚台の付く坏か埦ということになるが、かような器形は未知である。1と同じで内面は黒色の上にミガキを施す。黒化しているのはやはり器表面から1mm程である。



第104図 黒色土器実測図(1/3)

3は97号住居跡のカマド内出土である。胎土は精良としてよいがつくりが粗く、器壁の厚さも一様でない。内面は底部付近にミガキの痕跡がみえるものの、体部はよくわからない。なでが施されていることは知れる。断面で見ると、器肉全部が黒化した部分と、半分以下の器表に近い所のみの黒化とが一破片の中で出ている。口径10.6cm。

4は98号住居跡出土品で、3と胎土・焼成等がよく似ている。しかし同一個体とはならないようだ。 内面はミガキを施しているが光沢のあるものではない。外面はケズリの痕跡が伺える。外面も黒色部分が多い。器肉は全て黒化している。復原口径12cm。

5は57号掘立柱建物のすぐ東にあるP63から出土した。内面はおもに横方向に擦過に近いなでを行っているのはわかるが、ミガキがある(あった)のかどうかわからない。断面でみると器肉の半分以上まで黒化している。口径12.1cm。

6は22号土拡からの出土で、もし黒色でなくとも 一見してすぐ他と異なる土器だとわかる。器壁は薄 6(D22-9)く、砂粒を殆んど含まない精良な土器である。器形 (1/3) 的には口縁直下で内湾度の変化している点が特徴と いえよう。約1/8程の破片であるが、内面は全て黒色をなしへラミガキの痕跡をよく留めている。外面は器表の3/4程が黒色をなし、残り1/4が黄橙色を呈する。この面もヘラミガキが丁寧である。器胎そのものも全て黒化している。復原口径14.8cm。

以上の6点(1・2が同一個体として5個体)は、黒色土器という共通項の中でも、6だけは器壁の厚さ、調整、器形が他の4点と全く異なっている。これは後述のように6と他との時期的な差異ではなく、製作者の相違または土器そのものの出自に起因するものであろう。1・3・4・5の4点について仔細に見ると、3~5の胎土は粗いように見えながらも精良なものであって、1の砂粒を多く含んだ粗さとは明確に異なる。その逆に内面の調整のあり方においては、1は丁寧なミガキが施されるのに対し、3~5はミガキの有無もわからない程度である。1と3~5とは区別して見るべきだろう。これは1の方が新しく位置づけうるところから時期差に起因するとみられる。

つまるところ,この 5 点の黒色土器は大きくは $1\sim5$ と 6 との 2 つに分けられるとしてよい。 $1\sim5$ は口径 $10.5\sim12.1$ cmになり, 1 を除いて多分に丸底であろう。 6 は口径14.8cmと大きく, 高台の付くような器形が想定できる。

さて、これらの黒色土器の時期であるが、所属する遺構から出土した他の土器の特に須恵器を見るにおいて、1は7世紀前半代、3・4は7世紀中葉~後半代、6も7世紀中葉~後半代に位置づけられよう。3・4と6とでは、6の方がやや古くおけるのかもしれない。

これまで黒色土器の九州での出現は8世紀後半代とされているが、この宮原遺跡での例は古くは7世紀前半代から存在していることになる。さらに7世紀中葉以降には2形態のものを見るようになって、8世紀代に属する例が今のところ見当らない。宮原遺跡はまだAII地区、D地区にかなりの数の住居群と土壙などがあり、それらの大半は8世紀代に位置づけられる。その中に黒色土器が埋もれている可能性も強いといえよう。現時点では、7世紀代のこれらが偶発的存在なのか、他からの移入なのかはわからない。 (伊崎)

註

- 1. 田中琢「古代・中世における手工業の発達 —窯業— (4)畿内」 『日本の考古学VI』 河出書房新社 1967 P.199
- 2. いま、これらの時期比定に際しての問題は、第一に土器そのものが混入品とは考えられないのかということ、第二に所属遺構そのものの時期が確かであるのか、という点が挙げられるが、それを確かめる術はない。現時点では記述したとおりの時期と捉える。
- 3. 佐藤浩司「北部九州における黒色土器の生産と流通」 (『横山浩一先生退官記念論文集 I 生産と流通の 考古学』) 1989

森隆「九州系黒色土器の器形的系譜に関する若干の覚書」 古文化談叢 第21集 1989

5. ネズミ狂騒曲

宮原遺跡AI地区22号土壙出土の土師器甕にはネズミのものと思われる"爪あと"が,57号住居跡出土の土師器坏にはやはりネズミのものらしい"歯形"が付いていた。これらはまだネズミのものだと特定されたわけではない。しかし、素人目にも多分にネズミのものだろうと思われる。以下においては、これらがネズミの活動の痕跡であろうことを前提にして二題を設けて話をすすめてゆくこととする。

ネズミといえば人間への害獣の代表格として名高く,また悪賢いというイメージがとても強い。"ネズミの子算用(ネズミ算)"と言われるように繁殖力がすさまじいので,古くは子孫繁栄の象徴としてもみられていたらしい。しかし,食料を掠めとったり,田畑を荒らしたり,病原菌の媒介をするなど人へ害毒を及ぼす動物としての位置づけが強く,まずもってよく言われることはない。悪口雑言の対象に比喩的に使われることが多い。

十二支の最初にくるのは子(ネズミ)であり、これにまつわる説話が猫との確執として著名である。ネズミにとって猫はやはり天敵なのだろう。

ネズミが人間との関わりにおいて歴史上にその名を最も強烈に残すのは、中世ヨーロッパを恐怖のどん底に落とし入れた黒死病(ペスト)大流行のときであろう。特に14世紀においてはヨーロッパの全人口の4人に1人が死んだとさえ言われている。ペスト菌を媒介するノミはヒトばかりでなくネズミをも宿主としていたため、そのネズミの拡散がペストを蔓延させたのである。14世紀代のペストはもとは11世紀にインドで原発し、十字軍の戦乱でクマネズミとともにヨーロッパへ入りこんできたものという。十字軍の真の勝利者はネズミどもだった、という言葉は歴史のシニカルな側面を言い得ている。

ふつうにいうネズミは齧歯目のネズミ亜目に属し、約1800種があるという。この亜目にはネズミ上科、ヤマネ上科、トビネズミ上科等があり、日本に分布するのはネズミ上科のキヌゲネズミ科(ハタネズミ亜科 Microtinae)とネズミ科(ネズミ亜科 Murinae)、それにヤマネである。その多くの属・種・亜種がいる中で九州に住むのは次の種類である。

- ●ドブネズミ Rattus norvegicus 日本古来のものではなく、17世紀頃に朝鮮半島から渡来してきただろうという。一説には7世紀代にやはり朝鮮から来たともいう。
- ●クマネズミ Ruttus rattus 一説に、7世紀初めの遺唐船で渡ってきたという。
- ●ホンドハツカネズミ Mus musculus molossinus
- ●シコクカヤネズミ Micromys minutus japonicus
- ●ホンドヒメネズミ Apodemus argenteus geisha
- ●ホンドアカネズミ Apodemus speciosus speciosus
- ●ハタネズミ Microtus montebelli

●スミスネズミ Eothenomys smithii

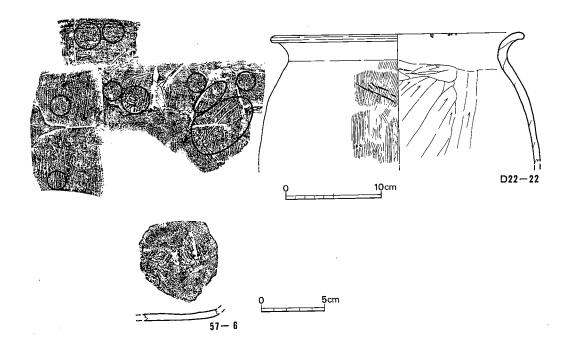
なお、ヤマネ上科 Gliroidea のヤマネ Grirulus japonicus は日本特産種で、これも九州にもいる。
(雌3)

i ネズミは土器をよじ登った — ネズミの爪痕 ——(Fig. 6, 第105図 D22-22)

22号土壙出土の土師器甕D22-22 (第105図) は、いま残存しているのは口縁部が全周の1/12 ほど、肩部から胴部に至る破片全体では1/4ほどのものである。その22号土壙に投棄されていた甕の胴部・肩部・口縁内側に、小動物の足跡(爪痕)が15個ばかり印されていた。この爪痕については専門的な"鑑定"を未だ行っていないけれども、多分にネズミのものである。

爪は 5 本あるが、5 本が全て印されているのは 1 箇所しかない。他は 4 本分の爪痕が台形の四つのコーナーに 1 つずつ配した格好で印されている。上段 2 個は 3 ~ 4 mmの間隔、下段 2 個間は 7 ~ 8 mmをあける。上段と下段の間隔は 3 ~ 4 mm程度。これはふつうよりもやや踏んばって足 (前脚)をかけた時の爪の位置とみてよい。勢いっぱい踏んばると、最大1.2cmの幅にまで爪が開いている。ズルッとすべった時のひっかき傷がその幅になっている。

さて、この甕は復原すれば器高が35cmを上回る大型のものになるだろう。この甕の肩部付近に集中して残されている爪痕を見ると、その中にひっかき傷のようになったのが2~3回分あ



第105図 ネズミの爪痕・門歯痕(1/3・1/4)

る。これは甕をよじ登ろうとして、足場が悪かったためか、すべり落ちそうになった時についたものだろう。ネズミはこの甕をよじ登ろうとしたらしいのだ。

いま、以上のことをふまえたうえで、その時の様子を脚色して以下に再現してみよう。あくまでも紙芝居ふうのフィクションである。

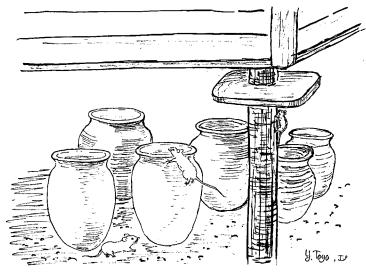
時は7世紀の後半の頃。所はみやばるムラの一角。竪穴式の住居が5~6軒のまとまりで数ケ所に建っている。高床のクラも2~3棟ずつ建っている。

みやばるムラに住むタケマロは、ムラの広場でせっせと"土師器"を作っている。種籾を入れるのと、カマドにかける器が壊れて少なくなってきたのだ。今回は30個も作れば足りるだろう。

作った器は高床のクラの下の日陰で乾かすことにしていた。クラの陰には作られたばかりの器が所せましとワラの上に置き並べられている。

さて、近くの田んぼを走り回っていたネズミのチュー大郎は、自分のねぐらへ帰ってきた。ムラを出てもあまり食べ物には恵まれない。きょうこそはあのクラに潜り込めないものか。でも、人間どもが鼠返しなるものを取り付けているのでどうしても中にまで入っていけない。

今まで走り回っていた疲れも忘れて、チュー太郎はクラの柱にとびつこうとした。おや、クラの下には器がいっぱいあるではないか。中には籾が入っているのかも……。チュー太郎は甕のひとつに飛びついた。ズル、ズルッ。爪をたてたがすべり落ちた。今度はもう少し勢いをつけて、それっ、と甕の肩につかまって、口の所にまで手(前脚)を伸ばして中を覗く。チェッ、何にも入ってないのか。



第106図 ネズミのチュー太郎

そのとき、コラーッ、と大きな声。チュー太郎は急いでとびおりて一目散に逃 げていった。

またあんネズミばい。クラはまだやられとらんけんよかけど、イへの中の物に 悪そうばされよる。はよ,退治せんとひげん(いかん)……。

タケマロは、器にチュー太郎の足跡が付いていることを忘れてしまっていた。 チュー太郎の足跡が付いたままその甕はムラの中で焼き上がった。

その甕はしばらくは使われていたが、運ぶ途中で落として割れてしまった。い くつかの破片はすぐ近くのゴミ穴に捨てられた。……

かつて、直良信夫氏は「家鼠の渡来と伝播」と題して小形獣類たるネズミのことに言及され た。なかでもクマネズミやドブネズミといった大形のネズミは「日本ではまず後期の弥生式文 化期に、対馬のシタル貝塚にあらわれたのが最初であろう。」として、朝鮮半島からの渡来をそ こに想定されたのであった。そして今日,それらのネズミは「ほとんどが人間と同じ屋根の下 でくらしている。したがって人間が直接、これらの家鼠から受ける被害は甚大なものだ」と指 摘されている。これより前にも直良氏は,静岡県登呂遺跡でのハツカネズミの上顎門歯片の出 土報告に際して、次のように述べられていたのだった。 (#f)

「ネズミの生態に関心をもたない人々は、たかが一匹のネズミくらいと軽くあなどる傾向が ある。過去幾年かにわたって私はネズミの生態学的事項について研究してきた。現在の木造建 築ですらネズミが人間生活に与える被害は大きなものがある。ましてや自然環境といえ,住宅 の構造といえ, すべてがネズミの生活に好適な条件を具備していた過去にあっては、特にこの 問題は等閑に付してはならない。」

志多留貝塚ではその後の1972年の調査で、縄文後期中葉(鐘ケ崎式)の貝層からドブネズミ

の骨が多く出土し、大腿骨と脛骨が 多いことから、肉付きのよい後肢が 食用に供されていたのではないかと されている。

北部九州でネズミが出土した遺跡 として, 今のところ最も古いと思わ れるのは、北九州市楠橋貝塚であろ う。その縄文時代前期の轟式を主体 とする貝層(2トレンチ3層)から ハタネズミ、カヤネズミ、アカネズ ミ?の骨及び歯が出土している。



Fig. 6 ネズミの爪痕(D22-22)

行橋市下稗田遺跡の貯蔵穴(A地区51号, E地区48号, 地区番号不明)から出土した大臼歯 18点と頭蓋骨は, ドブネズミ, ヒメネズミ (アカネズミ属) に同定されている。弥生時代前期中葉~後葉の時期である。ドブネズミと同定された頭蓋骨・歯が出土したことはきわめて重要で意義あることと言わねばならない。

佐賀県三養基郡三根町本分貝塚の弥生時代中期中葉~後葉を主体とする貝層中からは、狭い 範囲のトレンチ調査ながらも、ドブネズミ・クマネズミ・アカネズミと思われる骨が最低でも 21体分は出土している。これらは食料とされた可能性もあると指摘される。ドブネズミ・クマ ネズミの存在は重要であろう。

以上のほかにも多々出土しているのだろうが、寡聞にして多くを知らない。古代以降の骨や歯などの検出報告例をあまり見ないのは、ただ単に遺存条件が整っていないというだけのことと思われる。

ともかくも、ネズミは古くから、おそらく人類が発生して以来今日まで、人間のまわりにいて動き回ってきたことだろう。

縄文時代などでは志多留貝塚での報告のように食用にも供されたであろうが、弥生時代以降の食料生産段階になると、今度は自らが生産した物をネズミの害から守ることが重要課題となってくる。とくに貯蔵された食料のまわりには必ずといっていいほど、ネズミが出没したにちがいない。

人間たちは、ネズミの害を最小限にくいとめようといろいろ知恵をしばった。穀物を高床の 倉庫に貯蔵するようになった弥生時代には、ネズミが柱をよじ登ってきても肝心のクラの中に までは進めないように、大きな平たい板を柱に取り付けた。鼠返しと呼ばれるものである。静 岡県登呂遺跡での出土とその復原された倉庫とが夙に有名である。

卑近な例では、小郡市薬師堂遺跡谷地区からも鼠返しが出土している。600×450mm程の隅円長方形をなし、中央に柱を通す100×125mmの同形の穴を穿っている。厚さ35mmほどで針葉樹と思われる材である。これは奈良時代のものであろう。

鼠返しはネズミの存在についての間接的資料にすぎない。その点、土器の表面に印された爪痕は骨や歯という直接資料に次ぐ生々しい存在の証しといってよい。ただ、この爪痕のみで多数の種類の中から特定種を割り出すのは至難のことかもしれない。

なお、このような爪痕または爪による引っかき傷は注意して見ると多くの土器に残されていることがわかってきた。既に報告済みの立野遺跡 C地区出土の甕にもあるし(6世紀末頃)、次回以降に報告予定の宮原 D地区の土器にも付いている。筑後市森ノ木遺跡の弥生後期前葉~中葉の土器に見られるものは、現時点では最も古い段階のものと捉えている。おそらく縄文土器にも見つかってくるだろうが、やはり多くを見るようになるのは弥生時代以降の土器においてであろう。ネズミの存在は周辺に食料があることの裏返しともいえる。

ii. 窮鼠土器を嚙む?―― ネズミの門歯痕 ―― (Fig.7, 第105図 57-6)

57号住居跡出土の土師器坏を見てみよう。この内底面にはたくさんの"キズ"が付いている。一見すると、土器を叩くか突いてできたキズのようでもある。この"キズ"は破損した断面部分にもあるので、土器を作る時の調整痕とかではなく、焼き上がった製品が破損した後に付いた(付けられた)ものであることは間違いない。

これらをよくよく見ると、長さ $2 \sim 3 \, \mathrm{mm}$ の横沈線が $0.5 \sim 1 \, \mathrm{mm}$ の間隔をおいて同じ方向にもう 1 本,つまり破線のようになっている。それはやや湾曲しているので垂れ下がった眉のような形となる。その都合 $5 \sim 6 \, \mathrm{mm}$ の長さでひとつの単位(1 個分)となっている破線(または列点)が器面に多数印されて,結果としてまるで模様のように見えているのである。

これを齧歯類の上顎にある門歯で傷つけた痕跡,とする。なかでも門歯 1 本が幅 $2 \sim 3$ mm, 2 本合わせて $5 \sim 6$ mm幅の歯を持った "ネズミ"が,土器の表面にその上顎の歯を打ちつけて傷をつけたものと考える。門歯 2 本の歯形ならば土器の破損面にそれが付いていることも納得できる。

齧歯類は上下の門歯が絶えず摩擦するため、門歯は伸びるのと同じぐらいの速さですり減ってしまう、という。それでも、伸びてきた門歯をすり減らそうと土器に歯を打ちつけているのだろうか。因みにドブネズミよりクマネズミの方が、かじる能力は優れているという。

上述のような門歯痕と思しき痕跡は、既に報告した甘木市塔ノ上遺跡出土の土師器坏類にもたくさん見られた。その報告の時には、何かの小動物が介在して付いた痕跡なのだろうとは思っていたが、ネズミの仕業とは思いもよらず、半ば無視していた。今回、再度見なおしてみると門歯痕のある土器はかなりの点数にのぼる。Fig. 8 にそのいくつかを示しておく。

他の遺跡でも多くの埋もれた事例があることだろう。

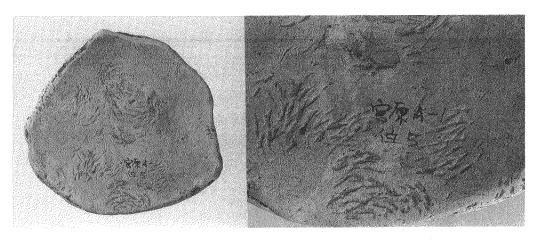


Fig. 7 ネズミの門歯痕〈宮原遺跡57-6〉

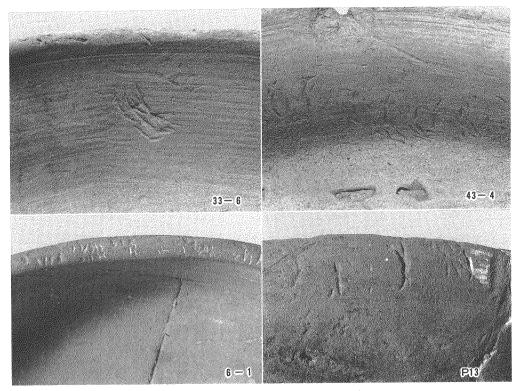


Fig. 8 ネズミの門歯痕(塔ノ上遺跡)

なお、門歯をすり減らすために付いた痕跡であるとすれば、その対象は土器でなくともよかったはずである。しかし、現時点では土器にしか、それも土師器にしか確認していない。土師器が対象となる利点があったのだろうか。

土師器坏に印された箇所は内外面ともにあり、また部位も体部・口縁部などと限定はされていないようだ。ただ、内面の方がより多いという傾向は伺える。 (#22)

- 1. この項においては、主に下記文献を参考とした。
 - a.宇田川竜男『ネズミ―恐るべき害と生態―』 中公新書 82 1965.10
 - b.宇田川竜男『ネズミの話―よみもの動物記―』 北隆館 1974.4
 - c. 北原正宣『ネズミ―けものの中の超繁栄者―』(山の小さな動物たち4) 自由国民社 1986.10
 - d. 矢部辰男『昔のねずみと今のねずみ』 どうぶつ社 1988.9
 - e. 伊藤政顕『動物好きの人のオモシロ事典』 ワニ文庫 KKベストセラーズ 1986.12
 - f.實吉達郎『動物故事物語(下)』 河出文庫 1988
 - g. Albert Elmer Wood(吉行瑞子・今泉吉典訳) 「齧歯類」 ブリタニカ国際大百科事典 6 1973

- 2. 村上陽一郎『ペスト大流行――ヨーロッパ中世の崩壊――』 岩波新書 225 1983 堀越孝一・三浦一郎『世界の歴史 5 中世ヨーロッパ』 現代教養文庫 825 社会思想社 1974
- 3. 註1のb・c・gによる。
- 4. 先に記したようにネズミと断定はできていない。ただ、例えネズミでなくともそれに近い小動物であるのは間違いない。少なくとも人間にとっての益獣ではなかったようだ。
 - これをネズミの爪痕だと指摘したのは岩瀬正信氏である。氏の慧眼には感服する。
- 5. 直良信夫『古代人の生活と環境』 校倉書房 1965 P251・252より引用
- 6. 直良信夫「動物遺存体」(日本考古学協会編『登呂』本編) 1954 P342より引用
- 7. 林田重幸「志多留貝塚の動物骨について」(坂田邦洋『対馬の考古学』 縄文文化研究会所収)1976 なお、遺跡での報告例等々について木村幾多郎氏より多大な御教示を得た。深謝いたします。
- 8. 花村肇·岡崎美彦「獣骨」〈北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室『楠橋貝塚』(北九州市埋蔵文化財 調査室報告書 第69集)〉1988
- 9. 花村肇「下稗田遺跡出土ネズミ類の同定」〈下稗田遺跡調査指導員会『下稗田遺跡』 (行橋市文化財調査 報告書 第17集)〉 1985
- 10. 木村幾多郎「動物遺存体」〈佐賀県立博物館『本分貝塚』 (佐賀県立博物館調査研究書 第7集)〉1981
- 11. 季刊考古学・第11号の特集"動物の骨が語る世界"には、各地の遺跡における動物遺存体のあり方がまとめられていて興味深い。ネズミを主題とした特論はないが、この特集の中でも10遺跡ほどでのネズミの出土が知られる。(雄山閣出版 1985)
- 12. 日本考古学協会編『登呂』本編 1954
- 13. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 —10—』 1987 図版13に出土状態の写真がある。
- 14. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 8 』 1986 50号住居跡出土甕の把手の所にある。(P87)
- 15. 1988年筑後市教育委員会調查。佐々木隆彦氏御教示。
- 16. この点も岩瀬正信氏の御教示による。これも実験等を行ったわけではないのでネズミと断言するのは早計かもしれない。しかしこれを"歯形"とする以外の別のものを想起しえない。
- 17. 最大の問題点は、この門歯痕が住居等が営まれていた当時のものなのか、あるいは後世に付いたものなのか、という点である。これについては確かめる術を持たないが、当時のものと解したい。
- 18. 註1gに同じ
- 19. 註1d, P49~50
- 20. 福岡県教育委員会『九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 -9-』 1987
- 21. たとえ門歯を打ちつけても、石や須恵器は材質的に痕跡となりにくいという点がある。
- 22. 朝倉町大迫遺跡 (横断道第37地点) 出土の土師器甕底部片にも,その内面と断面とに門歯痕があるのを確認している。

あとがき

この報告では、各住居跡や土壙などの時期の比定はいくつかを除いて殆んど行わなかった。 一遺構からの出土土器にかなりの時期幅があったり、遺構の重複関係と土器とが既往の編年観からすれば逆転しているなどの例もあったりしたので、あえて言及を避けたのである。混入と思われる土器を除外して、重複の先後関係に齟齬をきたさないように検討するという基礎作業を丹念に行うべきなのだが、言い訳になるけれども、あまりに時間がなかった。

出土土器を見る限りは、5世紀代の溝(溝1)と一部の建物を除いて、遺構の殆んどは6世紀の終りに近い頃から8世紀中葉~後半という時期幅の中におさまるものである。最も主体をなすのは7世紀代と思われる。

これから順次報告していく宮原遺跡のAII・D地区の住居群も、その大半は6~8世紀代の中で営まれ廃絶されていることがわかっている。その整理報告が全て終わろうとする時点においては、この約2世紀間にも及ぶ集落の変遷過程を呈示し、史的な位置づけもしなければならないだろう。それまでにはこのAI地区の住居群も再検討しておきたいと念じている。

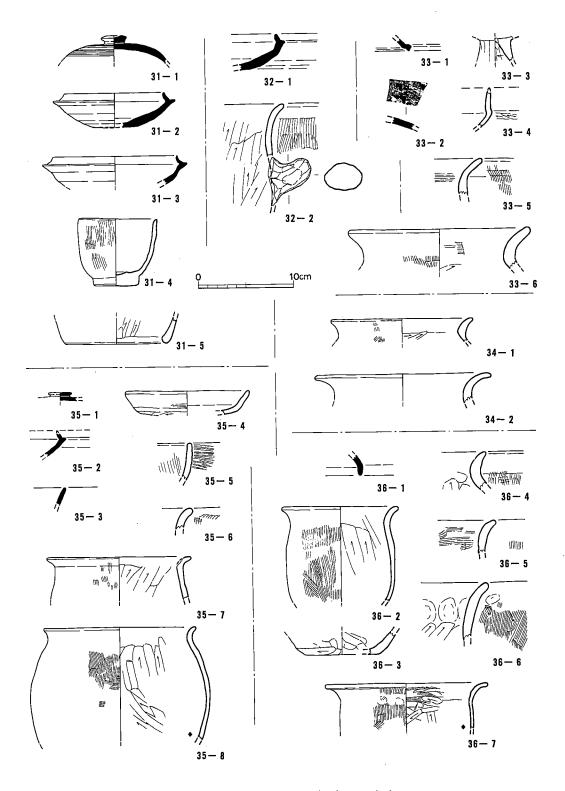
最後に、いつものことであるが、この報告書も多くの方々の援助なしには刊行しえなかった。 その多くの方々に対し、心よりお礼を申し上げます。謝々。

〈補遺〉

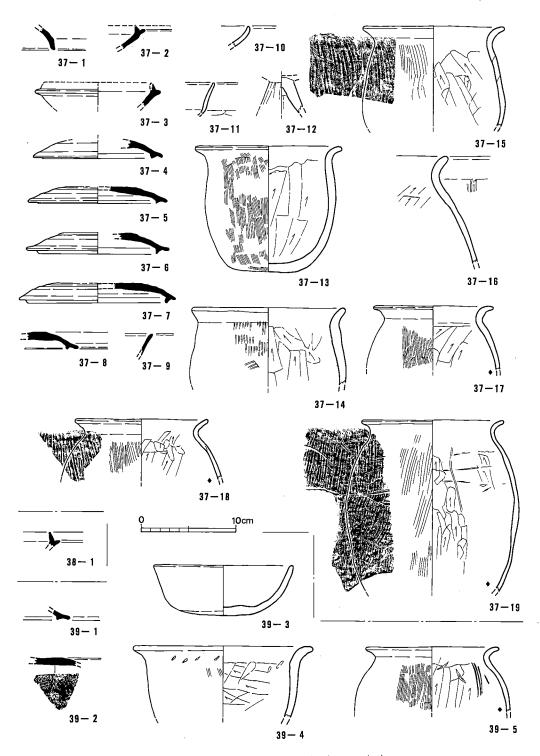
籾痕のある土器 (図版89)

土器の器表面に籾の圧痕を持つものがいくつか見られたので列記しておく。気づいたものだけであり、もっと点数があろうかと思う。

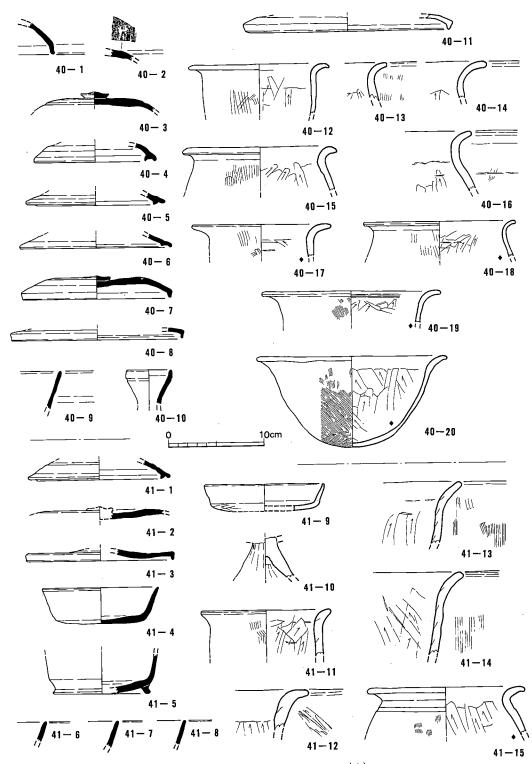
- ·84号住居跡——土師器坏外面 埋土中出土
- ·89号住居跡——土師器甕内面 埋土中出土 (89-10)
- ・95号住居跡――土師器坏内面 カマド西側出土(95-3)
 - 須恵器坏外面 埋土中出土
- ·表 採——土師器坏外面



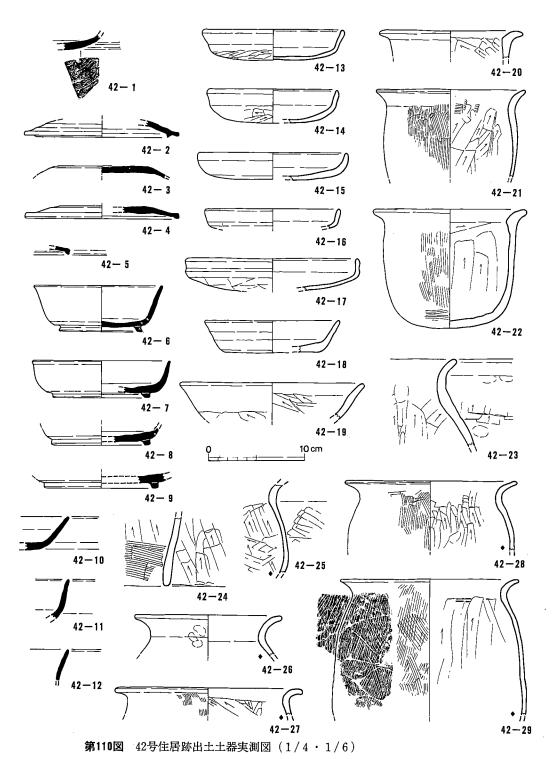
第107図 31~36号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)

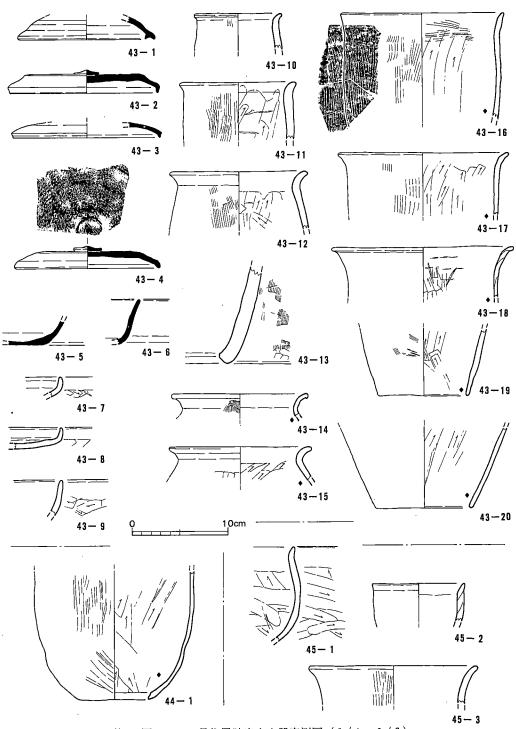


第108図 37~39号住居跡出土土器実測図 (1/4·1/6)

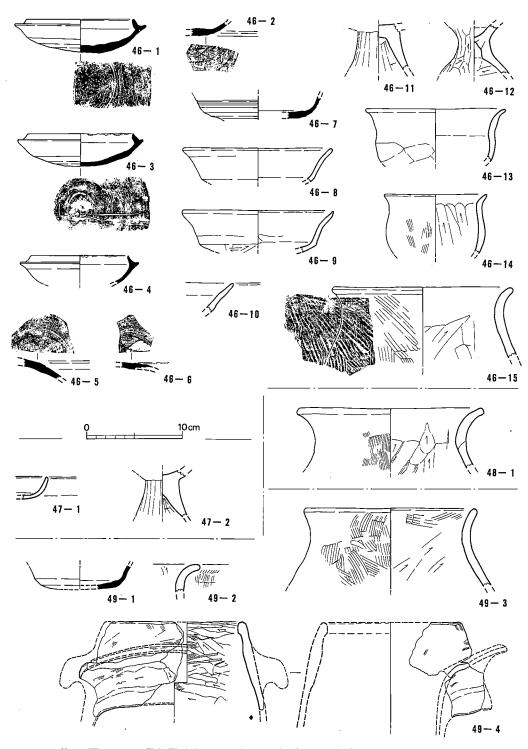


第109図 40・41号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)

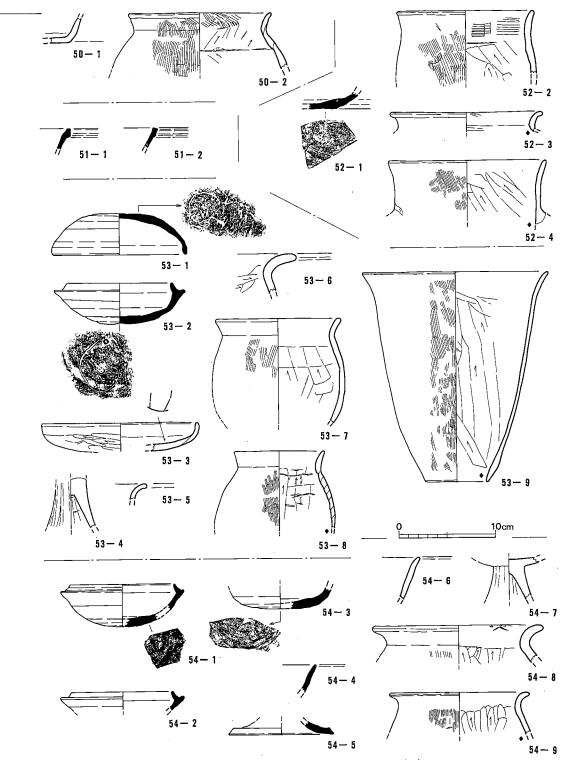




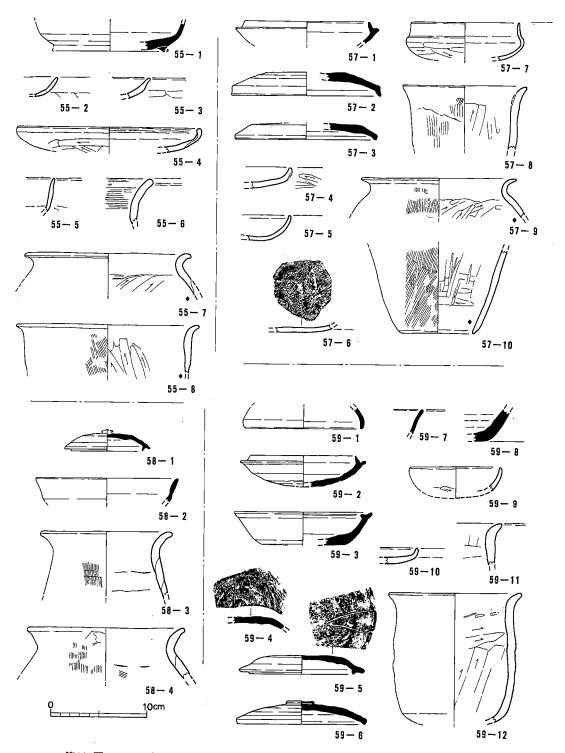
第111図 43~45号住居跡出土土器実測図(1/4·1/6)



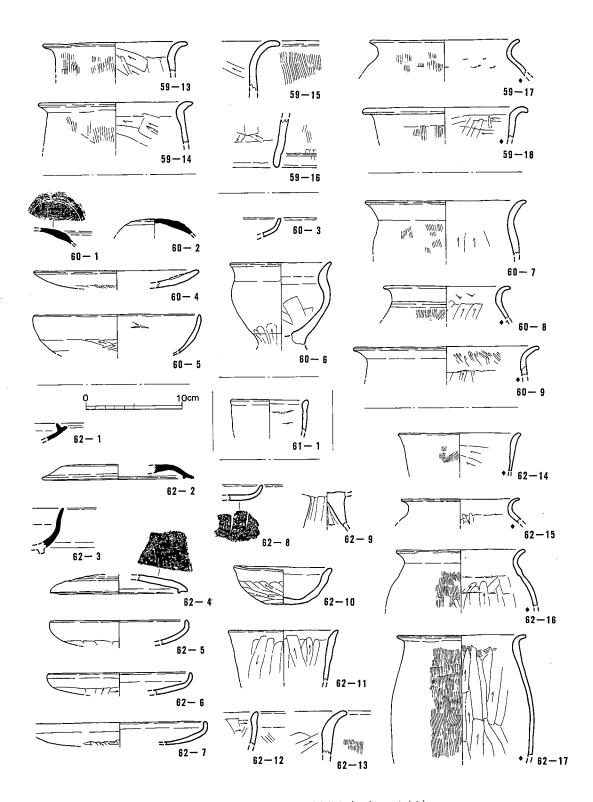
第112図 46~49号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



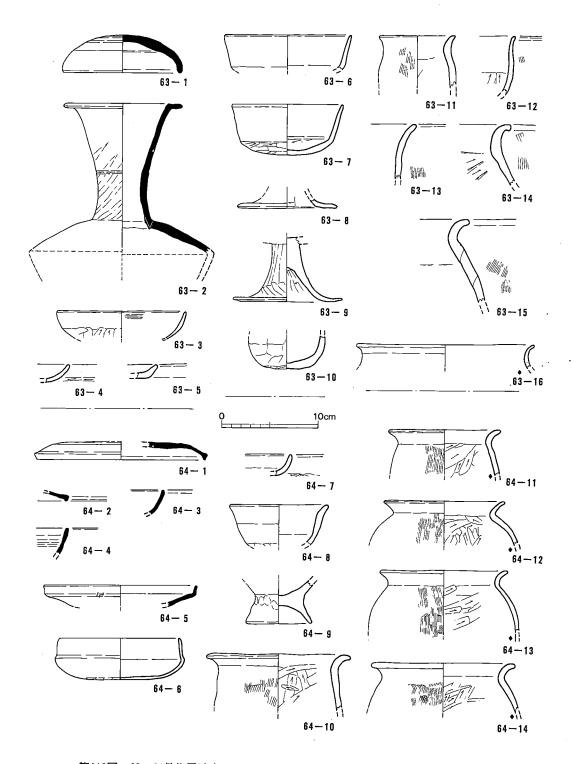
第113図 50~54号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



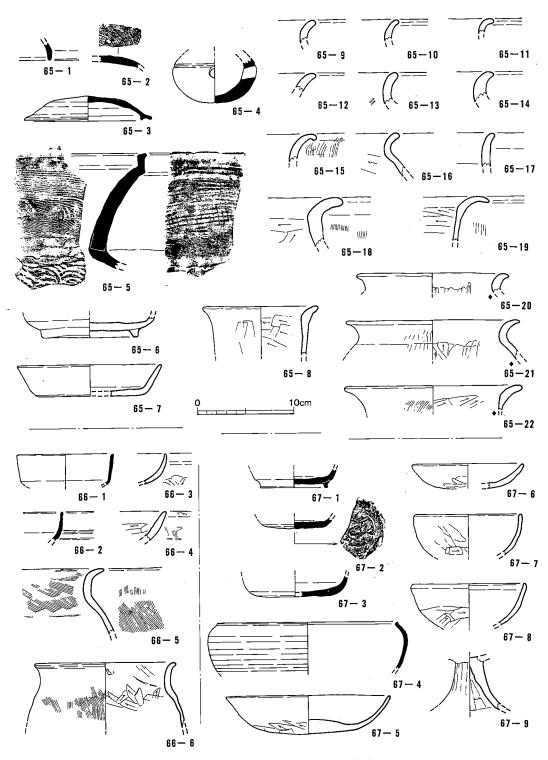
第114図 55~59号住居跡出土土器実測図(1/4·1/6)



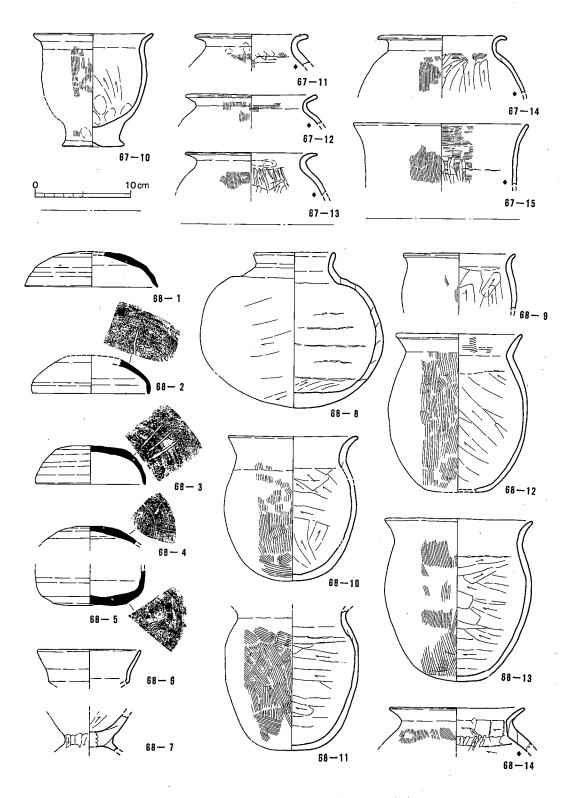
第115図 59~62号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



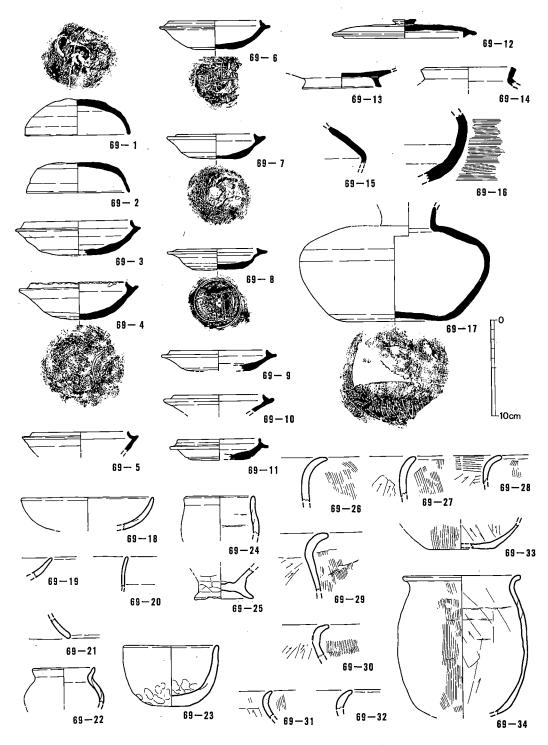
第116図 63・64号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



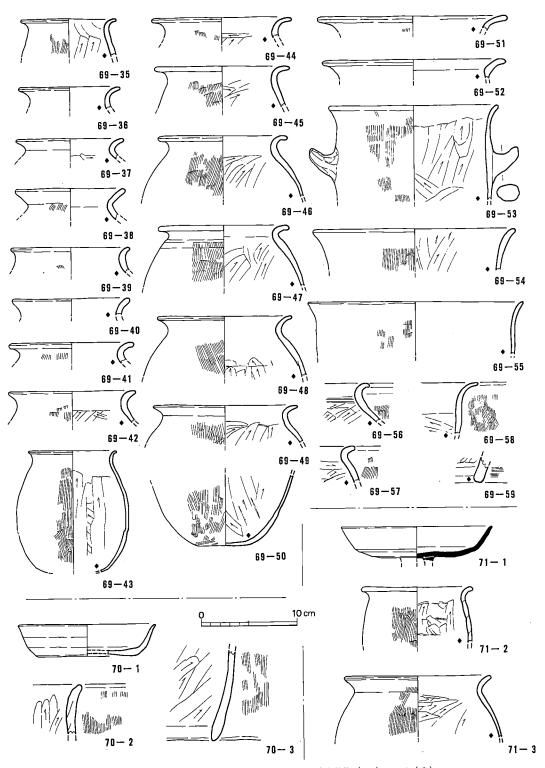
第117図 65~67号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



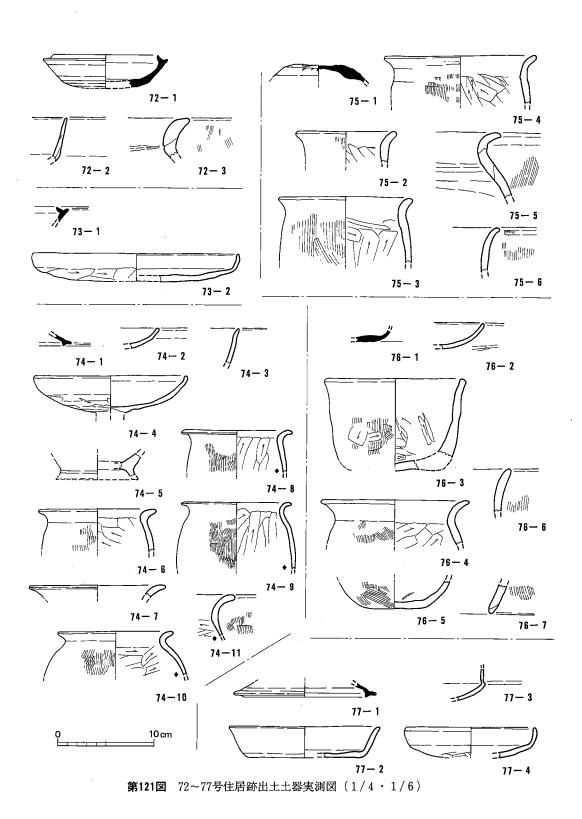
第118図 67・68号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



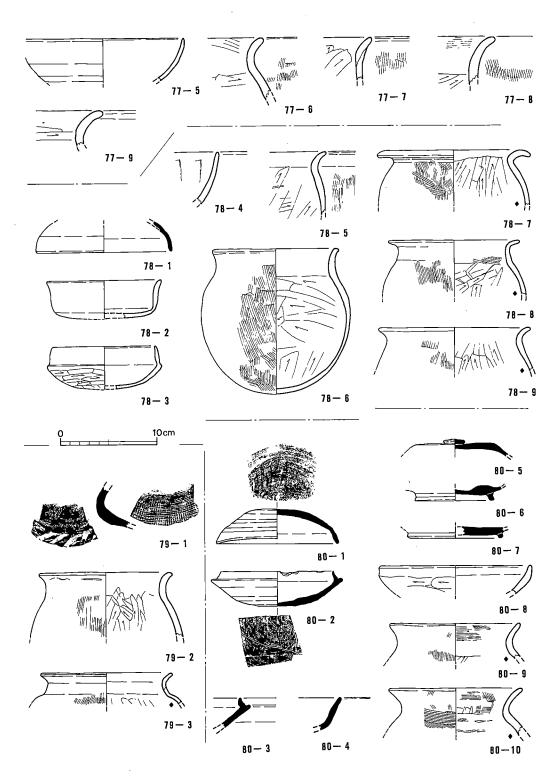
第119図 69号住居跡出土土器実測図(1/4)



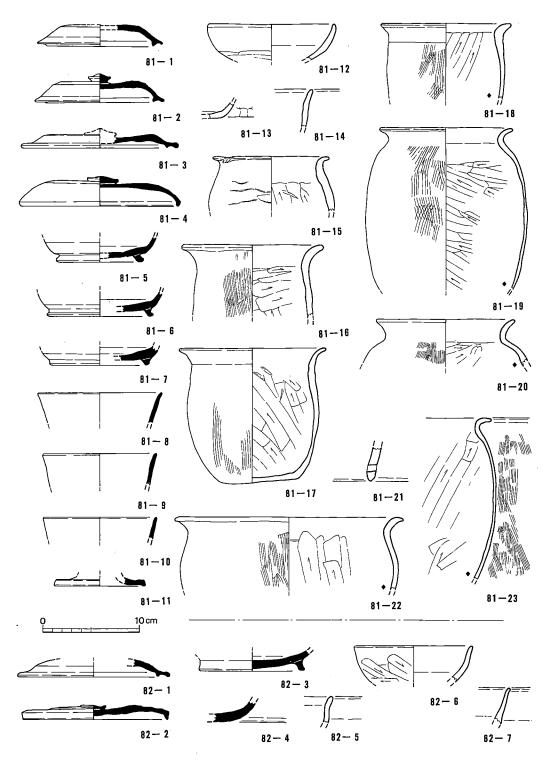
第120図 69・70・71号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



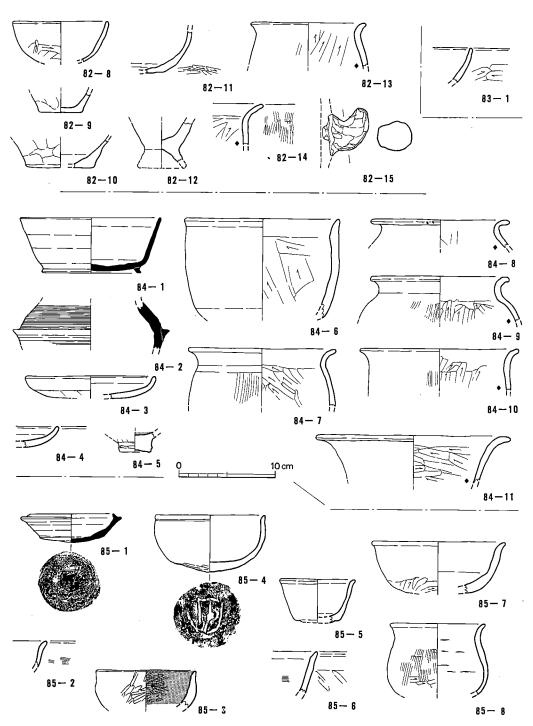
— 211 —



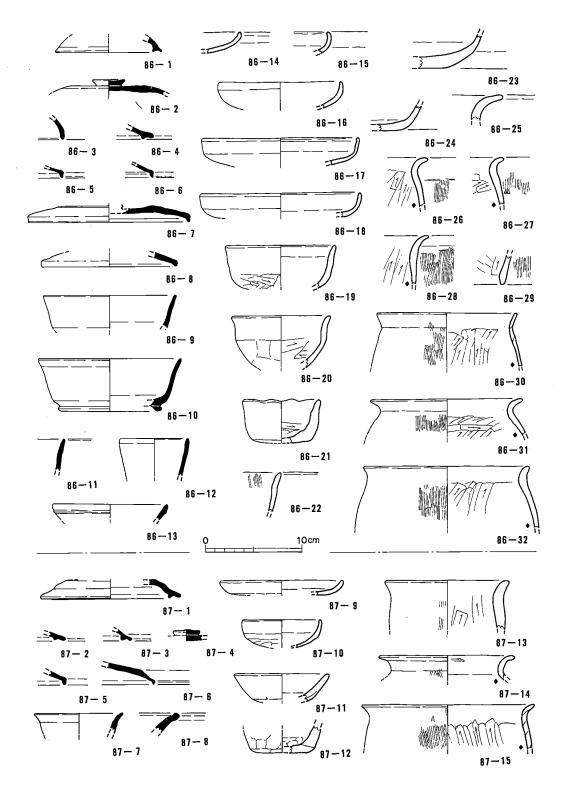
第122図 77~80号住居跡出土土器実測図 (1/4·1/6)



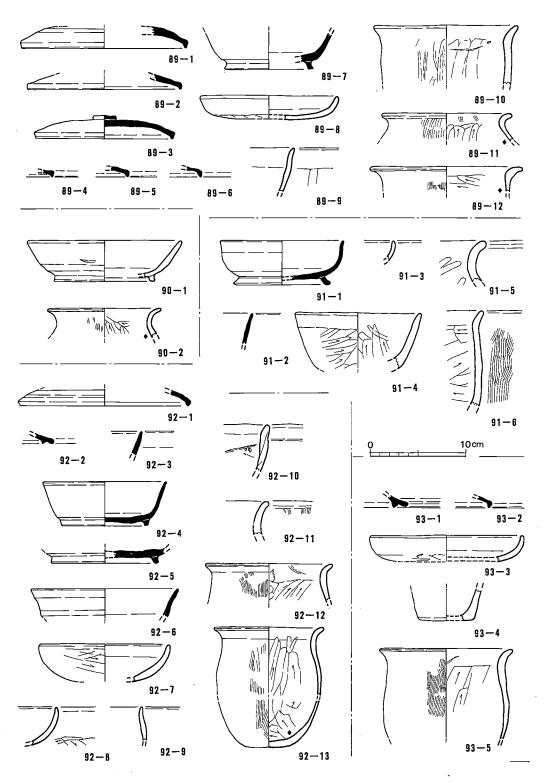
第123図 81・82号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



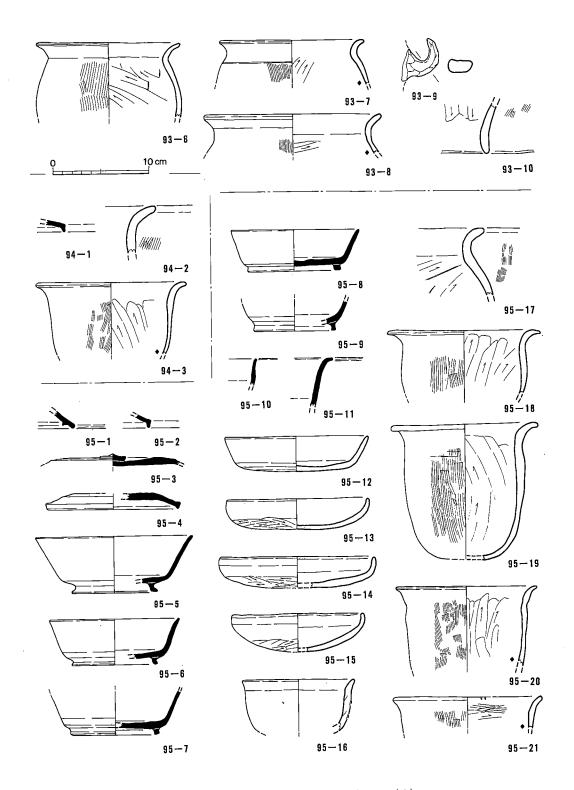
第124図 82~85号住居跡出土土器実測図(1/4·1/6)



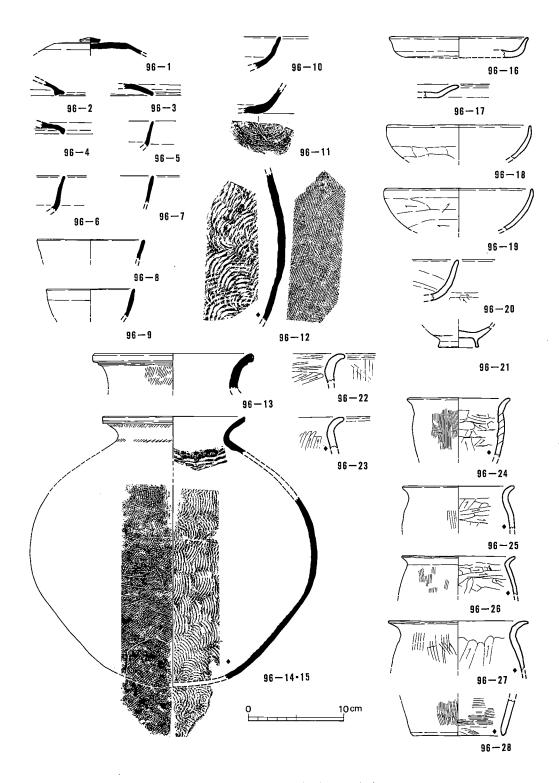
第125図 86・87号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



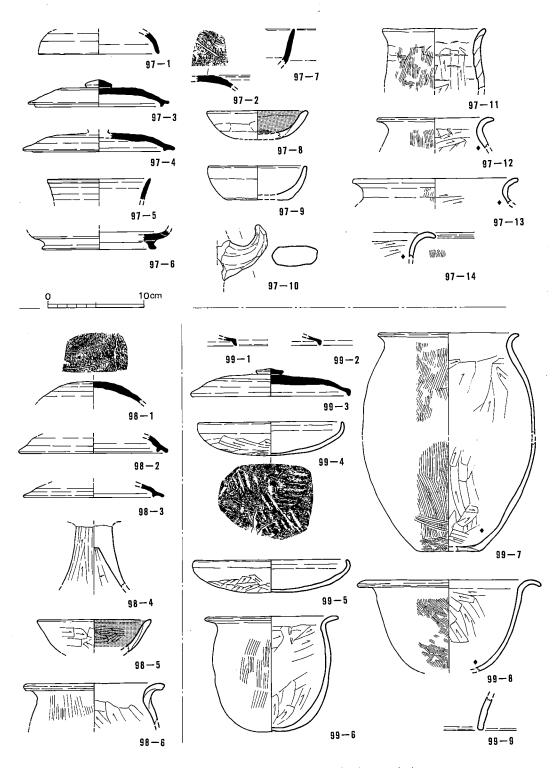
第126図 89~93号住居跡出土土器実測図 (1/4·1/6)



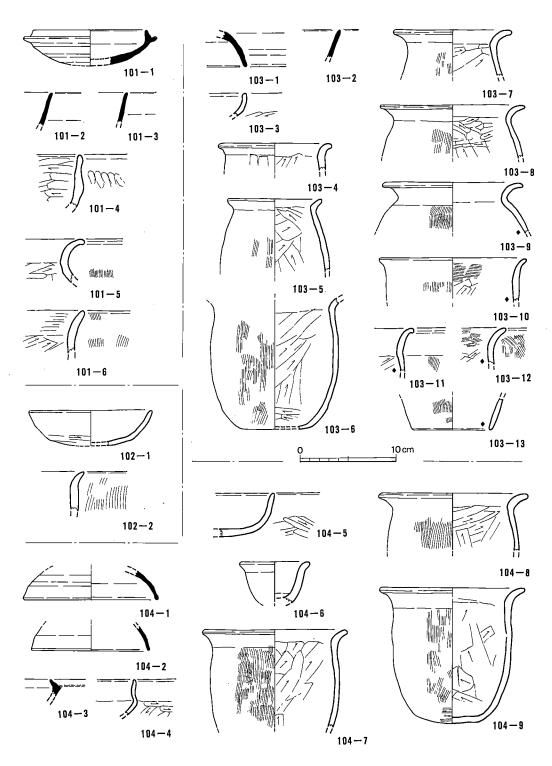
第127図 93~95号住居跡出土土器実測図(1/4·1/6)



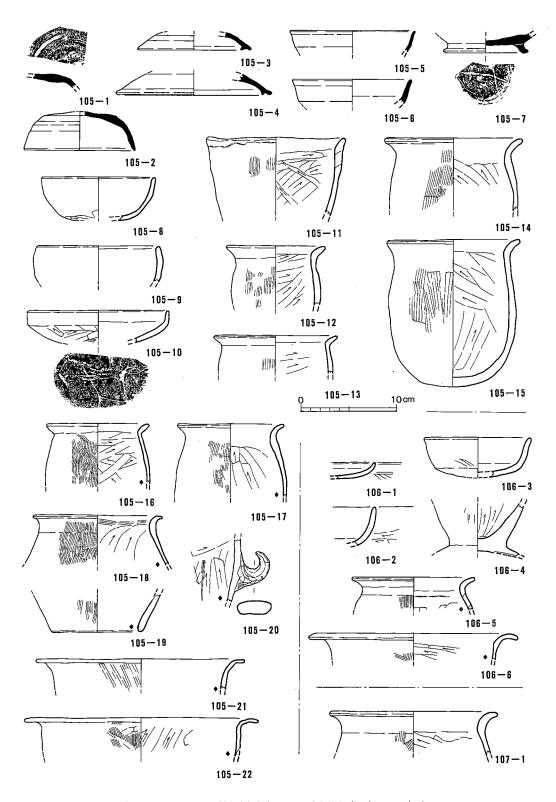
第128図 96号住居跡出土土器実測図 (1/4·1/6)



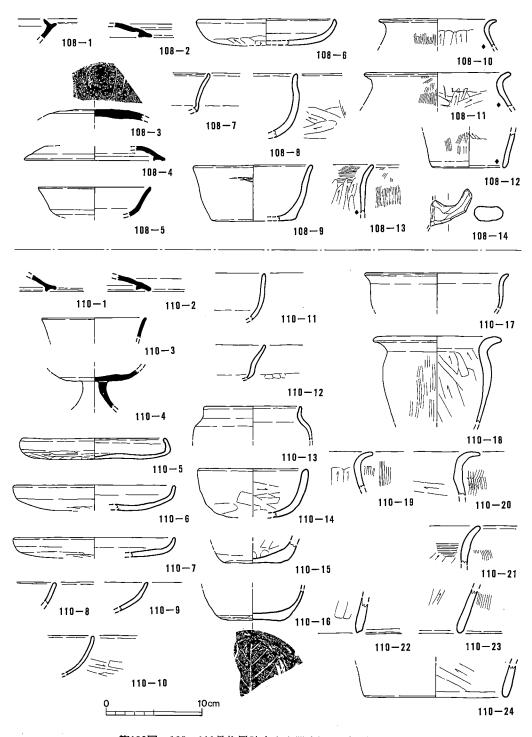
第129図 97~99号住居跡出土土器実測図(1/4·1/6)



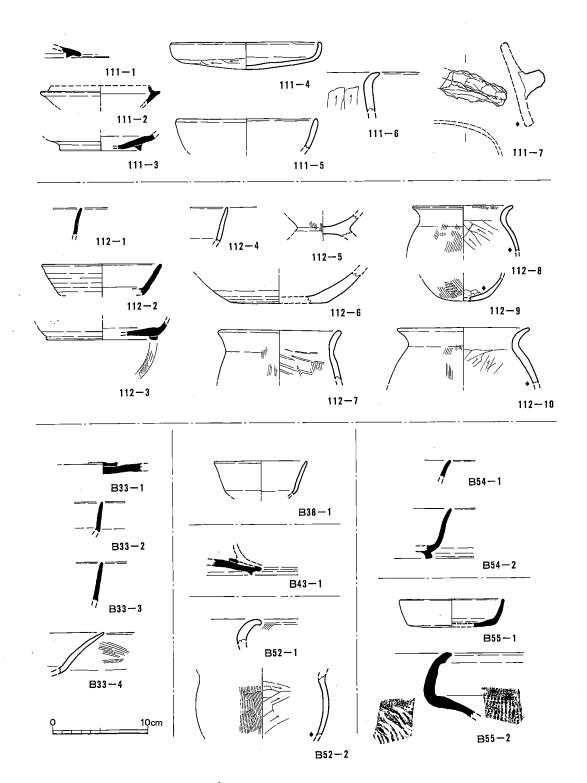
第130図 101~104号住居跡出土土器実測図(1/4·1/6)



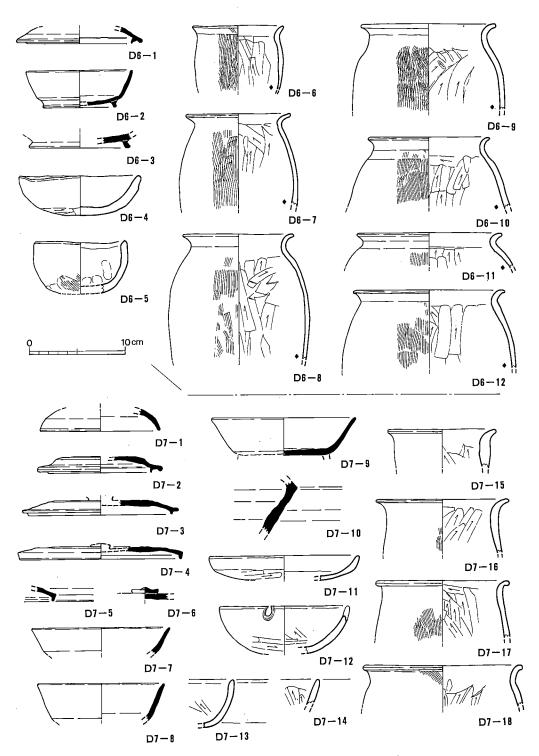
第131図 105~107号住居跡出土土器実測図(1/4・1/6)



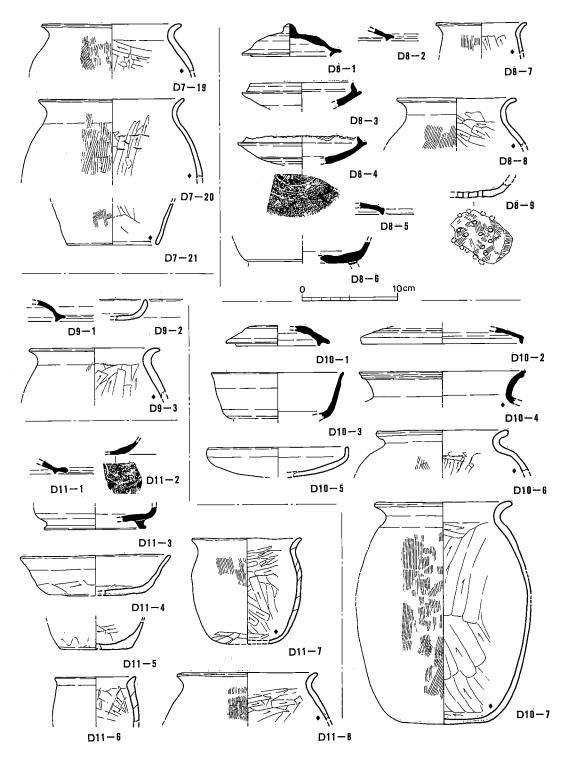
第132図 108·110号住居跡出土土器実測図(1/4·1/6)



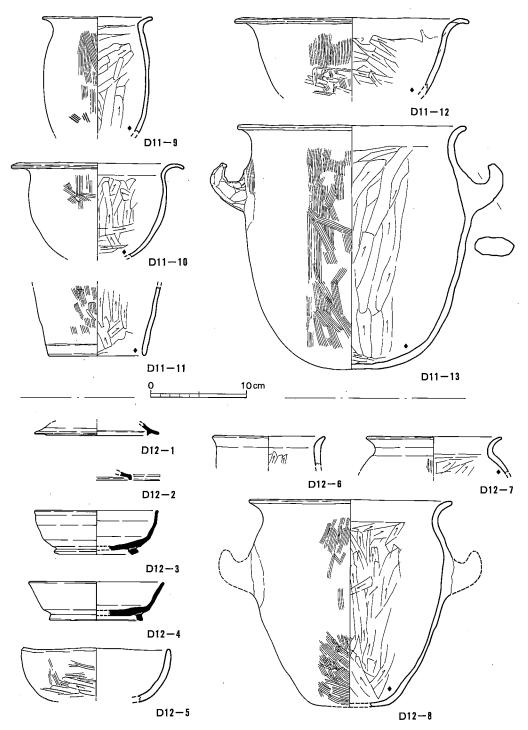
第133図 111·112号住居跡,掘立柱建物跡出土土器実測図(1/4·1/6)



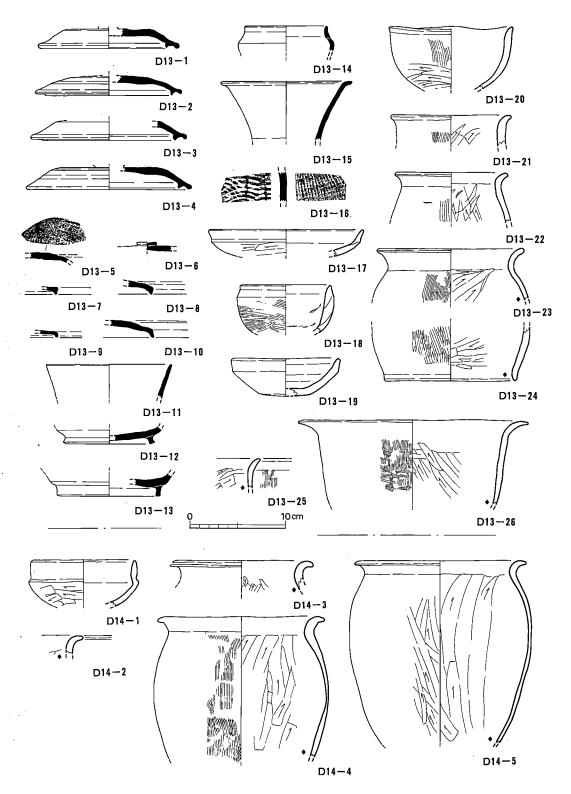
第134図 6・7号土壙出土土器実測図 (1/4・1/6)



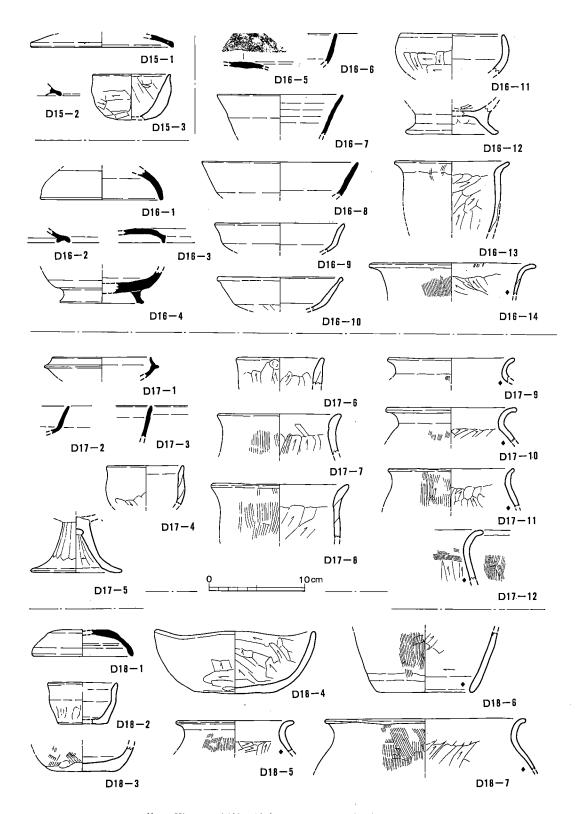
第135回 7~11号土壙出土土器実測図(1/4·1/6)



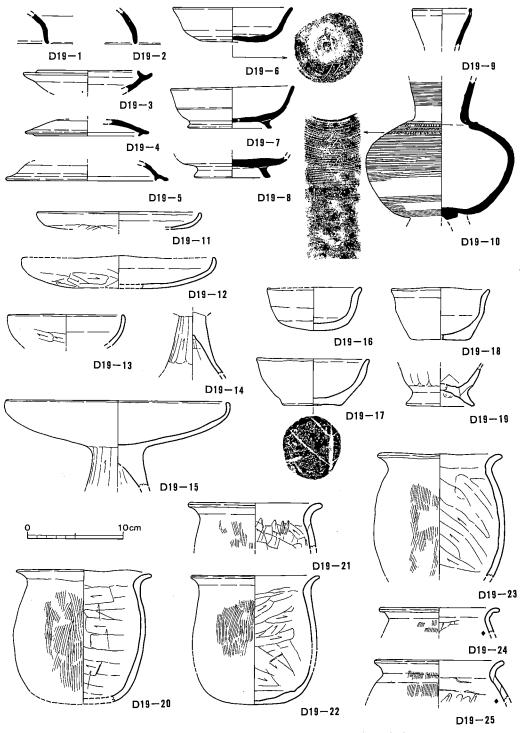
第136図 11·12号土壙出土土器実測図(1/4·1/6)



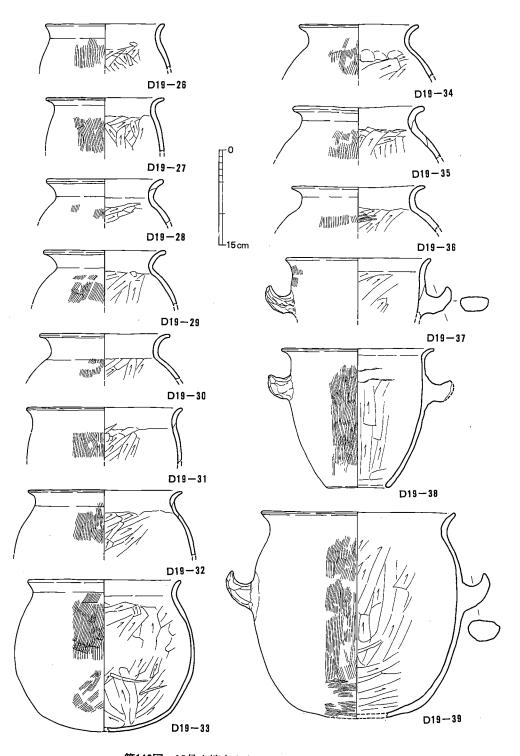
第137図 13·14号土壙出土土器実測図(1/4·1/6)



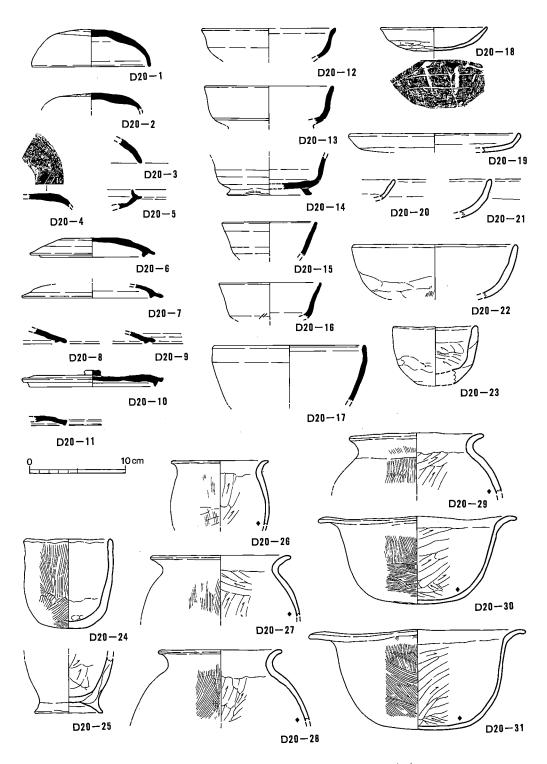
第138図 15~18号土壙出土土器実測図(1/4・1/6)



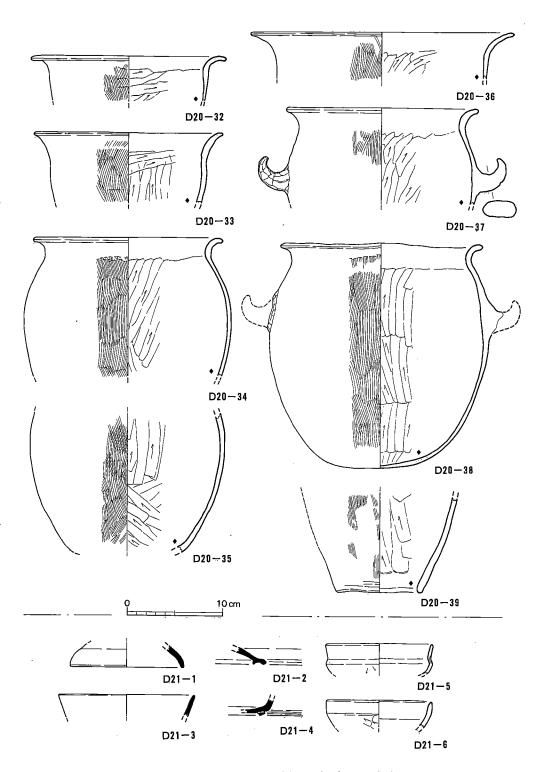
第139図 19号土壙出土土器実測図① (1/4·1/6)



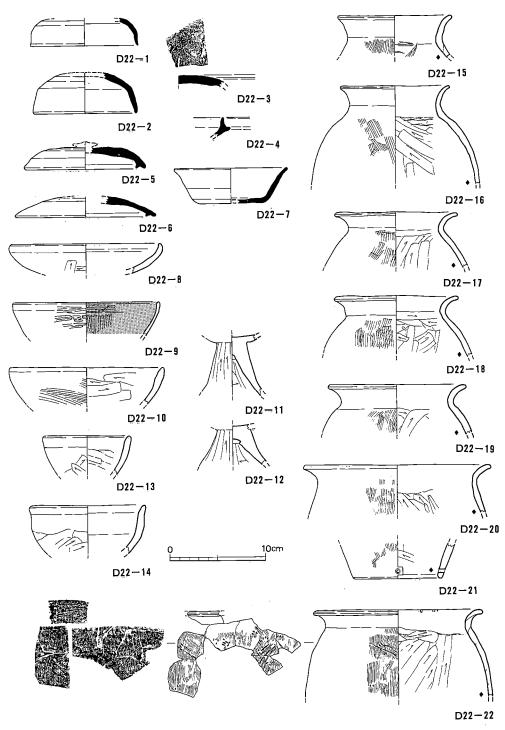
第140図 19号土壙出土土器実測図② (1/6)



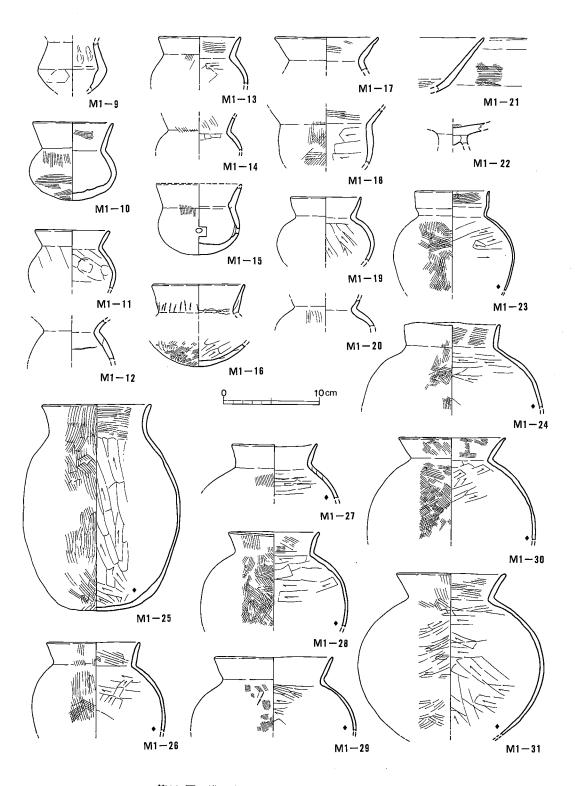
第141図 20号土壙出土土器実測図(1/4・1/6)



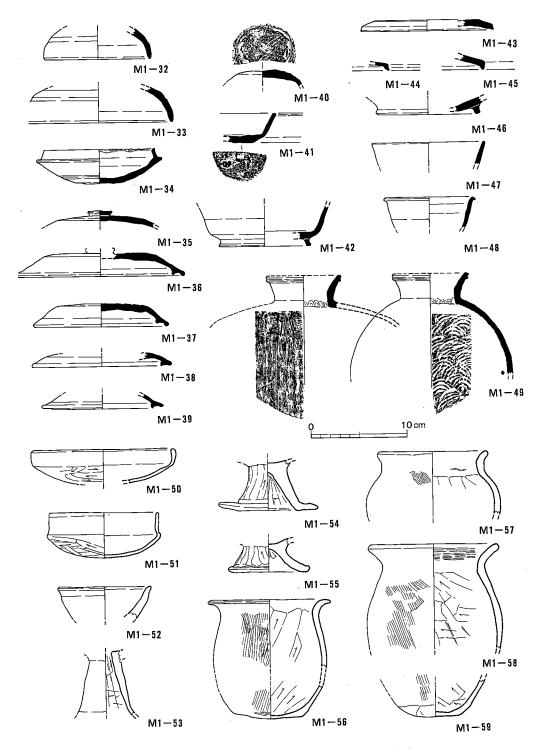
第142図 20·21号土壙出土土器実測図 (1/4·1/6)



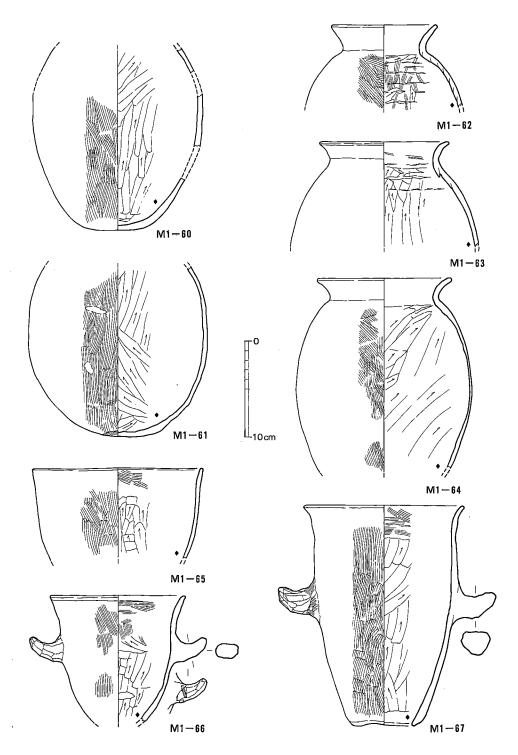
第143図 22号土壙出土土器実測図 (1/4·1/6)



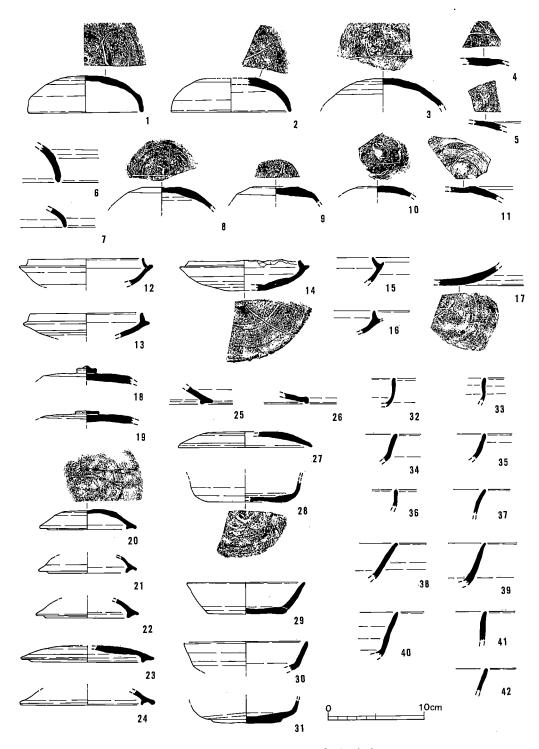
第144図 溝1出土土器実測図① (1/4·1/6)



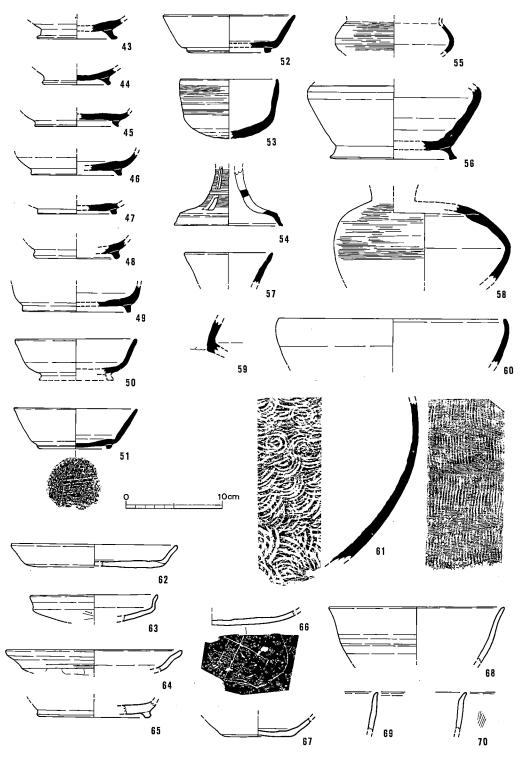
第145図 溝1出土土器実測図②(1/4・1/6)



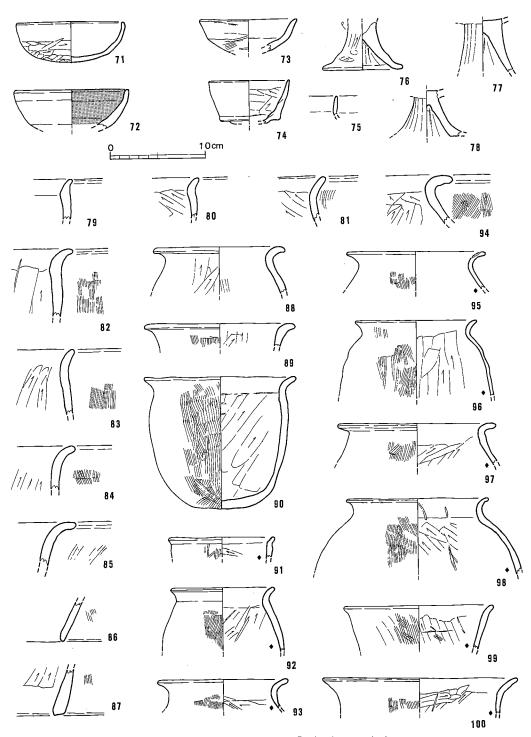
第146図 溝1出土土器実測図③ (1/6)



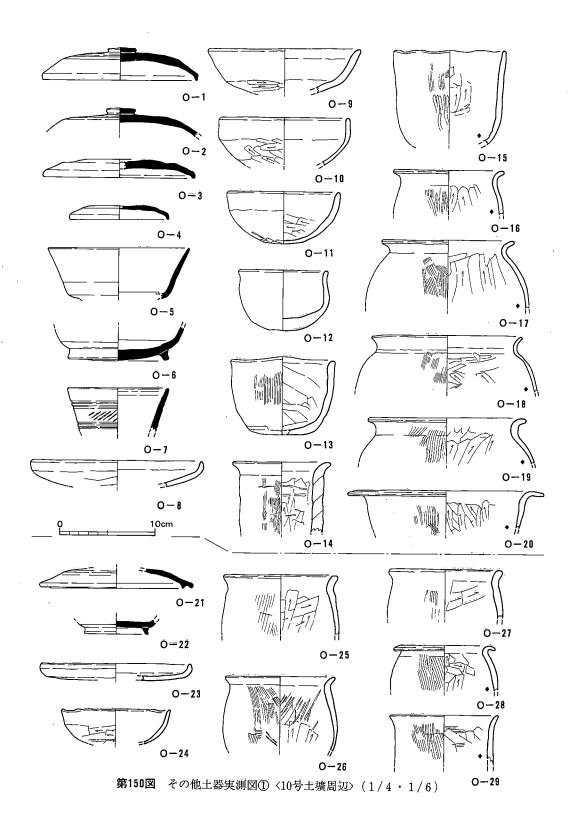
第147図 ピット出土土器実測図① (1/4)

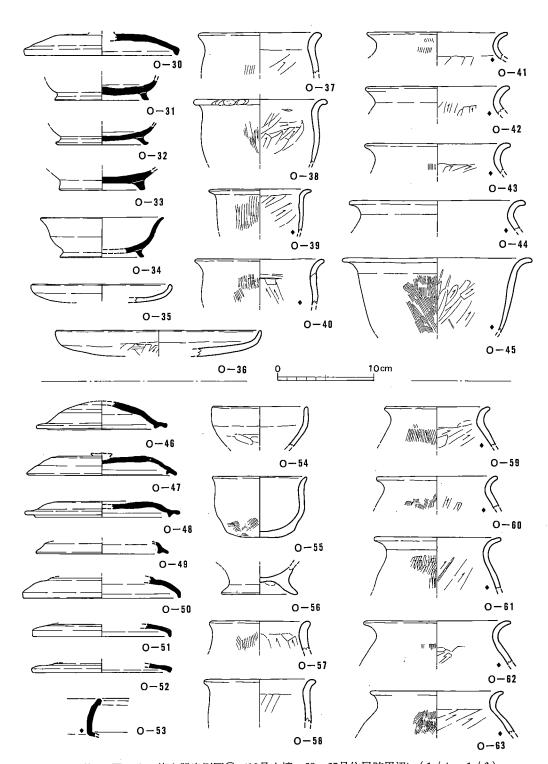


第148図 ピット出土土器実測図②(1/4)

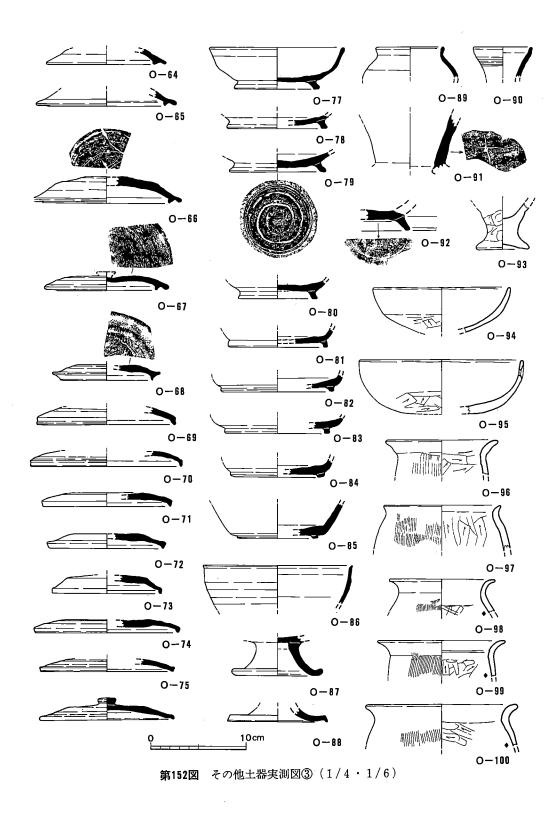


第149図 ピット出土土器実測図③(1/4・1/6)

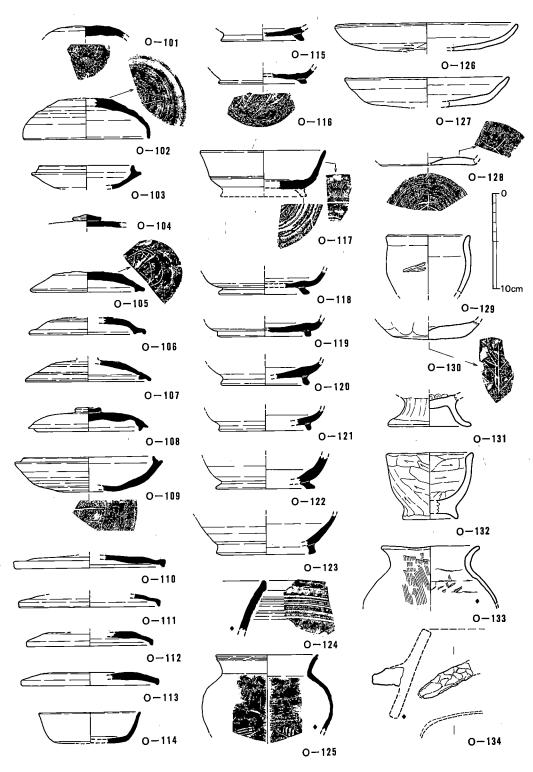




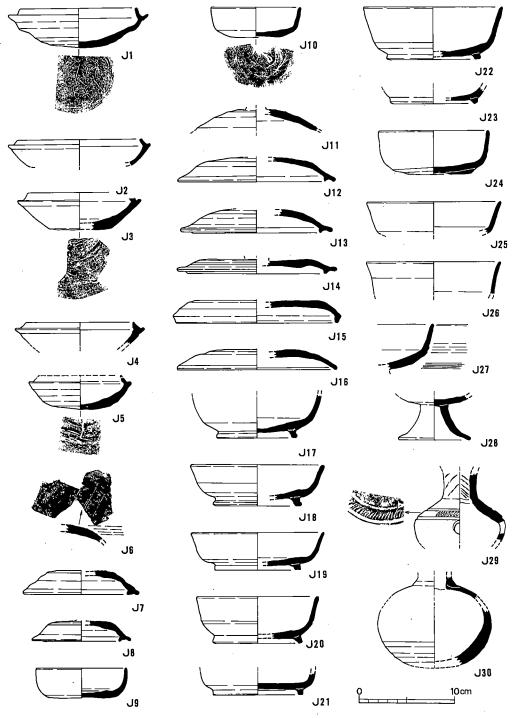
第151図 その他土器実測図②〈10号土壙、62~65号住居跡周辺〉(1/4・1/6)



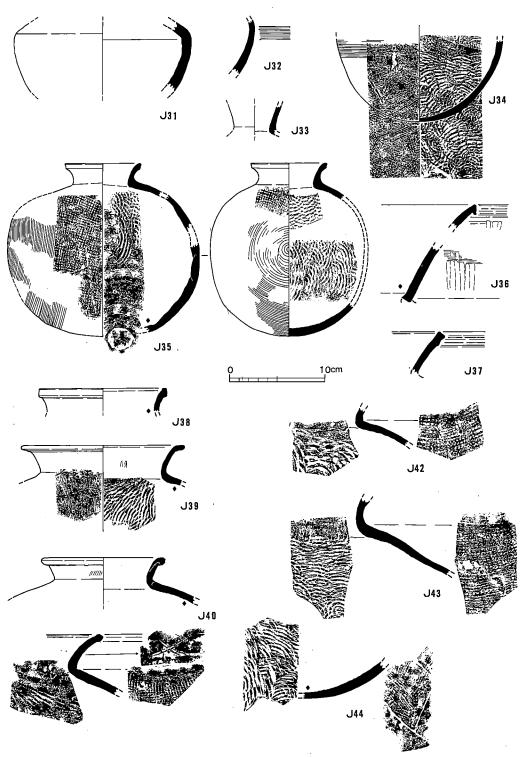
— 242 —



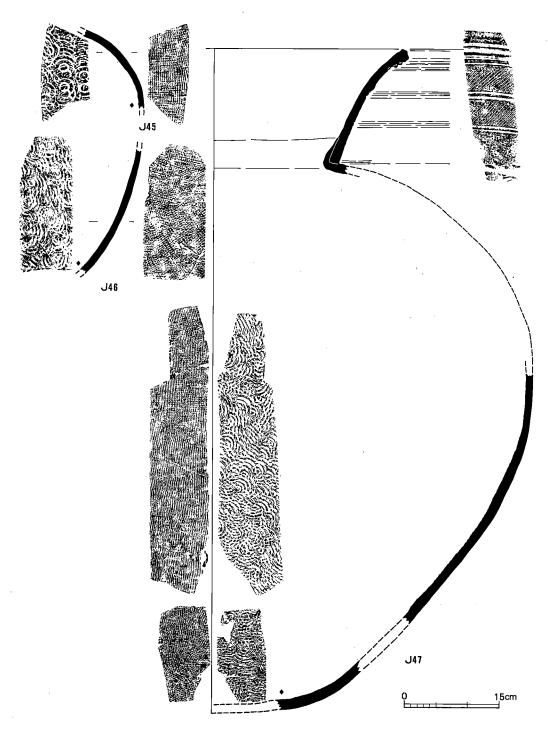
第153図 その他土器実測図④(1/4・1/6)



第154図 接合・同一個体資料①(1/4)



第155図 接合・同一個体資料② (1/4・1/6)



第156図 接合・同一個体資料③ (1/6)

第 | 表 宮原遺跡出土土器法量表

	_	
	٦	7
ı		١.

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高法量②底径 ④胴径	備	考
住31	(第107図) 1	須恵器	蓋		1/5		カマド周: E	<u>刀</u> 131-, 2
"	. 2	"	坏身		1/4	①10.3 ③3.8 ④12.8	カマド周	<u>ग्र</u> -31- 3
"	3	ı,	11		1/8	⊕13.0 ⊕15.2		31-4
11	4	土師器	- 城		1	①8.05 ②4.6 ③7.0	photo	31-1
"	5	"	甑			@10.6		31-5
住32	1	須恵器	坏身					32-1
11	2	土師器	甕					32-2
住33	1	須恵器	蓋					33-1
"	2	"	坏				へラ記号	33-2
#	3	土師器	高坏				精製	33-4
#	4	#	坏				精製	33-3
"	5	"	甕					33-6
"	6	"	"		1/5	① 19.0	下層中央	土壙 33-5
住34	1	土師器	甕		1/10	1 14.8	床下層	34-2
"	2	"	"		1/7	①18.4		34-1
住35	1	須恵器	蓋					35-2
"	2	11	坏身				床下層	35-1
"	3	11	坏		1/12		カマド内	35-3
"	4	土師器	坏		1/5		北側掘り	込み 35-8
#	5	"	埦.					35-6
"	6	"	甕					35-5
11	7	"	"			€15.2		35-9
"	8	"	"		1/10	①23.9 ④28.1	カマド内	35-7
住36	1	須恵器	蓋					36-,1
"	2	土師器	甕		1/5	①12.2 ③10.0 ④11.3	床下層	36-2
"	3	11	#			27.75		36- 4
IJ.	4	"	"					36- 6
"	5	"	"					36-7
"	6	"	"					36- 5
11	7	"	"			①25.6	床下層西	壁 36-3
住37	(第108図) 1	須恵器	蓋					37- 9
"	2	"	坏身				カマド周 縁打欠き	37-7
#	3	"	"		1/8		カマド周 緑打欠き	
"	4	H	蓋		1/8	①11.4 ③1.9 ④13.6		37-6
"	5	"	H		1/8	①12.4 ③1.7 ④14.6		37-5

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住37	6	須恵器	蓋		1/3	①12.4 ③2.2 ④15.0	床下層、;	里土 37-3
"	7	"	11		1/2	①14.6 ③2.1 ④16.4	カマド付3 層	近床下 37-2
"	8	"	ŋ			,	床下層	37-4
#	9	"	坏					37-10
"	10	土師器	坏				精製	37-16
"	11	n	高坏				n	37-17
"	12	"	,#-				n	37-18
"	13	#	甕		2/3	①15.4 ③13.2 ④13.7	カマド周 photo	37-1
"	14	"	"		1/4	①16.2 ③8.3 ④16.4	カマド床	37-11
#	15	"	11		1/4	①15.0 ③10.5 ④15.1	カマド外 近、タタ	キ疫 37-19
#	16	n	11				カマド外 近、精製	左袖付
"	17	"	n		1/8	①19.0 ③10.1 ④21.0		37-12
"	18	"	#		1/4	①21.2 ③9.7	タタキ痕	37-13
"	19	"	"		1/6	①22.4 ③27.25 ④27.1	カマド内 キ痕	、タタ 37-15
住38	1	須恵器	坏身				床下層	38-1
住39	1	須恵器	蓋					39- 2
n	2	"	坏				ヘラ記号	
"	3	土師器	Į,		2/3	①14.75 ③5.3	カマド周 や粗、ph	辺、や oto 39-1
"	4	11	甕		1/5	①18.8 ③7.65 ④15.6	床下層	39-4
#	5	#	11			①21.1 ③10.35 ④24.5	カマド周	辺 39-5
住40	(第109図) 1	須恵器	蓋				床下層	40-7
"	2	"	ij			_	号"、	へラ記 40-11
"	3	"	"				埋土上層 層	、床下 40-10
"	4	"	"		1/10	①10.5 ④ 12.8	打欠き	40-6
"	5	"	"		1/4	①12.2 ④ 14.6	床下層	40-9
11	6	"	"		1/8	①13.6 ④ 16.0	"	40-5
"	7	"	n		1/2	①15.35 ③2.4	層、pho	埋土下 to 40-2
"	8	"	11		1/8	①17.8 ③1.1	床下層	40-4
#	9	"	坏					40-3
"	10	#	平瓶		1/5	①4.1	床下層	40-8
"	11	土師器	蓋		Γ		カマド内	40-12
. ,,	12	"	甕			①14.8 ④ 13.0	床下層	40-18
"	13	"	"		1/6	16.2	カマド内	下層 40-20
"	14	"	"				床下層	40-14
#	15	"	"				"	40-16

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住40	16	土師器	甕					40-15
"	17	"	#		1/8	①22.0	タタキ痕	か? 40-13
"	18	"	"		1/12	①23.9		40-17
"	19	#	H		1/8	①28.1		40-19
"	20	"	鍋		1/5	①30.0 ③14.2	カマド内 photo	40-1
住41	1	須恵器	蓋	1/12		①13.0 ④ 14.9		41- 4
11	2	, "	11					41-5
#	3	"	"	1/5		①15.3		41-2
11	4	#	坏			①12.4 ②9.4 ③3.8	photo	41-1
#	5	"	11			2 10.35	カマド周	辺 41-3
#	6	"	"					41-8
"	7	"	"					41-6
"	8	"	"					41-7
"	9	土師器	坏			12.6 32.8		41-10
"	10	"	高坏					41-15
H	11	11	甕			①13.6 ④ 11.9		41-13
"	12	"	"					41-11
#	13	"	"					41-14
11	14	, ,,,	"					41-12
#	15	"	"		1/6	124.8		41-9
住42	(第110図) 1	須恵器	坏				へラ記号	42-14
"	2	11	蓋		1/10	①13.8 ④ 16.2		42-12
"	3	"	11		1/4		床下層	42-11
"	4	11	#		1/5	⊕16.0		42-5
#	5	11	#					42-13
"	6	"	坏			①13.3 ②8.75 ③4.85	photo	42-3
"	7	"	H		1/3	①14.25 ②9.9 ③3.9		42- 4
"	8	"	#			210.4	床下層	42-9
"	9	"	H			② 11.0		42-10
11	10	. "	II					42-8
11	11	"	"				カマド右	油床面 42-7
H	12	"	"					42- 6
#	13	土師器	坏		1/4	①14.6 ③3.2	床下層、 photo	情製、 42-2
"	14	"	"	-	1/5	①13.5 ③3.5	精製	42-15
\neg	15	"	η		1/4	①15.65 ③2.8	半精製	42-19

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住42	16	土師器	坏		1/8	①13.95	精製	42-17
"	17	"	"			①18.4 ③3.4	"、床	下層 42-16
"	18	"	H gg		1/8	①13.85 ②9.7 ③3.3	"	42-18
"	19	"	- ⁻		1/10	19.4	粗製	42-20
"	20	"	甕		1/4	15.0		42-22
"	21	#	"		1/4	①15.6 ④ 14.0	床下層	42-27
"	22	"	. #		1	①16.05 ③12.5	カマド突 photo	出部、 42-1
"	23	"	"				-	42-25
"	24	"	甑				カマド内	42-21
"	25	"	甕				カマド内	焚口部 42-24
"	26	"	11		1/5	①23.4		42-23
n	27	"	"		1/6	D 29.8		42-26
"	28	"	#			①27.1 ④26.2	床下層	42-28
"	29	,,	"			①28.2 ④30.7	カマド右	抽床面 42-29
住43	(第111図) 1	須恵器	蓋		1/8	①12.4 ④14.4		43-7
"	2	"	11			①15.45 ③2.45	photo	43-2
"	3	"	11		1/6	⊕15.4	床下層	43-4
"	4	n	11		1/3	①15.1 ③2.3	"、· 号	へラ記 43-3
"	5	"	壺					43- 6
"	6	"	坏					43-5
"	7	土師器	坏				精製	43-12
"	8	11	"				n	43-14
#	9	11	缬				半精製	43-8
H	10	"	魏		1/5	①9.2 ④9.2		43-20
н	11	"	#		1/4	①12.2 ④ 11.5	カマド内	43-17
"	12	"	"		1/5	①14.45		43-11
"	13	"	甑					43-15
"	14	"	甕		1/8	①21.6	半精製	43-10
"	15	"	"		1/4	①22.4	"	43-9
"	16	"	"			①25.6 ④24.6	カマド内	上層 43-13
"	17	"	n		1/6	€27.0	н	43-16
"	18	"	11		1/9	①28.8		43-18
"	19	"	飯	İ	1/5	②13.5	カマド内. 層	床下 43-19
#	20	"	"			2 15.0	photo	43-1
住44	1	土師器	甑			②10.5 ④ 25.2	カマド内	44-1

⑤

住45 " "	1	種 別土師器		分類	残	法量①口径 ③器 法量②底径 ④胴	高隆	備	考	遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	į
" "	-	土師器													1		4
" (2		CAMP TO MA	鉢				;	カマド、	精製 45-2	住53	3	土師器	坏		1/10	①16.2 ③2.9	^
(3	2	"	甕		1/8	①9.6 ④9.3	7	カマド周	辺 45-4	"	4	"	高坏				精
12 1C ()	3	"	"			①17.8	;	カマド	45-1	"	5	"	甕				カ
住46 ~	第112図)	須恵器	坏身		1/2	①11.3 ③3.5 ④13.8		へラ記号 ohoto	46-2	"	6	"	#				床
n	2	"	坏					"	46-7	"	7	. ,,	#		1/3	①13.2 ④ 13.9	カ pl
"	3	n	坏身			①11.1 ③3.4 ④14.2		" き、phot	、打欠 o 46-3	"	8	"	#			①14.4 ④ 19.1	pl
"	4	"	"			①10.2 ④12.5		打欠き	46- 4	"	9	"	甑			①29.3 ②9.5 ③32.8	
"	5	"	坏			-		カマド、· 号	へラ記 46-6	住54	1	須恵器	坏身	-	1/9	①10.9 ③4.5 ④13.0	床号
"	6	"	"				7	ヘラ記号	46-8	"	2	11	11			①10.7 ④13.0	床
#	7	"	高坏						46-5	"	3	"	埦?		1/3		^
п.	8	土師器	ij			①15.8			46-16	11	4	"	坏				
"	9	n	"			①16.0	i	精製	46-15	"	5	"	高坏			2 11.0	床
"	10	"	11					"	46-9	11	6	土師器	埦				T
"	11	n	n					n	46-11	"	7	"	高坏				
"	12	"	"				k	粗製	46-13	11	8	"	甕		1/6	① 18.0	
11	13	"	埦			①14.6 ④ 12.5	ł	精製	46-14	11	9	"	"		1/6	①22.2	Ī
11	14	"	甕		1/8	①10.8 ④ 10.4	J	未下層	46-18	住55	(第114図) 1	須恵器	坏	1/9		@12.2	床
η	15	"	#			①19.0			46-17	11	2	土師器	11				
住47	1	土師器	坏				1	精製	47-1	11	3	"	11			-	
"	2	"	高坏					n	47-2	11	4	"	JJ		1/7	①19.4	#
住48	1	土師器	甕			①19.6			48-1	11	5	11	亃	_			
住49	1	須恵器	坏			②8			49-2	"	6	"	甕				床
"	2	土師器	甕						49- 4	ii	7	"	"			①26.3	
"	3	"	IJ		1/5	①18.2	7	カマド	49-3	11	8	"	11		1/6	① 29.0	カ
"	4	"	カマド				I	photo	49-1	住57	I	須恵器	坏		1/10	①13.0 ④ 15.0	pl
住50	第113図) 1	土師器	坏				2	半精製	50-1	11	2	"	蓋		1/10	① 15.5	
"	2	#	凝			15.0	;	カマド	50-2	11	3	"	"		1/4		床
住51	1	須恵器	甕						51- 1	11	4	土師器	坏				半
ıı	2	"	"						51-2	11	5	"	11				精
住52	1	須恵器	坏					へラ記号	52- 1	"	6	"	11				
"	2	土師器	甕		1/4	①14.4 ④ 14.7			52-2	"	7	"	"		1/4	①11.2 ④ 12.4	
n	3	"	"		1/12	①24.2	*	精製	52- 4	"	8	"	甕		1/6	① 13.0	床
"	4	"	甑		1/10	①25.0			52- 3	11	9	"	"		1/6	①24.3	
住53	1	須恵器	蓋		1	①13.8 ③4.4		へラ記号 photo	53-4	11	10	"	甑		1/6	② 11.6	カ
"	2	"	坏身		1	①10.9 ③4.25 ④13.8	Ť	n ohoto	53-5	住58	1	須恵器	蓋		1/4	①7.4 ④ 9.0	床

坦翀	1年区1110	性加	允许生	刀炽	724	四里②底径 ④胴径	VHI	~9
住53	3	土師器	坏		1/10	①16.2 ③2.9	へラ記号	、精製 53-6
"	4	"	高坏				精製	53-7
"	5	"	甕				カマド周	辺 53- 9
"	6	"	#				床下層、	半精製 53-8
"	7	. ,,	#		1/3	①13.2 ④ 13.9	カマド内 photo	53-3
"	8	"	#			①14.4 ④ 19.1	photo	53- 2
"	9	"	甑			①29.3 ②9.5 ③32.8	"	53- 1
住54	1	須恵器	坏身		1/9	①10.9 ③4.5 ④13.0	床下層、 号	ヘラ記 54-1
"	2	11	ij			①10.7 ④13.0	床下層	54-2
"	3	"	埦?		1/3		ヘラ記号	54-5
n	4	"	坏					54-4
"	5	"	高坏			② 11.0	床下層	54-3
"	6	土師器	埦				" 、	半精製 54-7
"	7	"	高坏				" 、	精製 54-6
11	8	"	甕		1/6	①18.0		54-8
"	9	"	"		1/6	⊕22.2	•	54-9
住55	(第114図)	須恵器	坏	1/9		2 12.2	床下層	55~ 1
11	2	土師器	11				n	55- 3
"	3	"	11					55- 4
"	4	"	,,		1/7	①19.4	半精製	55- 7
"	5	11	城				n	55- 6
"	6	"	甕				床下層	55-8
"	7	"	"			①26.3	"	55-2
"	8	"	"		1/6	€29.0	カマド	55- 5
住57	1	須恵器	坏		1/10	①13.0 ④ 15.0	photo	57- 4
11	2	"	蓋		1/10	⊕15.5	-	57-3
11	3	"	"		1/4	_	床下層	57-2
11	4	土師器	坏		-		半精製	57- 5
"	5	"	,,,				精製	57- 6
"	6	"	"			-	"	57-10
"	7	"	"		1/4	①11.2 ④ 12.4	"	57- 1
"	8	"	甕		1/6	①13.0	床下層	57-9
11	9	#	"		1/6	①24.3		57-8
"	10	"	甑		1/6	@11.6	カマド周	辺 57-7
- 住58	1	須恵器	蓋		1/4	①7.4 ④ 9.0	床下層	58-1
		<u> </u>			_			

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住58	2	須恵器	坏		1/10	①15.0	床下層	58- 2
"	3	土師器	甕	-			"	58- 4
"	4	"	"		1/6		n	58-3
住59	1	須恵器	蓋		1/7	⊕12.1		59-6
"	2	"	坏		1/4	①11.0 ③3.3 ④13.1		59- 3
,,	3	"	"		1/8	①12 ②8.8 ③3.4 ④14.4	床下層	59- 4
,,	4	n	"			<u> </u>	へラ記号	59- 5
"	5	II	蓋			①10.9 ③1.9 ④13.1	_	59- 2
ŋ	6	"	"		1	①13.2 ③2.5	photo	59- 1
ıı	7	#	坏					59- 7
"	8	"	壺		П		_	59-8
"	9	土師器	坏		1/6	①9.8 (③3.2)	精製	59- 9
"	10	11	"			_	精製	59-12
11	11	"	甕	_			床下層	59-17
"	12	"	"			①14.0 (③13.8) ④12.9	"	59-18
"	(第115図) 13	"	#		1/4	₾16.6	カマド内	59-14
#	14	,,	"		1/10	16.4	カマド周	辺 59-13
#	15	"	11		_	,	半精製	59-10
#	16	y.	甑					59-11
"	17	"	甕		1/6	①23.6	床下層、	精製 59-15
"	18	"	鍋		1/8	D26.2	カマド内	
住60	1	須恵器	坏				ヘラ記号	60-2
"	2	11	1)					60-1
li	3	土師器	"			-	精製	60-5
11	4	"	11		1/10	①17.7cm		60- 4
"	5	"	"		1/6	① 17.4	精製	60-6
"	6	"	甕			①10.7 ③8.6 ④10.4	床下層	60-9
"	7	"	"		1/8	①16.8 ④ 15.3		60-3
"	8	11	"		1/6	①20.0		60-7
"	9	11	H		1/10	①29.3		60-8
住61	1	土師器	甕		1/10	①7.9 ④8.0		61-1
住62	1	須恵器	坏					62- 4
"	2	"	蓋			①13.7 ③1.6 ④16.0		62-3
"	3	"	坏					62- 5
"	4	土師器	蓋			①12.8 ③2.0 ④14.5	ヘラ記号	62-17

								•
遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住62	, 5	土師器	坏		1/7	①14.2	精製	62- 9
H	6	"	11			① 15.0	n	62-10
11	7	"	#		1/8	①18.0	"	62-11
"	8	11	#				и ,	ヘラ記号 62-16
"	9	"	高坏				"	62-12
"	10	"	埦		1	①10.2 ③3.9	粗製、	photo 62~ 1
"	11	. ,,	甕		2/3	11.6		62-2
"	12	11	".				粗	62-15
"	13	11 .	"					62-8
"	14	"	"		1/6	①19.4		62-7
"	15 ·	"	n		1/8	①18.6	精製	62-14
"	16	"	#		1/5	①20.4		62-13
"	17	"	#		1/4	①20.4 ④22.4	床上	62- 6
住63	(第116図)	須恵器	蓋		1/5	①12.2 ③4.0		63-4
"	2	"	壺			①12.4 (④19.4)	photo	63-3
n	3	土師器	坏			①13.6	精製	63-5
"	4	"	"				"	63-11
"	5	"	"				".	63-5
"	6	"	"			13.4	"	63-15
"	7	"	"		1/4	①11.5 ③5.3 ④9.8	″、 内、pl	南周壁湖 noto 63-2
#	8	"	高坏			@10.4	精製	63-16
.))	9	"	"			②11. 5	"、	photo 63-1
"	10	11	壺			4 8.1		63-14
"	11	#	甕		1/6	①8.0 ④ 8.2		63-8
"	12	#	"	•				63-10
"	13	"	"					63-7
"	14	11	"					63-9
11	15	H	"					63- 6
"	16	#	"			①28.2		63-13
住64	1	須恵器	蓋			① 17.6		64-3
"	2	"	"					64-8
Н	3	11	坏					64-7
"	4	"	"					64-6
"	5	"	高坏		1/6	16.2		64-5
н :	6	土師器	坏		1	①12.4 ③4.35 ④13.6	精製、	photo 64-1
$\overline{}$		-			_			

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住64	7	土師器	坏				精製	64-16
"	8	11	塡			1 10.4	半精製	64-17
"	9	"	脚		1/2	2 7.0		64-15
"	10	11	甕		1/4	① 15.2		64-12
"	11	n,	"		2/5	17.8		64-13
"	12	"	"		1/4	①19.2		64-10
"	13	"	"			①22.0 ②24.0		64-14
ıı	14	"	"		1/4	①22.8		64-11
住65	(第117図)	須恵器	蓋					65-7
н	2	"	坏				ヘラ記号	65-8
"	3	"	蓋			①11.1 ③2.6 ④13.3		65- 2
11	4	"	璲			4 8.8		65- 5
11	5	"	壺					65-6
"	6	土師器	坏			@9.8		65-4
"	7	11	Н		1/3	①15.1 ②10.7 ③3.2	photo	65-1
"	8	#	甕			①12.2	カマド内	65-16
"	9	11	ŋ					65-14
11	10	"	11					65-23
H	11	"	"				床面	65-11
"	12	"	"			<u> </u>		65-22
"	13	"	"					65-20
"	14	. "	IJ					65-12
11	15	#	"				床面	65-19
"	16.	11	"					65-17
11	17	H	"					65-18
11	18	"	"					65-15
11	19	11	#					65-13
11	20	"	H		1/8	①24.0		65-11
,,,	21	"	#		1/3	①27.4	床面	65-9
,,	22	"	"		1/7	①28.0		65-10
住66	1	須恵器	坏		1/10	①10.2		66- 2
11	2	11	H					66-1
11	3	土師器	11				精製	66- 6
11	4	"	"				粗	66-5
"	5	"	甕					66-4

住66 6 住67 1 n 2 n 3 n 4 n 5 n 6	土師器 須恵器 ""土師器	坏 " "	1/8	法量①口径 ③器高 ②底径 ④胴径 ①14.8 ②7.0		66-3
n 2 n 3 n 4 n 5	# # # # # # # # # # # # # # # # # # #	"	1/9	27.0		
" 3 " 4 " 5	"	"	1/9			67-5
n 4 n 5	".		1/2	25.9	へラ記号	67-7
" 5	<u> </u>			28.0		67-6
	JL 675 BB	鉢	1/10	①18.8 ④21.0		67-4
" 6	工帥器	坏	1	①17.2 ③4.1	床面、半 photo	精製、 67-3
	"	"	1/10	①11.8	精製	67-11
" 7	"	埦	1/5	①11.0	11、力	マド内 67-10
" 8	"	Н	1/8	① 11.6	"、力	マド内 67-12
<i>"</i> 9	"	高坏			精製	67-15
// (第118区 // 10) "	甕	1	①12.6 ②6.5 ③11.8 ④11.0	床面、ph	oto 67-2
" 11	"	#	1/6	① 17.8		67-13
" 12	"	11	1/7	①20.8	半精製	67-8
" 13	"	"	1/6	①21.0		67-9
<i>"</i> 14	"	H	1/2	①20.3	床面、ph	oto 67-1
n : 15	"	"	1/8	①27.2	カマド内	67-14
住68 1	須恵器	蓋	1/6	①13.8 ③3.7		68- 9
" 2	"	"		①12.2 (③3.6)	へラ記号	68-10
" 3	#	"	1	①11.5 ③4.0	"	68- 6
" 4	"	"	1/2		"	68-8
<i>"</i> 5	"	坏		②5.5 ④ 11.6	"	68- 7
" 6	土師器	髙坏	1/5	① 11.0	精製	68-12
<i>n</i> 7	# .	甕			粗	68-14
# 8	11.	壺		①8.2 ③16.3 ④19.1	精製、ph	oto 68-5
<i>"</i> 9	"	甕	1/4	①11.9 ④ 12.2		68-13
" 10	n,	17	1	①13.6 ③15.3 ④13.8	photo	68- 3
" 11	ii ii	"	1	4 14.0	n n	68-2
" 12	ıı	"	1	①13.4 ③16.5 ④14.7	カマド内 photo	68-1
" 13	"	"	1/2	①15.5 ③17.1 ④15.4	photo	68-4
" - 14	"	"	1/5	① 21.5		68-11
住69 (第119図	須恵器	蓋		①11.1 ③3.9	へラ記号	69- 5
" 2	ıı .	"	1/4	①11.0 ③3.1	"	69-12
<i>n</i> 3	n,	坏		①11.2 ③3.6 ④13.2		69- 7
<i>n</i> 4	"	11	1	①10.0 ③3.9 ④12.5	ヘラ記号 photo	69-2
<i>"</i> 5	"	"	1/4	①10.1 ④ 12.3	カマド内	69-8

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径		考
住69	6	須恵器	坏			①9.7 ③3.0 ④11.7	photo、*	ヘラ記 69-1
11	7	#	"		1	①8.2 ③2.6 ④10.4	" 、	" 69- 3
11	8	"	"		1	①8.4 ③2.2 ④10.6	" 、	n 69- 4
#	9	"	"			①10.2 (③2.2) ④12.2		69-11
H	10	n	"		1/6	①9.6 ④ 11.8		69- 9
#	11	#	H			①8.6 ③2.2 ④10.4		69-10
11	12	"	蓋			①12.5 ③1.9 ④15.1	粘土層中	69-13
Ħ	13	#	坏			②8.4		69-6
#	14	11	壷		1/8	҈09.1		69-14
H	15	. 11	"			-		69-15
"	16	"	"					69-16
11	17	"	平瓶			210 420.0	ヘラ記号 photo	69-3
"	18	土師器	坏		1/8	D 13.8	精製	69-58
"	19	11	11				カマド横 製	、半精 69-33
"	20	11	"				" .	、精製 69-29
Н	21	"	高坏				カマド横	69-26
"	22	"	坩		1/6	₾6.4 ♠8.3	精製	69-60
11	23	"	埦		1/4	①9.9 ③6.4	半精製	69-61
"	24	"	壺		1/6	①7.0 ④8.2	"	69-59
H	25	"	脚台			26.25		69-25
H	26	n	甕					69-37
11	27	11	11				カマド横	69-30
"	28	"	11					69-31
11	29	"	"					69-35
11	30	"	"					69-22
11	31	n	#				カマド横	69-23
"	32	n	#				n.	69-27
11	33	"	"			26.7		69-39
"	34	n	"			①12.4 (③15.0) ④13.6		69-43
11	(第120図) 35	"			1/4	15.0		69-46
11	36	"			1/8	①16.0		69-36
11	37	"			1/8	①17.0	カマド横	69-19
"	38	"			1/3	⊕17.2		69-24
"	39	"			1/6	⊕18.8	カマド内	69-20
"	40	n.				①18.6	カマド横	69-18
	•	•			-			

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住69	41	土師器	甕		1/6	① 19.8	カマド内	69-21
11	42	"	"		1/7	①20.0	"	69-50
H	43	"	11		1/3	①14.0 (③19.6) ④17.7		69-57
ŋ	44	"	H		1/6	①22.0		69-55
11	45	n	11			D21.2		69-54
"	46	"	"	-		①20.3	半精製	69-34
"	47	, 11	"		1/8	⊕20.6	カマド内	69-56
"	48	"	11		1/8	€21.2		69-51
IJ	49	"	IJ		1/4	①22.6	半精製	69-17
"	50	#	II				カマド内	69-45
"	51	"	鍋			①30.0		69-38
11	52	"	甕			①29.0		69-28
11	53	"	11			①26.8 ④24.3	カマド内	69-44
11	54	11	#		1/12	①32.0		69-52
, ,,	55	11	"		1/4	①34.0 ④31.3	カマド外 り	土器溜 69-42
"	56	"	"					69-32
"	57	"	"		Γ			69-53
11	58	"	"					69-40
11	59	"	甑					69-41
住70	1	土師器	坏			①14.2 ②10.7 ③3.3	photo	70-1
"	2	11	甕					70-2
"	3	"	甑					70-3
住71	1	須恵器	高坏		1/4	① 15.8		71-1
11	2	土師器	甕		1/4	①17.8 ④ 17.4		71-2
n	3	"	. #		1/4	⊕23.2		71-3
住72	(第121図) 1	須恵器	坏		1/4	①11.0 (③3.6) ④13.1		72- 1
11	2	土師器	"			-	精製	72-3
"	3	"	甕					72- 2
住73	1	須恵器	坏					73- 2
"	2	土師器	n		1/4	①21.7 ③2.9	精製	73-1
住74	1	須恵器	坏					74-2
11	2	土師器	"				精製	74-6
"	3	"	埦				"	74- 9
n	4	11	高坏		1/2	①16.3	" 、pl	noto 74-1
"	5	11				(28.6)	"	74-10

		1			_			
遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 ②底径 ④胴径	備	考
住74	6	土師器	甕		1/5	①12.4 ④11.8		74-5
"	7	11	"			14.4		74-4
"	8	"	"		1/4	①17.4 ④ 15.6		74-8
"	9	"	"		1/6	①17.3 ④ 18.8		74-3
H	10	"	11		1/5	①18.2		74-11
Ħ	11	"	"					74-7
住75	1	須恵器	坏			4		75- 1
11	2	土師器	甕		1/6	10.6		75-3
11	3	77	11		1/3	①14.2 ④14.0		75~ 6
"	4	"	11		1/6	①16.0 ④14.6		75-2
IJ	5	"	11					75- 5
#	6	"	"					75- 4
住76	1	須恵器	坏				へラ記号	76- 1
#	2	土師器	"					76- 6
"	3	"	鉢			①15.0 ②10 ③9.7		76-7
11	4	"	甕		1/6	①15.6		76- 2
"	5	"	"					76-3
"	6	"	甑					76- 4
11	7	"	"					76- 5
住77	1	須恵器	蓋		1/5	①12.8 ④ 15.0		77- 1
H	2	土師器	坏			①15.8 ②12.0 ③3.3	精良	77- 6
H	3	"	,,				"	77-8
#	4	"	11		1/7	①13.4	"	77-5
H	(第122図) 5	11	埦		1/7	①16.7	"	77- 7
"	6	#	甕					77-2
"	7	"	"					77-4
"	8	"	"				-	77-3
"	9	"	ŋ					77-9
住78	1	須恵器	蓋			14.4		78-3
"	2	土師器	坏		1/8	①12.0 ②10.4 ③4.0	精製	78- 4
"	3	"	"		1/2	①10.6 ③4.5 ④12.0	" 、 ^	ラ記号 78-2
"	4	11	埦				半精製	78- 7
#	5	"	甕					78- 5
"	6	"	"		I	①13.3 ③15.4 ④15.6	カマド裾、 photo	78-1
"	7	н	"		1/8	①24.0 ④23.7	床下層	78-8

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住78	8	土師器	甕		1/6	①20.6 ④22.3		78-9
11	9	"	11		1/4	①23.8		78-6
住79	1	須恵器	甕					79- 1
H	2	土師器	IJ		1/4	①13.9	床面	79- 2
11	3	"	"		1/6	①20.9	カマド内	79-3
住80	1	須恵器	眯		3/4	①12.9 ③3.8	ヘラ記号、 photo	80-1
"	2	"	坏		1/8	①11.7 ③3.7 ④13.7	ヘラ記号	80- 7
"	3	11	IJ					80-9
"	4	11	11		1/12			80-8
11	5	"	蓋					80-6
n	6	"	坏			28.3		80-3
11	7	"	"		1/8	@10.0		80-4
ŋ	8	土師器	"		1/8	15.6	精製	80-12
#	9	"	甕		1/4	①20.6		80-10
#	10	"	"		1/10	€21.1		80-11
住81	(第123図) 1	須恵器	蓋		1/6	①11.2 ③2.2 ④13.1		81-7
"	2	11	n		1/4	①11.3 ③3.0 ④13.6	ヘラ記号、 photo	81-4
11	3	#	"		1/4	⊕14.2 ⊕16.5		81-6
"	4	"	"		1	①16.4 ③ 3.2	photo	81-5
11	5	"	坏		1/2	28.4	床面	81-9
11	6	n	"			@11.2		81-8
"	7	"	"			@10.4	カマド内	81-10
"	8	"	"		1/7	① 13.1		81-11
"	9	"	"		1/9	①12.0		81-12
"	10	"	"		I/11	① 12.0		81-13
"	11	#	高坏		1/4	29.6	カマド内	81-14
11	12	土師器	坏		1/4	₾13.2,		81-16
11	13	"	"				床面	81-23
"	14	"	埋				精製	81-15
"	15	"	甕		1/5	①12.2 ④ 13.2		81-17
11	16	"	11		1/5	①14.8 ④12.5		81-20
11	17	"	"		1	①15.4 ②8.2 ③14.1 ④13.8	カマド内、 photo	81-2
11	18	II	11			①20.4 ④18.5		81-3
"	19	"	н		1/6	①21.0 ④ 25.3	床面	81-19
11	20	"	"		1/4	D21.8	"	81-18

									(L)
遺構	挿図No.	種	別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住81	21	土師	器	甑					81-22
#	22	n		甕		1/5	①36.1 ④34.4	床面、pl	noto 81-1
"	23	#		11			-	n	81-21
住82	1	須恵	器	蓋		1/10	①13.4 ④16.0	カマド	82-4
"	2	"		"		1/2	①15.1 ③1.5	床面、p	hoto 82- 2
"	3	"		坏			2 11.1	н	82-3
n	4	#		壺					82- 5
"	5	土師	器	埦				精製	82-14
"	6	ļ		η			① 12.5	粗	82-10
H	7	"	-	鉢			_	カマド馬 精製	辺、半 82-15
"	(第124図) 8	"		"	-	1/4	①9.9	photo	半精製 82-1
11	9	11		H			24.5	カマド、	精製 82-17
"	10	"		11			27.3	カマド	82-9
"	11	n	Ì	11				精製	82-13
11	12	"			_		(25.2)		82-11
11	13	"		甕		1/9	①18.2	床面	82-6
#	14	"		Ħ		Г		カマド、	精製 82-8
11	15	"		把手			-	半精製	82-12
住83	1	土師	器	坏				精製	83-1
住84	1	須恵	(器	坏		3/4	①14.8 ②10.4 ③5.9	photo	84-1
11	2	,,		壺		1/6	4 16.4		84-2
#	3	土師	「器	坏		1/6	① 13.8	精製	84-7
11	4	n		"				"	84-8
"	6	"	.]	鉢					84- 5
11	7	11		甕		1/8	①15.7 ④ 15.5	床下層	84-3
"	8	"		11		1/6	①22.0	床面	84-9
"	9	"	.	n		1/6	①22.0		84-10
Ĥ	10	"	,	"		1/8	①25.1		84-6
"	11	"	,	鍋		1/6	⊕27.1		84-4
住85	1	須恵	器	坏		1/2	①8.7 ③3.1 ④10.5	床下層、 号、pho	ヘラ記 oto 85-5
"	2	土師	器	坏					85-10
"	3	"		"				床下層	85-9
"	4	"	,	埦			①11.6 ③6.1	photo、号	ヘラ記 85-4
н	5	"		н			①8.0 ②4.8 ③4.5	photo	85-1
,,	6	"	,	11		T		半精製	85- 8

住85 "	7	土師器					
			捥	1/3	①14.0 (③5.5)	photo	85-2
12.00	8	"	甕	1/4	①10.0 ④ 10.6	やや粗	85-7
住86	(第125図) I	須恵器	蓋	1/4	①9.3 ④11.2	床下周	86-11
"	2	"	11			床下層中 南	央土壙 86-13
"	3	11	"			床下層	86-15
"	4	11	"				86-7
"	5	"	11				86-9
11	6	"	"			床下層	86-14
n	7	"	"	1/6	16.8		86- 1
#	8	"	"	1/10	①14.2		86- 6
H	9	"	坏	1/8	①14.0		86-3
"	10	#	"	1/6	①15.0 ②10.8		86- 4
"	11	"	"				86-2
"	12	"	瓶		①7.2	床下層	86-12
"	13	"			①11.8		86-8
"	14	土師器	坏			床面	86-20
"	15	#	"				86-19
"	16	n	11	1/8	1 12.8	精製	86-26
n	17	"	11	1/8	16.2	"	86-30
"	18	n	"		①17.0		86-18
"	19	"	塡	1/5	①11.4	精製	86-22
"	20	"	11	1/4	10.4	床下層、	やや粗 86-29
"	21	"	"	1/3	①8.0 ②6.2 ③4.6	粗	86-24
"	22	"	"			半精製	86-25
"	23	"	壺			床下層	86-35
"	24	"	#			n	86-23
"	25	"	甕			" ,	精製 86-3 <u>4</u>
"	26	"	"			4	86-28
11	27	"	"	Γ		床下層	86-33
11	28	11	H				86-27
11	29	"	甑			床下層、	精製 86-31
"	30	"	甕	1/7	①22.0	床面	86-16
"	31	n	"	1/8	①24.0	床下層	86-32
"	32	,,,	"	1/4	€26.2	床面	86-17
住87	1	須恵器	蓋	1/8	⊕12.3 ⊕14.7		87-1

	-	
1		

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高	備	考
住87	2	須恵器	蓋				床下層	87-8
"	3	"	"				"	87- <u>2</u>
"	4	#	"					87-5
"	5	"	#					87-4
,,	6	"	"					87-3
,,	7	11	壺			①9.2	床下層	87- 7
"	8	11	甕					87- 6
"	9	土師器	坏		1/8	⊕13.0	精製	87-14
"	10	"	"		1/3	҈08.4	床下層、	精製 87-10
"	11	"	н		1/5	① 10.0	やや粗	87-12
"	12	"	鉢		1/2	26.7	粗製、木	葉痕あ 87-11
н	13	"	甕		1/10	①13.0		87~13
"	14	11	"		1/8	①21.4	精製	87-9
"	15	11	,,,		1/10	⊕27.2		87-16
住89	(第126図) 1	須恵器	蓋		1/6	① 17.1		89-1
"	2	"	11		1/12	① 16.4	_	89-7
11	3	"	77	-	1/4	①14.4 ③1.95		89~ 3
"	4	"	11				カマド内	89-6
"	5	"	11			-		89- 5
#	6	"	"					89- 4
"	7	"	坏			@9.4	カマド内	89-2
"	- 8	土師器	"		1/6	①14.2	カマド内	、精製89-9
11	9	н	婉				"	89-8
11	10	"	甕		1/6	①14.8		89-10
11	11	"	"		1/7	① 20.7	精製	89-12
11	12	"	11			⊕23.0	カマド内	89-11
住90	ĺ	土師器	坏	-	1/7	①16.3 ②10.6 ③4.3		90-1
."	2	η	甕		1/6	①18.0°	-	90-2
住91	1	須恵器	坏			①13.0 ②10.2 ③4.7		91-1
,,	2	11	11			- · .		91-2
11	3	土師器	"				精製	91-6
11	4	"	鉢			① 13.3	粗製	91-3
11	5	"	甕				半精製	91-5
'n	6	"	,,		T			91- 4
住92	1	須恵器	蓋		1/10	17.6		92- 2

								(IS)
遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住92	2	須恵器	蓋	-				92-4
H	3	"	坏					92-6
H	4	"	"	-	1	①13.2 ②9.3 ③4.6	床面、ph	oto 92-1
#	5	"	#			@11:3		92-5
H	6	"	11		_	①15.6	·	92-3
#	7	土師器	坏		1/8	① 13.9	床下層、	精製 92-8
"	8	"	"				精製	92-10
"	9	"	婉				半精製	92-7
"	10	"	鉢				粗	92-13
"	11	,,,	甕					92-9
"	12	,,,	"		1/6	① 13.5	床下層	92-12
"	13	"	"		_	①17.5 ②18.8	カマド周	辺 92-11
住93	1	須恵器	蓋	-:-				93- 2
"	2	"	"					93 1
"	3	土師器	坏		1/10	D 16.3	精製	93- 5
#	4	11	鉢		1/2	2 5.5		93-8
#	5	. #	甕		1/2	①14.1 ④ 13.3	床面	93-6
"	(第127図) 6	"	"		1/2	①15.1 ④ 15.2	,,	93-7
"	7	"	"		1/12	D23.0	-	93-3
"	8	"	"		1/10	① 28.2		93-4
"	9	"	把手					93-10
"	10	"	甑				-	93-9
住94	1	須恵器	蓋					94- 1
II	2	土師器	甕					94-3
11	3	"	"		1/6	₾24.0		94-2
住95	1	須恵器	蓋			-		95-10
"	2	"	"					95-12
"	3	"	"		_			95-11
ij	4	n	"		1/3	①13.8	カマド内 photo	J. 95-5
11	5	"	坏			①16.6 ②9.0 ③6.0	,	95-6
11	6	11	"			①13.6 ②9.0 ③4.9	床下層	95-8
"	7	"	11			29.4	"	95-7
#	8	"	"			①13.3 ②9.7 ③4.5	photo	95- 4
#	9	"	n			28.6		95- 9
"	10	"	"		T	-		95-13
	L		1					

								(19)
遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量②口径 ③器高	備	考
住95	11	須恵器	壺	-			床下層	95-14
11	12	土師器	坏			①15.2 ②11.7 ③3.7	カマド西、 photo	95- 2
"	13	n	"		1	①15.0 ③3.3	,,	青製 95-3
11	14	"	"			①16.2 ③3.2	精製	95-15
"	15	#	"		1/4	①13.6 ③4.0	# 、床	下層 95-16
"	16	"	埦		1/6	① 11.8	床面 .	95-21
H	17	"	甕					95-17
ij	18	"	#		1/6	①16.0 ④13.1		95-20
11	19	"	#		1	①15.5 ③14.4 ④12.7	カマド支 photo	脚、 95-1
#	20	"	"		1/8	①21.6 ④ 19.0		95-19
"	21	"	"		1/9	①23.2	床下層	95-18
住96	(第128図) I	須恵器	蓋					96-7
11	2	"	11					96-10
"	3	"	11					96-9
"	4	"	11					96-8
"	5	II	坏					96-15
"	6	"	"				床下層	96-16
"	7	"	#		1/12			96-13
11	8	"	"		1/9	①11.4		96-14
,,,	9	"	"		1/8	19.4		96-11
"	10	n	"					96-12
11	11	"	壺				ヘラ記号	96-3
11	12	"	甕					96- 4
n	13	"	"		1/6	① 16.5		96-6
H	14	"	"		1/3	⊕22.2		96-5
"	15	"	"			4 45.2		96- 1
"	16	土師器	坏		1/6	①14.4 ②11.5 ③2.2	精製	96-24
11	17	"	,11				"	96-26
"	18	"	"		1/4		"	96-20
"	19	"	"		1/6	⊕15.4	"	96-25
"	20	"	"				半精製	96-21
"	21	"	H			24.2	photo	96- 2
"	22	"	魏					96-22
"	23	"	"		Γ			96-23
"	24	"	"		1/4	①16.2 ④ 14.5		96-18
	1	1	-				1	

								20)
遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住96	25	土師器	甕		1/6	①17.6 ④ 17.6		96-19
"	26	"	"		1/4	⊕17.8		96-28
"	27	"	"		1/6	①22.1		96-17
"	28	'n	甑		Г	@14.2		96-27
住97	(第129図) 1	須恵器	蓋		1/12	①12.7		97- 7
,,	2	"	坏				ヘラ記号	97-8
n,	3	"	蓋		1/4	①13.1 ③2.9 ④14.8	photo	97-2
,,	4	"	11		2/3	①13.8 (③2.0) ④16.0	床上、ph	oto 97-3
n	5	"	坏		1/8	①10.8	-	97- 5
"	6	"	11			@12.0		97- 4
"	7	"	"					97-6
"	8	土師器	坏			①10.6 ③3.1	カマド内	97-13
H	9	"	"		1/6	①10.5 ②6.6 ③3.6	-	97-10
"	10	"	把手					97-14
n	11	n	甕		1/3	①11.0 ④ 10.5	カマド内	97-15
11	12	"	"		1/7	①18.6	精製	97-9
,,	13	"	"	_	1/10	⊕26.2	"	97-12
"	14	"	11				"	97-11
住98	1	須恵器	坏		2/3		ヘラ記号	98-3
"	2	"	蓋		1/8	①13.4 ④15.7		98- 1
"	3	"	11		1/10	①12.5 ④ 14.8		98- 2
"	4	土師器	高坏				精製	98- 5
"	5	"	埦		1/7	11.7	半精製	98-4
"	6	"	甕		1/7	①14.6		98-6
住99	1	須恵器	蓋					99-3
"	2	"	"					99- 4
"	3	"	"		1/2	①16.4 ③2.9	photo	99- 2
"	4	上師器	坏		1	①15.0 ③3.5	精製、pl	noto 99-1
"	5	"	"		1/3	①16.3 ③3.5	"	99- 9
#	6	"	甕			①14.1 ③12.2 ④12.4	カマド内	99-8
#	7	"	"			①22.3 ②10 ③34.4 ④27.2	カマド内 photo	`99- 5
"	8	"	鍋			①29.4	半精製	99-6
"	9	"	甑					99-10
住101	(第130図)	須恵器	坏		1/6	①11.8 ③3.8 ④14.0	床下層	101-1
"	2	"	"				"	101-2

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住101	3	須恵器	坏				床下層	101-3
	4	土師器	埦				精製	101-4
	5	"	甕				# 床下層	101-5
	6	"	"					101-6
住102	1	土師器	坏		1/4	①12.8 ②3.8	床面、ph	oto 102-1
	2	H	甕					102-2
位 103	1	須恵器	坏				床下層	103-2
	2	#	"		1/16			103-1
	3	土師器	"				精製	103-13
	4	H	甕		1/5	①12.0 ②10.6		103-6
	5	"	"		1/5	①10.0 ④ 11.5	カマド内	103-3
	6	"	"			26.1 @13.4	貼床	103-12
	7	"	"	-	1/8	①12.5	貼床	103-5
	8	"	"		1/8	1 15.3		103-4
	9	"	"			①22.1	_	103-11
	10	"	"		1/8	①23.2 ② 20.9		103-9
	11	"	"					103-7
	12	11	"				床下層	103-8
	13	H	甑		1/8	2 12.6		103-10
住104	1	須恵器	坏		1/10	① 13.8		104-3
	2	n	"		1/9	①12.4		104-4
	3	H	"					104-2
	4	土師器	坏				精製	104-8
	5	土師器	坏				半精製	104-7
	6	"	城			①7.4(③4.6)	精製	104-9
	7	"	甕			①15.4 ④ 13.7		104-5
	8	"	"		1/5	①15.6 ④ 13.7		104-6
	9	"	"		1/3	①15.4 ③14.2 ④12.7	photo	104-1
住105	(第131図) 1	須恵器	坏					ヘラ記 105-12
	2	11	11		1/4	①11.6 ③4.1		105-5
	3	"	蓋		1/7	①9.7 ④12.0		105-10
	4	H	"		1/7	①14.4 ④ 16.4	床下層	105-9
	5	, ,,	坏		1/10	①13.2		105-8
	6	"	"		1/8	①12.6		105-6
	7	"	"		1/2	②8.9	ヘラ記号	105-7

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量②口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住105	8	土師器	坏		1/6	① 11.8	精製	105-16
	9	土師器	婉		1/5	① 13.0	半精製	105-20
	10	"	坏		1/6	①14.6 ③3.6	精製、	photo 105-4
	11	"	鉢		1/4	①14.3		105-14
	12	"	甕		1/4	①10.4 ④ 9.4		105-15
	13	"	"			①13.0 ④ 12.0		105-24
	14	"	"			①14.6 ④ 13.6	_	105-18
	15	"	11		1	①14.0 ③15.6 ③13.3	カマド photo	内、 105-3
	16	η	11		1/5	①16.1 ④ 16.3	半精製	105-22
	17	"	"		2/3	①16.7 ④ 17.5	photo	105-1
	18	"	"		1/4	①20.4	n	105-2
	19	"	甑		1/6	214.4		105-17
	20	"	"			·		105-13
	21	"	鍋		1/10	①33.0		105-19
	22	"	鍋			①37.0	精製	105-21
住106	1	土師器	坏				精製	106-5
	2	"	"				粗	106-4
	3	"	"			①11.4 ③4.2		106-1
	4	"						106-6
	5	"	甕		1/6	①19.6		106-2
	6	η	鍋		1/8	①33.2		106-3
住107	1	土師器	甕		1/5	① 17.8		107-1
住108	(第132図) 1	須恵器	坏					108-6
	2	"	蓋					108-4
	3	"	坏				へラ訳	号 108-5
	4	"	蓋		1/8	①12.4 ④ 14.8		108-3
	5	"	坏			① 11.8		108-2
	6	土師器	坏		1/10	14.3 32.7	精製	108-7
	7	"	11				精製	108-9
	8	"	埦				半精製	108-8
	9	"	鉢		1/8	①12.7 ②9.0	n	108-1
	10	"	甕		1/6	18.5	精製	108-10
	11	"	n'		1/6	①23.0		108-11
	12	"	甑			@11.2		108-13
	13	#	11					108-12

$\overline{}$	

遺構	挿図Na	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
住108	14	土師器	把手					108-14
住110	1	須恵器	蓋					110-3
	2	"	"					110-4
	3	11	坏		1/9	① 11.0		110-5
	4	"	高坏					110-2
	5	土師器	坏		1	①14.9 ③2.3 ④16.8	屋内土場 photo	110-1
	6	"	"		1/7	①17.1 ③2.8	精製	110-8
	7	11	"		1/10	①17.1 ③2.2	n	110-22
	8	n	"				半精製	110-15
	9	"	"				精製	110-18
	10	"	#				n	110-16
	11	"	11				半精製	110-14
	12	n	"				精製	110-11
	13	"	坩		1/8	①10.0 ④ 12.5	n.	110-19
	14	"	埦		1/4	①13.7 ③5.3.	半精製	110-7
	15	"	鉢			26.0	屋内土場	₹110-20
	16	"	"			25.4		110-23
	17	"	壺		1/6	①15.2		110-12
	18	"	甕		1/3	①13.6 ④ 11.5	床面	110-21
	19	"	"					110-10
	20	"	"					110-9
	21	"	"					110-24
	22	"	甑					110-17
	23	,,	"					110-25
	24	"	#		1/8	@15.2	半精製	110-13
住111	(第133図) 1	須恵器	蓋					111-3
	2	"	坏		1/10	①10.3 ④ 12.6		111-1
	3	n .	"			28.6		111-2
	4	土師器	坏		1/3	①16.0 ③2.8	精製、~	トラ記号 111-4
	5	11	"		1/6	1 14.6	"	111-6
	6	"	甕					111-5
	7	"	カマド					111-7
住112	1	須恵器	坏					112-3
	2	須恵器	坏		1/5	D 12.6		112-2
	3	"	"			211.7		

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残		備	考
住:112	4	土師器	坏				精製	112-7
	5	"						112-10
	6	11	壺			210.0	精製	112-5
	7	11	甕		1/4	⊕13.0		112-6
-	8	11	"		1/6	① 15.9		112-8
	9	jj	"					112-4
	10	"	H	_	1/8	①20.8		112-9
								·
B33	1	須恵器	蓋					P2017-1
_	2	"	坏					P2017-2
	3	"	"					P2017-3
	4	土師器	高坏					P2022-1
B38	1	土師器	坏		1/7	① 9.8		P1130-1
B44	1	須恵器	蓋					P2234-1
B52	1	土師器	甕					P758-1
	2	"	"			4 20.8	半精製	P758-2
B54	1	須恵器	坏		1/11			P1135-2
	2	<i>#</i> ·	"					P1135-1
B55	1	須恵器	坏			①11.0 ②9.2 ③3.0		P2025-3
	2	"	甕					P2025-2
D6	(第134図) 1	須恵器	蓋		1/9	①10.9 ④ 13.2	上層	D6-6
	2	"	坏			①11.2 ②7.7 ③3.9	n	D6-8
	3	"	"		1/6	2 10.6	下層	D6-7
	4	土師器	坏		1	①12.4 ③4.1	上層、	photo D6-5
	5	"	埦		2/5	①9.8 ③5.6	", "	D6-4
	6	#	甕			14.3 414.0	photo	D6-2
	7	#	"		2/3	①16.2 ④18.8		photo D6-3
	8	"	"		2/3	①17.7 ④ 22.3	上層、	photo D6-1
	9	"	"		1/10	①21.3 ④24.0	"	D6-1
	10	"	#			① 19.1		D6-10
	11	"	#			①22.8		D6-12
	12	"	"			D23.9 @27.4		D6-9
D7	1	須恵器	蓋		1/9	12.6	上層	D7-2
	2	11	"			①10.8 ③1.7 ④13.1	上層	D7-8

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
D7	3	須恵器	蓋		1/8	①15.0 ④ 16.4	下層	D7-10
	4	. "	111		1/10	16.9	n .	D7-9
	5	"	11				上層	D7-6
	6	11 .	"				n	D7-3
	7	#	坏		1/7	①14.6	n .	D7-5
	8	"	#		1/4	⊕13.4	. "	D7-4
	9	"	"			①15.2(②9.8)	photo	D7-1
	10	"	壺				上層	D7-7
	11	土師器	坏			① 15.8	下層、精	製 D7-15
	12	"	٠,,,		1/8	①13.7(③5.1)	半精製	D7-17
	13	"_	埦				″、上層	D7-14
	14	"	H				n 、 n	D7-13
	15	11	甕			① 11.4	上層	D7-18
	16	"	"		1/4	①14.1 ④12.6	"	D7-21
	17	"	"		1/4	①14.2 ④ 14.3	n	D7-11
	18	"	"			①16.8	n	D7-12
	(第135図) 19	n	H		1/10	①22.2	下層	D7-19
	20	11	"		1/8	①22.9	上層	D7-20
	21	"	甑		1/8	②14.7	n	D7-16
D8	1	須恵器	蓋		1	①8.4 ③3.4 ④10.5	photo	D8-1
	2	11	#					D8-2
	3	"	坏		1/6	①10.8 ④ 12.6		D8-3
	4	"	"		1/4	①11.7 ④13.6	へラ記号	D8-4
	5	"	蓋					D8-5
	6	"	坏		1/5		上層	D8-6
	7	土師器	甕		1/4	①14.4		D8-7
	8	"	"			①19.0		D8-8
	9	,,,	甑					D8-9
D9	1	須恵器	坏					D9-1
	. 2	土師器	甕		_	-		D9-2
	3	"	"		1/4			D9-3
D10	1	須恵器	蓋		1/4	(4)10.9		D10-3
	2	#	"		1/8			D10-2
	3	"	坏		1/3			D10-4
	4	#	甕		1/5	①26.2		

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
D10	5	土師器	坏		1/4	①14.9 ③3.1	精製、	ヘラ記号 D10-6
	6	n	甕			⊕20.9	床面付	丘 D10-7
	7	"	"		1	①21.7 ②13 ③35.5 ④27.5	photo	D10-1
D11	1	須恵器	蓋				上層	D11-5
	2	"	坏				"、~	ラ記号 D11- <u>4</u>
	3	"	"		1/4	210.8	上層	D11-6
	4	土師器	坏		1/10	①15.8 ②10.2 ③4.3	下層	D11-8
	5	"	鉢			②7.5 -	上層	D11-9
	6	"	甕	,		①8.4	下層	D11-13
	7	"	"		2/5	①17.4 ③16.8 ④17.6	上層、	photo D11-2
	8	"	"			①22.4	上層	D11-12
	(第136図) 9	"	"		3/5	①17.2 ④ 16.6	photo	D11-3
	10	"	鍋		1/7	①27.2 ④ 21.8	下層	D11-11
	11	"	甑			@15.2	半精製	、下層 D11-7
	12	"	鍋		1/5	①37.0		D11-10
	13	"	甕		9/10	①32.0 ③34.0	下層、	photo D11-1
D12	1	須恵器	蓋		1/8	①10.6 ④13.0	上層	D12-3
-	2	"	11				"	D12-4
	3	"	坏			①13.0 ②8.8 ③4.7	"	D12-5
	4	"	11		1/3	①14.2 ②9.8 ③4.0	"、ph	oto D12-2
	5	土師器	"		1/3	①15.4	ル、半 photo	精製、 D12-1
	6	"	甕		1/8	12.0	上層	D12-9
	7	11	"			①21.4	n	D12-8
	8	11	11		1/4	①32.2(②14.5)③ 32.6	11、半	精製 D12-7
D13	(第137図) 1	須恵器	蓋			①12.2 ④ 14.8	下層	D13-11
	2	ii	"		1/7	①13.3 ④ 15.4	上層	D13-15
	3	"	"		1/8	①14.0 ④16.4	下層	D13-3
	4	11	"		1/4	①14.8 ④ 17.5	上層	D13-12
	5	"	坏				", ^	ラ記号 D13-1
	6	"	蓋				上層	D13-4
	7	"	"				下層	D13-9
	8	"	"				上層	D13-6
	9	"	11				下層	D13-8
	10	"	"				", ^	ラ記号 D13-18
	11	"	坏			①13.2	下層	D13-7
				•			•	

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備考
D13	12	須恵器	坏			29.6	D13-2
	13	"	H		1/7	② 11.0	D13-13
	14	"	壺		1/7	₾8.6 @10.2	上層 D13-16
	15	#	"		1/6	① 13.8	下層 D13-14
	16	"	甕				上層 D13-17
	17	土師器	坏		1/10	16.2	″、半精製 D13-28
	18	"	埦		1/6	①9.3	下層、# D13-27
_	19	"	坏		1/4	①11.6 ③3.9	" , " D13-19
	20	n	埦			① 13.2	" 、" D13-29
	21	"	甕		1/8	① 12.7	上層 D13-20
	22	"	"		1/6	12.0	" D13-23
	23	ıı	11			①23.2	下層、半精製 D13-26
	24	"	甑			②21.0	半精製 D13-25
	25	"	甕				上層、半精製 D13-24
	26	n	鍋			①36.4	半精製 D13-22
D14	1	土師器	坏		1/6	①9.2 ④11.7	上層 D14-3
	2	"	甕				" D14-5
	3	#	"		1/6	①22.7	" D14-4
	4	"	"			①26.4 ④ 27.5	photo D14-1
	5	"	"			①27.0 ④ 28.5	" D14-2
D15	(第138図) 1	須恵器	蓋			①14.8	D15-1
	2	#	"				D15-2
	3	土師器	鉢		1/3	①8.0 ③4.8	D15-3
D16	1	須恵器	蓋			①12.8	D16-7
	2	"	"				D16-2
	3	"	ŋ				D16-6
	4	"	壺			28.8	D16-8
	. 5	"	坏				ヘラ記号 D16-1
	6	"	"			,	D16-5
	7	n	n		1/10	⊕13.2	D16-4
	8	"	"		1/7	16.4	D16-3
	9	土師器	"		1/6		半精製 D16-13
	10	"	"		1/10		精製 D16-14
	11	"	城ì			①10.8 ④12.0	半精製 D16-12
	12	"	脚		1/6	29.8	D16-11

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 ②底径 ④胴径	備	考
D16	13	"	甕		1/5	①12.0 ④10.2		D16-9
	14	"	鍋	1/6		D26.4		D16-16
D17	1	須恵器	坏		1/10	①8.9 ④ 10.6		D17-2
	2	"	"					D17-3
	3	"	"					D17-4
	4	土師器	埦		1/7	①7.8 ④8.3	精製	D17-12
	5	11	高坏				", ph	oto D17~1
	6	"	甕		1/6	₾8.8		D17-11
	7	"	"		1/7	①13.0		D17-7
	8	"	n		1/6	114.4		D17-9
	9	#	"		1/8	① 20.0		D17-6
	10	#	"			①20.6		D17-5
	11	"	"		1/8	①19.8		D17-8
	12	"	"			_		D17-10
D18	1	須恵器	蓋		1/4	① 10.3		D18-2
	2	土師器	鉢		1/6	①7.1 ②5.3 ③4.3		D18-5
L	3	"	甕			②6.0 ———		D18-6
	4	"	埦		1/4	①17.0 ③6.5	photo	D18-1
	5	"	甕		1/6	①18.6		D18-7
	6	11	甑		1/8	214.8		D18-3
	7	"	甕		1/8	⊕31.8	半精製	D18-4
D19	(第139図)	須恵器	蓋					D19-20
	2	"	"					D19-19
	3	#	坏			①10.6 @13.6		D19-28
	4		蓋		1/9	⊕11.0 ⊕13.0	ヘラ記	号 D19-21
	5	"	"		1/6	①14.4 ④17.2		D19-22
	6	"	坏			①12.6 ③3.6	photo、 号	ヘラ記 D19-15
	7	11	"		l	①13.0 ②8.8 ③4.4	photo	D19-16
	8	"	"			28.0		D19-24
	9	n	平瓶		I/4	①6.3	_	D19-23
	10	"	壺			4 15.6	photo	D19-17
	11	土師器	坏		1/8	①17.5	精製	D19-25
	12	"	"		1/2	①20.6	"、pho	oto D19-9
	13	"	"		1/8	①12.4	精製	D19-27
	14	11	高坏				" 、pho	oto D19-12

								_	
]No.	種	别	器種	分類	残	法量②口径 法量②底径	③器高 ④胴径	備	考
1	須息	器	蓋					中層、	へラ記号 D20-24
n	١,	. —	+7			①14.1		L 図	D20-23

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考		遺構	挿図No
D19	15	土師器	高坏	74.70		①23.6	photo	D19-8	ŀ	D20	11
-	16	"	城	-	1	①10 ③4.6		〜ラ記号 D19-18	ŀ		12
	17	"	鉢		1/3	①12.0 ②6.4	"	D19-14	ŀ		13
_	18	,,	"		1/2	③4.9 ①10.4 ②6.4	,,	D19-10	Ì		14
+	19		"		1/2	③4.4 ②7.2	n	D19-11	ŀ		15
	20	"	甕	-	1	①14.2 ③14.1 ④13.8	,,,	D19-4	t		16
	21	"	".		1/4	①14.2		D19-26	ŀ		17
	22	"	#		1	①13.5 ③13.6 ④13	photo	D19-2	ŀ		18
	23	,,,	"	-		①13.2 ④13.8	"	D19-3			19
	24	"	"		1/6	18.9		D19-31	ŀ		20
	25	"	"		1/3	①20.4		D19-34	1		21
	(第140図)	"	11		1/12	18.8		D19-39	Ì		22
	27	"	"			①18.6		D19-32	Ì		23
	28	,,	"		1/4	① 18.5		D19-35	Ì		24
	29	"	"		3/5	①19.3	photo	D19-1			25
	30	"	"			①20.5		D19-33	Ì		26
	31	"	"		1/7	①24.6		D19-36			27
	32	,,	H			①24.4		D19-29			28
	33	"	"		1/5	①24.3 ③23.8 ④28.6	photo	D19-7			29
	34	"	n			①18.9		D19-30			30
	35	"	н		2/3	①20.8	photo	D19-5			31
	36	"	,,		3/4	①21.0	photo	D19-13			(第142 32
	37	"	甑		T	⊕22.9		D19-37			33
	38	н	#			①24.1 ②9.4 ③21.9	photo	D19-6			34
	39	Н	甕			①30.7 ③32.6		D19-38			35
D20	(第141図) 1	須恵器	蓋		2/3	①12.5 ③4.0		D20-21			36
	2	"	ij					D20-17			37
	3	"	"					D20-15			38
	4	"	坏				上層、	ヘラ記号 D20-12			39
	5	"	"					D20-16		D21	1
	6	H	蓋		1/2	4)13.1	上層、	photo D20-11			2
	7	"	"		1/7	①12.2 ④14.8		D20-19			3
	8	"	"					D20-22			4_
	9	"	n.				上層	D20-13			5
	10	11	"	1	1/8	①13.2 ③1.7 ④14.9		D20-26			6

遺構	挿図No.	種別	器種	分類	残	法量②底径 ④胴径	備 考
D20	11	須恵器	蓋				中層、ヘラ記号 D20-24
	12	"	坏			①14.1	上層 D20-23
	13	n	<i>II</i> ·			① 13.5	D20-36
	14	"	"			28.9	上層 D20-20
	15	'n	"			①10.0	上層 D20-14
	16	"	"		1/8	① 10.8	D20-18
	17	"	鉢		1/9	①15.8	D20-25
	18	土師器	坏		1/2	①11.1 ③2.5	photo、ヘラ記 号 D20-10
	19	"	H			①17.6 ·	上層 D20-33
	20	"	"				中層 D20-37
	21	"	"				" D20-39
	22	"	"	_		17.0	D20-38
	23	"	埦		1/2	①8.6 ③6.3	中層、photo D20-7
	24	"	11		1	①8.8 ③9.5	photo D20-8
	25	"	甕			②7.2	中層、photo D20-9
	26	"	"		1/4	①15.4 ④ 15.6	中層 D20-31
	27	"	#		2/3	①22.2 ④ 25	photo D20-5
	28	"	"		1/3	18.6	D20-32
	29	"	11		2/3	①21.1	photo D20-6
_	30	11	鍋		2/3	①31.2 ③14.0	中層、photo D20-2
	31	"	"		2/3	①34.1 ②15.7	下層、photo D20-1
	(第142図) 32	n	鉢		1/5	①30.9	D20-28
	33	"	"		1/8	①30.0	中層、半精製 D20-30
	34	"	甕		1/5	①30.2 ④33.0	半精製 D20-34
	35	"	"			4 31.0	
	36	"			1/8	① 41.7	半精製 D20-29
	37	"	甕			①30.4 (④30.0)	半精製 D20-35
	38	"	H			①31.8 ③35.6 ④34.6	photo D20-3
	39	11	甑			@12.9	photo D20-4
D21	1	須恵器	蓋		1/5	① 12.0	D21-3
	2	"	11				D21-4
	3	#	坏		1/10	①14.4	D21-1
	4	"	. 11				D21-2
	5	土師器	"		1/8	①11.2 ④ 11.3	精製 D21-5
	6	"	. #			① 11.1	半精製 D21-6

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高	備	考
D22	(第143図) 1	須恵器	蓋		1/7	11.4		D22-7
	2.	"	"		1/2	①10.7 ③4.3	上層	D22-9
	3	"					上層、	ヘラ記号 D22-3
	4	"	坏			-		D22-5
	5	"	蓋		1/4	①10.8 ④ 12.5	上層	D22-4
	6	"	"		1/12	①12.8 ④ 14.8	n	D22-6
	7	"	坏		1/10	①12.0 ②6.6 ③3.7	n	D22-8
	8	土師器	坏			⊕16.0	#、精	製 D22-15
	9	"	"		1/8	①14.8	精製、	内黒土器 D22-14
	10	"	11		1/10	① 16.2	半精製	_
	11	"	高坏				精製	D22-10
	12	"	' //				"	D22-12
	13	"	埦		1/6	①9.4	半精製	D22-16
	14	"	11		1/8	①12.4	粗	D22-11
	15	"	甕		1/5	①18.0		D22-18
	16	"	"			①17.2		D22-2
	17	11	"		1/4	① 19.3		D22-19
	18	"	"		1	① 19.6	photo	D22-1
	19	# .	#		1/8	①21.8	上層	D22-20
	20	"	#		1/10	①29.8		D22-21
	21	, "	甑		1/12	@13.8		D22-17
	22	"	甕		1/5	①26.7 ④ 29.6	-	D22-22
		•				 -		
M1	(第144図) 9	土師器	坩			④ 7.3	下層	M1-60
	10	"	ij			①8.6 ③8.1 ④9.2	photo	M1-19
	11	, ,,	11			⊕8.0 ⊕9.2	"	M1-18
	12	ı,	"		1/6			M1-49
	13	"	"		1/6	҈08.7 ⊕10.2	上層	M1-48
	14	"	"		1/8	4 9.1	"	M1-61
	15	"	n			①9.0 ③7.6 ④8.6	" ph	oto M1-20
	16	"	11		1/3	① 9.6		M1-58
	17	"	#		1/6	① 11.0	上層	M1-50
	18	"	H			4 10.0		M1-47
	19	"	"			⊕7.4 ⊕10.3	photo	M1-17
	20	"	"		1/3		上層	M1-51

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器科	新	考
M1	21	土師器	髙坏				上層	M1-46
	22	"	"				"	M1-52
	23	"	壺			①11.8 ④19.1	下層、	photo M1-16
	24	"	"			① 15.2	photo	M1-12
	25	"	甕			①17.2 ③32.9 ④24.7	上層、	photo M1-7
	26	"	,,			①14.8 ④ 20.9	中層、	photo M1-11
	27	"	"			① 13.5	photo	M1-15
	28	"	"			①14.4 ④ 23.2	photo	M1-14
	29	"	11			①18.8 ⊕26.0	下層	M1-59
	30	"	11			①16.9 @ 26.5	photo	M1-10
	31	"	"			①17.4 ④ 29.4	photo	M1-13
	(第145図) 32	須恵器	蓋		1/7	11.4		M1-44
	33	11	"		1/7	15.4	上層	M1-41
	34	"	坏		1/4	①11.7 ③3.5 ④13.2	photo	M1-25
	35	<i>II</i>	蓋					M1-43
	36	"	'n		1/3	①15.2 ④17.3	下層	M1-42
	37	"	11		3/4	①11.8 ④ 14.3	上層、	photo M1-26
	38	"	#		1/6	①12.4 ④ 14.7	上層	M1-35
	39	"	".		1/9	①10.5 ④ 12.8	"	M1-39
	40	11	11				"、^	・ラ記 号 M1-28
	41	11	坏				", "	M1-34
	42	"	#			29.6	上層	M1-33
	43	"	蓋		1/8	① 13.8	"	M1-30
	44	"	,,				"	M1-32
	45	"	"	_			"	M1-29
	46	"	坏.		1/4	@11.0	"	M1-27
	47	#	#		1/8	①12.0	n	M1-36
	48	#	城		1/6	①9.6	"	M1-40
	49	"	横瓶			①12.0		M1-46
	50	土師器	坏		1/6	①15.0 (③3.7)	上層、	精製 M1-64
	51	11	"		i	①11.4 ③4.8 ④12.0	" , "	M1-24
	52	. "	鉢			①9.8 —	"、半	精製 _M1-63
	53	"	高坏				上層	M1-53
	54	"	"		2/3	②10.6	下層、 photo	精製、 M1-21
	55	"	脚台			②8.6 ————	photo	M1-22

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高	備考
M 1	56	土師器	甕			①13.0 ③12.4 ④12.0	下層、半精製 M1-62
н	57	"	"		1/3	①11.6 ④14. 0	" 、photo M1-23 .
11	58	"	11		1/4	①13.8 ④ 14.2	上層 M1-56
#	59	"	11				下層、半精製 M1-65
"	(第146図) 60	"	11			226.7	photo M1-2
"	61	"	"		_	②28.3	上層、photo M1-4
"	62	#	"		1/3	16.6	下層、photo M1-9
"	63	"	'n		1/3	①20.6 ④ 29.7	上層、photo M1-1
#	64	,,	#		1/4	①21.2 ④27.8	上層 M1-57
11	65	"	鉢		1/6	①27.0	M1-55
"	66	"	甑		2/3	①21.6~22.4	photo M1-8
"	67	"	"			①25.4 ②9.2 ③34.7	上層、photo M1-6
	_						
ピット	(第147図) 1	須恵器	蓋			①11.7 ③3.9	ヘラ記号、 photo P458-1
"	2	"	"		1/5	①12.6 ③3.5	へラ記号 P1213- 1
"	3	"	"				" 柱10
"	4	"	"				" P1111-1
"	5	"	H				" P2-1
'n	6	"	,,				P2131~ 1
n	7	11	11				P1060- 1
11	8	11	"				ヘラ記号 P201-1
ŋ	9	n	"				" P315-1
"	10	"	"				" P105-1
"	11	"	"				" P500- 1
н	12	"	坏		1/9	①11.9 ④ 14.0	P1193-1
#	13	,,	"		1/6	①11.9 ④13.4	P1177- 1
"	14	"	11		1/4	①11.4 ③3.4 ④13.6	ヘラ記号 P455- 1
"	15	"	"				P2231- 1
"	16	"	"				P1106- 1
"	17	"	"				ヘラ記号 P1219- 1
#	18	"	蓋				P2243-1
"	19	"	"				P694-2
"	20	"	"		1	①8.2 ③2.0 ④10.2	ヘラ記号、 photo 柱15
11	21	, ,,	"		1/8	҈08.3 ∰10.4	P1111- 2
"	22	"	n		1/6	①8.7 ④ 10.8	P2250-1

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残.	法量②口径 ③器高	備考
ピット	23	須恵器	蓋		1/7	①11.7 ④14.0	P421-1
"	24	H	- II		1/7	①11.5 ④14.2	P1018- 1
"	25	"	η				P370-1
"	26	"	"				P52- 1
"	27	. ")j			①14.1 ③1.6	P2133- 1
"	28	#	坏			28.0	P710- 1
"	29	, ,,,	"		1/5	①12.4 ②8.4 ③3.3	P559- 1
11	30	"	#		1/8	①13.0	P732- 1
ŋ	. 31	"	"			2 7.5	P232- 1
11	32	"	"				柱16
"	33	"	11				P1068- 1
#	34	11	н				P147- 1
#	35	"	"				柱12
11	36	"	11				P2114- 1
11	37	#	."		1/16		P210- 1
#	38	,,	"				P141- 1
H	39	"	"				P1190- 1
#	40	n	ŋ				柱14
"	41	11	11				P476- 1
11	42	ij	# "				P1046- 1
11	(第148図) 43	n	坏			②8.5	P650- 1
"	44	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	"			② 7.2	P730- 1
"	45	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	"			28.8	P1149- 1
n	46	"	1)			29.7	P1157-1
"	47	"	H			28.4	ヘラ記号 P694-1
"	48	. "	ij		1/5	29.1	P1049-1
11	49	"	"			②11.6	P222- 1
"	50	"	#			①13.0 (②7.9)	P744-1
"	51	"	"		1	①12.9 ②7.8 ③4.3	photo 柱2
11	52	"	"		1/4	1.00.9	P474-1
"	53	"	埦		1/3		P1188-1
η	54	"	高坏		1/3	211.4	photo 柱 9
"	55	"	坩			12.6	柱13
H	56	11	壺			②13.3 ④18.2	柱11
11	57	"	平瓶		1/8	①9.4	P185- 1
						·	

								(35	_							
遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考		遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量 ^{①口径} 法量②底径
ピット	58	須恵器	平瓶		1/4	4 18.2		P593- 1		0	(第150図) 1	須恵器	蓋		1/2	16.2 33 .
"	59	,,						P1192- 1		11	2	"	11		1	
"	60	"	鉄鉢		1/12	①24.2		P656- 1		11	3	"	"			①16.0 ③1.
"	61	"	甕					P1065- 1		ıı	4	"	"		1/2	①10.3 ③1.
"	62	土師器	坏		1/3	①17.4 ②14.4 ③2.4	photo	P349-1		11	5	"	坏		1/8	15.0
"	63	"	"			13.5	精製	P496- 1		"	6	"	11			210.7
"	64	"	"		1/7	①18.8		P7- 1		11	7	"	壺		1/12	①10.6
"	65	"	"		1/8	212.0		P1155- 1	١.	"	8	土師器	坏		1/5	①18.4
"	66	"	"				ヘラ言	已号、精製 P1201-1		"	9	H	#		1/8	16.0
"	67	"	"			2 7.0	ヘラ目		ĺ	"	10	"	"			①13.8
"	68	"	埦			118.6		P624- 1		"	11	"	"	_	1/6	1 12.0 3 5.
"	69	"	"		_			P1155- 2		"	12	#	埦			①9.5 ③6.4
"	70	"	"					P611-1		"	13	"	"		1/3	①11.0 ③8.
"	(第149図) 71	"	坏		1/2	①11.5 ③4.2	精製、	photo 柱17		"	14	"	甕		-	10.5
"	72	"	"			①12.1		P63-1	Ì	11	15	"	鉢	_		17.7
"	73	11	η			① 10.3	精製	P743- 1		"	16	"	甕		1/8	17.7
"	74	ıı	鉢		1/5	҈08.2		P727- 1		"	17	"	11			①21.2
"	75	"	坩					64-P13		H	18	"	n		1/5	①24.0
"	76	11	脚			28.4	_	64-P23		n	19	"	"		1/5	①25.0
"	77	"	高坏					柱 9		"	20	"	鍋	_	1/12	①31.2
"	78	"	H				精製	97-P4	Ì	11	21	須恵器	蓋			①13.8 ④ 16
"	79	"	甕			_		64-P33		"	22	n				26.7
"	80	"	"					62-P15	Ì	"	23	土師器	坏			①15.9
11	88	"	"		1/8	① 13.8	_	64-P28	j	11	24	n	"			①11.5
n	89	"	"		1/8	①16.0		64-P13		H	25	"	甕		1/4	①12.1 ④ 12
n	90	n	"		1/2	①16 ③13.8 ④14.6	photo	柱1	ľ	"	26	"	"			①11.6 ④12
11	91	"	"			①17.0		柱 8		"	27	"	"			①12.0 ④ 12
"	92	"	#		1/6	①16.4 ④ 19.1		柱 5	İ	11	28	"	11			①16.2 ④ 17
"	93	n	"		1/4	①20.8		64-P20	ľ	"	29	"	"			①17.2 ④15
"	95	,,	"		1/0	①22.0		柱 7		"	(第151図)	須恵器	蓋		1/7	①15.9
"	96	"	"		1/4	① 19.2		97-P4	f	77	31	"	坏			210.0
"	97	"	n	1	1/10	①25.1	精製	97-P1	f	11	32	"	"			29.8
"	98	n	"		1/3	①22.4		柱 8		"	33	"	"			2 9.1
"	99	#	H			①23.6		64-P31	f	11	34	11	"		+	①13.0 ②8.9 ③4.2
"	100	,,	"		1/6	①30.8		柱 4	+	"	35	土師器	坏	-	\rightarrow	①15.0
								11. 4	L		30		71			_

600
(30)

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 ②底径 ④胴径	備	考 _	ì	遺構	挿図Na	種別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備	考
0	36	土師器	坏			①21.4	精製	0 -168		0	72	須恵器	蓋			①12.1	住97周辺	0 -29
"	37	"	甕			D 13.0		0 -165		"	73	"	11			① 11.6	住95周辺	0 -33
"	38	"	"		1/3	①14.1 ④ 12.4		0 -171		"	74	,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,	#		1/4	①14.9		0 -30
"	39	"	"			①16.2		0 -170		"	75	11	11		1/6	① 13.8		0 -45
"	40	"	"			①20.6 ④ 18.5		0 -169		"	76	11	"		1/7	①14.2 ③2.3		0 -24
"	41	"	"			①22.2		0 -162		ŋ	77	"	坏			①14.1 ②8.6 ③4.4	photo	0 - 5
"	42	"	"			①22.8		0 -158		ŋ	78	"	"		1/4	210.6	住92周辺	0 -70
"	43	"	"			①23.0		0 -157		"	79	"	11			②10.2		0 -61
"	44	"	H			①27.8		0 -174		"	80	"	11			②8.3	住84周辺	0 -10
"	45	"	鍋			①30.0	半精製	0 -155		n	81	"	11			210.6	住92周辺	0 -89
"	46	須恵器	蓋			①11.3 ③2.9 ④13.8		0 -101		"	82	"	11			2 11.9	住95周辺	0 -82
"	47	n	"			①13.8 (③2.0) ④16.0		0 -102		#	83	n	11		1/7	②11.2		0 -92
"	48	"	"			①14.3 ③1.7 ④16.6		0 -108		"	84	"	"			210.0	住95周辺	0 -68
"	49	"	"			①11.8 ④14.0		0 - 8		11	85	"	"		1/6	28.6	住112周辺	2 0 -91
"	50	, ,,	η			1 16.4		0 -53		"	86	"	埦		1/6	⊕15.8	住71・73	0 -124
"	51	"	"		1/9	①14.4		0 -40		"	87	"	髙坏			29.6	住52・53	0 -19
"	52	"	"			₾14.3		0 -51		#	88	"	"		1/7	210.5	住92周辺	0 -15
n	54	土師器	埦			₾9.8		0 -191	Ī	#	89	"	坩		1/6	①7.0 ④ 10.0	住94周辺	0 -17
"	55	"	"			①10.0 ③6.4	粗	0 -215	ſ	//	90	"	平瓶		1/6	₾6.0	住71・73	016
"	56	"	脚台			②8.0	新住63月	郡辺-1		"	93	土師器	脚台			25.6		0 -218
"	57	"	甕			①10.6		0 -186		"	94	"	坏			①14.5	住71.73	0 -139
"	58	"	H			① 11.8 ④ 10.9		0 -178		"	95	. ,,	#			17.4	精製	0 -221
"	59	"	#			16.6		0 -208		"	96	"	甕		1/6	①11.8		0 ~148
"	60	"	H			19.0	半精製	0 -151		11	97	"	"		1/7	①12.4	住71.73	0 -142
"	61	"	#			D20.0		0 -205		11	98	n	"		1/8	①16.8	n	0 -143
11	62	"	11			①23.2		0 -204		"	99	"	"	_	1/10		" 、	半精製 0-144
"	63	"	"			①21.1		0 -212	L	"	100	"	11		1/7	€24.0	新住51月	∃辺-1
"	(第152図) 64	須恵器	蓋		1/6		住71.73	0 -98		"	(第153図) 101	須恵器	坏				ヘラ記号	0 -128
#	65	"	#		1/10	①12.4 ④ 14.8	住95周辺			"	102	"	蓋		1/2		n	0 -123
#	66	"	11		1/4		記号	、ヘラ 0-111	L	H	103	"	坏		1/7	①9.9 ④ 11.6		0 -110
"	67	"	"		1/4		住71.73、	0 -97		H	105	, ,,	蓋			①10.0 ④ 12.0	へラ記号	0 -216
"	68	11	"		1/4		へラ記号	- 0 - 106		,11	106	"	"		1/8			0 -103
"	69	"	"		1/7			0 -34		"	107	"	"		1/3			0 -100
11	70	n,	11		1/8			0 -46		"	108	"	"		1/2	4)12.8	photo	0 - 7
"	71	"	n			⊕13.6	住95周辺	1 0-28		#	109	"	坏		_	①13.6 ③3.6 ④15.6	へラ記号	0 -107

39)

										40
遺構	挿図No.	種	别	器種	分類	残	法量①口径 法量②底径	③器高 ④胴径	備	考

遺構	挿図No.	種 別	器種	分類	残	法量①口径 ③器高 法量②底径 ④胴径	備考
0	110	須恵器	蓋		1/2	D 15.8	0 -29
H	111	"	"		1/9	①14.6	0 -31
"	112	"	"		1/7	13.1	0 -38
"	113	"	"		1/5	①14.2	0 -44
11	114	"	坏		1/4	①10.8 ②7.8 ③3.2	0 -116
#	115	"	"		1/5	28.8	0 -72
н	116	"	"		1/3	29.4	ヘラ記号 0-58
11	117	"	"			①13.0 (②9.0) (③4.9)	ヘラ記号 0-64
11	118	"	"			19.6	0 -62
"	119	"	"	-	1/4	29.9	0 -66
"	120	"	11		1/4	29.4	0 -88
ii	121	#	11		1/4	29.8	0 -67
n	122	"	11		1/6	②10.5	0 -90
11	123	"	壺		1/7	@10.6	0 -69
"	125	"	"		1/2	①16.3 ④ 20.8	photo 0-6
IJ	126	土師器	坏			19.4	精製 0-220
11	127	, ,,	"			117.4 33.1	" 0 -217
H	128	"	,,			@9.9	"、ヘラ記号 0-137
11	129	"	埦			①8.9 ④9.0	精製 0-219
#	130	η.				2 7.6	0 -138.
"	131	"	脚			②9.0	photo 0-3
11	132	"	鉢			①9.2 ②5.6 ③6.9	粗、photo 0-4
"	133	"	甕			① 15.4	0 -214
J	(第154図) 1	須恵器	坏			①12.2 ③4.1 ④14.7	へラ記号、 photo J1
"	2	"	"			①13.0 ④ 15.0	J37
11	3	" _	n		1/8	①10.8 ②6.3 ③3.9 ④13.0	ヘラ記号 J 8
"	4	"	"	_	1/4	①11.3 @13.6	J15
H	5	#	"			(①8.6) (③3.5) ④10.1	ヘラ記号、 photo J19
"	6	,,,	蓋				ヘラ記号 J47
"	7	"	11		1/3	①10.0 ③2.5 ④12.4	J18
n	8	11	11		1/3	①8.0 (③2.1) ④10.4	J20
n	9	n,	坏			①9.4 ②7.1 ③3.1	J46
n	10	"	"			①9.3 ②5.0 ③3.1	へラ記号 J10
"	11	"	蓋				J23
11	12	"	ŋ			①14.4 ③2.6 ④16.6	J 3

道構	挿凶No.	種 別	吞種	分類	残	法量②底径 ④嗣径	備考
J	13	須恵器	蓋			①13.4 (③2.5) ④16.0	Ј 2
#	14	"	"			①14.6 ④ 16.8	J24
"	15	"	#			17.0	J48
"	16	"	#			①17.0	J21
"	17	"	坏			2 8.6	J25
"	18	"	"			①13.9 ②9.4 ③4.4	photo J17
"	19	"	n			①14.0 ②9.0 ③3.9	J11
"	20	"	"			①12.7 ②9.4 ③4.9	photo J12
#	21	"	"			29.5	J13
11	22	"	"			①14.8 ②10.0 ③5.5	photo J14
"	23	"	"			②9.2	J52
"	24	"	11			①11.5 ②7.5 ③4.7	photo J49
11	25	"	#			①14.1	photo J16
11	26	"	н		1/8	①14.1	J50
11	27	"	高坏				J43
"	28	"	n			2 7.6	photo J 5
"	29	"	瓱			49.6	photo J 4
,,,	30	"	壷			4 12.0	 J45
"	(第155図) 31	. "	"			18.7	J42
#	32	11	#				J41
#	33	"	"		1/2		J44
"	34	*	"			17.5	photo J 9 = J33
#	35	"	横瓶			①12.1 ③27.2 ④30.6	photo J30
"	36	"	甕				J54
"	37	"	"				J53
"	38	"	n		1/4	① 20.2	J59
"	39	"	"			①26. 0	J35
"	40	#	11		1/3	① 19.9	J58
"	41	#	II				Ј34
#	42	IJ	"				J55
n	43	ŋ	11				J56
η	44	"	"				J32=J36
ŋ	45	"	, ,,				J31
η	46	11	11				J27
"	(第156図) 47					①59 (④100)	J28=J29=J39
- '							

第2表 宫原遺跡出土不明土製品計測一覧表

先 4 	口四四	退哟'山上什'"	/1 3×,1	印川例 見び	
番	号	出土地点	型、式	特 徴	法量(長×幅×厚)cm
33-M	1	埋土	B_2	完形品。	$2.6 \times 1.4 \times 1.2$
35-M	1	埋土	B_2		$(3.2+\alpha)\times(1.9+\alpha)\times0.5$
37-M	1	埋土	B_2	精良。	$2.1\times(1.5+\alpha)\times0.45$
37-M	2	埋土	B ₂	完形品。	$2.25 \times 1.5 \times 0.9$
37-M	3	埋土	B_2	B ₁ ?	$2.7\times(1.6+\alpha)\times0.8$
37-M	4	カマド内下層	C ₁	切削物を重ね合わせる。	3.0×3.3×1.0
38-M	1	カマド付近	B_2	略完形品。	3.8×3.8×1.15
38-M	2	カマド付近	B_2	完形品。	2.85×2.7×0.65
40-M	1	(B)埋土	B_2	完形品。	1.95×1.5×1.05
40-M	2	(B)埋土	Cı	削り面と収縮面が認められる。	$1.7\times(2.6+\alpha)\times0.7$
40-M	3	(A)床面下層	C ₁ ?	切削後、端部を成形したのであろうか?	$(4.3+\alpha)\times1.25\times0.55$
41-M	1	埋土	B_1	穿孔後ナデ調整。指紋あり。	2.7×2.15×1.1
41-M	2	埋土	C ₁	切削物を重ね合わせる。	2.5×2.5×1.0
42-M	1	埋土	C ₁	切削後、端部を丸める。	$3.35 \times 2.8 \times 0.8$
42-M	2	床面下層	B_2	完形品、指紋付着。	2.3×1.7×0.9
42-M	3	埋土	C ₁	削り面と収縮面が明瞭に認められる。	2.8×2.2×0.75
42-M	4	埋土	B_2	完形品。	2.35×2.0×1.15
43-M	1	床面下層	B_2	略完形品。	$3.0\times(1.8+\alpha)\times0.65$
43-M	2	埋土	B_2	完形品。	2.85×2.35×0.8
43-M	3	埋土	B_2	略完形品。	$3.5\times(3.05+\alpha)\times0.7$
59-M	1	埋土	C ₁ ?	収縮面は明瞭。削り面は後にナデを行なう。	2.3×2.3×1.2
60-M	1	埋土	Bı	完形品。	2.9×1.95×0.75
60-M	2	埋土	B_2		$(2.2+\alpha)\times1.7\times1.25$
63-M	1	埋土	Cı	削り面と収縮面が明瞭に認められる。	$2.25 \times 3.2 \times 0.75$
63-M	2	埋土	B_2	B ₁ の可能性を有す。	$(1.95 + \alpha) \times 2.65 \times 0.75$
63-M	3	埋土	B_2	片面は平滑に仕上げている。	$2.25 \times 2.0 \times 0.55$
65-M	1	埋土	B_2		3.3×5.05×1.6
67-M	1	埋土	B_2		$(2.9+\alpha)\times(1.9+\alpha)\times0.8$
67-M	2	埋土	B ₁ ?	指紋が多く付着。	3.95×3.75×1.4
67-M	3	埋土	C ₁	重ね合わせている。	2.75×2.3×1.2
67-M	4	埋土	B ₂	やや粗雑だが、完形品。	$(3.6+\alpha)\times2.15\times0.85$
67-M	5 .	埋土	B ₂	完形品。	$2.6 \times 1.55 \times 0.8$
69-M	1	埋土	B ₂		2.15×1.4×0.6
69-M	2	埋土	B_2	完形品。指紋付着。	$(2.1+\alpha)\times1.4\times0.5$
69-M	3	埋土	B ₂	完形品。	3.2×1.55×1.05
76-M	1	埋土	B_2	片面は平滑に仕上げ、他面に指紋付着。	$(3.7+\alpha)\times(2.7+\alpha)\times0.8$

_		Ι.			2
番	号	出土地点	型式		法量(長×幅×厚)cm
76-M		埋土	B ₁ ?	片面は平滑に仕上げ、指紋多く付着。	$(4.8+\alpha)\times(3.5+\alpha)\times1.0$
79 • 80 —	M 1	埋土	B ₂	完形品。	2.2×1.8×0.45
81-M	1	埋土	С	端部を摘む。指紋付着。	$(3.05+\alpha)\times(1.8+\alpha)\times0.95$
81-M	2	埋土	C ₁	切削後,端部を丸く成形している。	2.6×2.7×0.75
82-M	1	埋土	B ₂	完形品。	2.65×1.6×1.2
82-M	2	埋土	B_2	完形品。	2.2×1.35×1.2
82 – M	3	埋土	С	完形品。	$3.4 \times 2.9 \times 1.7$
82-M	4	埋土	С	完形品。指紋付着。	$3.35 \times 3.45 \times 0.7$
84-M	1	埋土	C ₁	収縮は殆んどせず、ナテ調整。	$3.3 \times 2.4 \times 0.85$
84-M	2	埋土	B_2	完形品。指紋付着。	2.5×2.2×0.35
85-M	1	埋土	B_2	略完形品。	$(2.1+\alpha) \times 2.25 \times 0.3$
86-M	1	床面下層	B_2	両面に指紋付着。完形品。	2.9×1.85×0.75
86-M	2	埋土	B_2	完形品。	2.9×2.05×1.1
86-M	3	埋土	C ₁ ?	収縮が認められるが、磨滅している。切削物?	3.0×2.2×0.5
86-M	4	床下層土壙	B_2	片面は平滑に仕上げている。	$2.9 \times (2.0 + \alpha) \times 1.05$
87-M	1	床面下層	B_2		$(2.2+\alpha)\times(1.85+\alpha)\times0.8$
87-M	2	埋土	B ₂	片面は平滑に仕上げている。	$(3.0+\alpha) \times 2.15 \times 1.25$
87-M	3	埋土	C ₁	焼成は良好で赤褐色を呈す。	$2.7 \times 3.0 \times 0.6$
87-M	4	埋土	B_2	指紋付着。完形品。	2.7×1.8×0.65
92-M	1	埋土	C ₁	著しく湾曲している。	$(3.0+\alpha)\times(2.65+\alpha)\times0.6$
92-M	2	埋土	B_2	C ₁ の可能性も有るが、植物繊維痕付着。	$2.6\times(2.0+\alpha)\times0.55$
92-M	3	埋土	С	筒状支脚?カマド壁体?	$(4.2+\alpha)\times(3.9+\alpha)\times(1.6+\alpha)$
93-M	1	埋土	B_2	内湾面に指紋付着。	4.3×2.35×0.9
93-M	2	埋土	B_2	略完形品。	$(1.9+\alpha)\times1.7\times0.7$
95-M	1	埋土	B ₂	指頭痕あり。完形品。	2.75×2.2×1.0
95-M	2	埋土	B ₂	指紋付着。完形品。	1.95×1.35×0.65
95 – M	3	カマド付近	Bı	若干粗雑な造り。完形品。	2.8×2.6×0.9
95-M	4	埋土	B_2	完形品。	2.6×1.45×0.5
95-M	5	埋土	B_2	完形品。	2.0×1.85×1.0
95-M	6	埋土	B ₁ ?	植物繊維痕あり。磨滅しているも完形品。	3.9×2.5×0.5
95-M	7	埋土	B_2	若干湾曲した完形品。	2.9×1.5×0.55
95-M	8	埋土	Cı	焼成良好,赤褐色を呈す。削り・収縮は明瞭。	2.4×2.85×0.8
96-M	1	埋土	В1?	粗雑な造りで、若干湾曲する。完形品。	$3.05 \times 2.5 \times 0.75$
97-M	1	埋土	B_2	完形品。	2.8×1.8×1.45
97-M	2	埋土	B ₁ ?	土版状を呈す完形品。	5.4×4.3×0.8
99-M	1	埋土	B_2	布目痕あり。	3.5×2.7×0.65
	-				

番号	出土地点	型式	特 徵	法量(長×幅×厚)cm
103-M 1	埋土	B_2		$(2.5+\alpha) \times 2.15 \times 0.65$
103-M 2	カマド内	B ₂	ワラ状押圧痕が明瞭に残る。略完形品。	5.7×4.3×1.3
105-M 1	埋土	$\overline{\mathrm{B_{2}}}$	焼成良好な略完形品。	4.15×1.3×1.35
105-M 2	埋土	C ₁	切削後指オサエ。	3.85×1.75×1.2
105-M 3	埋土	B_2	薄手の略完形品。焼成良好。	$(2.7+\alpha)\times2.55\times0.4$
105-M 4	埋土	B ₁	若干粗雑な造りの略完形品。	$(3.55+\alpha) \times 2.8 \times 0.8$
105-M 5	埋土上層	B ₂	両面共に明瞭な植物繊維痕付着。	$(4.4 + \alpha) \times 3.05 \times 0.65$
105-M 6	埋土上層	В1?	片面は丁寧なナデ調整。	$(3.8+\alpha)\times(2.9+\alpha)\times0.5$
105-M 7	埋土	B ₂	明瞭な指紋付着。完形品。	2.9×2.2×1.0
105-M 8	埋土	B ₁ ?	両面に指紋付着。	$(2.6+\alpha)\times2.7\times0.55$
107-M 1	床面下層	B ₂	略完形品。	3.3×1.45×0.45
107-M 2	床面下層	B ₂	布目痕あり。完形品。	2.0×2.15×1.45
108-M 1	埋土	B ₂	指紋付着。	$(2.1+\alpha)\times2.2\times0.7$
108-M 2	埋土	B ₁ ?	粗雑な造り。ワラ状痕が明瞭に残る。	4.4×4.1×0.65
108-M 3	埋土	B_2	完形品。	4.05×3.65×1.5
108-M 4	埋土	C ₁	切削物を重ね合わす。	$2.05 \times 2.0 \times 0.9$
110-M 1	埋土	B ₂	指紋多く付着。	$(2.35+\alpha) \times 1.75 \times 0.75$
110-M 2	埋土	C ₁	切削後指オサエ。完形品。	$3.1 \times 2.5 \times 0.6$
110-M 3	埋土	B_2	指紋付着。完形品。	$2.45 \times 2.35 \times 0.7$
110-M 4	埋土	C ₁	切削後指オサエで平滑に仕上げる。	$(3.6+\alpha)\times(2.3+\alpha)\times0.65$
110-M 5	埋土	B_2	指紋付着。	$1.95 \times 2.85 \times 1.05$
112-M 1	埋土	B_2	完形品。	2.5×1.6×1.4
表採-M 1	住95周辺	B ₁ ?	円形になるか?	$(2.8+\alpha)\times(2.6+\alpha)\times0.8$
表採-M 2	住86~98	B_2	焼成良好な完形品。	3.7×3.0×1.3
表採-M 3	住86~98	B ₂	完形品。	3.1×2.7×1.1
表採-M 4	住95周辺	B_2	完形品。	2.8×1.8×0.6
表採-M 5	住95周辺	C ₁	切削後指オサエ。	2.6×1.5×0.75
D 6 -M 1		C ₁	ヘラケズリ・収縮が顕著に認められる。	$3.4 \times 2.8 \times 0.9$
D 6 -M 2		B ₁	植物繊維痕付着しているが、やや丁寧な造り。	$(3.9+\alpha)\times(2.4+\alpha)\times1.05$
D 6 -M 3		B ₂	略完形品。	2.8×1.9×0.6
D 6 -M 4		C ₁	3個の切削物を重ね合わせている。	3.5×3.1×2.05
D 8 -M 1		C ₁	切削後植物繊維痕と指紋付着。	$3.8 \times 2.4 \times 0.5$
D 8 - M2		B_2	略完形品。	$2.0\times(1.9+\alpha)\times0.4$
表採-M 6	D10西	B ₁	やや粗雑な造り。完形品。	3.6×2.95×1.2
表採-M 7	D10西	B ₂	平坦面は丁寧な仕上げ。焼成良好。	$3.5\times(3.3+\alpha)\times1.4$
表採-M 8	D10西	B_2		$3.3\times(2.1+\alpha)\times0.75$

番号	出土地点	型式	特	法量(長×幅×厚)cm
表採-M 9	D10西	B ₂		$2.1\times(1.55+\alpha)\times0.4$
D13-M 1		B ₂	完形品。	1.8×1.7×0.4
D13-M 2		С	小さな粘土塊を付着させている。	1.85×1.75×1.7
D15-M 1		C ₁	焼成良好、赤褐色を呈す。	3.0×2.85×1.0
D19-M 1		B_2	略完形品。	2.2×2.6×0.5
D20-M 1		C ₁	焼成良好。	1.35×2.15×0.75
D20-M 2		B_2	略完形品。切削物の可能性あり。	2.8×1.4×0.5
D20-M 3		C ₁	削り・収縮が明瞭に残る。	2.45×2.95×0.55
D20-M 4		B_2	完形品。	2.0×1.75×1.05
D20-M 5		C_1	焼成良好。	2.8×2.45×0.9
D20-M 6		B ₁	やや丁寧な造り。略完形品。	$2.6\times(2.2+\alpha)\times0.75$
D20-M 7		B_2	指オサエあり。略完形品。	2.5×2.35×0.85
D20-M 8		Cı	切削物を重ね合わせる。	3.0×2.3×1.15
D20-M 9		B_2	完形品。	2.9×1.8×0.7
D20-M10		B_2	両面共に植物繊維痕多く付着。	5.1×3.5×0.7
D20-M11		B_2		$(3.05+\alpha)\times(2.1+\alpha)\times0.6$
D22-M 1		B_2	両面共に植物繊維痕多く付着。	$(3.9+\alpha)\times(4.2+\alpha)\times0.75$
D22-M 2		C_1	切削後指オサエ。	$3.35 \times 2.5 \times 0.8$
M 1-M 1		B ₁ ?	植物繊維痕付着するも円板状の略完形品。	$2.65 \times (2.2 + \alpha) \times 0.9$
M 1 - M 2		Cı	切削物を折り曲げ、重ねる。	$3.15\times(2.0+\alpha)\times0.65$
M 1-M 3		C ₁ ?	切削物を板上に押し当てた?完形品。	$2.65 \times 2.6 \times 0.45$
M 1-M 4		C ₁	端部は丸味を有す。	2.4×2.8×0.8
M 1-M 5		B_2	両面共に植物繊維痕付着。	$3.15 \times (1.35 + \alpha) \times 0.65$
M 1-M 6		B_2	両面共に植物繊維痕付着。	$2.5\times(1.65+\alpha)\times0.5$
表採-M10	M 1周辺	B_2	切削物の可能性あり。	3.8×1.9×1.45
表採-M11	M 1周辺	B_2	磨滅しているが完形品。	2.1×2.0×1.35
表採-M12	M 1周辺	C ₁	切削物が重なり合う。	2.8×2.3×0.95
柱穴-M 1	P-689	C ₁	丸めた後へラ状工具による刺突痕あり。	2.5×2.7×3.15
柱穴-M 2	P-1120	B_2	完形品。	3.3×2.1×1.4
柱穴-M 3	P-2004	C ₁	切削物を重ね合わせる。	3.1×1.95×1.1
表採-M13	住81周辺	Bı	指紋多く付着した略完形品。	6,25×4.0×0.8
表採-M14	不明	B_2	指頭痕·指紋付着。	4.2×2.05×0.9
表採-M15	D10周辺	C ₁ ?	切削後指オサエ?	$(2.8+\alpha)\times(2.7+\alpha)\times0.9$

1

第3表 宫原遺跡竪穴住居跡一覧表

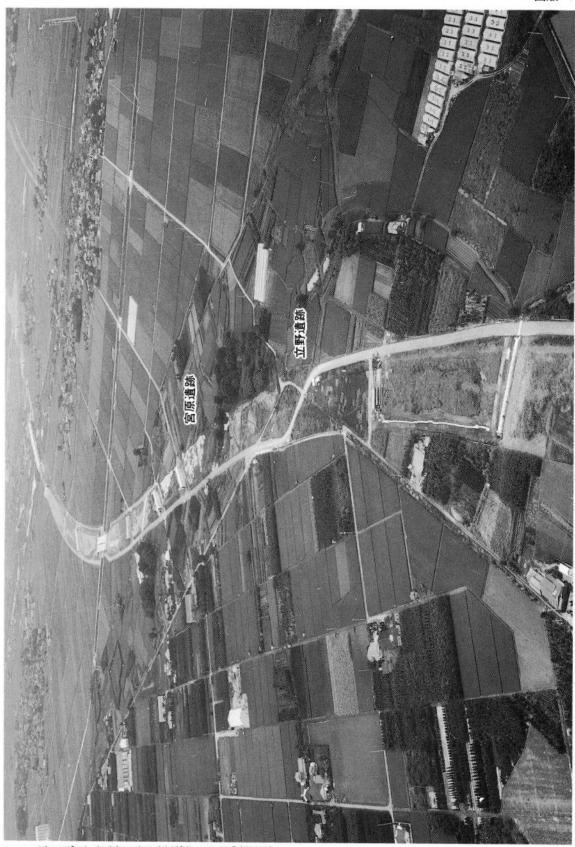
N-	578 W.C	ाजा	主軸方位	総面積	主柱間	c /c	た	7	ょ	ح	а	ь	с	đ	· P	1	P	2	P ₃		P		カマ	マド ;	カマド	対面	Ъ	下層	土岩	# #	手	土錘	鉄	— 石 器		IHNo.
-	図版	図 ———	_	(S)	主柱間 エリア(S ₁)	31/3	С	D	A	B (I	P ₁ -P ₂)	(P ₃ -P ₄)		(P ₂ -P ₄)			d_1	a ₂	C ₂		d₂	b ₂	-	支脚	粘土	土壙	P ₅	土壙	須		手 捏 一	錘	鉄器	器	耳環が出土。	
31	14	4	N-17°-W ?										145		102	117				140			北西						5	2	_				32~34より新。	91
32	14	4	N-21°-W ?						398		164		164		141	106	130	129		100			北西						4	1			1	_	31より古, 33・34より新。	92
33	14	5	N-30°30′-W	23.603?	6.336	26.8?	486				228	256	255	271	118	127	93?		113	136			北西		_			0	4	6			1		31・32・34より古。	94
34	14	4	N-21°-W ?	24.651?	5.163	20.9?			499		241	229	226	217	145	146	146	112					北西					0	1	2		'			31・32より古, 33より新。	93
35	16	6	N-27°30′-W	15.204	2.573	16.9	394	380	403	414	179	177	147	144	111	104	107	120	135	103	129	134	北西			0		0	4	17		!			36・溝1より新。	81
36	16	6	N-31°-W	14.487?	2.548	17.6	386?			378	165	171	146	161	149	106				109		99	北						2	10					35・37より古、38より新。	83
37	16	8	N- 1 °30′-W	15.048	2.232	14.8	405	397	387	383	160	120	158	160	113	120	95	107	133	129	143	133	北西		0				12	29		_		-	36・38より新。	82
38	15	8	N-26°-W		2.693		433				160	172	164	163	125				143		111		北西					0	1	2			1		36・37・39より古。	86
39	15	11	N-59°-E ?	15.964 ?	3.068 ?	19.2?			407		187			150	138	103	146	116				113	東北					-	1	18		_			40・41・D 7より古、38より新。	85
40	16	13	N-29°-W	8.796?	1.473	16.7?	289		312	313	109	120	134	126	84	104		100	71	112	77	81	北西						15	24			3		D7より古、39·41より新。	87
41	. 16	13	N-28°-W	12.644?	2.016	15.9?	370		367	347	141	147	152	129	133	107		119	87	103	79	98	北西						17	21			2		40·D7より古,建32より新。	84
42	18	15	N-12°30′-W	11.572	1.920	16.6	350	345	338	346	145	145	138	127	102	96	98	. 98	110	111	120	90							13	42					溝1より新。	88
43	18	17	N-14°-W	13.672	2.900	21.2	393	379	371	368	153	182	172	178	98	110	91	100	123	80	109	106	北					0	6	32		-			44・溝1より新。	89
44	18	17	N-17°-W		2.700						155	185	166	155		115				111			北西						0	1					43より古, 溝1より新。	90
45	19	19	_																				西?						0	5					46より新。	104
46	19	19	N-56°-W	29.635 ?	7.555	25.5?			554	548	285	282	265	271	143	131	135	138		129		137	西北					-	8	20		•			45・建34より古, 47・建33・35より新。	103
47	19	19	N-57°30′-W		8.733						304	291	302	293	157	103	141			129			西北						0	4					46より古, 48・49より新。	102
48	19	19	N-51°-W ?						_		327			290		168													0	1		t	-		47より古, 49・51より新。	105
49	19	21	N-48°-W	32.843?	8.227	25.0?			566		277	309	280	286	146	135	163	155		129			西北		,			0	1	6					48・建34より古,50・51・建33・35より新。	100
50	19	23	N-51°-W	25.787?	7.088	27.5?	500		504		264	268	278	260	118	129	111	111	104	132			西北					O?	1	2	1		1		49より古。	101
51	19	19	N-39°-W								259		234			132				118									7	0					48・49より古。	106
52	22	25	N-127°-W ?						460		226						114	127			121	121							3	4					53より新。	109
53	22	25	N-47°-W ?						571		342			287	131	117	123	113					西北				_		4	9				1	52より古。	107 108
54	23	26	N-12°-W ?						416			208							119	105	112	104				0	-	×	7	10		-			D8より新。	52
55	23	27	N-123°-W	18.536	4.204	22.7	448	464	415	430	230	204	181	209	129	95	143	90	139	118	113	109	西南				_	×	6	15				1	56・D 8より新。	55
56	23	27	N-131°30′-W?									181		170			92	98					西?					×	1	0		!	_		55より古。	54
57	23	28	N-47°30′-W	24.924?	6.844	27.5?	463	484	538?	534?	290	284	236	241	111	108?	119	140	116	115?	124	135						0	5	15					58・59より古。	5
58	24	29	N-48°-W ?	16.361	3.139	19.2?			416		184	183	173	172	129	123		110		110									3	5					57・59・61より新。	56

No.	図版	図	主軸方位	総面積 (S)	主柱間 エリア(S ₁)	S ₁ /S	た C		L S	В	a (P ₁ -P ₂)	b (P ₃ -P ₄)	C (P ₁ -P ₃)	d (P ₂ -P ₄)	P ₁		$\frac{P_2}{d_1}$	a ₂	P ₃	ь b	d ₂		力で	・ド : 支脚 :	カマド	対面 土壙	P ₅	下層	土器	是	手捏	土錘	鉄器	石 器	備考	日No.
59	24	29	N-64°30′-E	17.799?		22.0?		480		_		176		182			170	90			128	112	東北	0				×	13	17	1					40 41
60	24	30		_																	Ì						. /	×	3	12					61より新。	51
61	24	30		_															104?										0	1				1	60より古。	50
62	25	31	N- 6 °-W	14.836	2.202	14.8	390	390	391	381	178	164	129	130	139	109	129	105	123	112	132	105	北						7	26					玉が出土。D10より新。	3
63	25	32	N-73°-W	19.754	4.088	20.7	426	423	478	466	220	183	204	204	103	132	143	125	119	142	114	141	西北						7	54		1	1		建57・59より古。	1
64	26	33	N-41°-W	20.049	4.728	23.6	203	450	450	456	218	203	449	212	125	132	120	100	102	133	119	105	北西						15	26			1		D10, 建58より古。	2
65	27	34	N-130°-W N-117°-W	10.080	A2.520 B3.688		295 286	293 293	366 366	350 339?	167 167	170 169	151 222	155 222		106 106				114 76?	68 -3	65 95?				0		×	16	35		2		1	製塩土器が出土。建49より新。	4
66	27	35	N-43°30′-W	13.969?	2.887	20.7?			393		163						119	_			106	80	北西						2	12					鞴の羽口が出土。67より古。	49
67	28	35	N-37°30′-W	14.045	2.428	17.3	394	375	384	365	173	157	151	146	136	107	116	105	107	102	113	105	北西					×	5	22					鞴の羽口が出土。66・68より新	39
68	28	36	N-70°-W	10.892	1.708	15.7	322	305	353	356	150	149	119	110	99	120	95	82	105	130	101	77	西北	0					7	20					67・69より古,70より新。	42
69	30	38	N-47°-W	25.037?	4.945	19.8?		500	502	510	238	226	229	203		146	138	118	139	139	159	145	西北		0				25	50				3	71より古, 68・70・72より新。	38
70	29	36	N-60°-W	18.465?	3.880	21.0?	425?			440	224	193	194	183	111?	114			120	121	130	126	西北						0	6					68・69より古。	37
71	30	40	N-54°-W	16.908	2.605	15.4	409	419	411	413	155	154	170	170	124	115	126	140	115	147	122	112	西?					×	2	10					69・72・73より新。D18より古。	36
72		38	-	,	-																								2	3					69・71より古。	44
73	_	40			-																105							0	2	5		1			71より古。	35
74	31	41		-						_											104	116?							1	11		ļ _				34
75	31	41	-																		125	118						×	2	11		1		3	76より新。	33
76	31	41	N-34°-W?	27.613?	4.708	17.0?					237	243	197	197	İ		174	120				145	北?					-	1	7					75・77より古。	32
77	31	42	N-26°30′-W	36.164?	10.336	28.6?	611?	576?	602	617?	331	347	314	299	165	127	152	145	133?	124?	125?	145	北西						4	18		-	1		78より古, 76·D17より新。	31-B
78	32	43	N-40°-W	32.661?	10.345	31.7?		560?	553	637?	323	376	298	298	131	120	144	109		146	119?	116?	北西	0					3	15		4			79・80より古, 77より新。	31-A
79	32	44	N-95°-W	12.449	2.000	16.1	364	362	357	357	127	143	150	148	107	122	126	109	107	114	139	100	西						6	6					スラツグが出土。78・80・103・建51より新。	29
80	32	45	N-38°-W	28.908	9.243	32.0	550	554	520	541	298	278	315	329	98	117	94	106	137	135	130	128	北西				-		14	20	Ī				79より古, 78より新。	30
81	34	46	N-106°-W	13.663	3.280	24.0	347	362	390	408	179	177	190	180	91	110	107	101	67	114	75	116	西南						18	93		1		1	紡錘車が出土。D16, 建47より新。	8
82	35	48	N-47°-W	9.723?	1.236	12.7	325	322	312	306	107	104	117	120	112	110	109	95	97	106	92	96	西北					×	8	12					84より古, 83・建42よう新。	110
83	35	48	N-43°30′-W	12.667?	1.988	15.7?	,		344	356	164	152	124	131		99		81	110	102	114	103	北?						0	1					82より古。	111
84	38	50	N-17°-W	14.113	3.229	22.9	378	401	379	363	180	159	197	190	84	100	88	99	98	102	123	102	北西					×	5	15		. 3	1		82・85・建46より新。	17
85	38	50	N-41°-W	16.123?	2.556	15.97	409				181	179	145	141	133	122	143		131	126			北西						2	7		1	1		84・建46より古。	16
86	38	51	N-24°-W	11.776?	2.263	19.2	315?	316?	377?	403?	170	165	142	132	86?	109	101?	98?	87?	131		106?						()?	21	97			1	1	95・D15より古、87・89・92・96より新。	9 113 121

		1		総面積	主柱間		た	· T	よ	-	_	<u>۱</u>		ا ب	Р	. 1	p.		P.	. 1	P	. 1	カマ	? ド フ	カマト	: 対面			土岩	문	= -	4.	££	F		3
No.	図版	図	主軸方位	彩 <u>(S)</u>	エリア(S ₁)	S ₁ /S	C	D			a (P ₁ -P ₂)	b (P ₃ -P ₄)	C (P ₁ -P ₃)	d (P ₂ -P ₄)	C ₁	a ₁	d ₁	a ₂	C ₂	b ₁	d ₂	b ₂	位置	支脚;	粘土	土壙	5 ±	層		土	手捏	土	鉄器	石器	備 考 [⊟No
87	38	51	N-12°-W		2.215						156	156	130	159			125	107									()? 	10	22		ļ			86・95・D15より古、88~90より新。 1	114
88	38	51																											0	0						122
89	38	51																					西				(12	29		_			86・87より古、90・92・94より新。	10 115
90	38	51		-							158						117	133										×	1	6					87・89・D13より古, 88・91より新。	116
91	38	51	N-19°-W?		2.079?						152	149?	144?	133			108	117				95					()?	3	6					90・D13より古, D11・12より新。 1	117
92	38	52		12.521?	2.451?	19.6?	346?										117		88	97			北				:	×?	10	22		3			86・89より古、93・94より新。	11
93	38	52	N-11°-W?		2.512?		374?				166?	173	160?	140					95	98			at:?						3	12					92より古, 94・D16より新	12
94	38	52	N-13°-W	11.612?	3.013	25.9?	,		361		174	196	166	162	80	93	82	94					北					0	1	6		1			00 00 00 00 00000	6
95	40	53	N-102°-W	12.615	2,268	20.8	334	321	399	393	164	171	165	152	94	115	94	120	75	103	75	119	西	0			(O?	16	44	1	5	(1)	1	籾。	112
96	40	53	N-11°-W?	13.786	2.497	18.1?	367?				115	170	144	154	109?	106?		•	114?				北					0	26	41		, 2			86・95・98・99より古。	13 118
97	42	55	N-93°-E	15.187?	1.993	13.1?	403?	407?	389?	376?	178	152	165	164	126?	102?	128?	109?	112?	129?	88?	103?	東					×	12	14	1	2		1	98・99・100・101より新。	15 119
98	42	55					454	444?			159	163	200	167	166		164		87			111						O?	4	6					97より古, 99・100・106より新。	46 120
99	42	55	N-28°-W?	17.411?					442		145		143		129	146	138	150					北西						3	14	1	1			97・98より古, 96より新。	7
100	42	55	-		2.655						159	164	165	169	_				122?	90?	108?							×?	0	0					<u> </u>	123
101		55												176							104?								3	6					土馬が出土。100・106より古, 102溝1より新。	14 124
102		55	-	·								171	176						144?	147?									0	2					101・105・106より古。	125
103	43	56	N-43°-W	19.077?	4.360	22.9?	405?	452?	452	448?	233	214	194	195	115	114	137?	104	96?	122?	120	113	北西						7	13	1		1		79・104・建51より古, 建48より新。	18
104		57	N-65°-E?		2.172		448				162	158	137	134	166	106			144	106								×?	7	20		1	,		106・108より古, 103より新。	19
105	43	58	N-99°-W	13.892	2.579	18.6	370	370	390	374	153	140	168	180	103	110	89	126	99	113	101	121	西						17	26			2		102・106より新。	20
106		58	N-12°-W	23.517?	3.644	15.5	480	469		496	181	192	177	218	140	169	122?		162	185	128	119	北					×?	0	12					97・105・108より古,98・100・102・104・107 より新。	22
107	•	58	N-16°-W?		2.811						166	158	162	184					131?		130?								0	3					106・108より古。	21
108	44	60	N-29°-W	23.704?	3.644	15.4?	490	515			172	150	212	240	111		109	175	166		168	129	北西						10	7.0		(1)	,		土馬・青銅製品, スラッグが出土。109・110より古。	24
109	44	60	N-22°-W?		2.516?						156?	154?	170?	156?	_	155?			114?	122?	120?							0	10	18		(1)	3		108・110より古。	24
110	44	60	N-21°-W	11.181	2.287	20.5	350	341	330	329	118	135	180	178	84	112	96	100	76	110	68	83	北西		0				12	31			1	2	紡錘車, スラッグが出土。111より古, D19より 新。	27
111	44	62	N-92°-W?	11.948	2.664	22.3	320	334	364	379	184	158	145	165	80	89	74	90	96	120	95	102						0	4	8					110より新。	28 126
112		63	N-13°-W	23.365?	5.623	24.1?	475	505?	485	481	255	239	218	238	122	120	132	110	135	120	134	121	北?						3	17	_				鞴の羽口が出土。D22・建52より古。	43

註.下層土壙は中央土壙が \bigcirc 印,壁隅土壙が \times 印とした。S と S_1 の単位はm。 $A \sim D$ と $a \sim d$ 及び $P_1 \sim P_4$ の単位はcm

図 版



第11地点(立野·宮原遺跡)周辺航空写真



第11地点 (立野・宮原遺跡) 周辺航空写真 (1961年国土地理院撮影 KU-61-1)

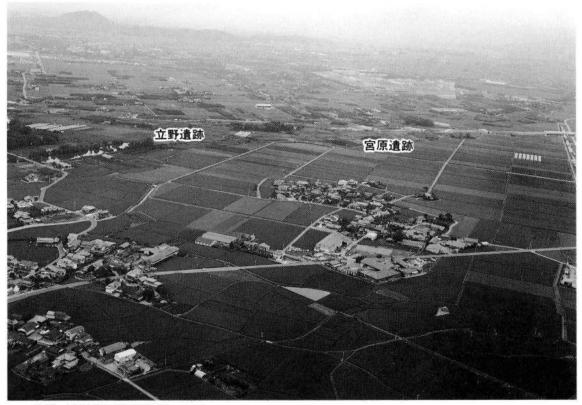


第11地点(立野·宮原遺跡)周辺航空写真(1981年国土地理院撮影 KU-81-1)



第11地点(立野· 宮原遺跡) 航空写真





立野・宮原遺跡航空写真



宮原遺跡航空写真



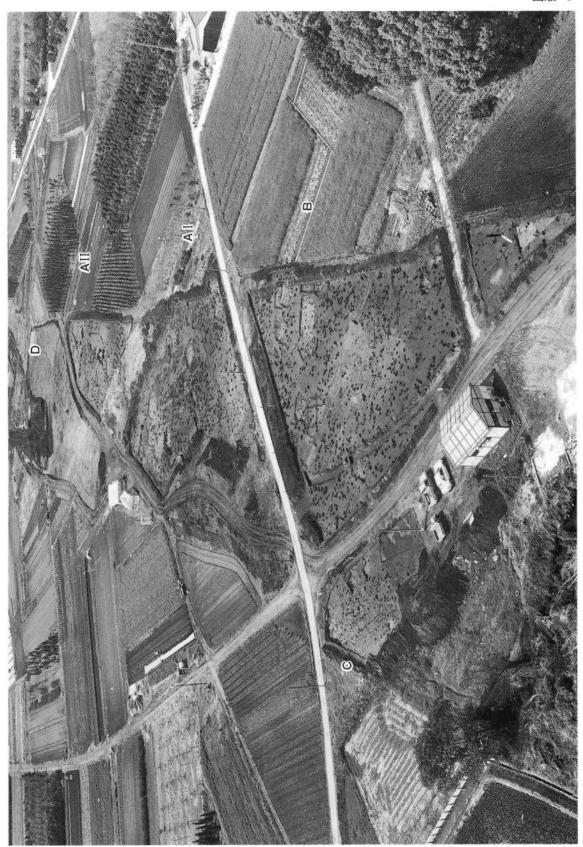
宫原遺跡航空写真



宮原遺跡航空写真



宮原遺跡航空写真



宮原遺跡航空写真



宮原遺跡航空写真



宫原遺跡航空写真



宮原遺跡AI地区全景(東から)



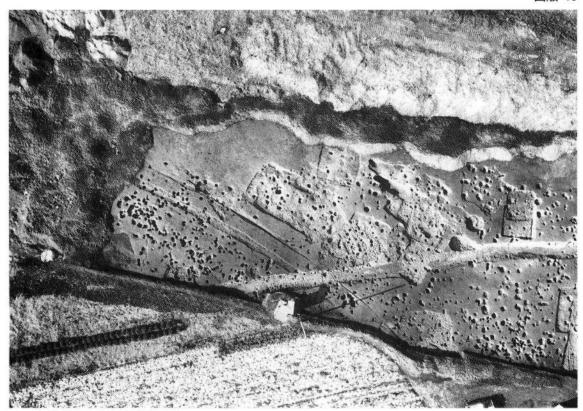
宮原遺跡AI地区全景(西から)



宫原遺跡AI地区気球写真



宫原遺跡A I 地区気球写真



宫原遺跡AI地区気球写真



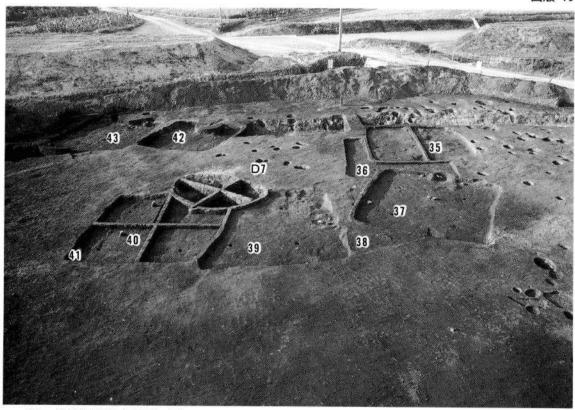
宫原遺跡AI地区気球写真



31~34号住居跡をのぞむ(西から)



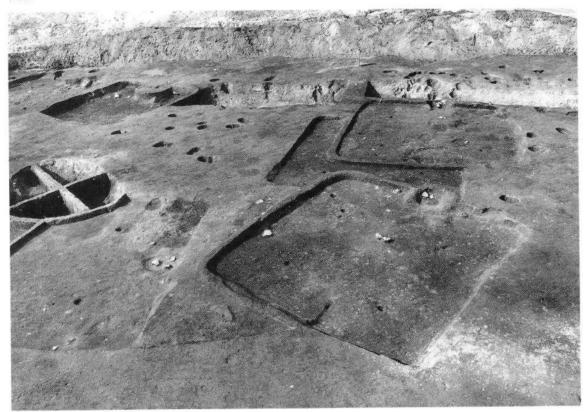
31~34号住居跡(西から)



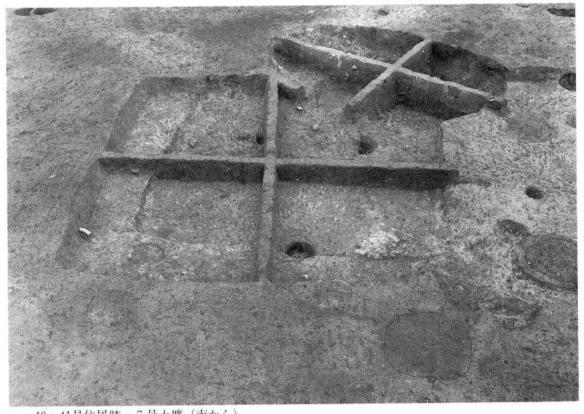
35~43号住居跡(南東から)



35~43号住居跡下層(西から)



35~37号住居跡 (東南から)



40・41号住居跡・7号土壙 (南から)



35号住居跡カマド



37号住居跡カマド

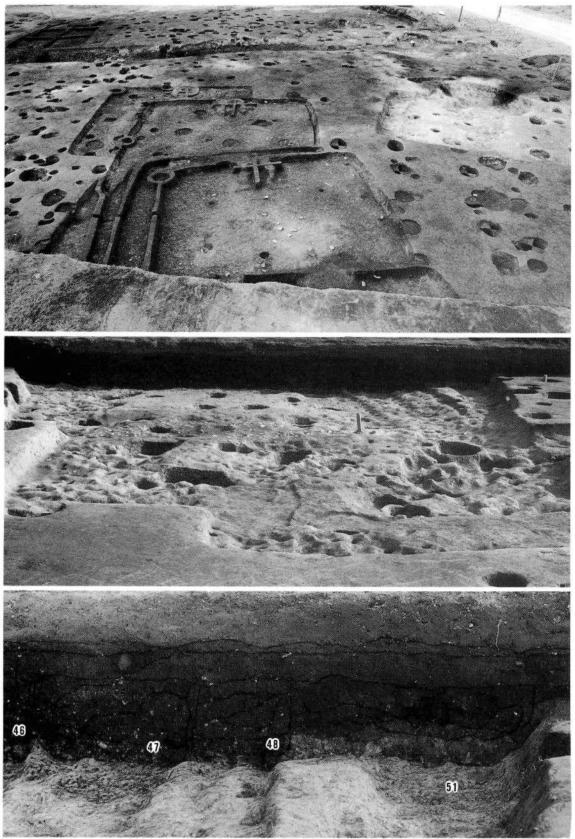
図版 18



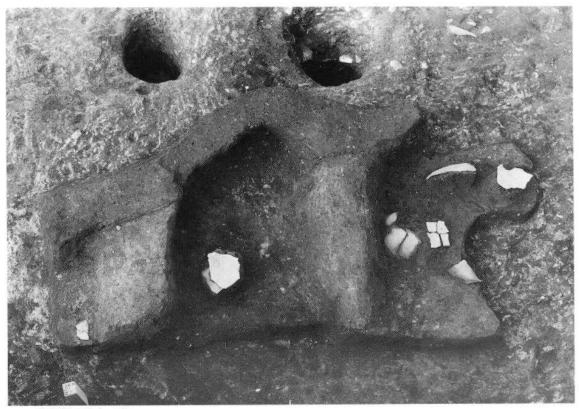
42・43号住居跡 (南から)



42号住居跡カマド (南から)



(上)45~51号住居跡(東から) (中)同下層(西から) (下)46~48、51号住居跡



45号住居跡カマド



46・47号住居跡カマド



49号住居跡カマド



50号住居跡カマド



52・53号住居跡 (北東から)



54~61号住居跡(南東から)



54~56号住居跡(南東から)



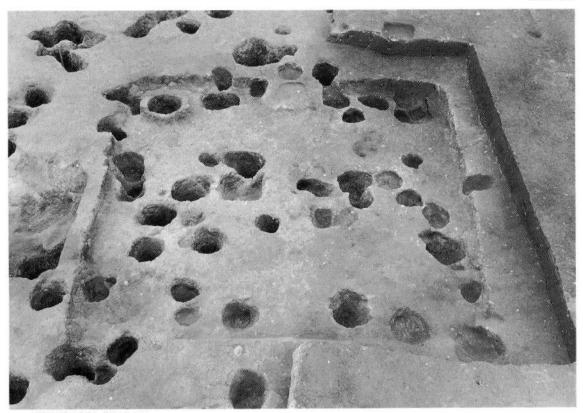
57号住居跡 (南東から)



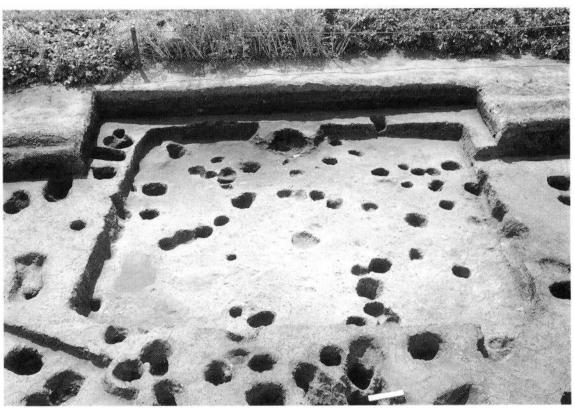
58~61号住居跡 (南東から)



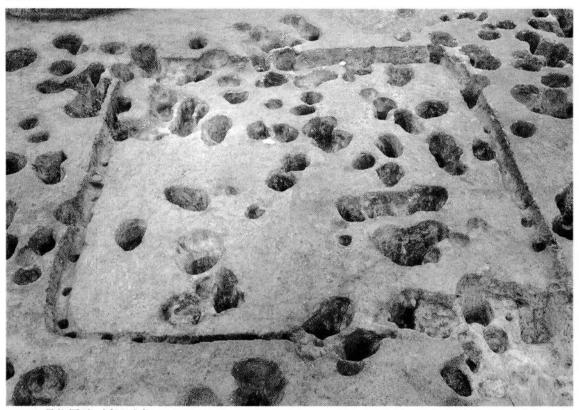
62~64号住居跡・10号土壙(東から)



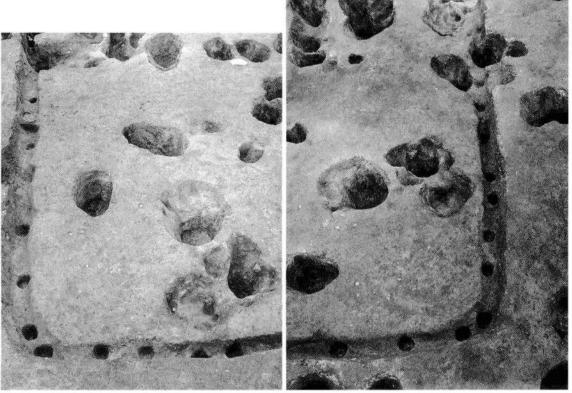
62号住居跡(南から)



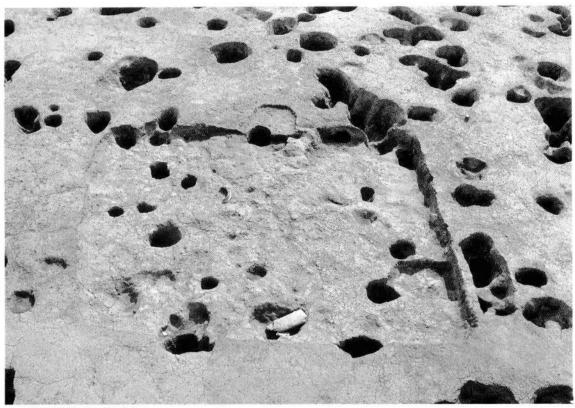
63号住居跡 (東から)



64号住居跡 (東から)



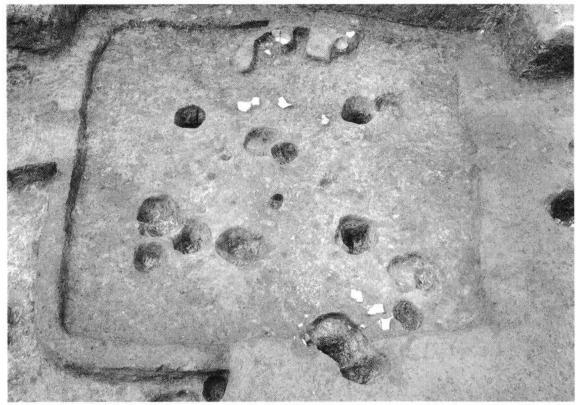
64号住居跡壁小溝内杭状痕



65号住居跡 (東から)



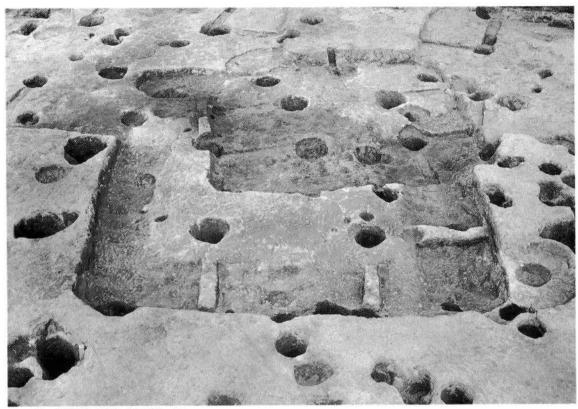
66号住居跡(南東から)



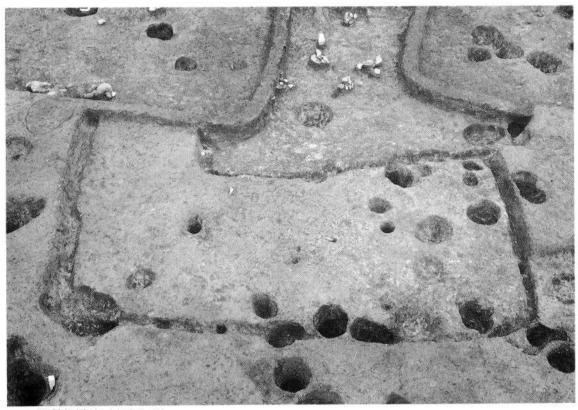
67号住居跡(南東から)



68号住居跡(南東から)



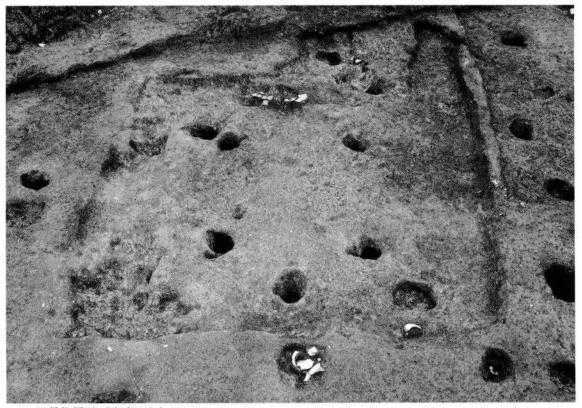
68~70号住居跡(南東から)



70号住居跡 (南東から)



69号住居跡 (南東から)



71号住居跡 (南東から)



74~76号住居跡(南東から)



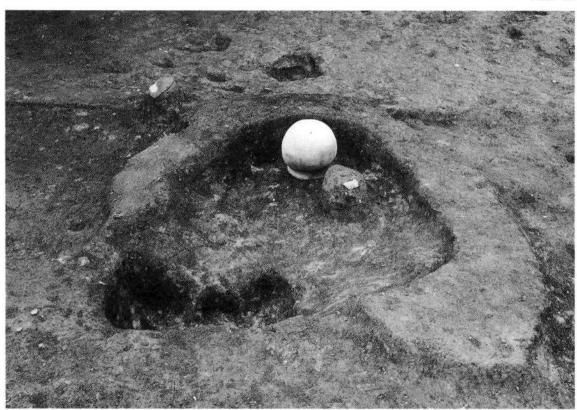
77号住居跡 (南東から)



77~80号住居跡(南東から)



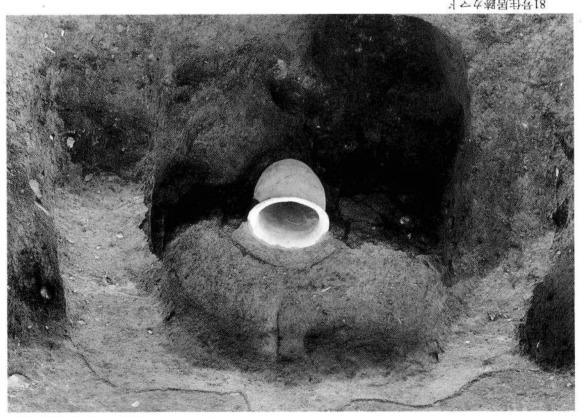
80号住居跡 (南東から)



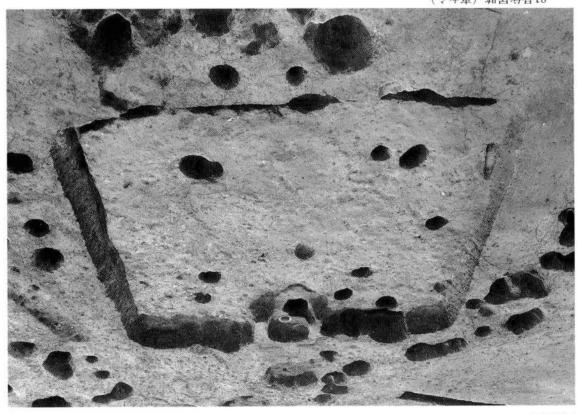
78号住居跡カマド



79号住居跡カマド



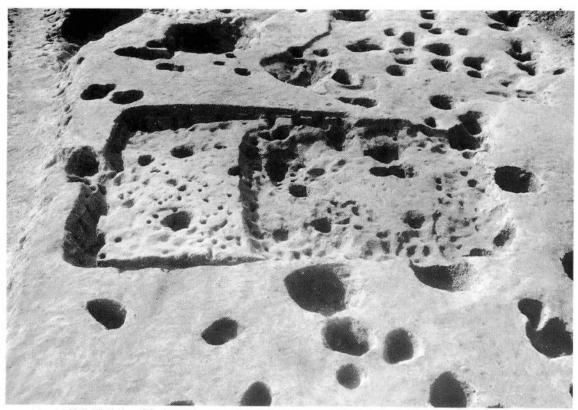
(され東) 被呂封号18



34 34



82・83号住居跡 (南東から)



82・83号住居跡床下層(北東から)



82号住居跡カマド



82·83号住居跡杭状痕



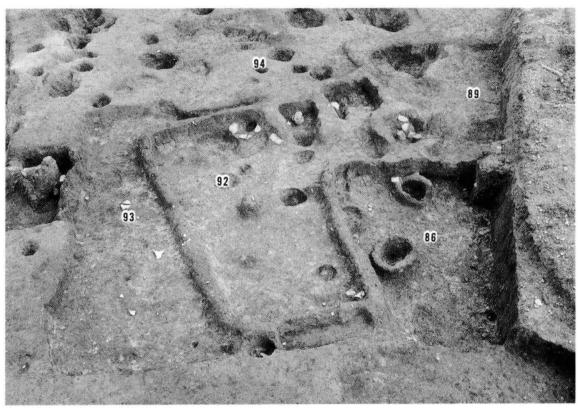
83号住居跡杭状痕



82号住居跡杭状痕



84・85号住居跡 (南から)



86~94号住居跡(南から)

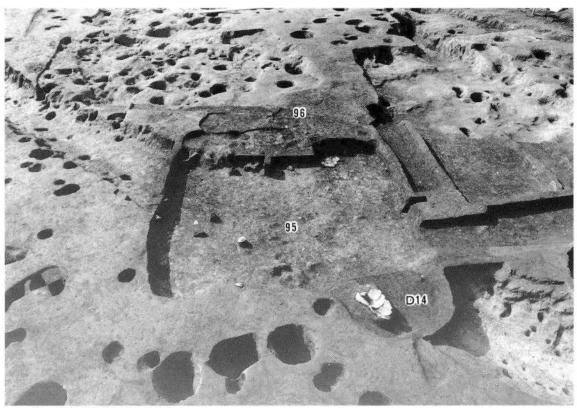


89号住居跡カマド



92号住居跡カマド

図版 40



95・96号住居跡 (東から)



95号住居跡床下層(北から)

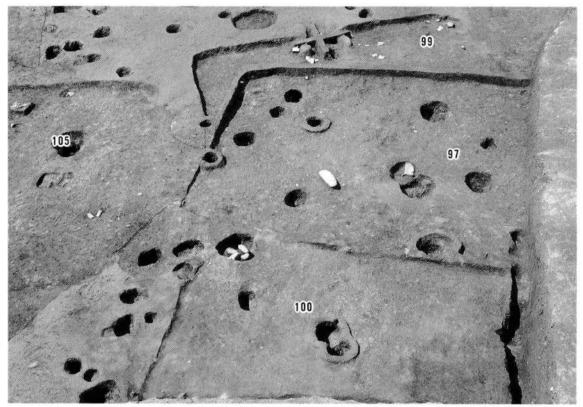






95号住居跡カマド

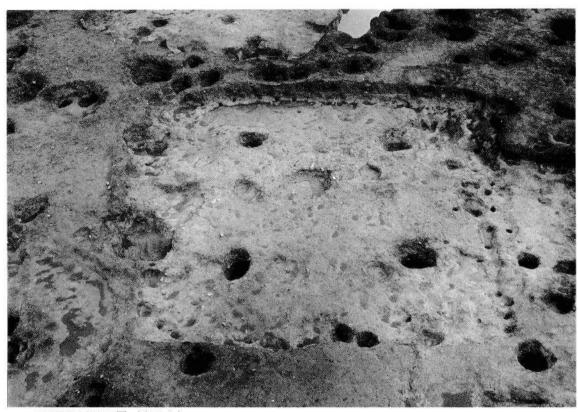
図版 42



97~100号住居跡(南から)



97・99号住居跡下層(南から)



103号住居跡下層(南から)



103号住居跡下層(南から)

図版 44



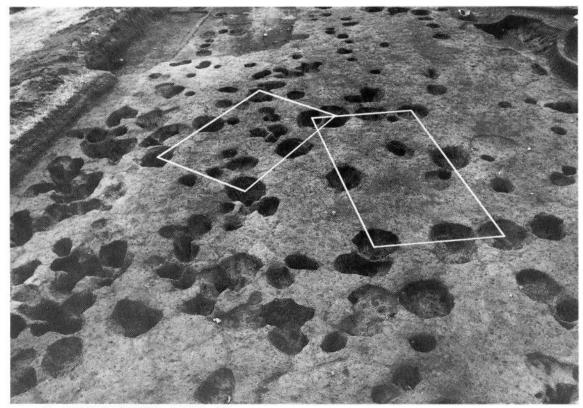
108~110号住居跡(南東から)



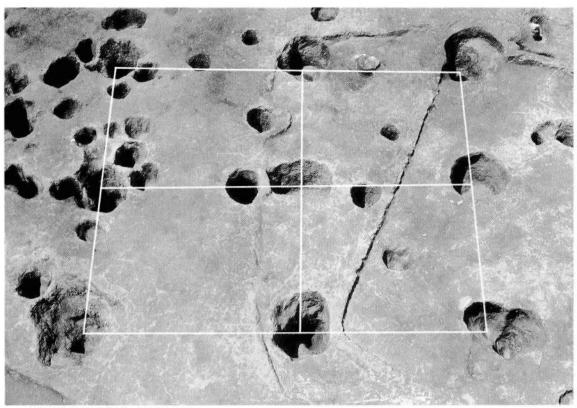
111号住居跡(南東から)



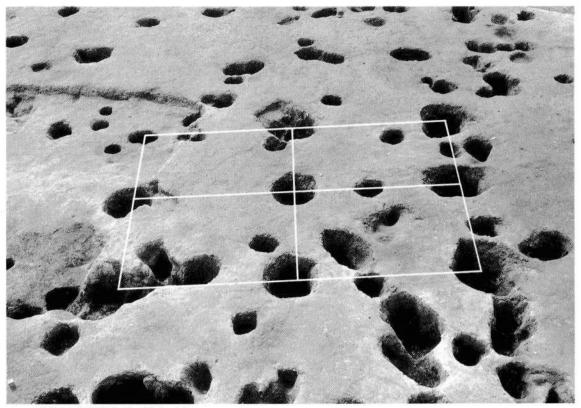
36号掘立柱建物跡(東から)



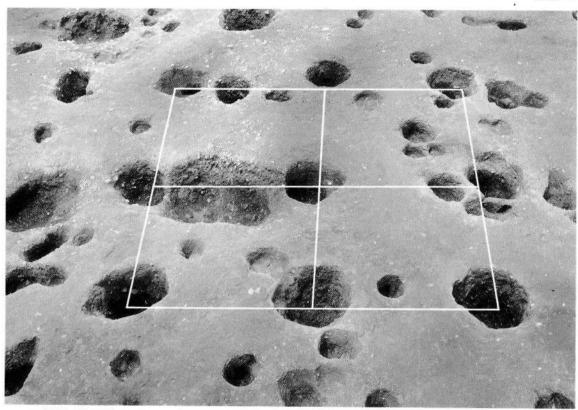
40・41号掘立柱建物跡(北東から)



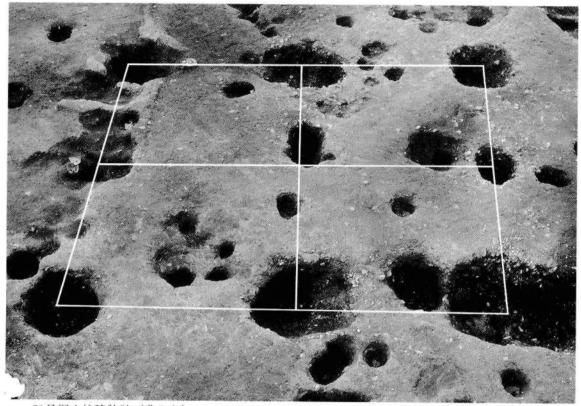
46号掘立柱建物跡(南東から)



49号掘立柱建物跡(西から)



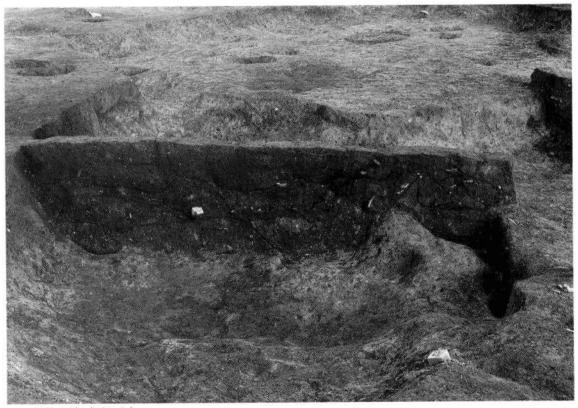
50号掘立柱建物跡(北から)



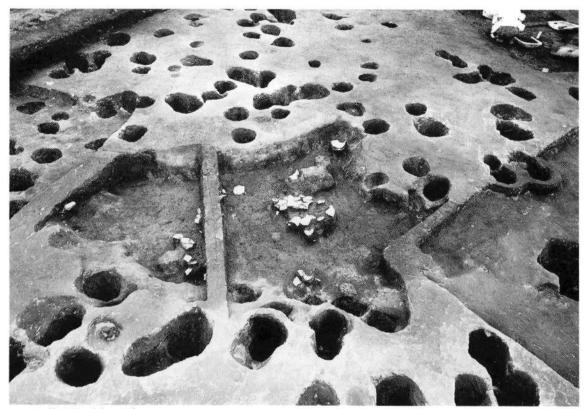
51号掘立柱建物跡(北から)



6号土壙(南東から)



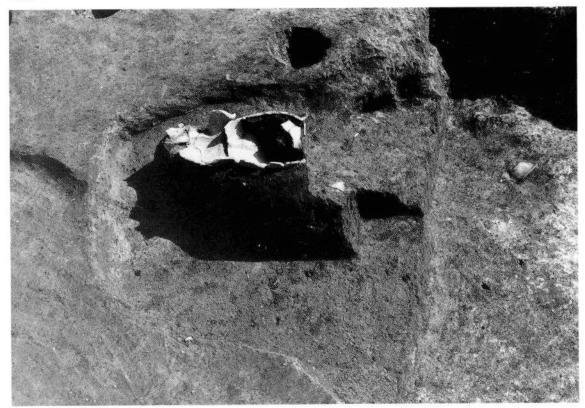
7号土壙 (西から)



10号土壙(北から)



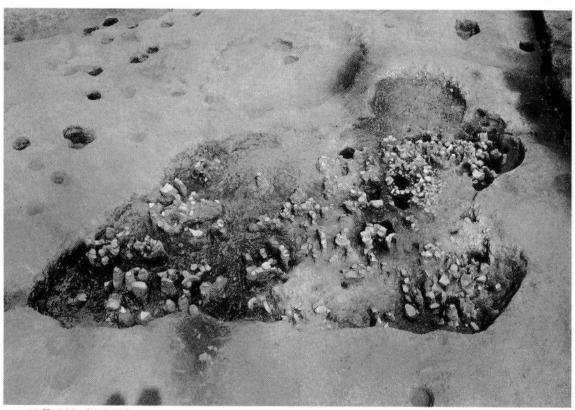
13号土壙(北から)



14号土壙 (北から)



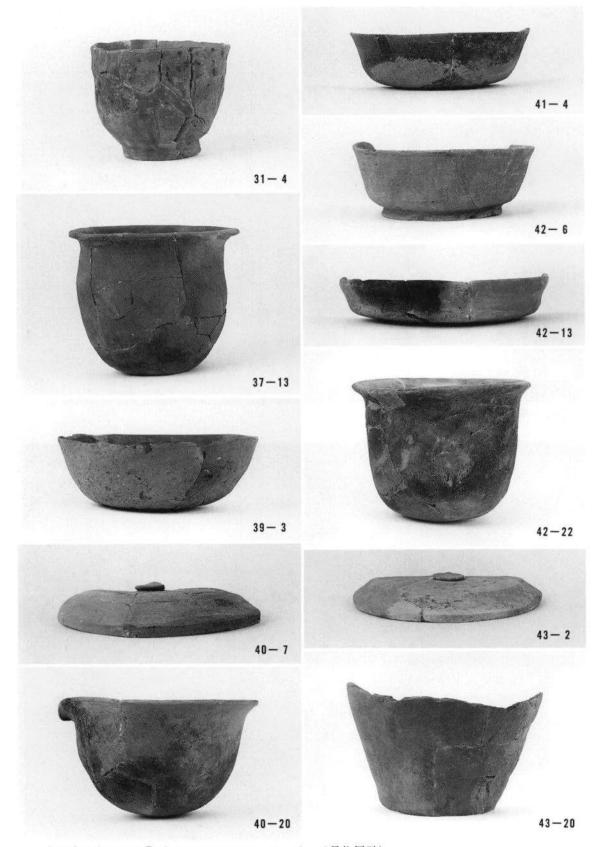
19号土壙(北から)



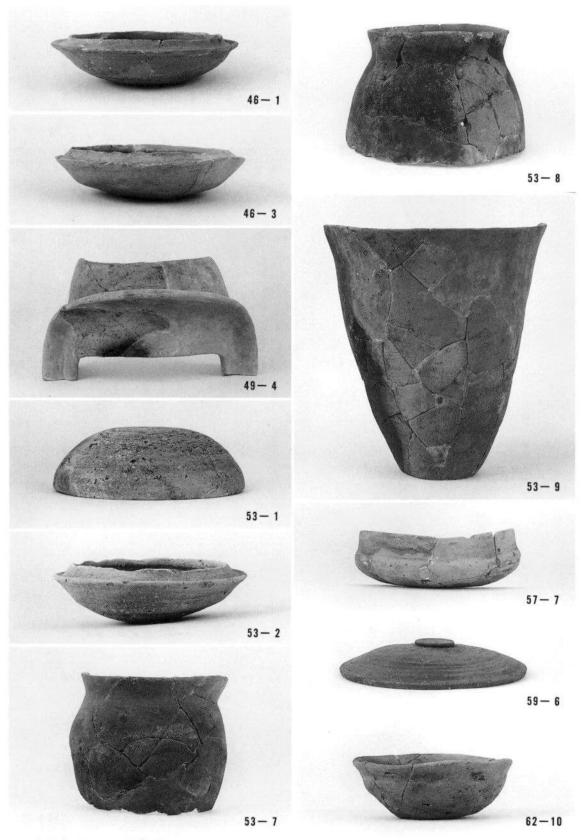
20号土壙 (西から)



22号土壙 (南東から)



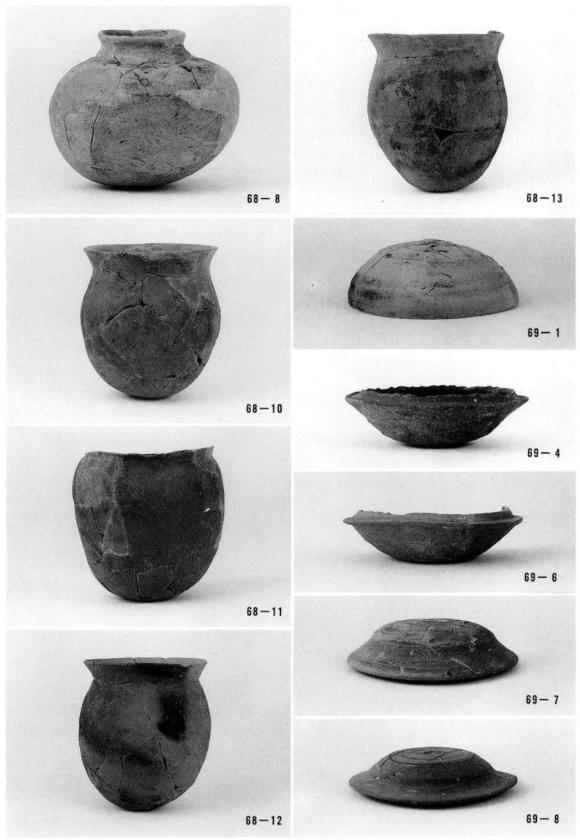
宮原遺跡出土土器① (31・37・39・40・41・42・43号住居跡)



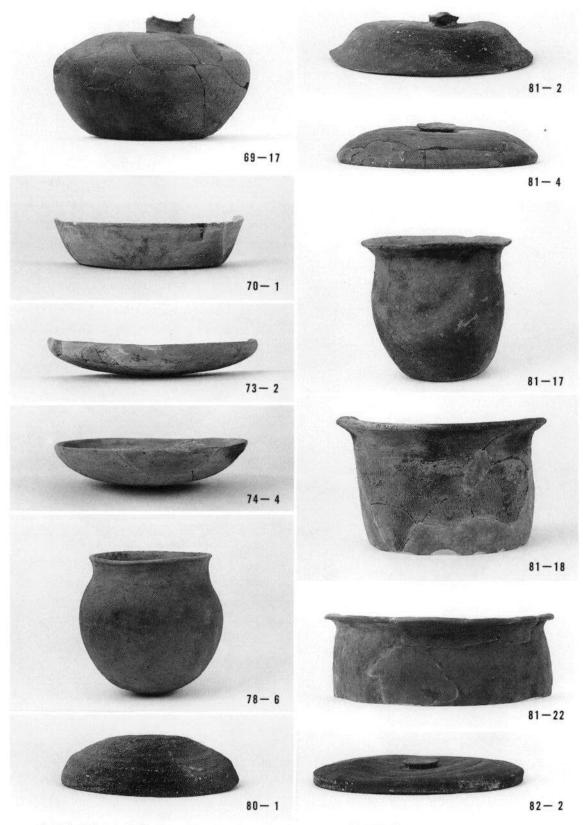
宮原遺跡出土土器② (46・49・53・57・59・62号住居跡)



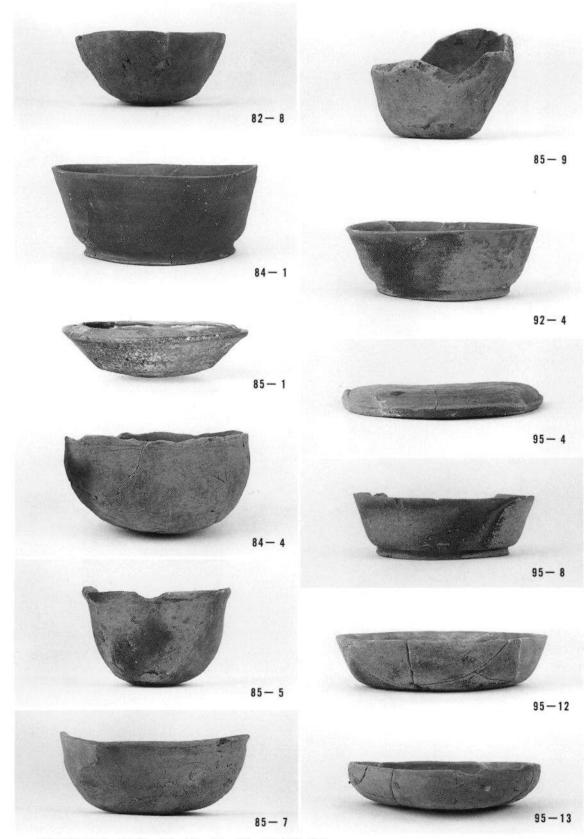
宮原遺跡出土土器③ (62・63・64・65・67・68号住居跡)



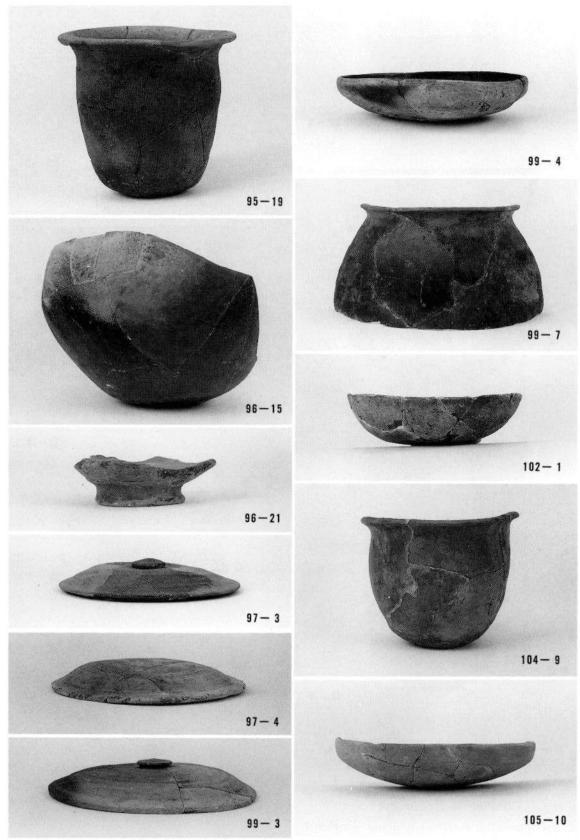
宮原遺跡出土土器④ (68・69住居跡)



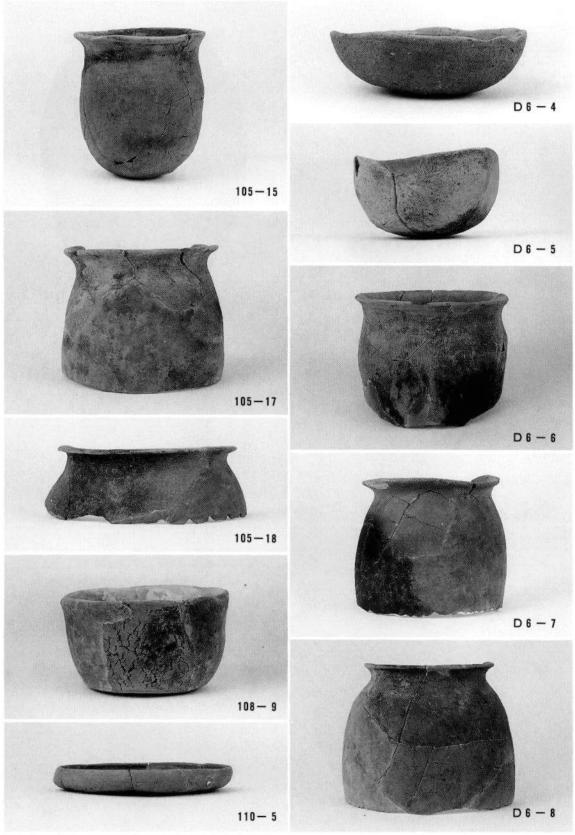
宮原遺跡出土土器⑤ (69・70・73・74・78・80・81・82号住居跡)



宮原遺跡出土土器⑥ (82・84・85・92・95号住居跡)



宮原遺跡出土土器⑦ (95・96・97・99・102・104・105号住居跡)



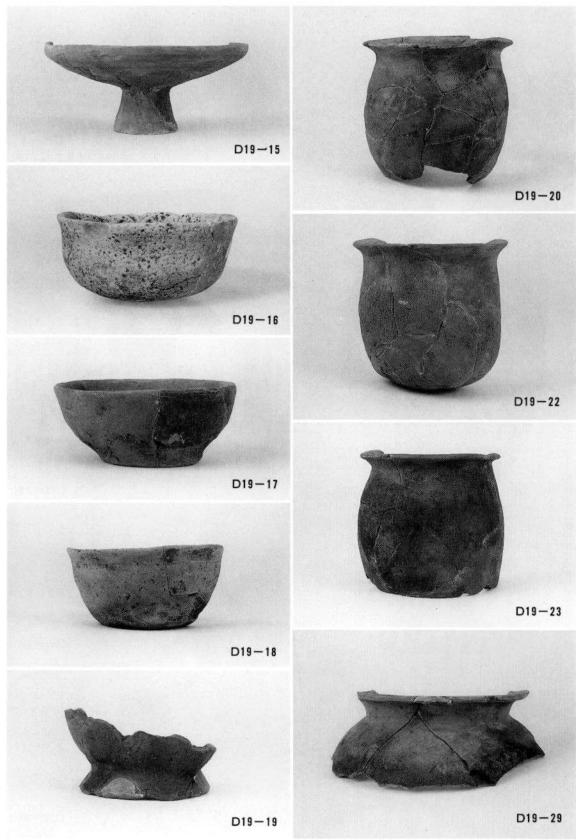
宮原遺跡出土土器® (105·108·110号住居跡、6号土壙)



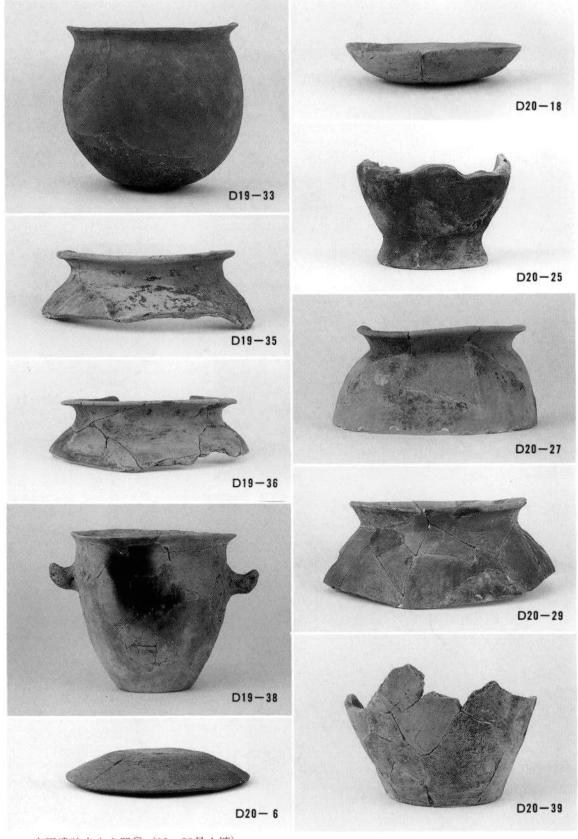
宮原遺跡出土土器⑨(7・8・10・11・12号土壙)



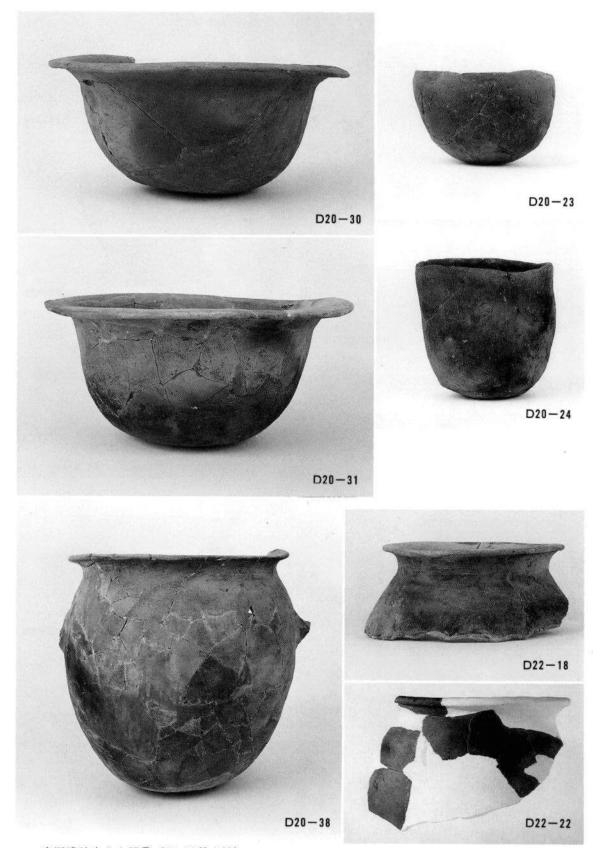
宮原遺跡出土土器⑩ (14・17・18・19号土壙)



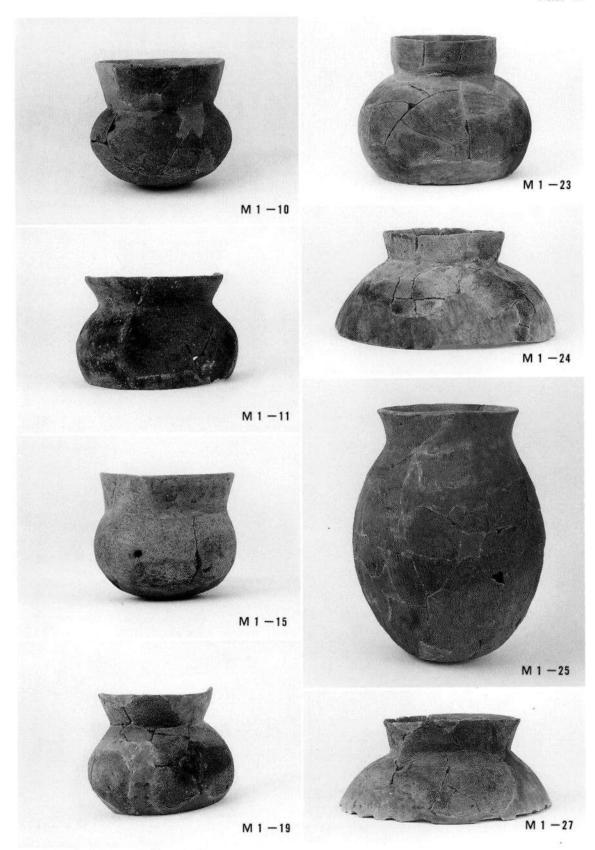
宮原遺跡出土土器⑩ (19号土壙)



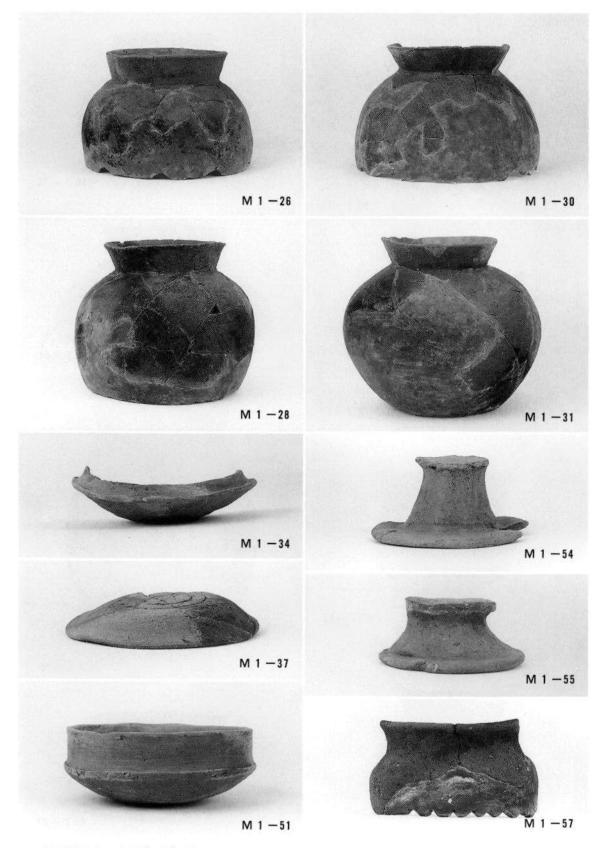
宮原遺跡出土土器⑫ (19・20号土壙)



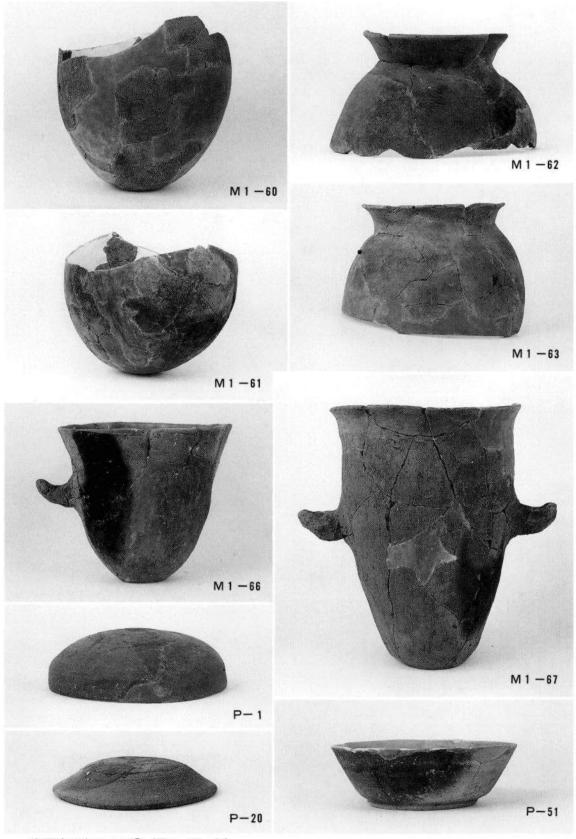
宮原遺跡出土土器⑬ (20・22号土壙)



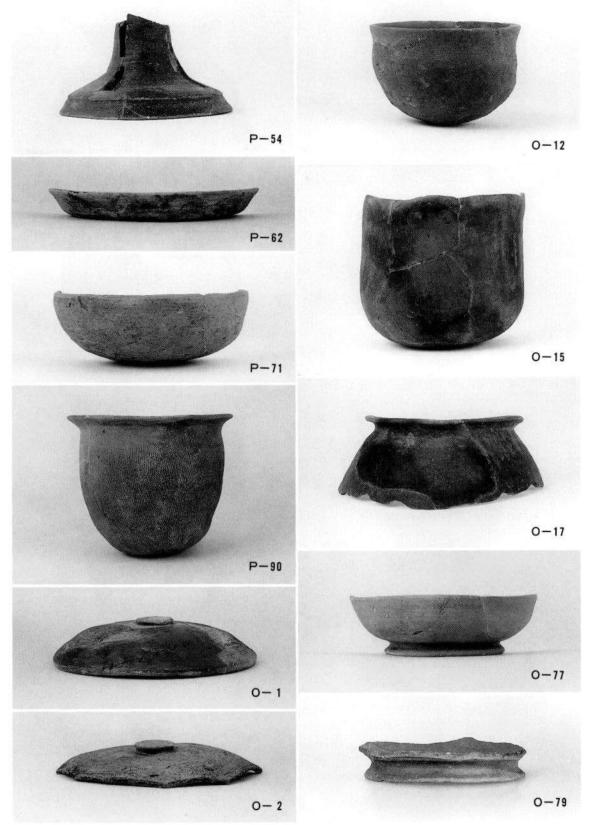
宮原遺跡出土土器④ (溝1)



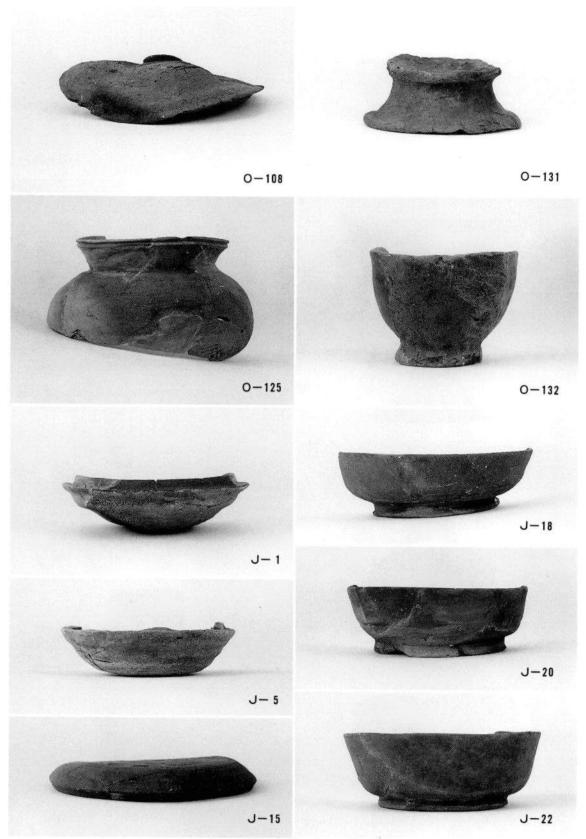
宮原遺跡出土土器⑮ (溝1)



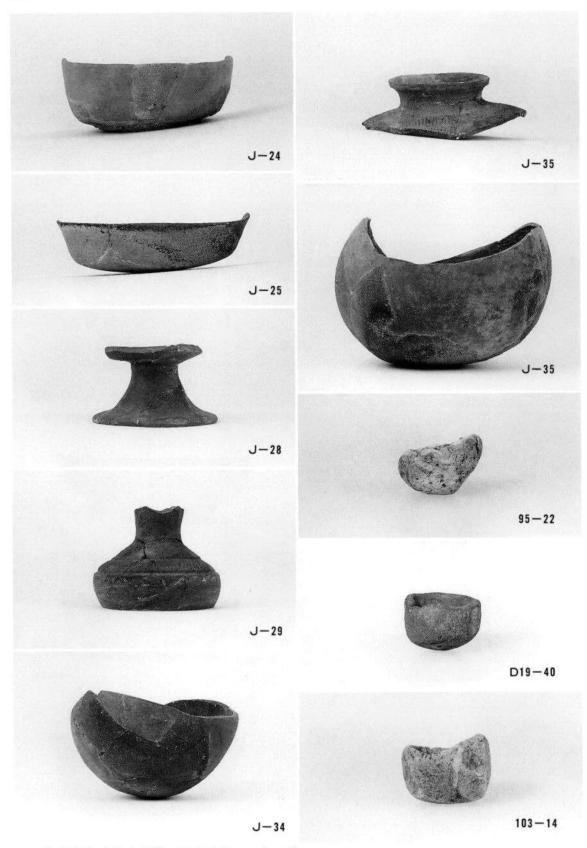
宮原遺跡出土土器⑯ (溝1、ピット)



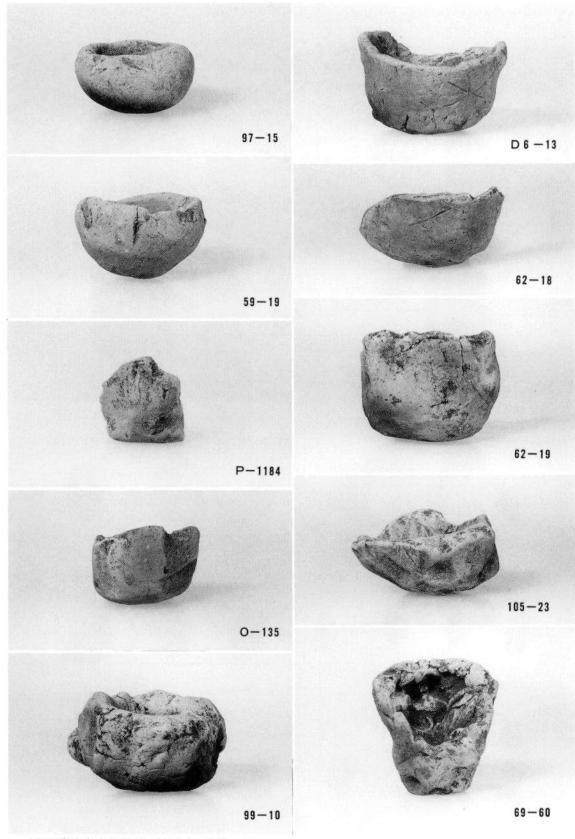
宮原遺跡出土土器 ⑰ (ピット、その他)



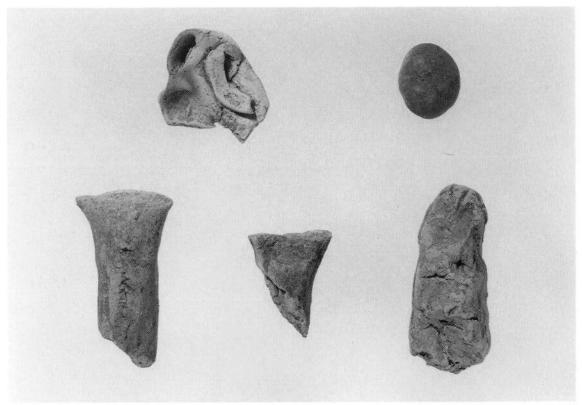
宮原遺跡出土土器(8) (その他接合資料)



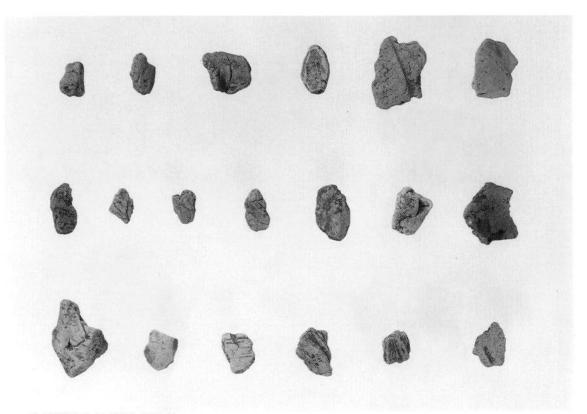
宮原遺跡出土土器⑩ (接合資料ミニチュア)



宮原遺跡出土土製品 (ミニチュア)



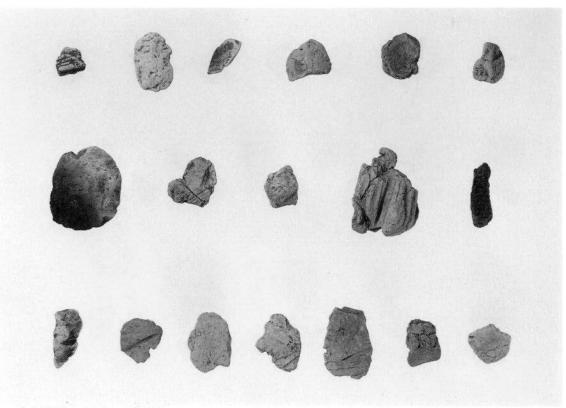
宫原遺跡出土土製品



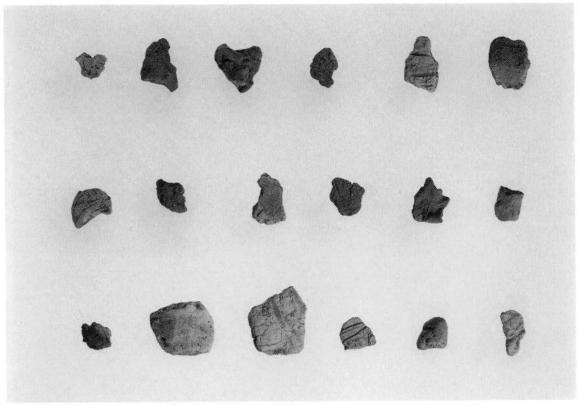
宫原遺跡出土不明土製品①



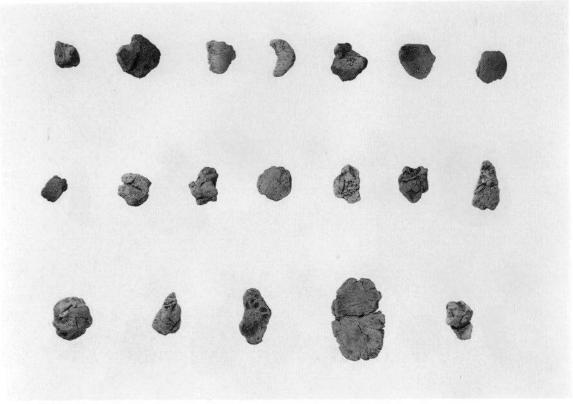
宫原遺跡出土不明土製品②



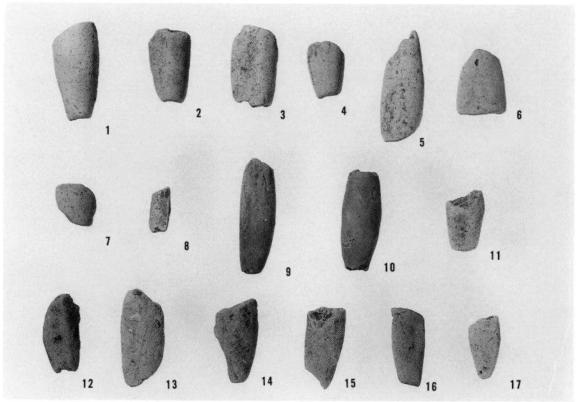
宫原遺跡出土不明土製品③



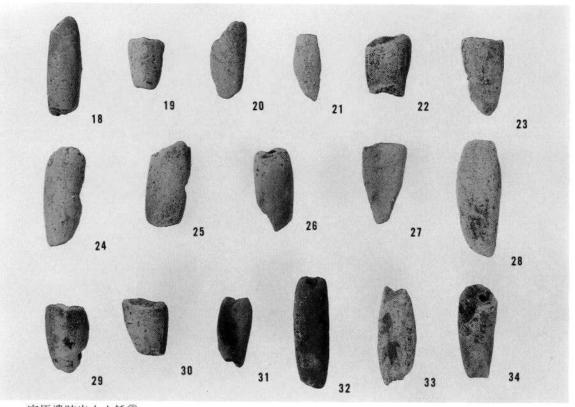
宫原遺跡出土不明土製品④



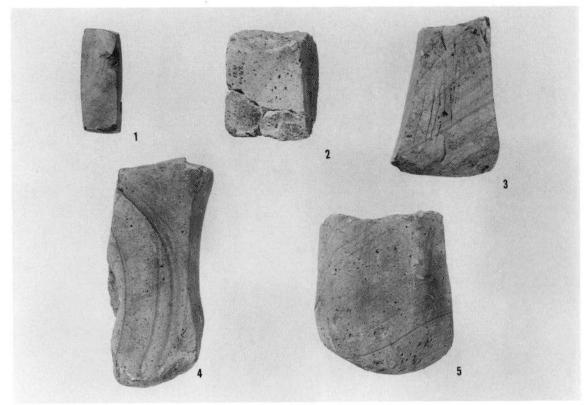
宫原遺跡出土不明土製品⑤



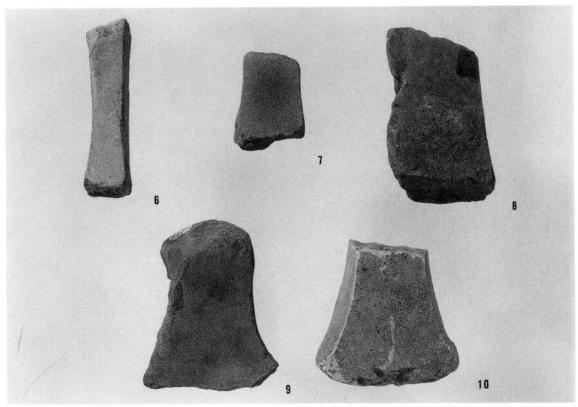
宫原遺跡出土土錘①



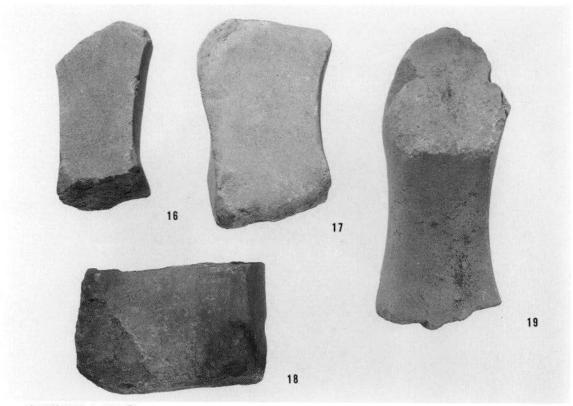
宫原遺跡出土土錘②



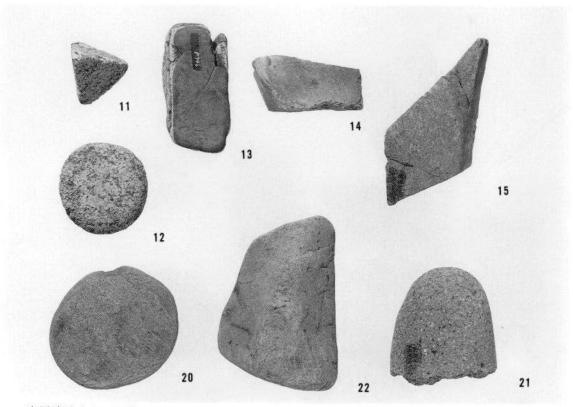
宫原遺跡出土石器①



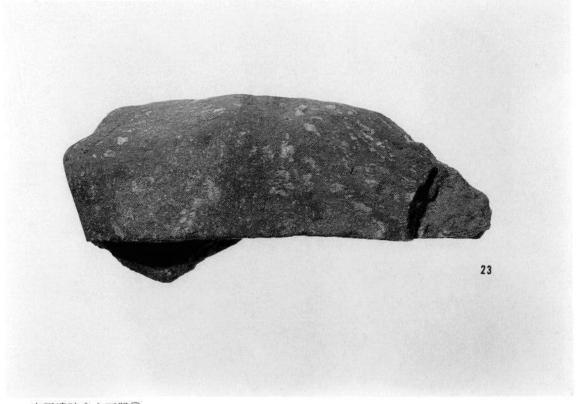
宮原遺跡出土石器②



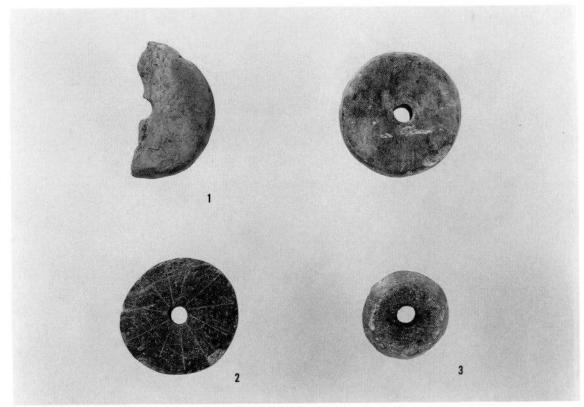
宫原遺跡出土石器③



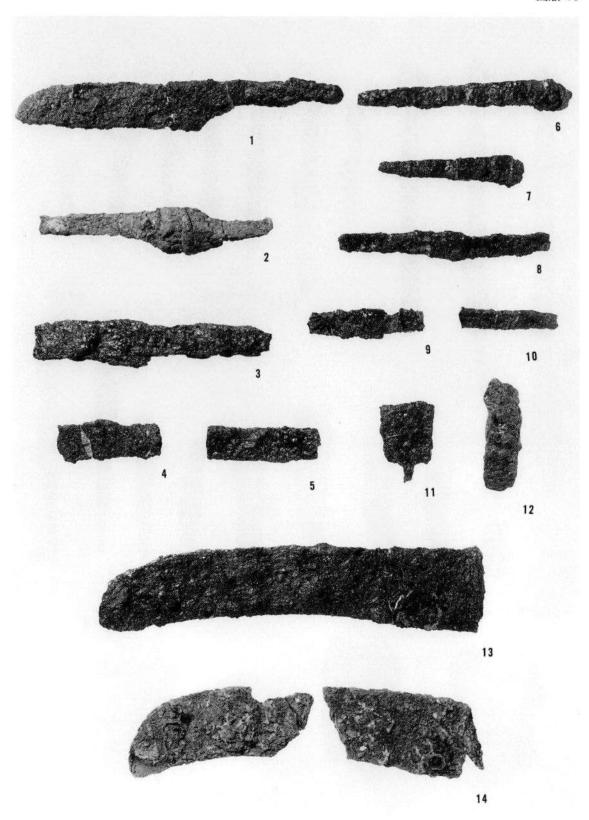
宫原遺跡出土石器④

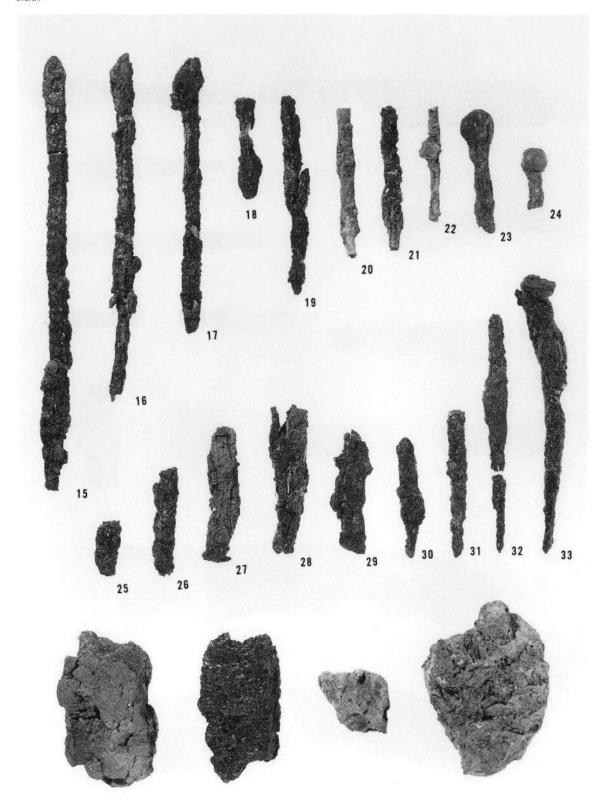


宫原遺跡出土石器⑤



宮原遺跡出土紡錘車

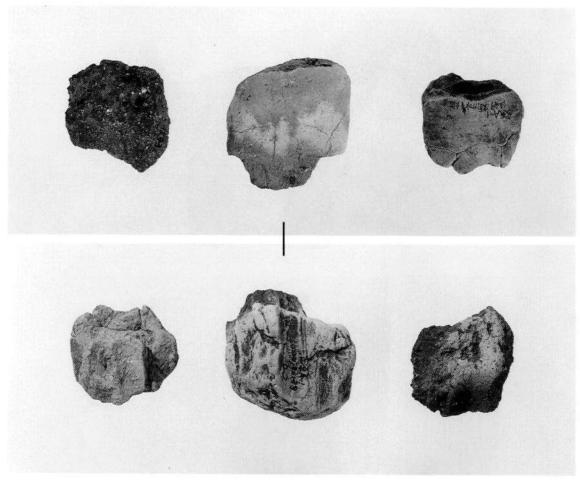




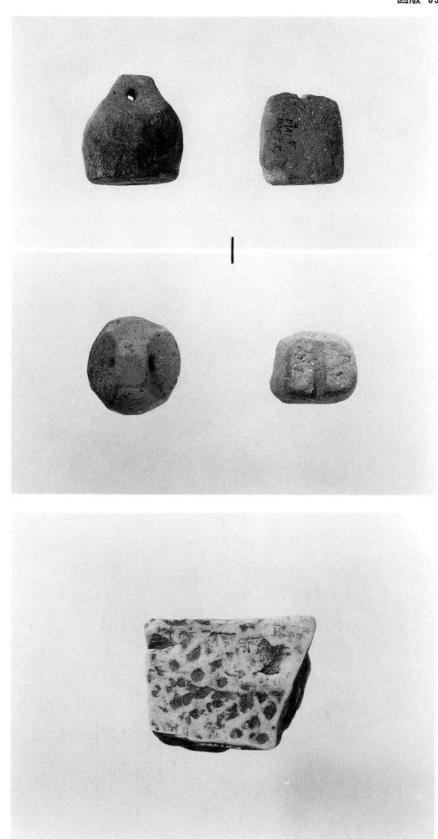
宫原遺跡出土鉄器②



宮原遺跡出土土馬



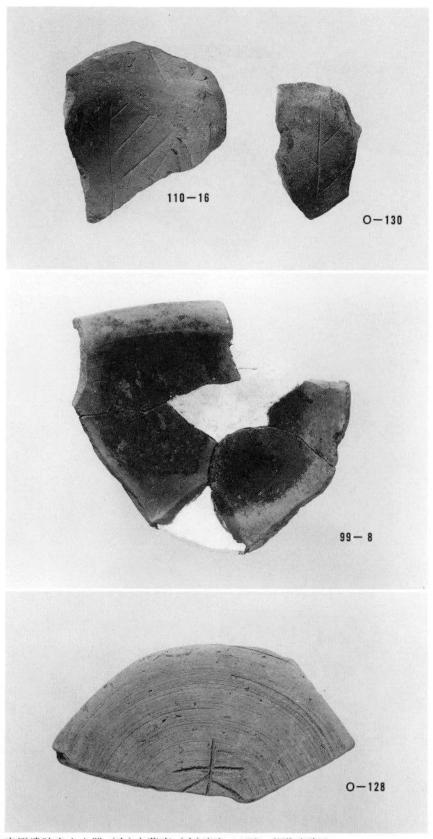




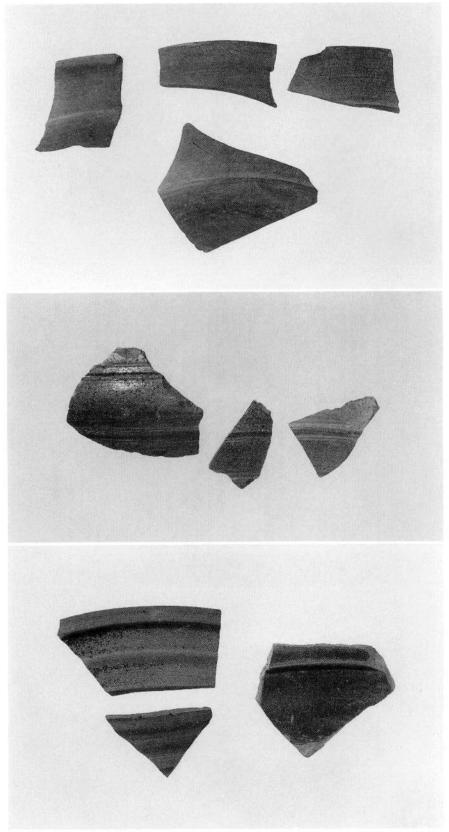
(上)宮原遺跡出土権 (下)瓦



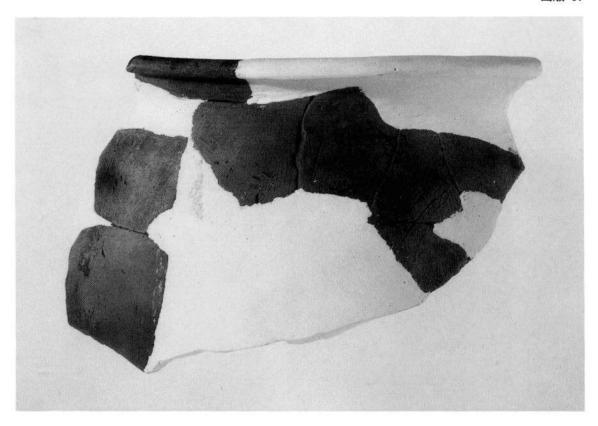
(上)宮原遺跡出土青銅製品 (下)宮原遺跡出土製塩土器

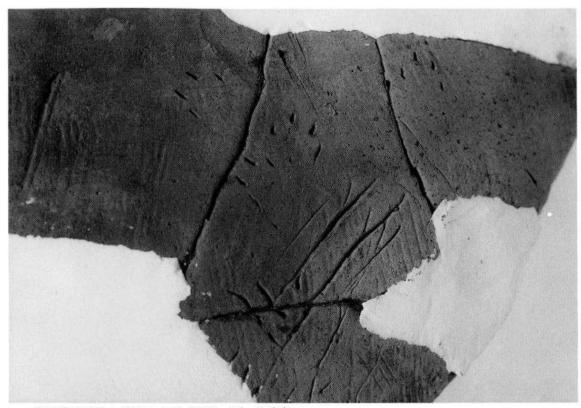


宮原遺跡出土土器 (上)木葉痕 (中)吹きこぼれ (下)文字?



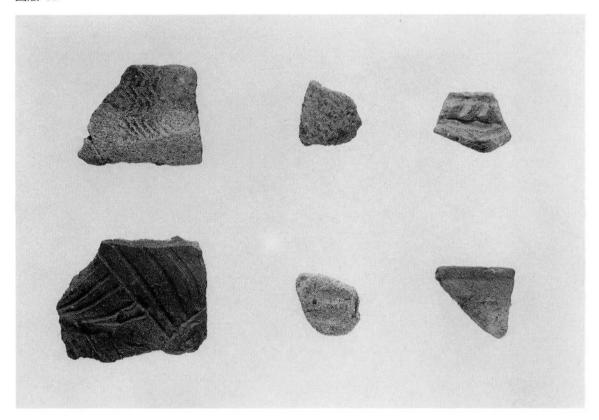
宫原遺跡出土陶質系土器

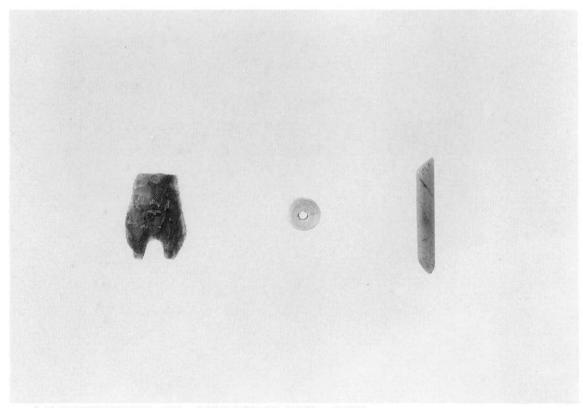




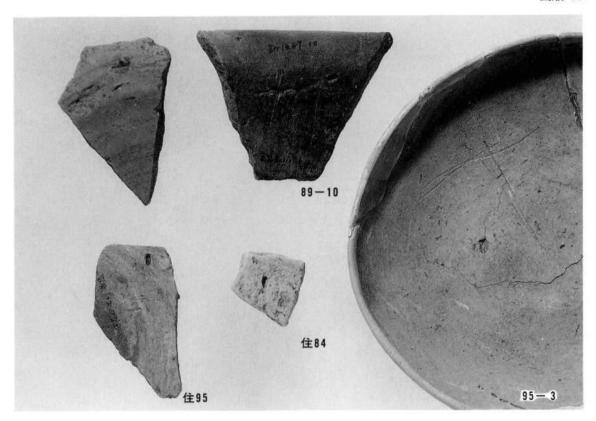
宮原遺跡22号土壙出土土器(D22-22)の爪痕

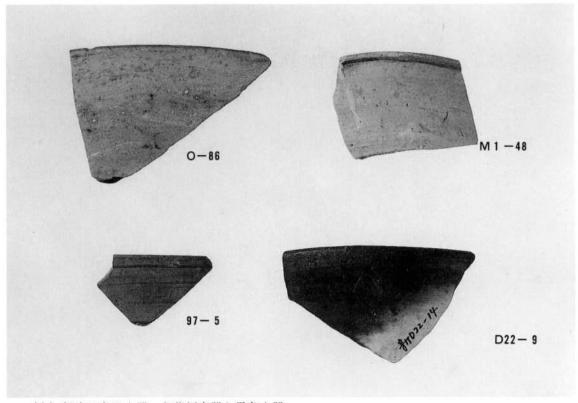
図版 88





(上)宮原遺跡出土繩文土器 (下)宮原遺跡出土石鏃·玉石器





(上) 籾痕のある土器 (下)須恵器と黒色土器

福岡県行政資料	
分類番号 J H	所属コード 2 1 3 3 0 5 1
登録年度 元	登録番号

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 — 17 —

平成2年3月31日

発行 福 岡 県 教 育 委 員 会 福岡市博多区東公園7番7号

印刷 赤坂印刷株式会社 福岡市中央区大手門1丁目8-34

九州横断自動車道関係埋蔵文化財調査報告 - 17 -

付図1 宮原遺跡遺構配置図,立野・宮原遺跡路線図 (上-1/600,下-1/2,000)

付図2 宮原AI地区遺構配置図(1/200)



